

やはり俺の实力至上の
青春ラブコメはまち
がっていない。

ゆっくりblue1

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ボッチの比企谷八幡が実力至上の学校で織りなす青春ラブコメ。果たして八幡は何を見て、何を感じて、何が成長するのか――？

目次

出会い	1	優しい奴が怒ったら本当に怖い	172
ボツチに似合わないBクラスと不自然さ		比企谷八幡は過ぎた役目を負う	192
因縁つていやだよな	12	閑話 小さき頃の思い出 坂柳編①	
王との会合（囁ませと真打）	28	魔性の女ってハイスペックな人ばっかだよな	211
天秤にかける関係	44	愚か者の地獄の序章	235
中間テストが迫っているはずなのだが……	61	逆鱗	256
藪から魔王達と試験の攻略法	88	思わぬ収穫と出来事	282
やはり俺が暴力事件に巻き込まれるのはまちがっている！	106	小屋の中、2人きりの状況で……	298
『本物』の兆し	127	迷った末のやり直し	324
	150	静かなる決別	346
			366

緊急事態の要請 387

夏風邪を引くと長引くよね 407

閑話 小さき頃の思い出 坂柳編②

433

恩を仇で返せば待つのは地獄 464

募らせる恋慕は焦りとなって 480

番外編 その日は誰もが幸せである日

と願って 498

最悪な組み合わせの特別試験 532

混沌とする思惑と想い 558

無駄な時間は早めに終わらせるにかぎ

る。 580

着々と追い詰めていくならやっぱり必要

なのは…… 602

次々と終わりゆく試験 624

水面下の計略と疑い 650

決着は突然に 676

試験の終了は新たな予兆を告げる。

724

閑話 小さき頃の思い出 坂柳編③

758

出会い

高度育成高等学校データベース

氏名 比企谷八幡 Bクラス

誕生日 8月8日

学籍番号 S O I T 0 0 4 6 2 8

部活 無所属

学力 B

知性 A

判断力 A-

身体能力 C+

協調性 D-

面接官からのコメント

学力、知性共に高く、更に身体能力も平均以上であつた為、Aクラス相当と見込まれたが面接時の消極的な応答態度や明確な将来の展望がなかったため、Aクラスを見送

りBクラスとする。

また別付資料に記載されている通り、自他への優先順位に偏った部分があるため、更生していく必要あり。

担任からのコメント

真面目に授業を受け、授業妨害もないですが、口数が少ないのと、消極的な性格がもつたいたいです。今のところ友達はあまりいないので何らかの形でクラスメイトや他クラスとのコミュニケーションをとってもらいたいです。

――――――――――

風が心地よく体に打ち付け、暖かな日差しが当たる。バス停に停車しているバスに乗り込むと、まだ一人も乗っておらず静かな車内。

早く来すぎたようだな・・・

適当に座って、鞆から海外文学の小説を取り出して読み始める。中学の後半にあたつてラノベだけでなく、海外文学の小説を読み始めた俺。きっかけは英語の長文読解の練習に用いて読んでみたが、自分でも驚くほどにはまってしまう、最近では週4のペースで読み漁っている。そのおかげで中学の英語レベルを遥かに超えたが、使う場面がテスト以外無い為少し残念だった。今はまっているのはフランスの小説家ルブラン・モーリス著書の有名推理小説『怪盗紳士アルセーヌ・ルパン』だ。ちなみに英語版のガチな奴だ。

しばらく読みながら、バスが発着するのを待つているといきなり声をかけられる。

「すみません。貴方が今読んでる小説、『怪盗紳士アルセーヌ・ルパン』ですよね？」

「えっ、あつ、はい・・・そうですけど」

いきなり声をかけられたことに動揺しつつ、何とか返事をしながら声をかけてきた相手を見る。やつべえ、声裏返りそうだったぜ。

「私も海外文学にはまっているんですが、あなたが今読んでいる小説は見たことなかっ

たのでちよつとびっくりしました」

声をかけてきた相手は、白よりの銀髪ウェーブに整った顔立ちの女の子だった。格好は俺と同じ『高度育成高等学校』の制服だった。その少女は目を細めて手を合わせながら嬉しそうに顔を綻ばせていた。

「お隣、失礼してもいいですか？」

そう言われた俺は断ろうとするが、ふとバス内を見渡すともう席は埋まってしまっていたので遅かった。

「……ど、どうぞ」

「ありがとうございます。では……」

そして臨席してきた少女は鞆から『四つの署名』を取り出した。どうやらこの少女も海外文学を読んでいるらしい。

「……あつ、すみません。自己紹介がまだでした。私は『高度育成高等学校』の新入生の椎名ひよりといいます。貴方は……?」

「……新入生の比企谷八幡でしゅ……」

この少女、椎名のおっとりした雰囲気とアンバランスなマイペースに思わず自己紹介で噛んでしまった。女子が近づいてきたから噛んじやったとかそういうのではない。断じて。

「比企谷君ですか。珍しい苗字ですね」

目を輝かせながら話し掛けてくる椎名にしどろもどろになりながら答える俺。俺に話しかけてきたことにも驚いたが、俺の見た目に軽蔑した様子がなかったのだ。

八幡は小中学校でいじめの対象になっており、小学校で目が濁ってしまい、中学校では容姿についてもからかわれることが多かった。妹は目が腐ることなく虐められるこ

ともなかったので良かったが、八幡自身はこのことが若干トラウマになっていた。

しかし、このひよりからはそんな様子が微塵も見られなかったのに対して八幡は驚きと少しの安堵感を持った。

受け答えをしているうちにバスは始発して、目的地である『高度育成高等学校』向かっていく。八幡がひよりとのコミュニケーションに慣れ始めてきたころ。

俺はバスが減速し始めてきたのを察し、前を見る。

「……そろそろ着くみたいだぞ」

「あつ、そうみたいですわね。会話を夢中になってたので気付かなかったです」

楽しそうに言いながら微笑む椎名。そんな笑顔向けんなよ。惚れちゃうだろうが。そして告白して振られちゃうまである。……振られちゃうのかよ。

そんな悲しい思考をしていると、バスは停車した。

「降りるか・・・」

「はい」

誰に対して言っただけでもないのに返答してくれる椎名。優しいなあ・・・天使かよ。

バスを降り、周りを見渡す。目の前にある『高度育成高等学校』で俺は3年間、『外部との接触を断って過ごすことになるのだ』此処を選んだ理由は、否、選ばれてしまったというべきか。両親が『親離れだ』と言って進めたのだ。詳細をよく知ろうとしなかったあの時の俺を殴ってやりたい。合格時に届いたパンフレットを見て、人生で一番大声で叫んだかもしれない。そう3年間、いかなる場合においても在校中は外部と接触が出来ないのだ。あの時の両親、いや、親父のしてやったりという顔を見て、俺は初めて殺したいと思ったからだ。嗚呼、愛しの *My sister*・・・会いたい。

負のオーラを撒き散らしていると椎名が不思議そうな顔で覗き込んできた。

「?どうしたんですか?」

「・・・や、なんでもない」

覆水盆に返らず。過去のことを気にしても全く意味がないため、無駄な思考を断ち切り、正門に向かい始める。ちらりと隣を見ていると椎名がついてきていた。

「一緒に掲示板を確認したほうが早いので」

なんでついてくるのかと、その疑問を読んだように答えてくる椎名。

椎名が何を言ってもついてくるであろうことは数分の間に理解したので、分かった。と頷いてクラス分けが書かれているであろう掲示板を確認する。

俺は・・・Bクラスか。

確認していると椎名が合流してきた。

「私はCクラスです。比企谷君は・・・Bクラスですか」

「そうみたいだな」

すると、椎名は残念そうに呟いた。

「残念です・・・同じクラスならもつと趣味について比企谷君と語り合えると思ったんですが・・・」

本当に残念そうに言う椎名を見て、普段の俺なら絶対に言わないであろう言葉と言った。

「・・・学校なら、図書館があるはずだ。・・・だから、そこでまた話そう」

気恥ずかしくなりながらも俺はそう言い切ると、椎名は俺が今日見た先ほどの笑顔よ

りも眩しい微笑みを向けて。

「はい。一緒に話しましょう」

力強く頷いた椎名。その顔を見るとドキツとして、不思議な幸福感に包まれた。

「・・・ああ。じゃあ、Bクラスだから」

「はい、また。放課後にでも」

そういい、別れる俺たち。

—————あんな子もいるんだな。と思いながら嬉しくなる自分と冷え切った感情を持った自分がいる。

—————勘違いだ。期待するな。信じられるのは自分だけだ。どんな過程で

あろうが最後に自分が勝てばいい。

そんな考えが浮かび上がり、俺はそんな自分に嫌悪した。酷く独善的で滑稽な思考、常に『何か』に脅えて逃げる。

「・・・チツ、面倒くせえ」

俺は肅々と廊下を歩く。そう独りごちた俺の声は響く足音と周りの声によって溶け込んだ。

ボッチに似合わないBクラスと不自然さ

廊下を歩いて、Bクラスの教室を目指していく俺。

そして、教室に着き、中に入ると、もう何人か教室にいて仲良くなっていた。そう、仲良くなっていたんだ……

「嘘だろ……」

この学校、教室に来て間もなくして初対面の相手と楽しそうに話しているクラスメイトになる者達を見て、俺は驚愕をさすがに隠せなかった。

コミュニケーション高いな、おい。

俺は少しだけげんなりしつつ、窓側で会話しているクラスメイト達とは反対の廊下側の一番後ろの席に座り、また小説の続きを読む始めた。何故廊下側なのか？そんなの喋

り掛けられないようにするために決まってんだろ。あの中に入るのはリア充のみだ。

小説を見つつ、教室の様子を見渡していると、ある部分に気が付いた。

監視カメラ・・・教室の教卓のある天井部分に取り付けられていた。生徒達の様子を見て何かするのか・・・？普段の様子、いや、もしくは・・・

「授業態度の監視・・・か」

やはり、3年間、外部との接触が禁止されていることやあの監視カメラ・・・この学校は不自然すぎる。学校がこうも気を張る必要など普通はないはずだ。政府公認の学校だからだろうか。

俺は学校の不自然な様子に思案しながら黙って小説を読み進める。教室にもどんな生徒が入ってきて騒がしくなり始める。

それからまた暫く経つと、教卓がある方の扉から黒に近いグレースーツを着た女性が

入ってきた。髪色は黒よりのピンクだった。先生だろうか。ていうか先生が髪を染めてもいいのだろうか。

「はい、皆席に着いてちょうだい」

先生？の声を聞いて席に着き始める生徒たち。かなりフレンドリーに喋るなこの先生。

席に全員つき終わった様子を見てから、再度口を開いた。

「まず、新入生の皆さん、入学おめでとう。私がこの1年Bクラスの担任になった星之宮知恵です。よろしくねー！教科担当は理科。分からないところがあつたら相談に乗るから遠慮なく言つてね。さて、まず説明するのは、この学校は3年間クラス替えがないから注意してね？後、合格発表時に渡されたパンフレットに記載されている通り、この学校は『3年間、在校中において特別な緊急の理由がない限りは如何なる場合においても外部との接触を禁ずる』、『女性寮に男子が入つていい門限は11時まで』・・・」

そうして他の注意事項についても改めて説明していく星之宮先生。パンフレットに書いてある内容とほとんど同じだ。

「そして、もう一つ重要なことが、この学校は『Sシステム』っていう特別な仕組みでその配布してある学生証に『プライベートポイント』っていう現金代わりの電子マネーがあるから買い物するときはそれを使つてね？原則はこのポイントで買えないものはないから。生徒間で譲渡しあうのもOKだから、困ったときは助け合つてあげるのもありよ。このポイントは月の初めに学校が配当するから覚えておいてね」

そう言われて学生証を見ると『10万Pt』と表示されていた。マジか。おそらく1pt＝1円の計算だろう。それにしても高校生に与える額とは到底思えないな。

「びつくりしたでしょう。このPtはどう使うにも貴方達生徒の自由だから、先生は口出ししないし、合格記念のようなものととらえるのも自由よ。これから3年間よろしくね」

そしてH Rのチャイムが鳴り終わって先生が出ていくと、ドツと生徒がまた騒ぎ始める。

「ごめんねみんなー。ちよつと注目して欲しいんだけどいいかな？」

そう声を大きく発したのは女子で、ストロベリーブロンド色の髪のアイドル顔負けレベルの容姿と抜群なプロポーションが特徴的だった。

その声にみんな注目する中、件の美少女は教卓に立って口火を切った。

「私は一之瀬帆波って言います。これからよろしくね。早速提案があるんだけどこれから互いが集団として生活するけど、円滑に仲良くしていきたいから自己紹介の時間を設けたいんだ。したくないって人は首を横に振ってもらえるかな？」

一之瀬が聞くが、誰も首を振らない。俺？振ったら振ったで面倒くさそうだから振らない。

「うん、皆ありがとう！改めまして私は一之瀬帆波です。趣味は読書と映画鑑賞かな。これから3年間、よろしくね」

よろしく、と声上がり、疎らに拍手も聞こえる。・：うーん、なんていうか：：クラスを間違えた感じ。もの凄く、キングオブボツチたる俺には似合わない明るすぎな雰囲気だ。

自己紹介に耳を傾けつつ、俺はさつき、星之宮先生が言った説明について考えていた。

10万pt、この金額分を毎月配当するのか？一人当たり、年間にして120万、しかもクラスの人数は約40人だから4800万、クラスは4クラスあつて40人程度だ。3年間払えば5億以上の支出になる。こんな真似、続けるとは思えない。口ぶりからしてもそんなことは微塵も感じられなかった。

ptについての使い方は自由と言っていたが、裏を返せば使わない方がいいと言われているような気がしてならないのだが。

やはり変だなこの学校。と結論付けようとした時、ちょうど俺の自己紹介の番が来た。

「じゃあ次は、廊下側の後ろの一番端にいる男の子。自己紹介お願いします」

「・・・俺は、ひ、比企谷八幡です。よろしく」

そういつて座ると一之瀬が少し驚いた顔で苦笑していた。周りを見渡したが、大半の奴等は苦笑したり驚いていた。

「よ、よろしくね、比企谷君。じゃあ次の人ー」

そして滞ることなく自己紹介は進んでいった。

自己紹介の時間が過ぎて、帰りの準備をして廊下に出る。

廊下に出たところで後ろから声を掛けられた。振り返って確認すると、先程自己紹介の時間を設けた女子、一之瀬帆波が立っていた。

「……何か用か？」

初日で早くも『俺の中で苦手な女子ランキング1位』に輝いた一之瀬に話しかけられて少しげんなりして尋ねる。ちなみに男子の方は柴田っていう奴だ。男子版の一之瀬っていう感じがするんだよなあ彼奴。

俺の様子に少し慌てたのか、申し訳なさそうな顔で謝ってきた。

「ごめんね？都合悪かったかな？」

「いや、大丈夫だ。悪い、態度が良くなかった。気を悪くさせたなら謝る」

「だ、大丈夫だよ。．．．それでなんだけど、比企谷君はこの学校についてどう思ったかな？いきなりで悪いんだけど」

そんな質問をしてきた一之瀬に対して、俺は聞き返した。

「．．．なんで俺に聞くんだ？」

「学生証を見て、皆動揺してる様子だったんだけど、君は動揺してなかったからね」

あの時、一之瀬は周りを観察していたのか。．．．一之瀬は違和感を持ったのか。

「まあ、一言で言えば、怪しさ全開で信用ならない感じだな」

監視カメラにお小遣いとして10万．．．どう考えても不自然な学校だ。

「そうだよね。いきなり10万円をポンって渡された感じだもん」

「・・・後、今後はたぶん調子に乗ってP.t使いまくるやつが出てくる筈だから、一応注意した方がいいんじゃないか？」

俺にしては珍しい助言をしたが、何となくそうしたほうがいいと思っていたので素直に述べる。

「そうだね。何か嫌な予感もするし、先生の言い方にも不審な点がいくつかあったしね」

一之瀬が頷く。そんな様子を見た俺は更に言った。

「後、授業態度も徹底した方がいいと思う。教卓のある位置の天井に監視カメラがあったからな」

「えっ、監視カメラ？・・・あつ、ほんとだ！よく気付いたね」

一之瀬は監視カメラの存在に気が付き、驚いた。それはそうだろう。普通は天井なんて気にしないからな。

「p tは毎月払うとは言ってたけど、10万を毎月払うとは言ってなかった。おそらくだが、授業の様子で振り込まれるp tが変動するんだと思うんだが。．．．完全な憶測だけど」

俺の意見を聞いて熟考する一之瀬。自信はあるがどうだろうか。

「．．．うん、凄いい参考になったよ。ありがとう、比企谷君」

笑顔を向けてお礼を言ってくる一之瀬。向日葵のような奴だな。どこまでも純粹で真つすぐ、俺とは正反対のやつだ。

「．．．別に良い」

照れくさくて頭をかいてしまう。そんないい笑顔向けんなよな。すげえ可愛くて惚

れちまいそうだ」

「か、可愛い・・・」

頬を赤らめながら言う一之瀬。あつ、これつてもしかして口に出した感じ?・・・
やべえ、死にたい。

と、とにかく、一之瀬の怒りを解かなければ・・・

「わ、悪い、一之瀬。変なこと言っちゃって」

「う、ううん、大丈夫!」

まだ頬が赤い一之瀬。怒った様子は感じなかったので少し安心した。

「比企谷君ってコミュニケーションが苦手なのかなって思ったけど話しやすいよ」

「……まあ、誰とも話す機会がなかったからな。友達も出来ないし」

「わ、私は……友達になれないかな？」

不安そうに聞いてくる一之瀬。しかも、上目遣い。たぶん、計算してないっぽい。ていうかめっちゃ近い!!

「お、おう……なれるだろ。……たぶん」

顔をそむけながら言う俺。……何だこれ。

「……ふふつ、これからよろしくね？」

「……ああ」

その後、俺たちは分かれ、俺は図書館に向かう。すると、その道中……

「あっ……」

カランと金属が落ちたような音がしたので振り返ると小柄な銀髪サイドテールの少女が杖を落としていた。

周りに俺と少女以外いないので、杖を拾って渡す。

「……大丈夫か？」

「すみません、ありがとうございます」

「……別に気にすんな。……じゃあ」

そういい、踵を返すと図書館に向かう。あつ、という声が聞こえたような気がしたが気にしない。

椎名はいるだろうか。いたら少し嬉しいんだがな。

「お礼を言いそびれてしまいましたか．．．」

少し残念だったがすぐに切り替える。

「お礼．．．どうやって返しましょうか．．．ふふっ」

「今度、食事に誘ってみましょうか」

少し、楽しくなってきましたね。

ねえ、
比企谷八幡君。
愛しい貴方。

因縁つていやだよな

入学式の次の日の放課後、俺は今後の生活に必要なものをそろえるためにコンビニに来ていた。

商品を手にとって、棚に戻す。そしてあるコーナーを見て気付いた。

「無料品、1日1人3個までねえ……」

この学校、やはり10万pptを与えたりしてくる時点で怪しいと思ったが、確定した。10万を月にくれる事は絶対にない。

「ん？何だ彼奴……」

必需品をかごに入れ、レジに行こうとしてふと前を見ると、その視界の端に動きが不審な女子生徒がいた。手に取っている商品を見ずに商品棚にある別の商品を見ている。

自然な感じに見えるだろうがそれが逆に違和感を俺に持たせた。動作から察するに慣れているのだろう、『万引き』に。

しかし、俺はそれを止めようとはせず、携帯を一応録画モードにしてレジに向かう。すると急に斜め後ろから声をかけられた。

「貴方は彼女が万引きすると思っっていますか？」

俺は驚いて振り返る。振り返るとそこには昨日、杖を落とした銀髪少女がいた。顔は実に面白いといった表情で笑っている。その少女が小声で言ったので店員や万引きするであろう女子生徒には聞こえていない。

「……さあな」

人が多くなってきたのでおそらく万引きについて今回は諦めるだろう。そう予想すると、俺は携帯の録画モードを切つてレジに向かっていく。案の定その女子生徒は万引きしようとせずにコンビ二を去っていった。

すると、銀髪少女もついてきた。何故に？

「何でついてくる？」

「昨日、杖を拾ってくださったので、そのお礼としてお食事に誘おうと・・・」

律儀な奴だなあ。礼なんていらぬのに。

「・・・と、そう言えばまだ自己紹介をしていませんでしたね。私は1年Aクラスの坂柳有栖です。以後お見知りおきを」

・・・名乗られた以上は名乗り返すのが一応礼儀なので、挨拶する。

「俺は1Bの比企谷八幡だ」

「ゴッ丁寧に。・・・さて、近くのレストランへ行きませんか？」

「・・・悪いがお断りさせてもらう」

さつきから考えないようにしていたが此奴の底知れない気配が、俺の本能に全力で警鐘を鳴らさせていた。背中から若干の冷や汗が流れるほどに。早く此奴から逃れたい。

「何故です?」

不思議そうに首を傾げる坂柳。・・・地味にあざといな。

「俺は養われる気はあるが、施しを受ける気はないんでな。・・・それに落とした物を拾った程度だし、恩義なんて感じる必要はない」

「養われるとは一種の施しなのでは?・・・では言い方をかえさせてもらいましょう。私は貴方に興味を持ったので食事に誘うのですよ」

なおも俺は断ろうとしたが、『断ったら泣きます』と言われたので諦めて黙ってついて

いった。泣くとか反則じゃね？

そして近くのレストランに入って、テーブル席に座る。腹も減ってきてはいたのでちようどよかったが。

「これは私の奢りなので比企谷君は気にしなくてもいいですよ？」

施しは受けないとは言ったが、ptが浮くので提案に乗らせてもらう。

「……それじゃあとんかつ定食で」

「ふふつ、では私はナポリタンを頼みましょう」

注文をして、料理が来るまでの間、坂柳が口を開いた。

「さて、比企谷君。貴方に聞きたいことがあります」

「・・・何だ？」

「貴方はこの学校についてどう思っていますか？」

「何故、違うクラスの俺にいきなりそんなことを聞く？」

一之瀬は同じクラスだから答えたが、他クラスの坂柳がそういうことを聞いてくるとは思えない。

「Aクラスだけの見解だけじゃなく、他クラスの人の意見も聞いておきたかったのだ」

それらしいことを言ってるが此奴は嘘をついているように感じる。ただ、そこに悪意の類の感情はなかったのだ、隠すメリットもないと判断して俺が一之瀬に話したことを伝えた。

「ふむ・・・比企谷君はよく周りを観察しているようですね。その観察眼、ぜひAクラスに欲しいですよ」

ボツチだったからな。常に周りの行動を見て授業とかついていかないと友達いない俺には誰も助けてくれないし。ていうか中学の時、知らない間に教科書借りられて返されなかったんだが。何、俺は幽霊か何かになってたの？そしていつの間にか落とし物預かりボックスに入ってるっていう。

「おいおい・・・やめてくれ。お前にこき使われるような未来しか見えないんだが」「それは残念です。とても面白そうですが」

否定しねえのかよ・・・それに全然残念そうに見えないし。今もクスクスと口に手を当てて上品に笑ってるしな。

それからまた他愛のない話をしていると注文した料理が来たので会話を中断して食事に集中する。食べていると坂柳の頬にトマトソースがついているのに気づく。

「おい、坂柳。トマトソース、頬についてんぞ」

「はい？何所あたりについてますか？」

そういうながらナプキンで拭こうとするが、じれったく感じてしまい、俺は前のめりになってナプキンでついてる場所を拭く。

「ほれ、取れたぞ」

「・・・ありがとうございます」

頬を赤らめて礼を言ってくる。なんか俺の想像と違う反応でもじもじしている。

「・・・悪いな。妹によくやっててその癖が出ちゃった」

「いえ、大丈夫ですよ」

その後も順調に食べ進め、食べ終わると坂柳が言ってきた。

「比企谷君。良ければメールアドレスを交換しませんか？」

「えっ、嫌だ」

「もちろんクラス関係なく、私個人ですよ。貴方とのお話は楽しいですから」

そう言われると断りづらいんだよなあ。……まあ、個人としてなら困ることもないしな。もしこの学校がクラス同士で争わせたりしたらスパイって疑われるけど。

「……分かった。個人ならいいぞ」

「ありがとうございます」

メールアドレスを交換し、坂柳の番号を登録する。電話帳が椎名、一之瀬、坂柳と増えた。ていうか女子ばっかだな。中学の俺が見たら『ボッチの風上にも置けねえな』って鼻で笑いそうだ。

そして坂柳が会計をすまし、二人で店を出た。さて、俺は帰りますか。荷物もあるし、さっさと帰りたい。

「・・・じゃあな、坂柳。帰るわ」

「私も帰りますからご一緒してもいいですか？」

「・・・はいよ」

そう言うのと、俺と坂柳は寮に戻り始める。自然と阪柳と歩幅が合うように歩く。

「すみません、合わせてもらって」

「別に謝ることじゃない。俺が勝手に合わせてるだけだ」

ゆつくりと二人で肩を並べながら帰る。俺たちの間に会話はないが、不思議と気まず

くはない。むしろ心地の良い沈黙。この状況は中学のあの時と似ている。

最後の最後まで俺の話を聞いてくれなくて、否定され、あの事件で更に俺の立場は悪くなった。あいつ等から離れるためにこの学校を選んだ。此処に来て「ヒツキー！」ないとか良かったんだがなあ。

こんな呼び方をする奴は一人しかいない。が、別に反応する必要はないので無視して歩く。だって俺、ヒツキーって名前じゃないし。

「何を無視しているのかしら？逃げ谷君」

「そうだし！ヒツキー無視すんなし！」

「あ？何だよ？俺は逃げ谷でもヒツキーでもないんだが」

後ろを振り返ると、俺の中学の同級生であり、元部活メイトであり、俺を否定した張本人たち、雪ノ下雪乃と由比ヶ浜結衣がいた。

「私たちに謝罪の一言もなく、逃げたからよ。そんなことも分からないのかしら？」

「はあ？ ヒツキーはヒツキーだし！ 何言ってるの？」

心底意味が分からない、といった表情で罵倒してくる2人。すると坂柳が少しだけ不快そうにしながら聞いてきた。

「比企谷君。品の欠片もないこの方たちはお知合いですか？」

「・・・中学の元部活メイトだ」

まさかこつちに來てたとは思わなかったが。

「ヒツキー、なんで女の子と一緒にいんの!? 誘拐!？」

「誘拐谷君。その人を誘拐したのかしら？ 白状しなさい！」

坂柳と一緒にいることがおかしいのか誘拐などと喚き散らす二人。いつの間にか野次馬も集まり始めてきた。

「悪い、坂柳。少しここから離れるぞ。文句なら後で聞くから」

「えっ?」

坂柳の返事を待たずに俺は彼女の脹脛と腰に手を入れ、所謂お姫様抱っここの状態にして人のいない方へ全力疾走した。

『おおおおおおお!!』

『きやあああああ!!』

悲鳴のような興奮のような野次馬の声を背に受けるが、今はそんなことに構ってられない。暫く走って、人がいないか確認して坂柳を降ろす。杖ごと抱えたので少しだけ

痛かった。

「はあ、はあ．．．わ、悪かったな坂柳、恥ずかしくさせる格好にさせて」

「．．．いえ、別に大丈夫ですよ。比企谷君の格好いい姿を堪能させてもらいましたし」
わずかに頬を赤らめつつも、許してくれた坂柳。

「ところで、一体あの2人と何があったのですか？ 雰囲気からして普通ではありませんでしたが」

怪訝そうに聞いてくる坂柳。やっぱりこうなったか．．．言いたくないが、坂柳を巻き込んでしまった以上はこつちとしてもフェアではない。話そう。

俺はあの2人との関係、何故ここまで恨まれているか、この学校に来るまでの経緯をすべて話した。

「そうですか……奉仕部に修学旅行の依頼が来て、2つの正反対の依頼に悩んで、どちらかの依頼を遂行するために貴方は『嘘告白』をして、あそこまでの亀裂が入ってしまったと」

坂柳が1人納得しているが、遂行なんて出来ていない。俺は依頼を『なかった』ことにしたに過ぎない。褒められることはないやり方^{偽物}で。

「……ですが、比企谷君は最終的に問題を『解消』したのでしょうか？他の2人が受けた依頼を」

「……ああ」

「確かにそのやり方は褒められたものではないでしょう。しかし、同時に称賛すべきものです」

称賛……あの2人や学校の奴等とは全く違うものだ。

「人が何かに挑戦した時、成功か失敗か以前に『責任』が発生します。どんな形であれ比企谷君は責任を果たした、ですから貴方は『間違っていない』」

その瞬間、暖かな何かが体を包んだ。言われたかった、間違っていないと。肯定してほしかった、俺の^紛存在^いを。そして理解されたかった。坂柳の言葉を聞いて、俺は憑き物が落ちたかのように体が軽くなった。

「坂柳」

「はい」

「ありがとう」

短い言葉だが、その言葉で十分だろう。何故なら、自分でもわかるくらい俺の口角は上がっているからだ。そのあと俺たちは並んで帰った。先ほどよりも俺たちの距離が無意識に近くなっていたことに気が付かずに。

王との会合（囁ませと真打）

坂柳との食事―デートとも言おう―から2週間と少しが経った。2週間と少しの過ごし方はボツチと思われても仕方ないものだった。

1人で読書したり、ゲームしたり、図書館に寄って椎名と本の事について語り合ったり、坂柳に遭遇して揶揄われながら一緒にチェスしたり、一之瀬に構われて、一緒に何処か連れていかれたり……ってあれ？1人でいる方が逆に珍しくなってるね？ボツチってなんだっけ。

ボツチの概念について思案しつつ、平和な昼休みを過ごす俺だったが、お腹が鳴ったのを機に食堂に向かおうと廊下を歩いていると。

「あら？比企谷君ではありませんか。食堂に行くのですか？」

坂柳ともう1人の女子生徒と遭遇した。坂柳と一緒にいる生徒はあの万引き未遂

だった。見た目は坂柳に引かず劣らずの整った容姿だ。

「……そうだが、何か用か？」

坂柳を一見して、女子生徒に悟られないように平静としながら用を尋ねる。

「私達もちようどお腹が空いてきたものですから、ご一緒しようかと」

ナチュラルについて来ようとする坂柳。もう1人の女子生徒は目を見開き、驚いていた。

「ちよつ、坂柳。ついていくの？」

「はい、何か疑問でもありましたか？」

クスクスと口に手を当てて笑いながら、坂柳は聞いた。楽しそうですね……

「アンタには彼氏とか男友達っていう部類の奴は作らなさそうだったからね」

「おいちよつと待て、友達な訳がないだろう。ましてや彼氏とかもつとないわ」

俺みたいなやつが彼氏とか坂柳が可哀想だし、何より釣り合わないだろうからな。恋愛絡みは中学の時の一番痛い目を見たし、もう勘弁願いたい。

「そうですか。私は貴方のことをボーイフレンドと思っていたのですが」

ねえ、それってどっちの意味なのん？俺じやなかったら勘違い起こして、告白して振られちゃうよ？もちろん俺も同じだし、此奴の場合は絶対に揶揄してるだけだろうから俺は勘違いは絶対に起こさない。現にめっちゃいい微笑みで言ってくるし。

「はあ、そんなこと良いからさっさと行かせてくれよ。もう食堂がそろそろ混んでくる頃合いだし」

腹の虫が鳴り始めた。さっさと飯食わねえとな。冗談や揶揄いに付き合ったらエネ

ルギー使ってますます腹減った・・・

「そうですね。では行きましょうか」

楽しげに笑いながら足を進める坂柳。俺は内心溜息を吐きながら食堂に向かった。

食堂に来て、適当に食券を買い、近くのテーブル席に座る。そこまではいつも通りだからいいんだが・・・ここからが違った。

「おい、坂柳。何で同席してんの？」

「はい？一緒に食べたいからですが？」

ケロツとした様子でそう言うが、自分の立場を分かって言っているんだろうか。分

かつててやってんだろなあ・・・此奴の場合、人をいじり倒すの好きだろうし。

「はあ、お前はAクラスのリーダーって噂されてんだが。しかも、派閥争いもあるってな」

そう、現在Aクラスは『坂柳派』と『葛城派』の2つの派閥があつて主導権争いが行われている。人数もほとんど同じ程度で、水面下で人数を増やし続けているのだ。まだ、本格的な争いにはなっていないようだ。

「ご心配には及びませんよ比企谷君。私はあくまで『Aクラスの坂柳有栖』ではなく『比企谷君や椎名さんの友達の坂柳有栖』として行動していますから」

坂柳はプライベートにクラス関係といったものを持ち込む気はないようだ。俺はその答えを聞いて安心した。ふと、坂柳が思い出したように言った。

「そういえば、あなたのことを紹介していませんでしたね」

坂柳の付き人っぽい立ち位置にいる女子生徒のことを俺はすっかり忘れていた。

「彼女は神室真澄さん。まあ、言うなれば……助っ人のような人です」

「よく言うわよ……」

呆れたように返す神室。様子から察するに結構こき使われているのだろう。まあ、坂柳の判断は正解だけだな。あのまま万引きを放置すればいずれは足がつく。そのときにクラスにも何らかの影響を受けるかもしれない。

自己紹介を終えた後は、雑談しながら飯を食べていた。雑談で分かったことは、神室は坂柳の下僕のような立ち位置にいること。神室が何かと苦労人気質なこと。そして坂柳との関係が満更でもない様子なことだ。

飯を食べ終え、教室に戻ろうとするが、坂柳に止められて渋々従ってまた雑談をしていると、椎名がこつちに來ていることに気が付く。

「比企谷君、坂柳さん。一緒に食事されていたんですね」

「椎名か。今まで食堂で見かけなかったんだが」

「いつもはお弁当を作り置きして、それを持って行くんですが、今日は少し寝坊しちゃいました……」

作り忘れたのか……夜中に作り置きとこまるで主婦みたいだな。俺は専業主夫志望だが、夜中とか起きれないから絶対に夕食の残りで済ませちゃう。手抜きとかじゃないよ？本当だよ？ハチマンウソツカナイ。

「椎名さんが寝坊とは少し意外ですね」

「この子が椎名？」

「ええ、私は椎名ひよりと言います。貴女は……？」

「坂柳と同じクラスの神室真澄」

「ということはAクラスの人ですか。よろしくお願いしますね、神室さん」

「・・・よろしく」

自己紹介が終わって椎名も合流してまた雑談が再開される。ていうか女子比率高すぎる。三人の容姿が良いのも相まって何か注目されてるんですが。・・・視線痛い。特に男子の嫉妬の視線が。・・・帰りてえ。

その視線を受け、内心辟易していると、急に声を掛けられた。

「椎名さん！」

そう椎名が声をかけられる。その声には聞き覚えがあつた。・・・まさか。

椎名の方に視線を向けると、そこには、金髪で爽やかな雰囲気をつつたりア充の模範

みたいな男子。そして、俺が中学で虐められる原因を作った本人でもある。葉山隼人その人だった。

「此処にいたのかい。龍園君が呼んでたよ。戻ろう」

葉山は椎名を見つけると、そう言い、戻るように促した。俺は自分の十八番『ステルスヒツキー』を全開してはれないようにやり過ぎそうとする。しかし、その努力叶わず……

「というか、坂柳さんに……。比企谷。何故、君がここに……」

坂柳から俺へと視線を移した葉山。俺を見た瞬間に、顔を顰めながら俺を睨んだ。

「……別にお前には関係ないだろう」

俺も葉山を睨み返す。何故此奴がここにいるのか、そんなことは心底どうでもいいが、関わり合いたくなかった。ポケットにある携帯を操作する。

「・・・君はまだ雪乃ちゃんや結衣に謝っていないようだな。文化祭の時といい、修学旅行での事といい」

「謝れ・・・？いつも罵倒を繰り返してきて俺の意見を聞こうともしないあいつ等に・・・する道理がねえだろ」

部室に行けば、冷たい視線に罵倒だ。俺も人間、限界だった。一色の依頼の時、雪ノ下達は俺に邪魔するなど言って俺は依頼に関わらなかった。だが、一色は俺に接触してきて生徒会長になるのを阻止するために動いた。最終的には一色の箔をつけるために生徒会長に就任させて、結構上手くやっていた。だが、それによって完全に俺と雪ノ下は決別した。依頼の邪魔をしたなどと言われて。俺は奉仕部を退部した。平塚先生の薦めもあってこの学校を選んで受験したのだ。

「ふざけるな！それは君があんな方法をとったからだろ！？彼女たちの思いを踏みにじって！」

葉山が俺に詰め寄り、切れかかってくるが、これは何の茶番だ？修学旅行の問題は元々は葉山のグループの問題であって、由比ヶ浜はともかく雪ノ下や俺には全く関係ない問題だった。文化祭は葉山が相模を推したことで起こったことでもあるのだ。それを俺は形だけ見れば尻拭いをやったのだ。感謝されど責められる謂れはない。

「踏みにじった？それをお前が言うのか？」

「なんだとっ!？」

俺は言い返すと葉山の沸点が切れそうになったのか胸倉を掴み、拳を振り上げる。殴られる、ここににいる誰もがそう思った時。

「おい葉山、何してんだ？」

そんな男の声がした。声を聴いた葉山は肩を戦慄かせ、動きを止めて声のした方を向いた。

「あら、貴方は龍園君ではないですか」

「坂柳か・・・ククツ、お目にかかつて光栄だぜ。お前がここにいるとは思わなかった」

ククツと喉を鳴らして笑う龍園という男。その男からする雰囲気や圧は葉山などとは比べ物にならないほどに強い。葉山が蟻の王なら、龍園は百獣の王だ。それほど違いがある。鋭い瞳は坂柳を見据えていて、まるで御馳走を見る肉食獣のように。坂柳も不敵な笑みで迎える。

「それで葉山、俺をいつまで待たせるつもりだ？俺はひよりを連れて来いといったんだがなあ。そこにいる奴の胸倉掴んで暴力か？」

そう笑いながら聞いてくるが、目は笑っていない。まるで下僕が粗相を起こし、それを尋問する王のように。

「ぐ、ごめん龍園君。そんなつもりはなかったんだが・・・」

俺の胸倉を放し弁明する葉山。完全に屈服している。目には恐怖の色が浮かんでいた。

「だったら無駄なこととしてねえでさっさと連れて来い。目立つような真似はするな」

釘を刺すように言う龍園。葉山は蛇に睨まれた蛙のように動けなくなった。

「てめえは戻れ。邪魔だ」

「わ、分かった」

葉山は俺たちから離れ、食堂から出ていく。最後に俺を睨んだが全く怖くない。

葉山が出ていくと、龍園は俺達に向き直って話を始めた。

「さて、俺はお前に用があるんだが。．．．お前、録画してやがるな？」

俺に向かって言う龍園。ちつ、バレたか。此奴、携帯を録画モードにした時点で近づいてきたのか？

携帯の録画モードを切って、戻す。すると龍園は愉快そうに笑った。

「やるじゃねえか。大方、彼奴をわざと煽ってたろ？」

誘導したのはそうだが、彼奴が勝手に爆発しただけだ。こんな簡単にいくとは思わなかったがな。だが、龍園には見切られた。今後の生活でCクラスのカードを手に入れられれば、何かと楽になると思ったが。

「あらあら。比企谷君、ちゃっかりしてますね」

楽しそうに笑う坂柳に、溜息を吐く神室。椎名は心配そうにこつちを見ている。

「んで、何の用だ？Cクラスの王様」

「ククツ、面白えなお前、Bクラスにもこんな奴がいたなんてな。じゃあ単刀直入で言う。……ひよりに今後関わるな」

そう龍園は言い放つ。椎名は苦悶の表情を浮かべ、拳を握る。

「……いやだ、と言ったら？」

「その時はお前を潰す。Bクラスをまとめてな」

龍園の瞳には『本気でやる』という意志しか感じられない。葉山の時といい、今回といい、此奴は独裁者だな。喧嘩を売ればあらゆる方法を使って報復するだろう。恐怖が感じられない。

「関わりたかったらBクラスの情報を売れ。もちろん、タダでな」

椎名と関わりたければ、スパイになれと。龍園の中ではある程度予測が立っているのだろう、『クラス同士の争い』という方向に。だから、リスクになる目的無しの他クラス

への接触はなるべく避けたいのだろう。俺ならそうするしな。

「……時間をくれないか？」

「比企谷君……」

「……分かった。二週間は待つてやる。だが、その間はひよりとの接触は絶ってもら
うぜ？」

「ああ、それでいい」

「良い返事、期待してるぜ？腐り目。行くぞ、ひより」

葛藤している様子の椎名だったが立ち上がり、龍園の方へ向かう。

「比企谷君……また」

椎名の苦しそうな表情が俺の脳裏に焼き付いた。そこから思い出される記憶、椎名の笑った顔、眠そうな顔、静かに本を読む姿、そして椎名との会話は短い間だが、俺にとって心地よいものだった。だから・・・まだ、この関係を終わらせるのは、惜しい。

椎名が龍園と食堂を出た後、坂柳も神室連れて教室へ戻っていった。俺は深くため息をついて、瞑目した。

天秤にかける関係

風に乗ってコートがたなびく。こんな中二病の様な表現だが、間違っではないだろう。ザツ、と地面を踏みしめ、春の夜風に肌を少し震わせた。

男は学校寮の前から少し離れた、人目に付きにくいところで佇んでいた。ただ外の夜風を浴びに来たわけではなかった。男は適当に寮の角に設置してある自動販売機で、好物である『MAXコーヒー』を買ってブルタブに指をかける。カシュツ、という音とともに飲口を開き、喉に流し込んだ。

「寒・・・早く帰ってえな・・・」

近くにあるベンチに腰を下ろし、溜め息を吐いて空を仰ぐ。生憎と星や月は見えず、薄い曇が漂っているだけだった。腕に巻いている時計を見る。『PM 7:15』を表示している。そして視線をまた空に戻してしばらくの間、ボーッとしていた。

ふと、足音が聞こえてきた。その主はどんどん近づいて来ているようだ。

顔を上げて見てみるとそこには待ち合わせの相手の男が近づいてきていた。その男は愉快そうでありながら、眼には寧猛な火を灯して笑っていた。ケラケラと笑い、こちらの前で止まる。

「よう、意外と早かったじゃねえか？」

「……面倒くさいことを後に回すのはもうこりごりなんだよ。後回しにしても特に良

いことなかったからな」

奉仕部で何かと押し付けられてたし、それでもう悩むのは俺にとって損しかないってやつと理解したのだ。

「はっ、どんなことがあったかはどうでもいいぜ。さっさと本題に移るが、俺を呼んだってことはCクラスのスパイになる気になったのか？それともひよりの関係を切る宣言か？」

鋭い瞳でこちらを見る龍園。その瞳には『愉快』といった感情が見え隠れしていた。……此奴は坂柳に似てんな。

「そのことだがな龍園。少し条件を変更できねえか？」

「どんな条件だ？」

話を聞く様子ではあるが、ふざけた条件を出せば攻撃を受けるだろうな。といつてもこつちだってふざけた条件を突きつける気なんてない。

『コレ』だ」

そうやって俺は学生証と携帯を取り出した。そして次に言う。

「プライベートp.t.こいつで手を打ってくれよ」

「……くははっ！成程そう来やがったか！おもしろえじゃねえか」

龍園にとっては予想外であつたのか。心底愉快そうに笑つた。そして楽しそうな顔のまま言う。

「良いぜ？金で解決しても。ただし、『50万pt』だ。それならひよりも好きにしろ」

平然とその金額を条件に出してきた龍園。こつちが慌てると踏んでいるのか、ニヤついている。だが、その期待を裏切るように冷静な声で俺は言つた。

「分かつた。後日に契約書にサインしてもらふ。仲介役付きでな」

「・・・あ?」

俺の様子を見て怪訝そうな声を上げる。なぜ俺がこんなにも余裕なのか分かっていないようだ。俺は一応学生証の p t 残高を確認する。その表示には『1, 0 5 7, 8 1 0 p t』—————となっていた。

何でこんなにも p t を稼いでいるのか、それは1週間前に遡る。

今日も平穩無事に授業を終え、俺は寮でごろごろしながら携帯をいじってネットサー

フィンをしていた。そしてトップ画面に戻ってゲームアプリを開こうとして、間違っ
て学校の掲示板のところを押してしまった。

「間違った・・・」

そして戻ろうと操作して、そこに『ある文章』が目飛び込んできた。

『「p t賭けマツチ」・・・?』

詳細を見ると、上級生がp tかけた試合をオンラインで知らせているみたいだ。
参加人数は8人と多いのか少ないのかわからない。好奇心に負け、俺は参加する。

すると、レース対戦、トランプゲーム、ボードゲームと選択肢が現れる。運によって左右されるレースやトランプはリスクが高いため、ボードゲームを選ぶ。そして、更に項目が現れる。将棋、オセロ、チェス、ダイヤモンドとゲーム内容の選択だ。

「チェス・・・と」

中学で小説以外ではCPU相手にチェスやっていたし、最近は坂柳にぼこぼこにされながら学んでいるし。彼奴、プロ級で強すぎなんだよなあ。ドラ○エでレベル1の勇者がいきなり竜王のところで勝負吹っ掛けられるレベル。しかも俺が負けたとき良い笑顔で俺の頬突いてくんの、しかもドヤ顔付きで。何、マ○クのスマイル0円ってやつなの？

そんなことを思いながらチェスを選択する。参加者は俺を入れて3人だ。

参加したことに反応したのか、メッセージが飛んできた。

《おつ、参加者か？》

《目ざといね。こんな目立たない賭け試合が行われてるところに入ってくるなんてさ》

やはりネット上だと初対面の人にも遠慮なくメッセージを送ってくるらしい。ネットは本来の自分をさらけ出しやすい状況だし、更に匿名性もあるため、個人の特定が難しい。メッセージを見ると、更に送られてきた。

《何年何クラスなんだ？》

答える気はなかったが、何か反応を示さなければ『賭け』が出来なくなる可能性が高いため、一応返信しておく。

《1年Bクラスです》

返信すると、すぐさまメッセージが返ってきた。

《Bクラスか……。よし、勝負しようか。いくら賭ける?》

そうメッセージが来たので、俺はスマホの画面から学生証に視線を移して、考える。

『75, 690 pt』が今の俺の残高だ。様子見したいが、一発目で遠慮すると相手も低い掛け値で来そうなので、俺は賭けに行く。

《5万ptで》

《結構貯めてるな。じゃあ敬意を表して俺は10万をかけよう》

おっと、これはラッキーか？勝てば10万か・・・良いかもしれない。俺はにやけながら二つ返事でOKを出す。

そして試合が始まった。相手は攻めるタイプのようで、攻めの手を思い切って打ってきた。しかも中々の手練れの打ち方だ。読み合いが上手い。が・・・

「坂柳と比べたら甘いな……」

相手の攻めを冷静に回避して、カウンターで一氣に盤上の状況をひっくり返す。坂柳の打ち方はそれさえ利用して更にこっちの逃げ道を塞ぐ戦い方をしてくるからな。もはやいじめみてえなもんだよ。それをするとなんと笑顔をこっちを見るんだよ。

そんな坂柳の仕打ちを思い返してしまった俺は若干イラつきつつ、反撃に出る。坂柳ほど読み合いがうまいやつは学年でもあまりいないだろう。坂柳であれば防いでいるであろう一手を、今の相手は防ぎ切れていないのだから。

そしてチェックメイトがかけられるまでさほど時間はかからなかった。

相手はもう王を守り切れないことが分かるとリザインのメッセージを送ってきた。それとともに連絡先のリンクも届く。金を支払うためだろう。俺はリンクをアクセスすると、10万ptが学生証に入金した。相手はコメントのメッセージを送ってきた。

《負けた。強いな、経験者か？》

《はい》

返信を送るとこの試合を見ていたのか、違う人からもメッセージが来た。

《君、強いみたいだねー。次は私とやろうよ》

触発されたのかやる気満々のメッセージだった。俺もまだ稼ぎたいのでOKを出す。リスクリターンの計算には自信があつた自分だが、金の力には抗いがたかった。恐ろしい金の魔力・・・！

そして俺はまた賭けに身を投じた。

《負けた・・・強すぎだよ君》

あの後も俺は勝ち続けてしまい、結局この賭けに参加している全員と勝負して勝ってしまった。

《ボードゲーム部あるから入ったら？》

《ありがたい提案ですけど、遠慮しておきます》

部活はもう遠慮したい。仮に入つたとしても俺はボツチなのでコミュニケーションがとりにくい。邪魔になるだけだ。

《堅い返信だね（笑）また勝負しようよ》

そんな軽いメッセージの後、相手のメールアドレスが届いた。登録しろとのことらしい。ていうかなんでそんな軽くネットで個人情報渡すのん？ハチマンイミワカンナイ。

一応登録してみると、電話帳に名前が表示された。

——それが相手の名前のようだ。

——『朝比奈なずな』——

そして、登録したことの趣旨を伝えたと相手はネットから消えた。

・・・もつたいないし、置いておくか。そしてオフラインに戻り、時間を見ると『P
M 7:45』と表示されていた。腹の減り具合を確認し、食事を取ることにした。

それが1週間前に起こったことだった。少し、考えすぎたようで龍園が怪訝そうに見える。

「払えるのなら別にいいが。おら、さっさと送れよ」

「分かってる。後、携帯で一応録音させてもらったからな」

いざとなればこれが証拠になる。すると龍園はまた楽しそうに笑う。

「随分と慎重なこった。で？明日には契約書にサインせんのか？」

「保険としてだ。お前のクラスメイトにも邪魔されんようにな」

「くくつ、ぬかりねえな。俺の駒に邪魔させる計画もあつたが」

やっぱりか。此奴、相当な屑だな。まあ、そんな奴の手を見切る俺も相当変な奴だが。おい、今屑つて思った人先生怒らないから出てきなさい。

そして、後日Aクラスの先生を仲介役にして、俺と龍園は念書を交わした。条件は……

・比企谷八幡（以下、これを『甲』とする）と対象者、椎名ひよりとの接触に対して契約者（Cクラス全員を含む。以下、これを『乙』とする）は関係を著しく妨害するよ

うなことをしてはならない。

・『乙』が対象者と『甲』に対してこの契約の上記の違反をした場合、10万ptを『乙』が『甲』に支払う。2回目は、倍の金額を払う。3回目は50万ptの罰金となる。尚、3回目以降は倍の金額を支払うこととする。※(4回目は100万、5回目200万：となる)

・また、『乙』のいずれかの人物が退学しても、『甲』が退学にならない限りはこの契約は破棄されない。

となった。

ざわざわと騒がしい喧騒の中、いつも通りに私は小説を読んでいた。授業も比較的にスムーズに進行している。そしてその放課後のことだ。

「お前ら、少し残れ」

そう強い命令口調で指示を出した人は、私たちCクラスのリーダーの龍園君だった。部下となった石崎君と山田君を従えて、教卓に立つ。

「少し、重要なことだ。黙って聞け。特にひより、お前に関することだ」

龍園君により、先ほどまでの喧騒は嘘のように静まった。しかし、私に関することとはどんなことだろう。……まさか。

「昨日、Bクラスの奴とある契約した。コイツがその契約書のコピーだ。回し読みしろ。質問は受けねえ」

その紙を見る生徒の顔は驚愕を隠せていなかった。私にも回ってきたため、目を通す。

……これは!!驚きのあまり口元を手で覆ってしまう。喜びと驚きが私の思考をなймаぜにした。手が震えていることに気が付かずに。

呆然としながらも紙を後ろに回す。すると、声が上がった。

「龍園君！これは本当なのかい！」

立ち上がって聞いたのは、葉山隼人君だ。龍園君は葉山君を睨んで言う。

「質問は受けねえって言っただろ？次はねえ」

そう吐き捨てられ、葉山君は悔しそうに口を噛み締めて座る。

「契約内容は読んだな？違反した場合は俺がお前らを肅正するから覚えておけ」

そう言い残し、解散を命じた後、教室を去っていった。私も鞆に小説をしまい、教室を今私の出せる限界の速さで教室を出た。『速っ!?!』という声が聞こえた気がしたが構ってられない。早く、『彼』に会おう。

中間テストが迫っているはずなのだが・・・

眩しい、目の前が光っているのを認識した俺は静かにうつすらと目を開いた。ぼんやりとしている景色が徐々に鮮明に、五感がはつきりしてくる。

それから少し、ボーっとした後、眼覚まし時間の設定がしてあるスマホを見る。時刻は『AM 6:03』と表示されていた。

「早いな・・・」

平日でも7時くらいにしか起きれない俺には、早すぎる時間帯だ。ましてや今日は休日なので、二度寝一択だ。こんな早く起きてもヒーロータイムやプリティなキュアは放送しない。俺は、ベッドに体を倒して目を瞑ろうとする。

しかし、体を動かそうとして、腕だけが動こうとしなかった。何かに固定されたように両腕が動かなかった。俺の腕を固定する何かは、さらに纏わりついてきて離れない。

不気味に感じた俺はその正体を知るために左右に顔を動かした。後悔すると知らずに。

「すう．．．すう．．．」

「むにや．．．すう．．．」

その正体を知った俺の時間は凍り付いたかのように止まった。いや、止まったかのよう感じた。その理由は――――――――――椎名と一之瀬が俺の部屋で俺のサイドを陣取って寝ていたからである。

あまりに気持ちよさそうに寝顔を晒しているので起こすのも憚られてしまう。

「．．．．ていうか、何でこうなってるの．．．？」

俺はこの状況が作られることとなったきっかけを思い馳せた。

それは数時間前の、学校の昼休みで飯を食べ終わって教室に戻った時のことである。俺が教室に入ると一之瀬が近づいてきた。

「やつほー比企谷君、ちよつと良いかな？」

相変わらずボツチの俺にも気軽に話しかけてくる一之瀬。高いコミユ力のあるハイブリットボツチ妹と違い、若干反応がキョどる俺。そこに痺れるが懂れないっ！

「な、何だ？」

「ふふっ・・・ちよつと小テストのことで相談があつてね？」

そんな俺の返しを何か暖かい反応で返して話をする。なんか小さい子を見守ってる親みたいな感じ。そして、一之瀬が言っているのは2日前に受けた小テストのことだ。

星之宮先生が今回、意味深な発言をしたものだ。成績には反映されない。つまり成績以外でなら影響がある。そのような発言をしたのだ。そして更に小テストの最終問題に当たる3問が高校1年の範囲を超えていたのだ。国語や英語は全て解けたが、理科、社会は1問ずつで、数学は全く解けなかった。ていうか、数学に関しては数Ⅲレベルだったからなあ。解けるわけねえんだよなあ。

「全教科で、最後の3問だけが凄く難しかったんだよね。私は最初の1問は何とか解けたけど後の2問は全く。比企谷君はどうだったの？」

「俺は国語と英語は全部解いて、社会と理科は1問。数学は全く解いてない。数学に関してはもう日本語じゃなかった。何あれ？何聞いてんの？」

もうね、問題文が書いてんのか全然わかんない。正直、ちゃんとした問題として成り立ってんのかその場で聞きたかったレベル。まあ、カンニング扱いされるから無理だけど。

「国語と英語は全部解けたんだ！凄いよ、比企谷君」

一之瀬はそう言つて、感心した様子で称賛してくる。そんな一之瀬の様子に何とも言えないむず痒さとおほんの少しの羞恥と嬉しさが湧いてきた。

「ん、ん！・・・それで？その事がどうしたんだよう？」

閑話休題を断ち切るように咳払いをして、一之瀬に本題を言うように促す。

「あつと、ごめんね？それで本題なんだけど・・・あの最後の問題について、比企谷君はどう考えてるのか聞きたいんだ」

そんな質問を一之瀬はしてきた。そう、どう考えてもおかしなことなのだ。小テストで現時点の実力を知りたいのに習っていないところから問題を出題するのは論外だ。そのことから、俺が立てる仮説は2つ。1つは『その問題が解ける生徒をチェックする』もう1つは『その問題の意図するものが今後のヒント』これが俺の仮説だ。ちなみに、俺は後者のほうが可能性が高いと考えている。

「俺が考えてんのは、あの問題が今後にある何かのヒントになる、って考えてるんだが」
その答えに一之瀬は首をコテン、と傾けて言う。その仕草は中学のあざとい後輩を彷彿とさせるが、一之瀬の場合は天然っぽいな。城廻先輩と一色を足して2で割った感じ？

「今後のヒント・・・？うん・・・あつ！」

何か閃いたのか声が漏れた一之瀬。少し、俺は気になったので聞いてみる。

「なんか思いついたのか？」

「うん。比企谷君の考えをもとにして考えて、ヒントが近いうちに出るって考えたら、この時期から一番近い中間テストに出るんじゃないかってね？」

一之瀬の思いついた考えに俺も思考する。確かに一理あるな・・・ただ、これは仮説から基づけた仮説の中の仮説だ。そもそもヒントなのかも分からないし、仮にヒント

だったとしても中間テストでは意味がないかもしれない。つまり現時点ではほぼ意味がないということだ。

「まあ、分からなくはないが、今は別に考えすぎずに留めて置いた方がいいんじゃないか？」

焦る必要はないと言っておく。俺の考えを信じ込まれすぎても良くないからな。

「そうだね！ありがとうね、比企谷君」

焦って考えるのは禁物と思い返したのか、前に見たような眩しい笑顔に向けてくる一之瀬。心臓に悪いから止めてもらいたい、今まで出会った女性の中で一番可愛いから思わず惚れそうになる」

「ほ、惚れ・・・!?」

一之瀬の顔が真っ赤に染め上がった。・・・やっぱえ、また思ったことが漏れて

しまつたらしい。一之瀬の前でだとこんな現象が結構な頻度で起きてしまう。

「わ、悪い。また変なことを言つたな」

「う、ううん！大丈夫だよ！．．．ちよつと嬉しいし」

ぼそつと最後のほうに呟かれた言葉は聞こえなかったが、様子を見るに本当に怒つてなさそうなので少し安心した。

俺たちのそんな様子見ていたクラスメイトは『ヒュー』と口笛で冷やかしたり、小声で『キヤー』とかいつてる。男子達は嫉妬の視線、女子たちは黄色い声だ。そんな中でより一層強い嫉妬の視線を感じる。ばれない程度に盗み見てみると、女子が俺を睨み付けてきていた。

確かあいつは一之瀬といつもいる奴だったな。名前は．．．白波だったか？よく絡んでいるのを見かけて名前が聞こえてくるので無意識に覚えていた。一之瀬と白波のゆる百合は何時かの部活で見た光景と酷似している．．．何で思い出してんだろう

な。

「と、とりあえずはこれでいいだろ。ほら、昼休みが終わる」

そう促すと一之瀬は慌てた様に準備やクラスメイトに促した。委員長ポジションは大変なようだ。

そしてその次の日、月をまたいだためptが支給される日。支給された額は『75,000pt』だった。案の定先生はこの学校のことを実力至上主義と言った。俺たちの行動次第でpt額が変動するという推察は当たっていた。そして次に、cptが発表された。Aクラスが940、俺たちBクラスが750、Cクラスが490、そしてDクラスが0ptだった。Dクラスは何がどうなったら0まで落ちたんだ？見下しているわけではなく純粋な疑問だった。

そして更に中間テストの時期が近づいていると先生が言った。どこの学校も大体は同じ時期にやるんだな。しかし、一般の高校と違うのは赤点をとってしまうと即『退学』になるということ。その知らせを聞いてHRが終わった後、早速と言わんばかりに一之

瀬が教卓に立って作戦会議を始めた。

「先生から聞いたとおり、中間テストが近づいてきてるから明後日から勉強会を開きたいと思ってるんだけど、皆はどうかな？」

一之瀬の人望はこの一か月の間にすっかり根付いていたようで、特に反対の意見や様子はクラスからは見られない。俺も特に何もなく賛成の意を示しておく。

「ありがとう皆。平日は帰りのH Rの時間から午後の7時までで、休日は午前の部と午後の部で、9時から12時と2時から5時まで。参加は自由で強制なし。苦手な教科を教えあうって感じでどうかな？」

すらすらと作戦内容を話す一之瀬に反対の意見はついに出なかったもので、この作戦で中間テストに臨むことが決まった。

そして一之瀬の話を聞き終えて帰るための身支度をしていると、一之瀬から声をかけられた。

「比企谷君。この前のクラスの授業態度の話なんだけどね？」

「おう、それがどうしたんだ？」

「比企谷君の考えが当たっていたから何かお礼をと思って」

「いや、別に恩を着せるために話したわけじゃねえし。礼はいい」

実際にただ自分の考えを話したただけだ。お礼を貰うほどのことではない。一之瀬が判断したことだ。

「うーん、それじゃあ申し訳ないし……とりあえず一緒に帰りながら話そうよ」

なんか超自然と一緒に帰ることを選択肢に入れられてるし。これが天然アイドル系リア充女子のなせる業か!?

「い、いや、一緒に帰ったりなんかしたらほかの生徒に見つかった場合に変な噂立つんじゃないやねえか？」

こんな美少女と目の腐った男子が一緒に帰って恋愛方面の噂をされた暁には俺の豆腐メンタルが死ぬまである。それに、一之瀬だつて迷惑を被つてしまう。そのことによつて更に俺のメンタルが死ぬ。

「大丈夫なんじゃないかなあ。そこまで面白がつて揶揄ってくる人はさすがにいないと思うけど……」

「でもなあ……」

それでもなお俺は断ろうとすると、一之瀬が悲しそうな表情と上目遣いで言う。

「だ、駄目……かな？」

そんな顔されると、めちやくちや断りづらい。仕草は多分意図的にやっていないだろうから破壊力がやばい。

「……わ、分かったよ」

了承すると一之瀬の表情が打って変わって明るくなった。向日葵が咲いたような感じ。

そして一之瀬は身支度を済ませ、一緒に教室を出た。教室を出た時、クラスメイトがにやにやとこつちを見てきた。特に柴田、口笛を吹くな。白波、睨まないでくれ。

クラスから居心地の悪い視線を向けられ、逃げるように寮に向かう。寮のエントランスに入ると誰かに声をかけられる。

「比企谷君、一之瀬さん」

椎名がいた。俺を見ると嬉しそうな微笑みを浮かべて近づいてきた。

「一緒に下校していたのですね」

「ああ、椎名はもう帰ってたのか」

「はい、今自動販売機で飲み物を買おうとしてまして」

「そうなんだ。……ねえ椎名さん」

一之瀬が椎名に話しかけ始める。なんか嫌な予感がしてきた。

「はい何でしょう?」

「比企谷君にちよつとお世話になったことがあつてね?何かお礼したいんだけど、椎名さんが良ければ参考意見をくれないかな?」

「いいですよ。……ふむ、そうですね……」

一之瀬の質問に熟考し始めた椎名。すると一之瀬が俺の肩を叩く。内緒話をご所望のようで俺の耳に口を近づけて聞いてきた。近いな……

「ねえ、椎名さん、よく話すね？いつも口数少ないのに」

一之瀬から甘い匂いが発せられるのにドキドキしながら聞いてみると、椎名の俺へのなつき具合に疑問を持ったようだ。

「……ちよつと色々とな」

前に龍園と契約したことで椎名は俺との接触を妨げられなくなった。契約したことを知った椎名は俺にめつちやなつた。この前なんか一緒にいたら『抱きしめてください……』なんて上目遣いで頼まれて抱きしめちゃったし。

「……あつ」

椎名が何か思いついたようだ。しかしなんか俺の理性センサーが警鐘をガンガン鳴らしてるんだが。俺の理性センサーは嫌なことだとはぼ百発百中で当ててくるのだ。おかげで冷や汗だらだらである。

「では一緒に寝るといふのは？」

おいおいおいおいおい！？椎名は何という案を出しとんじやああああ！！予想斜め上すぎんだろ！！案の定一之瀬は真っ赤に頬を染めてあたふたし始めた。

「え、ええっ？！！」

「比企谷君と一緒に寝るのは心地いいですよ」

さらなる爆弾を天然な微笑みを向けて落としてくる椎名。確かに一緒に昼寝したことはあるが、それを一之瀬に進めんなよ！！

椎名の言葉に何やら考えることがあったのか、一之瀬は少し落ち着いた後に言った。

「じゃあそれでいこう！」

「まてまてまて！そもそも俺はお礼はいいつて言ってるし、椎名の意見を鵜呑みにしな
くても・・・」

ていうかそもそもこんな美少女と一緒に寝たりなんかしてみろ、間違いなく俺の理性
が終わる。

「駄目・・・なの（ですか）？」

ダブル上目遣い＋涙目。俺の理性HPが80, 000のダメージを受けた。瀕死の状
態になった俺は思わず。

「わ、わかった、分かったからその表情はやめてくれ」

許可を出してしまった。すると2人は嬉しそうな表情になって。

「じゃあ（では）よろしく（お願いします）ね？」

そう言ってきた。さりげなく椎名も一緒に寝ることになるのを俺は気付く余裕すらなかった。

本当に何でこうなった・・・

俺はエントランスの天井を仰ぎながら心の奥でつぶやいた。しかし、そんなげっそりした感情とは裏腹に心暖かくなりながら。

藪から魔王達と試験の攻略法

一之瀬と椎名との添い寝イベントが終わった後の次の日、いつも通りに授業を受けていきながら昼休みを平和に過ごして、放課後になった。

そうしていつも通りに帰りの用意をして、教室を出る。廊下を歩いていると見覚えのある姿が俺の前方に移った。一之瀬だった。昨日のことを思い出してしまい、無視してすれ違おうとステルスヒッキーを全開にして通り過ぎようと試みる。が……

「あつ、比企谷君」

失敗してしまった。15年間培ってきた俺のスキル『ステルスヒッキー』がいつも簡単に破られてしまった。もはや一之瀬には通じないのだろうか……。無念。と、ふざけた思考で一之瀬に声をかけられたことによる焦りを誤魔化しつつ、無視は出来なさそうと判断し、反応する。

「よ、よう、こんなところで何してんだよ。一之瀬は……」

若干詰まりそうになったが何とか返事を返した。よくやった俺。ていうか昨日の今日であんなことがあったのに何でそんな平気そうに声をかけられるのかねえ。俺だったら一生関わらねえぞ。最近の女子は鋼の精神も備わってるのん？

「私はね、生徒会室に行ってたんだ」

そう答える一之瀬。生徒会室？こんな時期から一体何のために？

「何で？って顔してるね。自己推薦しに行ったんだ」

自己推薦か。やはりこの学校は他の学校とは違い、生徒会の人員確保の仕方も特殊なようだ。

「で、結果はどうだったんだ？」

少しだけ気になったので、聞いてみることにした俺。性格も良く、学力も小テストでクラスベスト5位以内にて高く、コミュ力も高い一之瀬のことだ。多分生徒会入りを果たしてるだろうと思った。しかし、予想外の返事が返ってきた。

「にやはは、一次面接で落とされちゃったよ。『まだ早い』って言われて見送られたんだ」
おいおい、一之瀬を見送るって生徒会はどれだけの逸材を求めてるんだよ。1年のほとんどの生徒が無理なんじゃねえの？

「・・・そうか。まあ、次があるだろうし頑張れよ」

らしくない励ましの言葉をかけると、一瞬だけキョトン、といった表情になるがすぐに嬉しそうに微笑んだ。

「うん、頑張るよ。一回落とされたぐらいじゃあ私は諦めないから」

気合を入れなおすように意気込む一之瀬にどこか和みながら、そろそろ帰ろうと思

い、歩き出す。

「じゃあな。一之瀬」

「うん、またね。比企谷君」

笑顔でそう言いながら、手を振ってきていたので小さく手を振り返しつつ、寮に向かって歩き出した。

それからまたその次の日、いつものように授業を受けて昼休みになった時、俺は小テストが返ってきたときに星之宮先生が言っていたことを考えていた。

『平均点は76, 4点でクラスで2番目です！1番はAクラスで3番目はCクラスで、4番はDクラスです！すごく優秀で先生びっくりしちゃった！最低点数は66点で、平均点数の半分の38, 2点が赤点よ。この調子なら中間テストも乗り越えられると思うから頑張つてね？小テストの結果でDクラスは赤点者が8人出ちゃったから茶柱先生

も少し対応を変えないといけないから大変だったそうなのよ』

というのが先生の言葉だった。ここで俺が持った違和感が浮上する。何故、『不安や心配』ということではなく、『対応を変えないといけない』ということ言ったのか。普通、赤点を取ったという結果を見るなら心配するような言葉が出てもおかしくはない。しかし先生は対応を変えなければならぬと言いつつた。ここから推測できることは対応を変えれば対処できる、つまり『退学者を出さない方法』が存在するということ。ここで、俺は二つの案を思いついた。しかし、Bクラスには特に何の関係もないため、そこで考えるのを止めて腹の減り具合をみて食堂に向かいだす。

食堂へ向かう道中、見覚えのある姿が前から見えてきた。そいつは俺の姿を見ると睨みながら近づいてきた。その相手は……

「あら、クズ谷君じゃない。私たちが受けた依頼を邪魔したくせに謝りもせず、更にAクラスの坂柳さんとするんで、一体どういいうつもりなのかしら？」

雪ノ下だった。相変わらず舌の乾かないうちに坂柳との関係のいちゃもんを謝罪の

強要を罵倒を忘れずに言ってくるが、こいつは一体何を言っているのだろうか。依頼の邪魔をした理由を話そうにも雪ノ下や由比ヶ浜が聞く耳を持ってくれないからだろうか？そして修学旅行の件は百歩譲ったとしても一色の依頼は雪ノ下が一色のアフターケアまで考えずに生徒会長に立候補しようとしたからだ。

一色の依頼内容は『生徒会長立候補と勝手にクラスの女子から推薦人30人の名前を書かれて立候補させられたから生徒会長にさせないでほしい』というものだった。

この土台ができている時点で雪ノ下が生徒会長になって一色を落選させてしまったら『クラスから推薦させたのに落ちた』というレッテルを張られ、更にクラスの笑いものになるだろう。いじめもエスカレートし、最悪の場合、不登校になった可能性だって無いとは言いい切れないのだ。

自分の優れているところを相手に見せ、誇ろうとしたに過ぎない。まったく依頼人の立場から物を見れていないし、『奉仕部の理念』からも全く別のものだった。そして坂柳につるもうが何だろうがこいつらには関係ないのだ。

俺はもう相手にするのも労力の無駄だと判断して雪ノ下の横を通り過ぎようとする。

「待ちなさい！」

怒鳴りつけるような雪ノ下の声が響いたそのすぐ後、この状況とは場違いとも言える
明るい声が乱入してきた。

「あれれ？雪乃ちゃんじゃん。そんな大声を出してどうしたのかな？」

そんな声ができる方向へ振り向くと、その女性は顔が雪ノ下によく似ていて、肩まで伸びた髪を揺らしてこちらを興味深そうに見て笑いながら歩いてきた。誰だ？

雪ノ下はその女性を見ると驚愕しながらも、苛立った表情と声音で言った。

「姉さん……っ!!」

「久しぶりの再会なのにそんな怖い顔しないでよぉ。お姉さん悲しい」

そんな雪ノ下の反応を受けても、言葉とは裏腹に全く悲しそうな感じではない返事を返す。それどころか、どこか揶揄っているような印象さえも受ける。

ていうか、雪ノ下の姉さんだと？顔立ちはそっくりだが、纏う雰囲気と威圧感とは比べ物にならないほど、姉の方が強い。それにどこか違和感を感じる。普通の人からはまず感じることはない違和感。本能が警鐘を鳴らし始める。

「で、そこにいる君、雪乃ちゃんとはどういったご関係なんですか？」

雪ノ下の反応を見た後、次は俺のほうに向きなおって、雪ノ下と俺の関係を掘り下げてくる。俺に近づいて二の腕を突きながら。

「……知らないですよ」

そんな雪ノ下の姉にげんなりしながら答える俺。すると雪ノ下がここぞと言わんばかりに罵倒を折り交ぜて捲し立てた。

「私とこの屑の関係？あるわけないでしょう、そんなの死んでもごめんだわ。それは備品よ。第一に姉さんには関係ないでしょう？」

もはや名前の原型すらなくなってしまった。人としても扱われなくなったか。

「……ふん、そうなんだあ」

そんな雪ノ下の返答に興味なさそうな相槌を打つ雪ノ下さん。その眼からは到底妹として見るような眼ではない。まるでどうでもいい他人に向けるような色のない瞳。自分に向けられてもいないのに背筋に冷たい刃でも突き付けられたかのように俺の体が動かない。

「ねねっ！それより私とお茶しない？」

雪ノ下に完全に興味を失ったのか俺を標的にしてくる雪ノ下さん。すると無視されたような反応が気に食わなかったのか突っかかってくる雪ノ下。

「何無視しようとしているのかしら？姉さん」

「あー、雪乃ちゃんはもうどこか行つていいよ。今私、彼と話すので忙しいから」

脇目も降らず、手を振って退場を促す雪ノ下さん。もはや他人同士の会話だ。決して混ざることはない水と油。パンク○ザードか何か？

「ッ！……いい加減にー！ー」「うるさいよ、雪乃ちゃん」ッ!?!」

適当に返事をする態度に雪ノ下が怒鳴るが、ぞつとするような冷たい声と軽蔑や失望のような類の感情を乗せた視線を雪ノ下さんは向け、雪ノ下を黙らす。

「会話の途中で無理やり横槍を入れないでくれるかな？邪魔したいなら後でいくらでも相手してあげるから」

「……!!」

雪ノ下は齒噛みして俺と雪ノ下さんを睨んだ後、この場を去っていった。その背中を見つめて雪ノ下さんが呟く。

「前の方がよかったなあ．．．お母さんに再教育受けさせればよかった」

対して残念そうに見えない。それに『再教育』という単語にとてつもなく危険な感じがする。やばい、この人。

そんな雪ノ下さんの態度と様子に戦々恐々としてみると、雪ノ下さんが俺に向き直って聞いてきた。

「ねえねえ、君は雪乃ちゃんとどんな関係かな？お姉さんに教えて」

そうお願いを言うが、眼が『お願い』ではなく『命令』だと語っていた。もうそんな様子を見て逃げられないと悟った俺は素直に話すことにした。逃げたらやばい、と本能が訴えてくる。

「……分かりました。でもとりあえず食堂へ行かせてください。話しますから」

食堂へ2人で行き、あまり人が集中していない席に座って、そこから俺と雪ノ下が出会った時からこの高校に来るまでの経緯を話した。一応嘘をつかずに。この人に嘘をつけるほど胆力があるわけじゃない。

そして話し終えた後、雪ノ下さんが聞いてきた。

「じゃあ、比企谷君は事故の被害者になって2年生の時に奉仕部に入部させられて、雪乃ちゃんと再会した。で、その奉仕部の方針と理念に従って依頼解決をしていたけど、雪乃ちゃんやガハマちゃんに自分の解決方法を否定されたんだね？」

「はい」

俺の解決手段が否定されて一部の奴は『自己犠牲』とか言ってたが、周りに頼りたくても手を振り払われて裏切られて、無駄と思ったから他人に頼るのをやめて期待するの

もやめた。自己犠牲？知ったような口を聞くな。それ以外の解決手段を知らないんだよ。たったその一言で片づけられると思うとどうしようもなく頭にくる。

「そう……じゃあまず、言うね？本当にごめんなさい」

そう唐突に頭を下げられ、俺は慌てる。

「ちよっ！雪ノ下さん!?頭を上げてください」

「これは雪ノ下家の長女としてのけじめなの」

そして数秒後に頭を上げて雪ノ下さんが話し始める。

「……雪乃ちゃんはね、自分で物事の解決をするのが物凄く苦手だね？偏った偏見も理由の1つだけど……最大の理由は私に対するコンプレックスがあるからなの」

「コンプレックス、ですか」

「そう、雪ノ下家で生まれた私たちはまず『期待』を背負わされるの。そして習い事や勉強、運動なんかでも一番を取るのが当たり前っていう風な感じだね」

自由ねえな……俺だったら精神的に病んじゃうぞ。

「大変ですね……」

「大変大変。……それで次に『比較』される。私は才能や器用さがあつた。で、何やるのにも雪乃ちゃんより先に出来ちゃうし完成度も高かつた。それで嫉妬したんだろうね雪乃ちゃんは。才能には一歩及ばず、器用さはない、やがて雪乃ちゃんは私を追いかけるようになった」

親にも比較され、いたたまれない状況だった雪ノ下。一方で誰からも称賛されてきた雪ノ下さん。どちらがいいかは一般的には決まっているだろう。

「そして知識や技を中途半端に蓄えて、今の雪乃ちゃんの素地が出来た。でも、自分至上

の考え方と偏った偏見で雪乃ちゃんは失敗してきた」

「君との出来事は雪乃ちゃんにはいい経験になったと思うけど、相変わらずあの人を見下す態度は治っていないかった。むしろ酷くなってた」

確かに。世界を人ごと変えるなんてたいそうなこと言っておきながら、俺を罵倒してくるし。

「この高校に来たのも多分私を追いかけてきたんだろうね。そんなことしても意味がないのに」

食事しながらため息をつく雪ノ下さん。かなり憂鬱そうだ。

「あんな考え方だからDクラス行きになっちゃうんだよ」

え、あいつDクラスなの？ 自分は優秀とか自慢しときながら？ というか絶対由比ヶ浜以外友達作れねえだろうな。

「なんでDクラスって知ってるんです？」

「んー、それは私が生徒会にいるからかな。うちの生徒会って他のとこと違って結構権力あるから」

何それ怖い。プライバシーとかやばくね？個人情報保護法仕事しろよ。

「まあ、今回の中間テストでDクラスは退学者出るだろうし、雪乃ちゃんもそう遠くないうちに脱落するかもねえ」

確かにそうだ。この高校が中間テストだけで終わるはずがない。この先もこれ以上に厳しくなっていくだろう。しかも今のDクラスの状況は最悪だ。団結すればまだマシだが……あの様子では難しいだろうな。

「ねー、君がDクラスならどうやって対処するか教えてー」

そんなことを言ってくる雪ノ下さん。

「……普通に勉強しますけど」

普通にあたり触りが無い答えを言うと雪ノ下さんはおどけながら言った。

「またまた、気付いてるくせに。依頼の解決方法があんなに面白いのに思いついてないわけないでしょ？」

いや何その偏見。しかし雪ノ下さんは確信してる様子で言ってくる。隠しても何のメリットもないので話すことにする。

「……はあ、2つあります。1つはP.tでテストの点を買うこと。P.tって原則何でも買えるって言ってましたし。2つ目はテストの過去問を買うこと。先生がヒントをくれたのであるんじゃないかな、と」

「……ぶっははははは!!やっぱり面白いね!君って!!」

「……ほう、気付いたのか」

後ろから急に声をかけられ、後ろに振り向いた。向いた先には眼鏡をかけた鋭い目が特徴の男性がいた。

「あつ、堀北君じゃん。どうしたの？」

「たまたま近くにいたから寄ったに過ぎない。それと雪ノ下、お前は書記の手伝いは全部終わったのか？」

「終わってるよく？それが？」

「橘がお前を探していたぞ」

「あー、まだ少し残ってたの忘れてた」

「放課後に話があるらしい」

「わかったよ」

そんな会話が目の前で繰り広げられている間に飯を食べ終わらせた俺は黙って教室に戻ろうとする。

しかし……

「ぐえっ!!」

背後から首根っこをつかまれたために変な声を漏らしてしまう。

「もう、照れないで自己紹介しなよ」

雪ノ下さんに捕まった俺は早々に諦め、自己紹介をした。だって目が怖いもん。

「……1年Bクラス、比企谷八幡です」

「3年Aクラス、堀北学だ。生徒会長だ」

「同じく3年Aクラスの雪ノ下陽乃。生徒副会長だよ」

二人ともAクラスかよ。しかも生徒会2トップって……大物だなあ。

「比企谷。いきなりでなんだが、生徒会には興味はないか？」

「はい？」

生徒会長の言葉に呆然としながら聞き返した。どうやら面倒くさい展開になりそう
だ。俺は心中で溜息を吐いた。

その後日、雪ノ下さんに話した2つ目の策を使い、中間テストの対策をしたので無事
にBクラスは退学者が出ることはなかった。もっともしなくても退学者が出ることは

なかったと思うが。

ちなみに由比ヶ浜はDクラスにいて、赤点をとったらしい。Dクラスのある奴のおかげで赤点になっても退学にはならなかったらしいが。もう退学しちまえよマジで。

そして俺はまた一之瀬に礼という名の添い寝を受け取ることになったのである。

その後、俺は生徒会の勧誘とそう遠くない内にある事件に巻き込まれ頭を悩ませることになる。

やはり俺が暴力事件に巻き込まれるのはまちがっている！

中間テストを無事に乗り越えて、夏の蒸し暑さが到来する時期になった。いつも通りに学校へ登校し、教室に入ると、クラスメイトが何やら集まってひそひそ話しをしていた。何、陰口かな？ Bの奴に限ってないだろうけど。

その様子が珍しかったため、耳を澄ませて話している内容を聞き取る。

「Dクラスの須藤がCクラスの生徒を殴ったって噂があるけどマジ？」

「いや、分からないけどあの素行の悪さなら本当の可能性はあると思う」

Dクラスの話しか。ていうか、噂されるほどってどんだけ素行悪いんだよ。

「ていうかさ、須藤君もそうだけど。あの雪ノ下さんと由比ヶ浜さんも酷くない？この

前なんかさ、普通に廊下歩いてたら曲がり角のところで由比ヶ浜さんにぶつかっただけど、その時、あの子歩きながらスマホしてたんだ。一応、こっちは謝っただけどね？そしたら「次から注意してね？」って言ったんだ。酷くない？」

「雪ノ下さんは、コンビニ行ったら由比ヶ浜さんと一緒にいて最初は歩きスマホを注意してたんだけど由比ヶ浜さんに何か言われたら、私のことを悪口言ってたんだよ!? 本当意味が分かんない!!」

女子は憤慨しながら言う。いくらなんでもあり得ない。女子はぶつかって謝ったのに対して由比ヶ浜は歩きスマホをしていて、ぶつかっても謝らずそっちの不注意だ。と言ってきた。第3者から見れば明らかに由比ヶ浜が糾弾されるだろう。ていうか雪ノ下は性格変わりすぎじゃないか？明らかに由比ヶ浜も悪いのに、由比ヶ浜に甘すぎだろ。よくそれで世界を人ごと変えるなんて言ってたな。

呆れて俺は聞くことをやめた。別にどうでもいいからな。そして視線を手元の小説に向けて読み進めていると。

「おはよー。皆」

一之瀬が登校してきて、クラスメイトに挨拶していく。そして俺のところにもやってきて挨拶をしてきた。

「おはよー！比企谷君」

「・・・おう」

相変わらずいつも通りだな、一之瀬は。添い寝というイベントを2回こなしておきながら俺に話しかけるとは。添い寝をする時点で大概の奴なら襲い掛かるぞ普通。それとも、俺は男として認識されてないのか？

そんな男として悲しいことを考えていると、当の一之瀬はこつちを怪訝そうに見つめて聞いてきた。

「・・・何か比企谷君、鍛え始めたの？」

「・・・いや、そんなことないが？」

よく見てるな一之瀬は。なんだかんだ言つて観察力もあるしな。クラスを纏めるリーダーなだけはある。

「そつか。じゃあチャイムももう鳴るし、行くね？」

「おう」

そして一之瀬は席に座りに行つた。チャイムが鳴るとほぼ同時に星之宮先生が教室に入ってきた。

「はい、皆席についてー。いつも通りHRを始めたところだけど・・・一つだけ皆に緊急連絡があつて。昨日の放課後に特別棟でDクラスの男子生徒がCクラスの3人の生徒を殴つたことが判明したの。CクラスとDクラスの意見は全く逆だから事態の収束に時間がかかっているみたいなの。みんなもこんな事件を起こしたりしないように

気を付けてね？」

先生の話を聞いてちようど須藤の話をしていた奴は驚いていた。まあそうだよな。一之瀬は先生に質問した。

「もし、どちらかのクラスに助けを求められた場合は協力してもいいんですか？」

「そこは貴方達の自由だから特に教師である私は口出しはしないわ」

そして質問に答え、ほかに質問がないことを確認していつも通りにH Rが始まった。にしても、暴力事件ね。Dクラスの状況は更に悪くなったな。ま、どうでもいいが。

そこからは特に変わったことも起こらずに時間が流れ、昼休みになって食堂へ向かうと。

「あら、比企谷君ではありませんか」

坂柳と鉢合わせした。そしてその隣には神室ではなく知らない金髪の男子生徒がいた。

「おう、じゃあな」

なるべく相手にしたくないので、スルーして横を通り過ぎようとするが。

「ふふ、待ってください」

「痛えっ！」

坂柳の杖で足を踏まれ、痛みに悶える。金髪はそれを見るとケラケラ笑っていた。

「声をかけたのにスルーしてそのまま行こうとするのは酷いものではありませんか？比企谷君」

「杖で足踏んづけるお前の方が酷いわ!!」

マジで痛いんだからな!?!此奴、最近俺を揶揄うのが趣味になつてきてんじやねえのか？

「それでは痛み分けとして手を打ちましょう。それと比企谷君、私と一緒に食事してください」

そう軽く先ほどのことを流して食事の誘いを受けたが、コイツ俺が断つてくんのをめんどくさがつて疑問形じゃなくて命令形で言つてきやがった。

「……はあ、わーった。行けばいいんだろ？」

「ふふ、ありがとうございます比企谷君。なんだかんだ言つてついて来てくれる比企谷君のことは好きですよ？」

そう揶揄う様なこと言つてクスクス笑っている坂柳に若干ドキツとさせられつつ、何かやられてばかりでは癪になるのでこつちも揶揄うつもりで返す。

「ま、嫌も嫌も好きのうちって言うしな」

どうだ。これでドン引きして俺を揶揄ってくることは無くなるだろ。あれ？何か自分で言つて悲しくなってきた。

「・・・え？」

坂柳を見ると驚いたような表情をしてこつちを見てきた。ここまで驚いたような表情の坂柳は初めて見た。ていうか、顔が赤い。何で？

「ははっ、坂柳にこんな表情させるなんて思わなかったぜ」

金髪は心底面白がるように言うと、俺に向き直って言ってきた。

「俺は橋本正義。坂柳と同じクラスだ。お前が坂柳の恋「橋本さん？」おおっと、友達の比企谷って奴だな？」

坂柳が遮った部分が気になるが、適当に頷いておく。

「そうか。いやー、坂柳の話題にお前がよく出てくるから会ってみたいと思ってたんだよ。よろしくな？」

此奴からリア充臭がプンプン漂ってくる。出来ればあまり関わり合いたくないな。

「……自己紹介も済んだようですし、行きましようか」

表情もいつも通りに戻った坂柳に促されて、俺たちは食堂へ向かう。すると坂柳は俺を見て不思議そうに聞いてきた。

「比企谷君。貴方、何か習い始めたのですか？」

「……何でそう思うんだ？」

一之瀬も此奴も鋭いな。そんな分かりやすいか？

「いえ、歩いているときの体軸のブレが前と比べてほとんど無くなっていますし、それに体の筋肉の付き具合が増えているので」

幾らなんでも鋭すぎだろ。よく見ただけでそこまで情報を引き出せるもんだ。やっぱり此奴とぶつかり合いたくねえわ。

「ちよつと鍛え始めたんだよ。最近何かと物騒だしな」

「そうですか。物騒と言えば、昨日CクラスとDクラスの間で暴力事件が起こったそうですが、比企谷君はどう思いますか？」

食堂について席に座って料理を頼んで出来上るのを待つ中、坂柳が聞いてくるので俺は考えていた答えを言う。

「どうも何もDクラスが殴った加害者側なんだから不利だろ？」

「そうですね。ではこう言いましょうか。場所は特別棟で、誰もいない中呼び出されて、一方的に相手を殴ってしまった。殴られた側は3人で、殴った側は1人です。殴った人を庇う場合、比企谷君ならどうしますか？」

そこまでの前提条件を聞き、俺は考えると、1つの案が思いついた。これが上手くいけばDクラスは無傷で済むが……これはいわば博打だった。失敗した時のリスクも大きい。

「……監視カメラか？」

その呟きを聞くと坂柳は楽しそうに笑った。

「ふふつ、やはり貴方もその方法を思いつきましたか。ちなみに橋本君は分かりましたか？」

「いや全然。答えを言ってくれ」

降参というポーズを示す橋本を見て、坂柳はクスクスと笑って言った。

「そうですね。ではこの騒動が終わった時に答えを言いましょう」

その後は雑談しつつ、橋本とメールアドレスを交換して、別れた。そして教室前まで戻ると見覚えのない奴等がクラスメイトと話していた。

龍園がいるCクラスがBクラスに来るわけがない。ってことはDクラスの連中か？
その場にいたのは騒がしい二人の男子と、無表情の男子、そして明るそうな女子だった。

俺はそれを見ながら静かに教室に入ろうとする。その時、無表情な男子と眼が合った。その眼を見た途端、今までより遥かに本能の警鐘が鳴り響いた。何だ・・・!? 彼奴は!!?

思わず後ずさりそうになったが、何とか耐えて教室の中に入った。雪ノ下さんの強化外骨格と比べ物にならないぞ・・・？引きずり込まれそうな感覚に陥った。

俺は深呼吸していると、教室の中にいたDクラスの明るそうな女子が俺に話しかけてきた。

「あの、ちょっと良いかな？」

そう不安そうに確認する仕草を見て1回で分かった。此奴も強化外骨格持ちの奴だ。雪ノ下さんの劣化版、もしくは一色の強化版と言ったところか。

「・・・何だ？」

「あつ、自己紹介がまだだったね。私はDクラスの櫛田桔梗だよ。今私たち、同じクラスの須藤君がCクラスの人を殴っちゃったんだけど。正当防衛なの、正当防衛の証拠を持っているかもしれない目撃者を捜してるんだけど・・・その人に心当たりはないかな？」

俺はそもそも先生に言われて事件のことを知ったので、目撃者は知らない。

「悪い、知らない」

そう言うのと、櫛田は落ち込む態度を見せたがすぐに笑顔になって言った。

「そっか、じゃあ私とメールアドレスを交換しないかな？事件の手がかりを見つけたら教えてほしいの！」

普通はこういう美少女とメルアドを交換したがるんだろうが、こんな仮面つけてる奴と俺は関わりたくない。しかし、こういうタイプは断つても折れないので交換して、すぐ削除すればいい。

「・・・分かった」

「ありがとうっ！」

そして俺は櫛田とメルアドを交換する。そして櫛田たちは帰っていく。一瞬櫛田と

眼が合った気がした。微笑んでいて、眼は喜色満面の色が滲んでいた――様な気がする。

そして櫛田達が去った後、入れ違いの形で一之瀬達が入ってきた。俺に聞いてきた。

「あれ？櫛田さん達が来てたの？」

「ああ、事件のことで協力をしてくれって言ってきた」

「そうなんだ。・・・じゃあ協力しようか！」

一之瀬はDクラスに協力することを選んだようだ。まあ、俺はどっちでもいいが。

「そうか、頑張れよ」

「うん・・・ってええっ!!? 比企谷君は協力してくれないの？」

「だって俺としちゃあCクラスが勝とうがDクラスが勝とうがどっちでも良いし。というか、こっちに飛び火する可能性だってある」

ていうかどっちのクラスにも協力したくない奴がいる。Cクラスは葉山、Dクラスは雪ノ下と由比ヶ浜。顔を合わせるかもしれないし、会ったら一緒になって罵倒されるだけだ。

「そ、そこを何とか、協力してくれないかなあ？」

目を潤ませながら上目遣いで棄てられた子犬のような雰囲気을纏わせて頼んで来る。計算でやっていないため、余計に破壊力があるが俺も譲れない理由があるんだ。ここはしっかりと断って……

「わ、分かった。協力するからそんな顔するな」

あれー？ちよつと逆のこと言つてなあーい？どんだけ俺の意思弱いのか……？

「ありがとうっ！比企谷君!!」

一之瀬はとても嬉しそうな表情を見せる。はあ……また面倒ごとに首突っ込んでしまったよ……。まあ、一之瀬にはお礼添い寝のお礼添い寝ってことにしておこう。

一之瀬との話を終えて、昼休みは終わりを迎えた。放課後はとりあえずDクラスの状況を聞いてみるか。

そして放課後になって寮に戻った後、Dクラスの状況を聞くために消す予定だった櫛田の連絡先に繋げる。

『もしもし、比企谷君?』

電話口から櫛田の声が聞こえるが、櫛田も寮に戻っているのか、周りの声が聞こえない。

「ああ。とりあえずBクラスは協力することになったから、今1人ならDクラスの須藤

がどんな感じで事件を引き起こしたのかとクラスの動きがどんなものなのか教えてくれ」

『分かったよ。ありがとうね比企谷君』

「礼なら一之瀬に言つてやってくれ。俺は最初、協力する気なかったしな」

『ううん、それでもだよ』

そこから須藤の事、殴られた3人の事とクラスの動きの詳細を聞いた。須藤は三人の男子生徒に呼び出された後、挑発されて殴り、殴られた側は抵抗しなかったらしくボコボコになった後に訴訟したということ。クラスは協力して須藤の嫌疑を晴らそうとして動いてはいるが、人数が少なく、唯一の希望である『目撃者』を探しているが、見つかっていないということだった。

「状況は分かった、思った以上に不利だなこれ」

『うん。目撃者の人が早く名乗り出てくれるといいんだけど……』

櫛田はそう言うが、AとBのクラスの奴ならまだしも、Dクラスのところから出て口裏を合わせたって言われて証拠能力が低くなって、勝ち目がなくなる。

ていうかこの事件、絶対1枚龍園が噛んでんな。恐らくクラスの大まかな实力を知るために仕掛けたんだろ。

「とりあえずこつちでも他にやれることはやつとくから、そつちに動きがあつたら連絡くれ」

『わかった！絶対連絡するねっ』

そして通話を終えた俺はため息をついて、思考する。櫛田との通話は神経使うな。それに龍園が関係してる可能性が高いし、殴られた3人の事を洗い流して見るか。

……それにしても――――

146 やはり俺が暴力事件に巻き込まれるのはまちがっている！

――――櫛田の声って聞き覚えがあるが、どこかであつたのか……？

× × ×

女子寮の中で今しがた通話を終えた櫛田桔梗は鼻歌を歌いながらベッドに座り、足をブラブラ揺らしていた。

「ふふつ、また会えるなんて思わなかったなあ・・・」

最近堀北や綾小路君のことでイライラしてたけど、八幡君を見た途端イライラが消えていった。私の外面を見たら一発で見抜かれただろうなあ。

私は鞆の奥底にしまっていたある写真を取り出した。その写真は、二人の男女が手を繋ぎながら写っていて、公園の一角で明るい笑顔を浮かべて幸せそうに写っている私

と、面倒くさそうな顔をしつつもしっかりと手を握っている男子——八幡君が写っていた。

あの頃の八幡君は可愛かったけど、今の八幡君はとっても格好良くなつてた。会つて分かったことがある。ただ、何で私のことを覚えてなかったのだろうか？

何かあつたのだろうか？ そうだとしたら記憶喪失ということだけど……まあ何にしても。

「早く思い出してね？ 愛する人」
八幡君

写真をまた大切にしまつてお風呂に入るために洗面台に行つて服を脱ぎ始めた。

『本物』の兆し

ノイズが鳴ったー何と言っているかは分からないが、不思議な感覚が体を包んだ。ノイズは鳴りやむと、感覚は鮮明になり始めた。

何もない白い空間にただ、佇んでいた。その姿の輪郭がはつきりしてくると同時にその人物は理解した。

ああ、これは夢なんだな、と……

そして、二つの影が下にやっていた視線に映った。そして見上げると見覚えのない少女等が笑顔を見せながらこつちを見ていた。初めて見る顔の筈なのに見ると落ち着くそんな感覚。

そして少女等は何かを喋ろうと口を開いているが、ノイズが入ってよく聞き取れない。しかし、最後に言った言葉だけは何故かとても鮮烈に聞こえた。

「……………」早く会いましょうね、八幡さん……………」

「……ん、ん……う」

眩しい日差しにより徐々に意識が覚醒していき、そして瞑っていた瞼を開く。目に映る景色がはつきりしていく。やがて体を起こしてスマホの時間を確認した。

「7時か……」

今日は平日で学校もあるため、二度寝をしたところだがそんなわけにもいかないのだけだるい体に鞭を打ち、制服に着替えて準備を済ます。準備をしているとあることを

思い出したため、思わず眩く。

「……そういえば今日は生徒会の裁判か」

そうして俺は静々と寮を出て、学校に登校した。

事態が急転したきつかけはこの1週間前のことだった。俺はCクラスの殴られた生徒について調べていると分かったことがあった。それは、3人のうちの1人、『石崎大地』が中学時代は地元ではちよつと有名な不良だったことだ。その他の2人も運動部ということ。しかし、これが分かったところで須藤が殴ったことの事実が消えないし、3人の証言能力の信憑性がほんの少し下がるだけに過ぎない。

やはりCクラスとDクラスの信用性が違いすぎるせいか、クラスにも影響しているのだろう。集団心理を利用したこの絡繰りがやつかいである。加えて須藤のクラスからの人望のなさも相まって圧倒的に不利だ。

調べるのを止めて一息吐こうと冷蔵庫からマツカンを取り出そうとした時、机に置いていたスマホのバイブが鳴った。電話元は『一之瀬帆波』と表示されていた。俺はスマホとって電話に出た。

『もしもし比企谷君、今大丈夫かな？』

「ああ、大丈夫だが。それより何か用か？」

電話口から一之瀬の声が聞こえるが、ブオォー。と音が鳴っている。そしてすぐに音が弱まったが何かしているのだろうか？

「なあ、今何かしてんのか？」

『あつごめんごめん、今ドライヤーで髪を乾かしてたんだ。伝えないといけないことがあったのをさっき思い出したから電話したんだけど』

一之瀬がそう言う。ドライヤーで髪乾かしてたつてことはおそらく風呂上り……つて俺は何を想像してんだよ！思わず頭を振って湧いて出た煩惱を払い、一之瀬に聞き返した。

「伝えることつてのは……？」

『今日、Dクラスの人と同盟関係を結んだんだけどね？共同で作戦を考えたりするから比企谷君も参加してくれないかなって』

一之瀬は休戦をするのか……作戦も一緒に練ってほしいと。まあ特に俺は反対しないし、Bクラスの立場からすればこの上ない休戦協定だ。しかし……

「話は分かった。けど、俺は参加しない。動くなら裏方だ。とりあえず神崎にでも誘ってくれ」

一之瀬たちと表からやるには俺では不向き。しかも龍園に悟られてしまえば面倒だ。作戦が変えられなんかしたら詰みになる。

『わかったよ。色々ごめんね？比企谷君』

「……いや、別に良い。しかし一之瀬、Dクラスと何で協定を結んだんだ？」

そこに俺は疑問がある。Bクラスがこの協定を結んでも得られるメリットはごく僅かだ。

『困ってる人を見て助けたくなった……じゃ、理由として足りないかな？』

「……いや、一之瀬の理由がそれなら俺は何も言うことはない」

此奴は優しいのだ。由比ヶ浜や葉山などのように口先だけじゃなく最善の行動を人のために取る奴なんだ。由比ヶ浜は行動を起こしても何もかもが中途半端で、人に泣きつく。葉山は自分の理想から離れることをせず、人に頼って失敗したらその責任を押し付ける。

しかし、一之瀬は自分が受けるデメリットも顧みずに人のために全力を尽くせるのだ。俺は優しい女の子が嫌いだ。同情なんかで関わられても事実は変わらないし、みじめになるだけだからだ。しかし、一之瀬からはそんな感じは見受けられない。……お前なら。

『そっか、ありがとう比企谷君。こんな夜遅くにごめんね』

「大丈夫だ……なあ、一之瀬」

一之瀬の名前を呼ぶ。一之瀬は不思議そうな声で聞き返した。

『どうしたの?』

「……いや、お前のその気持ちは俺にとって羨ましいよ。それだけだ」

『……そっか。……じゃあ切るね?』

確認する一之瀬に俺はこう言った。

「ああ。・・・お休み、一之瀬」

『!・・・うん!お休み、比企谷君』

そう言つて通話を終了して、俺は歯を磨こうと洗面台に行つた。鏡に映つた自分を見る。そこには・・・

「・・・笑つてるのか、俺」

僅かに口角を上げた俺が写っていた。どこか不思議な高揚感と心地いい安らぎが俺の心を埋めていた。そして俺はそのまま気分の良い状態で就寝した。

そしてその2日後のことだった。学校の昼休みを満喫していると一之瀬からDクラスと色々と画策をしたと伝えられた。主に、目撃者探しとCクラスの3人の人物像の情報収集だ。ここで大きく動いたのは、目撃者が見つかったらしいとのこと。ただ、目撃証言をする気がないのとその目撃者がDクラスから出たのがネックだが。

そして、放課後になって帰る準備を整えていると、一之瀬に話しかけられた。

「比企谷君、ちよつと良いかな？」

「どうした？」

「……じゃ話にくいことだから自然公園で話してもいいかな？」

真剣な表情で小声で言ってくる一之瀬の様子を見て誤魔化すことをせず、俺は頷いた。誰にも聞かれたくないのだろう。

「……分かった」

そうして俺は身支度を整え、一之瀬とともに寮へ向かった。

公園に着いて、誰もいないことを確認すると俺は一之瀬に用件を聞いた。すると、鞆の中からある手紙を取り出して俺に見せた。

「今日この手紙がロッカーに入ってたのに気づいたんだけど……」

そして手紙をよく見ると、一之瀬宛のものであることが分かった。中身は一之瀬が送り主を気遣い見せなかったが、それが妥当だろう。何故ならこの手紙は……

「見た限りラブレターっぽいな……」

手紙のデザインから見て可能性が高いのでなんとなくわかった。そして、一之瀬は頷いて本題を切り出した。

「中身を見て確認したんだけど明日体育館の裏で告白するみたいなんだけど……今は付き合う気がないんだ。でも相手が傷つかないようにしたいんだ、けどどう断ったらいいかが分からなくて……お願い出来るなら比企谷君に彼氏のふりを……」駄目だ。その方法は「……えっ？」

思わず一之瀬の言葉を遮って俺は言った。

「……この手紙を見る限り手書きの奴だ。此奴の一生懸命な思いが詰まってるんだろう。告白するのは告白される側もそうだが、する方も相手に想いが伝わるように伝えることなんだ。一之瀬が言ったことで相手の望む答えはもうない。だけどそれは相手だって覚悟しているはずだ。傷つくのは当たり前なんだよ、望んだ答えじゃないんだか

ら。それにお前は彼氏のふりを俺に頼むんじゃないで、此奴と向き合うことなんだ」

俺の感情がいつになく高ぶっている。どうしてなのか、きつと俺は一之瀬にそんな方法をとってほしくないのだろう。他人事だが、一之瀬の方法は俺が中学の時に取った行動と似ているから。それをしたら俺のように失敗する。そして独りになって悪意ある視線に晒される。

俺はそんな思いを一之瀬自身にして欲しくないのだろう。なんて遠回しな言い方だろうか。すると、頬に暖かい手が添えられた。

「ごめんね比企谷君。だから、泣かないで……?」

悲しそうに俺を見ている一之瀬にそう言われてふと滴が流れていることに気付いた。

「え、何で俺、泣いて……」

それを認識するとさらに涙があふれ出し、感情の奔流が俺の心を埋め尽くす。する

と、一之瀬は俺を抱き寄せて頭を撫で始めた。凄く暖かいぬくもり。

「ごめんね、辛かったんだね．．．」

同情の言葉であろうはずなのにその言葉は俺の心に響いた。そしてついに俺は嗚咽をこらえることが出来なかった。

「．．．．っ」

しばらく泣いた後、俺は一之瀬から離れた。恥ずかしい．．．何女の子に慰められてんの俺。小町にだってされたことねえんだぞ!? 新たな黒歴史に悶えつつも、一之瀬に謝る。

「その、本当に済まなかった。いきなり泣いて．．．」

一之瀬は頬を若干赤らめつつも、変わらないトーンで言った。

「ううん、大丈夫だよ? . . . 比企谷君」

一之瀬は不安そうな表情で聞いてきた。

「その、比企谷君が良ければ何があつたのか教えてくれないかな? 比企谷君が泣くなんてよっぽどの事だと思うし」

もちろん無理に言わなくてもいいからね。と言う一之瀬。 . . . 慰めてもらったし一之瀬にも話そう。俺の過去を。否定されるならそれでもいい、一之瀬には世話になつたからな。

「. . . . 話すよ」

そして俺は自身の中学時代での出来事からここに来るまでの経緯を話した。そして話し終えると一之瀬が口を開いた。

「. . . . 比企谷君」

「・・・・・・・・」

一之瀬の言葉を黙って待つ。坂柳には受け入れられたが、一之瀬は分からない。そしてこう言われる。

「お疲れさま」

「えっ・・・・？」

言われたのは肯定でもなく否定でもなく、劳いの一言だった。俺は驚くと一之瀬は続ける。

「背反した依頼をちゃんとこなした比企谷君を私は否定しないし出来ないよ。たしかに方法はあまり良いものとは言えないけど、でも比企谷君は最後までやり切った。だから比企谷君、『お疲れさま』」

そういい、また俺を抱き寄せてくる一之瀬。慌てて、離れようとも一之瀬のぬくもりを放したくないと体が訴えているかのように体は動かない。そして一之瀬はその状態で話し始めた。

「・・・私も中学の時、万引きしたんだ」

「・・・は？」

一之瀬の口からそう話された過去。俺は素っ頓狂な声で聞き返してしまった。クラスでも優秀な成績を収めていてコミュ力も高い一之瀬がそんなことをするなんて・・・

そこから一之瀬の過去が明かされた。一之瀬の家庭は母子家庭で、一之瀬には妹がいた。決して裕福な家庭ではなかったため、母親が女手一つで働いて暮らしていた。一之瀬もそんな母親のために苦労をあまりかけないように学校はトップクラスの成績に、コミュ力も磨き、友達もたくさん出来た。そんな順風満帆な生活の中、妹はあまり我儘を言わないで我慢をしていた。

そんな妹の誕生日が近づいたとき、初めて妹が流行りのヘアピンが欲しいとプレゼントを求めた。しかし、ヘアピンの値段は1万ととてもではないが買えるレベルのものではない。そこで、一之瀬は――万引きをした。1つの拭えない一生の罪を犯してしまった。妹は姉が自分の願いを叶えたと喜んだ。しかし、母親にばれて叱られ、万引きをした店に謝罪に行つて母親が示談して、民事裁判は免れた。一之瀬はそのあと家に半年の間、家に閉じこもった。そして半年後、何とか折り合いをつけた一之瀬はこの学校 existenceを知つて受験した。もう間違わないために。

「……私が犯したどれだけ時間がたつても赦されない罪、一生向き合わないといけない罪なんだ」

そういういい終えた一之瀬は俺に聞いてきた。

「ねえ、比企谷君。私はBクラスにいてもいいのかな……？」

「……」

……ここで一之瀬を慰めるようなことを言っではいけない。そんなことをすれば一之瀬は罪悪感に苛まれて自分を見失うだろう。此奴のいるべき場所は――――

「――あゝ、駄目だな」

「っ」

肩を震わせる一之瀬。そんな様子を見ても俺は言葉を止めない。

「万引きは犯罪だ。小学生でも分かること。だから決して赦されることじゃない」

「罪を犯したなら裁かれる。――――そしてお前は裁かれた」

「えっ?」

驚いた声を出して俺を見上げる一之瀬。そして俺はまた続ける。一之瀬が先ほどしてくれたように頭を撫でて。

「お前と一緒にお母さんがお店にお詫びして、許してもらえたんだろ？ だったら良いじゃねえか」

一之瀬を慰めてはいけない。いや、正確に言うとは慰めるだけではないのだ。必ずその過程に罪を責めるということしなければ。今の一之瀬は誰かに咎めてほしいと思っているからだ。だから正しい手順で言ってやれば、ちゃんと向き合うことが出来る筈だ。

「私は、赦されてもいいのかな・・・？」

「法治国家のこの日本は時効とか満期というものがある。誰でも赦される権利は必ずある」

俺が言うとは一之瀬が俺の胸につけて嗚咽を漏らし始め、黙って一之瀬の頭を撫で続けた。

しばらく泣いた後一之瀬は俺から離れて顔を赤らめて照れくさそうな顔で言った。

「ご、ごめんね比企谷君。泣いちゃった・・・手紙の用件だけだったはずなのに」

「・・・お互いさまだ。俺も泣いちゃったしな」

俺も頭を掻いて言う。ホント、黒歴史の連発だよ・・・

「ふふつ、そうだね。・・・私、手紙をくれた子とちゃんと向き合うよ」

そう一之瀬は決意し、そして続ける。

「もし、また私が閉じこもりそうになったら比企谷君に相談してもいいかな・・・？」

顔を赤らめながら照れくさそうに言うその姿は夕日に照らされ、見惚れてしまうほど綺麗だった。

照れくさくなつたのを隠すように顔を背けて俺は返事を返す。

「まあ、暇だったら・・・な」

「ふふつ、ありがとう」

それから俺達は寮に戻った。そのとき一之瀬との距離が近かったのだが、何でだろうか。

×
×
×

八幡が自身の過去を話した後、ある者はその場面に遭遇して考えていた。

「・・・どうして？」

分らない。彼が言っていたことは嘘だったのか・・・

「一体どういうことなの？葉山君・・・」

そう呟いた雪ノ下雪乃が酷く当惑しているのを見た者は誰もいなかった。

優しい奴が怒ったら本当に怖い

一之瀬の告白騒動は一之瀬が無事に乗り切って終了した。告白の相手は白波だった。しかし、ある程度予想していたため驚きはそんなにない。告白は断った後、まさかの白波から、普段通りに接してくれ。と言われたようだったのでそこに驚いたが。

そして更に翌日になって俺は特に何も問題なく、昼休みを過ごしていた。無事に食事もと終えて教室で小説を読んでいた。しかし今回は文学小説ではなく、久しぶりのライトノベルを読んでいた。展開は主人公が交通事故によって死に、神様の力によって異世界に転生する、今では珍しくないポピュラーなやつだ。

しかし、転生した主人公は何の特殊な能力もなかったのだ。神様がミスったのかと思っていた主人公だが、現れたヒロインが滅茶苦茶強く、無双するという斬新なライトノベルだ。特に主人公が傷つけられて切れたヒロインがめっちゃ怖い。魔王でさえ、ガタガタ震えて裸足で逃げ出すほどの怖さだ。そしてこのラノベはハーレム物でもある。

俺は最後まで読み切ると、本を閉じて鞆にしまう。そして欠伸をして体を伸ばすと、尿意を感じたため教室を出てトイレに向かった。

「ふう、すつきりした……」

トイレを無事に済ませ、教室へ戻ろうと廊下を歩いていると、周りが騒がしい。

「おい、何かあったのか？」

「Dクラスでなんかあったらしいぞ」

周りの生徒がそういつてるのが耳に入る。俺が進む方向にDクラスの教室が通過点としてあるため、通らなければならない。なるべく接触しないで戻ろう。

そう決意して戻っていると、聞き覚えのある声と姿がした。一之瀬と神崎の姿が見えた。そしてその後すぐに怒鳴り声がその近くから聞こえてきた。その声にも聞き覚えがあった。

「何で前向いて歩かなかったの!?!おかげで怪我しそうだったじゃん!!」

由比ヶ浜の怒鳴り声だった。大声で怒鳴っているため野次馬が集まっっていて注目されている。そして怒鳴られている相手はすっかり委縮して泣きそうな声で言った。

「あ……ご、ごめんな……」

「はあ!?!聞こえないし!?!はつきり言いなよ!!」

かすれた声で謝ろうとしたが、その様子が更に由比ヶ浜を苛立たせたのか、遮るようにして怒鳴る。すると、この事態に気付いた雪ノ下が近寄ってきて状況を聞いた。

「由比ヶ浜さん、そんなに怒鳴って一体どうしたのかしら?」

「聞いてよゆきのん!私がお弁当を持って廊下を歩いてたんだ。するとこの子が角を曲がって下向きながら走ってきてぶつかったんだ。その拍子でお弁当がぐちゃぐちゃに

なったんだよ!!でも、何も言わずに逃げようとしたから怒ってたんだよ!!」

雪ノ下は由比ヶ浜の言い分を聞いた後、何か一瞬考えてもう1人の当事者に真偽を聞いた。

「それは本当なのかしら?佐倉さん」

佐倉と言われた少女は話を振られたことに驚いたが、ゆっくり答えようとする。

「ち、違います…私は普通に歩いていました。曲がり角でゆ、由比ヶ浜さんとぶつかつたのは事実です。そのとき謝ろうとしたけど、由比ヶ浜さんの声に遮られてしまつて……」

どうやらこの佐倉とやらの言い分と由比ヶ浜の言い分がかみ合っていないようだ。つまりはどちらかが嘘をついているということ。佐倉の言い分に由比ヶ浜は憤慨して、声を荒げて反論する。

「はあ!? 何嘘言つてんの! あんたの不注意の所為でお弁当ぐちゃぐちゃになったのに言い訳するなし!」

その様子にさらに佐倉が怯え、沈黙してしまう。その様子を見かねたのか、雪ノ下が言った。

「由比ヶ浜さん。彼女は謝ろうとしていたのよ? お弁当のことは残念だけれど、何もそこまで……」

擁護するように言った雪ノ下に由比ヶ浜は不満と少しの怒りを抱いたような瞳を向けて、聞いた。

「ゆきのん……ゆきのんは一体どっちの味方なの?」

「!……それは」

気まずげな様子でつぶやいた雪ノ下に由比ヶ浜が更に言葉を言おうとしたその時。

「はい、ストップ！」

一之瀬が割り込むように仲裁に入ったのだ。急に仲裁に入ってきたことに驚きつつも由比ヶ浜はいまだ怒りが収まらないのか強く言い放つ。

「関係ない人が急に割り込んでこないでよ!!」

その様子とは反対に一之瀬は落ち着き払った声で言い返した。

「関係ないことないよ？廊下でこんな大声で騒いでたら他の人が通るときに邪魔になっちゃうし、他の人の迷惑になるよ」

正論で返すと一之瀬は佐倉に視線を移していった。

「Dクラスに用があつてきたんだけど、君達が言い合いになってたから仲裁に入らせてもらったの。大体理由は聞こえてたからわかるけど。由比ヶ浜さんもその辺で許して

あげよう？佐倉さんも謝るだろうから」

一之瀬の言葉で周りの空気は由比ヶ浜の味方になる奴はほとんどおらず、佐倉に同情の視線が寄っていた。その空気が癪に障ったのか更に由比ヶ浜は吠えるように訴える。

「一之瀬さんはいきなり何なの!?私はただ謝ってもらおうとしただけだし!!」

その言葉にも動じた様子なく、一之瀬は淡々と言い返した。

「ううん、謝ろうとしたのにその態度で言ったらだめだよ。相手は謝れなくなるし、由比ヶ浜さんが悪いように見えるよ。相手からしたら度が過ぎた強要の仕方に感じ取れちゃうよ」

そしてとうとう、自分の感情が抑えきれなくなったのか、一之瀬を由比ヶ浜は突き飛ばすように押し出した。俺はその様子を見て、慌てて人だかりを避けつつ、体勢を崩れそうになった一之瀬を支える。

「つと、大丈夫か？一之瀬」

「あ、比企谷君！」

俺のことを見た一之瀬は驚きつつもどこか安堵した様子だった。俺の存在に気付いた由比ヶ浜と雪ノ下が驚きを隠せず言った。

「・・・比企谷君」

「ヒッキー!？」

ん？雪ノ下の態度がおかしい。前に会った時は敵意と嫌悪感丸出したのに、今はどこか神妙そうな表情としおらしい態度だったからだ。なにかあったのか、まあ、こつちとしては絡まれずに済むので都合が良い。

「おい、由比ヶ浜。喧嘩の仲裁に入った一之瀬を突き飛ばすことはねえだろ」

俺がそう言うのと、一瞬茫然としていた由比ヶ浜は再起動し、俺を睨み付けながら言った。

「うつさい！ヒツキーに言われたくないし！」

「お前らが言い合ってることは正直どうでもいい。ただ、関係ない奴に当たり散らすな」

「当たってない！一之瀬さんが勝手に入ってきて勝手に言うからだし！ヒツキーキモイ！マジキモイ!!」

駄目だ、話しが通じねえ・・・お前の空気読む長所はどこ行つたんだよ？

由比ヶ浜がここまで性格がゆがんだのには理由があつた。嘘告白をした理由を話そうと奉仕部に八幡が行く前、葉山が雪ノ下と由比ヶ浜に真相とは全く別のことを話したからである。葉山グループの中からカップルが誕生するのを妬んで、文化祭で悪評を垂れ流されたので恨みで、などという理由を作つて2人に伝えたのだ。その事により由比ヶ浜は失望して、恋心から失望と怒りに感情が変化したのだ。

雪ノ下もあの一件に遭遇するまでは全く同じ思いだった。しかし、あの一件により、八幡の嫌悪が3割、葉山への疑念が7割とかなり揺れ動いていた。ここまで変化したのは、葉山への信用の無さと、八幡の態度から来ていた。自分が罵倒しているのに言い返さないのはおかしい、ただの無視かとも考えたが、八幡の眼差しから失望の色がかすかに感じ取れた。人の感情に疎い、雪ノ下が感じ取れるほどのものだったのだが、それに真っ先に気づくであろう由比ヶ浜は完全に怒りに飲み込まれていて、それに気づかなかった。

グループの友達が傷つけられたという思いもあったので余計に由比ヶ浜の冷静さを奪うことになったのだが。本当はそのグループのリーダーこそが傷つけていたと知らずに。

俺はどうこの状況を切り抜けるか考えながら口を開こうとすると、この状況という名の火に油を注ぐであろう最悪の人物が人だかりをかき分けて近づいてきた。その人物は――――

「一体どうしたんだい？ 結衣」

葉山隼人、その人が由比ヶ浜にこの状況を問いかけていた。そして状況を聞き出すと、俺達・・・否、正確には俺を睨んできた。何故俺が睨まれないといけないんだよ。

「そうか、佐倉さんがぶつかっただのか・・・じゃあちゃんと結衣に謝ってほしい。普通に歩いていたのかもしれないが、結衣の弁当が食べられない状態になったのは事実だからね」

・・・此奴はわざとなのか？ どんな判断してんだよ。

「おい、葉山何を言ってるんだ。現時点で此奴は謝ろうとしてたじゃねえかよ。理由の違いはあるが、ちゃんと謝ろうとしてたのを遮ったのはそっちだろ」

もともと謝ろうとしていたのに改めて謝罪しろと言う意味が分からない。俺が口を挟むと葉山は険しい表情で怒鳴りつけるように言った。

「ヒキタニは関係ないだろ！引っ込んでろ!!」

いやいや、俺は関係ないかもしれないが、お前のほうがもつと関係ないだろうが。ていうか、まだわざと名前を間違えて言ってるし。小学生かよ……

葉山の態度に呆れていると、突如この空間が凍り付いたような張りつめた空気が漂い始めた。野次馬の生徒達は動揺し始め、雪ノ下は辺りを見渡し、葉山と由比ヶ浜は何が起こったのかわかっていない様子だった。俺は何事かとの空気になった元を探す。そして気づいた、この空気の元は俺が体勢支えていた存在である一之瀬帆波から漂っていたものだという事だ。周りの生徒達が水面に水を打ったかのように声を潜めた。

俺が困惑していると、一之瀬は1歩前に出て、言葉を使う。

「ねえ、今比企谷君のことをヒキタニって言ったのかな？」

「え、あつ……」

葉山が困惑していて言葉になっていない。冷や汗が出ており、物凄く動揺している。そして一之瀬は氷のような冷たい眼差しを由比ヶ浜にも向けて言った。

「そしてさつきから思ってたけどヒツキーって何かな？」

「う……え……？」

聞いても固まったままで何も言わない一之瀬は2人を睨みながら更に近づいて言った。

「早く答えてくれないかな？」

「ひっ……!?」

一之瀬の様子に恐怖を抱いたのか、悲鳴を上げる2人。ぶっちゃけ俺も上げかけてる状態でございます。周りの生徒達も怯えた反応がちらほら見えた。あつ、神崎も震える。こんな状態の一之瀬は初めてだ。大概のことを叱っても最終的には笑って許すあ

の一之瀬が。

俺が動揺している中でも2人に聞き続ける一之瀬。底知れない雰囲気纏っていて誰も口を開けない。

「もしかして彼を貶すために言ったの？」

「そ、それは……」

動揺しまくった様子で蚊のような細かい声で言い淀む。葉山はガタガタ震えていて、由比ヶ浜に至っては泣きかけている。

これ以上この状態が続いたらまずいので、俺は一之瀬に近づいて肩に手を置いて言う。

「一之瀬、もう良い。……おい、由比ヶ浜に葉山！佐倉は素直に謝るんだからこれでチャラにしてくれ。納得いかないなら弁当はどっかで奢ってもらえばいいだろ」

ていうか由比ヶ浜の料理の実力がどれだけ伸びたかは知らんが、多分そこらのコンビニで買ったやつだろ。俺は作ったとは思えないし。

「それでいいか？」

当の本人である佐倉に向かって聞く。呆然としていたが俺の声に我に返ったのか、返事をする。

「え．．．あ、は、はい．．．」

俺を見て少し慌てつつも返事をしたので頷いて、いまだ纏っている雰囲気が変わらない一之瀬に向き直って言う。

「一之瀬、そういうことだから元に戻ってくれないか．．．？」

俺は不安な感情を抱えて一之瀬に頼む。すると、一之瀬の纏っていた雰囲気が霧散

し、息を吐いて言葉を言った。

「・・・2人が納得してくれるなら私からは特に何も無いよ。私からもごめんね？急に割り込んじゃって」

佐倉に向かって謝罪すると、佐倉は慌てて首を横に振った。

「今日はもうDクラスにお邪魔できる感じじゃないし、戻るね。行こう？比企谷君」

一之瀬はそう促したので俺は素直に従って踵を返すように背を向ける。

「あ、言い忘れそうだった」

そう思い出したように言うのと由比ヶ浜達のほうへ振り向いて、2人の間まで行つて耳元に囁いた。

「比企谷君を蔑称で呼んだり、理不尽に貶したら・・・」

眼の光が完全に消え、感情が読めない声で言った。

「――絶対に後悔するよ?」

そして2人の反応を見ずに今度こそ踵を返して、モーセが通るかのように人だかりが左右に割かれるとその様子に俺たちは苦笑して、――俺はめっちゃ恥ずかしい――この場を去っていった。

はぁー……Dクラスと連携する以前の問題だなこれは。クラスの問題の種が多すぎるし。

俺は一之瀬とその場に呆然とたたずむ由比ヶ浜と何故か沈んでいる表情の雪ノ下、こつちを睨み付けてくる葉山をちらりと垣間見る。

これ以上の厄介事は勘弁してもらいたいんだがな……

そんな思いを抱きながら昼休みが終わる前に俺たちは教室へ急いだ。

×
×
×

由比ヶ浜結衣は先ほど去って行った2人を睨みながら苛立っていた。佐倉愛梨もこつちに謝り、そそくさとこの場を離れていき、友達の雪ノ下雪乃も気まずそうにこつちを見て、離れていった。葉山隼人は何かに怯えるように急いで去って行った。

「もう、ヒツキーと一之瀬のせいだ!!」

憤慨して他人に責任を押し付ける由比ヶ浜。何故こんなことになったのかすら省みず、怒りをぶちまけるように言って教室に入っていた。

しかし、この騒動を見ていた人物たちは……

「……ふふ、いい度胸していますね」

「堀北の奴よりむかつくなあ……」

「……葉山君と彼女は許せません」

銀髪のサイドテールの女子は冷笑と憎悪を浮かべ、今後の計画を練る。

明るいショートヘアの少女は、退学させる人物に2人を定めた。

おっとりした少女は罵倒された2人を護ると決意する。

こうして由比ヶ浜結衣と葉山隼人の運命は少しずつ狂い始めていることを、当の本人たちは知らない。

比企谷八幡は過ぎた役目を負う

不穏な空気が流れていて滅茶苦茶居心地悪い。現在、俺は生徒会室にいる。そして目の前でDクラスとCクラスの論争を見ている。

あれから特に大きな動きは特になく、生徒会裁判当日となった。Dクラスの主張は『無罪』と変わらず、Cクラスも『有罪』と同様だった。

ただ、論争を見ている限りではこっちが圧倒的に不利だ。だから、こっちも切れる手札を打った。何度かの論争の繰り返しつつ、Dクラスの主張の番となった。

「し、失礼します……」

生徒会室の入り口が開き、そこから入ってきたのはDクラスで唯一、この状況を覆せる人物、佐倉愛里だった。

そこから論争は加速し、暴力事件の現場を目撃をした証拠を見せる。そこには、須藤、Cクラスの石崎、小宮、近藤の姿がはつきり写った写真だった。日時も暴力事件の発生した日と一致する。

「しかし、この写真があるからと言って須藤君が彼らに暴力を振るった事実が変わりませんよねえ」

Cクラスの担任である坂上先生がこの証言の弱いところ突いてきた。それに佐倉は動揺し、須藤は吠えるように訴えようとするが、弁護する側の堀北に手で制され、渋々辞める。そのまま続けるように傍聴者のDクラスの担任、茶柱先生に提案する。

「このままではどちらも譲らない押し問答になりそうです。そこで茶柱先生に提案があります」

「ほう、何でしょう?」

「こちらの生徒に1週間の停学、須藤君には2週間の停学及び部活動の停止がこちらの

最大限の譲歩出来る条件です。pt等は払わずに頂いてもいいです。どうです？良い条件でしょう」

坂上先生はそう妥協案を提示する。確かにDクラスの立場からすれば破格の好条件だ。しかし、それは須藤の立場を抜きにした場合に限りだが。須藤は顔を顰め、その顔を見た石崎達はニヤニヤと笑う。石崎達の目的は須藤の部活動で出場することになった大会に出させなくすることが狙いだ。

要するにDクラスを掻き乱すための嫌がらせである。それにこの妥協案にはCクラスにデメリットがほとんどなく、Dクラスの足並みも更に乱せるという旨味がある。

茶柱先生は坂上先生の主張を聞いて肩を竦めながらフツと笑って返した。

「私はそれでも構いませんがね。しかしそれは当事者達が決めることですので、私はこの裁判の決着を見守るだけです」

おいおい、せめて何か堀北達に一言言つてやってもいいだろうに。いくら実力を重ん

じるからって冷たすぎないかこの先生。

まあ事実ではあるため何とも思えないが・・・堀北を垣間見ると、何やら膝に手を置いて震えながら俯いている。心ここに在らず、か。

俺もDクラスの援護は出来ない為、傍聴するしかない。すると、同じく弁護しに来た綾小路が急に堀北の脇に手を通し、あろうことか撥り始めた。

「ちよっ!? ツ、やめ・・・ッ!!」

ここにいる全員がその奇行を嘩然としながら見つめていた。そして綾小路が撥りをやめ、堀北に問いかける。

「目が覚めたか? 堀北」

奇行を起こした綾小路を睨む堀北。しかし、意に返した様子なく続けて言う綾小路。

「須藤の無実を裏付ける証拠はない。これが教室やコンビニで起こった事件なら、大勢の生徒が見ていて確実な証拠があったかもしれないが、人もいない設備もない特別棟じゃどうしようもないってことだ」

「話し合いをして分かっただろ。どれだけ訴えてもCクラスは嘘だと認めないし、須藤も嘘とは認めない。平行線だ、話し合いなんて最初からしなければ良かったくらいだ。そう思わないか？」

ん？綾小路の言い回しが回りくどいな……。ッ!!そういうことか。そしてあの後堀北は坂上先生の言った妥協案を呑むことなく、『完全無罪』を主張した。そしてこの状態では決着がつかないため、裁判の決議は延期になり、後日にまた話し合われることになった。

裁判が閉廷となった後、関係者が出ていき、俺も出ていこうとすると、堀北会長に呼び止められた。

「比企谷、お前には少し残ってもらいたい」

「?・・・分かりました」

早く帰りたいんだが。渋々帰ろうとした足を止め、堀北会長の話聞く。椅子に勧められたため座る。そして堀北会長が口火を切った。

「さて・・・比企谷、お前はこの裁判の結末をどう見る?」

「はい?」

思わず素っ頓狂な声が漏れてしまった。そんなことを聞いてくるとは思わなかったからだ。しかし堀北会長の顔は至って真剣な為こつちも濁すことなく返す。

「・・・このままいけばDクラスが負けるでしょうね。結論を先延ばしにしようが、ね」

「・・・お前の意見を聞かせろ。Dの立場から見た上でな」

何でそんなDクラスを気にかけるんだ？妹がいるからか？・・・まあ、いい。

「まあ、逆転出来る唯一の案なら周りの環境を利用してみることですよ。例えば監視カメラ、とかですかね」

「！ほう・・・」

堀北会長は監視カメラといった瞬間気づいたらしい、否、最初から知っていて俺を試したっぽい。しかし、付き人の橘先輩は気づいていないらしく首を捻っている。

「ふ、お前の意見も聞いたことだ。呼び止めた本題を話そう」

え、まだ何かあのかよ？結構疲れたから帰りたいんですが・・・そんな俺の様子を他所に続けて言う。

「比企谷庶務あれから南雲の動きは察知したか？」

その言葉に俺は声の大きさとトーンを幾分か落として返す。

「・・・いや、今のところは不穏な動きはない」

「・・・そうか。今後も頼むぞ」

「・・・あいよ」

今のやり取りで何故、俺が庶務と言われているかと言うと雪ノ下さんと会長との邂逅の後、生徒会に誘われた。最初はもちろん断ったが条件を二つ出され俺はその条件を呑んで生徒会入りを果たした。一つは・・・

「・・・MAXコーヒーダースだ」

「うす、あざっす」

そう、MAXコーヒーを貰えるからだ。え？条件がおかしいって？俺からしたらこい

つは無くってはならないものなんだよ。疲れを癒せる嗜好品なんだよ。MAXコーヒー入りの箱を持つと橘先輩が苦笑いしてきた。

「よくそんな甘いものを飲めますね。糖尿病になりますよ?」

『『人生は苦いんだからコーヒーくらいは甘くてもいいじゃない』それが持論なんで』

「・・・後、稽古の事だが、金曜日に回すことにする。それで良いか?」

「はい、分かりました」

稽古というのは、実はこの人に格闘技や護身術の相手をしてもらっている。理由については龍園がいるCクラスやDクラスの須藤などの存在に暴力を仕掛けられそうになったと時に対処できるようにするためだ。これが2つ目の条件。これ以上話すことはない判断した俺は、失礼しました、と言い頭を下げて部屋を出た。

そして部屋を出ると綾小路と俯いて鳴咽を漏らす佐倉がいた。佐倉を慰めているよ

うだった。綾小路に目を合わせると、佐倉に気づかせないよう注意しながら口パクでこう言った。

『どこまで見えてる?』

『・・・同じことを考えたみたいだな』

ここまで聞いて俺は納得がいったため、2人に会釈する。綾小路が相変わらずの無表情で会釈を返してきたので俺は寮へと足を進めた。スマホを取り出して一之瀬へ1通のメールを送った。

〈決議は延期になった。多分今度Dクラスとの作戦を立てるときptが必要になるだろうから貸してやってくれ〉

送信すると1分もせずに返信が来た。

へOKだよ。でも比企谷君は参加しないの?〉

へしなくても大丈夫だ」

そう返信して俺は寮へ進める足の速度を速めた。これで俺の役目は十分だろう。後はDクラス次第だ。

「――この時俺は気づけなかった。綾小路が鋭い視線を俺に向けていたことに。」

そして後日、第2回目の裁判が行われる時間となった。Dクラスの奴は生徒会室に集まっているがCクラスの連中は来ていない。そして数分後に生徒会の扉を開いて入ってきた。Cクラスの連中の顔色は悪い。

「どうやら一之瀬達はうまくやったようだ。そして裁判は開廷されたがこの前とは真逆にCクラスは訴えを取り消すと言った。急な意見の変化に坂上先生は喚いたが意

見は変わらず、その意見が通りDクラスは無罪放免となった。

ここで種明かしだが、あの状況から逆転できる一手は『事件現場の何もない特別錬に監視カメラを設置し、そこにCクラスの当事者の連中を呼び出して、学校側はお前らのやったことを知っている、と焦らせて誤魔化し冷静さを奪うように、退学になる、と言って第3者の介入を許さないように立ち回りながらやれば更に焦った連中は訴えを取り消す』と言った嘘塗れの作戦だ。正直、カメラの映像を確かめられてしまえば本当の証拠なんてないため、この作戦は水の泡となり、Dクラスは更に失墜することになる。いわば大博打だ。

裁判を終え、生徒会室を出た俺はメールを今特別錬にいるであろう一之瀬に送る。

〈終わった。Dクラスの勝ちだ〉

〈良かった。比企谷君、今からこっちに来れないかな？何か佐倉さんの様子がおかしいの〉

返信が返ってきたが何やら佐倉の様子が変らしい。佐倉は今回の裁判には出ていないのでフリーの状態だ。俺は了承の返事を送って、今どこにいるかを聞く。〈昇降口辺り〉という返事が来たため昇降口に急ぐ。

しかしここで事態が急変した。昇降口を目指している道中、一之瀬からまたメールが来た。

〈比企谷君！佐倉さんを見失っちゃった！〉

今どうやら一之瀬は佐倉と一緒にいたわけではなく、佐倉を追っていたようだ。Dクラスの誰かに佐倉を見とくように頼まれたのか？何か事情があるのかは知らんがまずそんな状況だな……

〈どこの辺りで？〉

〈ショッピングモールへの道で！今探してるけど……〉

俺がメールを送り返そうとしたとき綾小路がかなり速い速度で走ってくる。俺に気づくと訝しげな様子だが俺はその様子を察して並んで走りながら言った。

「綾小路、お前佐倉の場所をつかんでるか？」

「！・・・ああ」

「よし、何処だ？」

「ショッピングモールの家電が売ってる店の辺りを進んでいる。少し急がせてもらうが、良いよな？」

「ああ、問題ない」

それから俺たちは何も言わず走る。それにしても綾小路は速い。前回の裁判の事と言い、警戒しとかなないとやばいかもしれないな・・・

ショッピングモールに着いて家電量販店の辺りが見えてきた。何やら声も聞こえてくるが、言い合っているようだ。

「どうしてこんなこと・・・!」

「君と僕は運命で結ばれているんだよ。だからこっちにおいで」

「近づかないで下さい!佐倉さん、私の後ろに・・・」

そこにいたのは何やら佐倉を血走った目で見つめながら近づく男とおびえる佐倉を庇う様に前に立ってスマホで110番通報しようとする一之瀬の姿があった。男はその様子に逆上する。

「何故邪魔をするんだああああ!!私と雫の愛を邪魔するなあああああ!!!」

そして一之瀬と佐倉に襲い掛かる男。しかし、足元が払われて倒れこんだ。頭を打って悶える様子を見もしない。

「おい。今、何しようとした・・・？」

一之瀬達の前に俺と綾小路が立つ。俺は自分でも驚くほどの低い声で言った。男はさつきとは打って変わり怯えた様子で俺たちを見る。

「何を「何をしようとしたって聞いてんだよ。さつきと答えろ」ひいひいひいひいっ!？」

ビビる男をシャッター辺りに追いやる。綾小路が言った。

「佐倉のストーカーだ。かなりの狂氣的な奴だ」

「そういうことか・・・おい、あんた、今の事は俺たち全員が証人だ、だから言い逃れできないしさせる気もない。豚箱行きになりたくないのなら2度と佐倉と一之瀬、いや、この学校に関わるな」

「とつとと失せろッ!!」

半泣きになりながら分かりました！2度と関わりません!!と言って逃げるようにその場を去っていった。そして緊張が切れたのか佐倉は座り込んだ。綾小路はその様子を見て佐倉の方へ向かったのだ、俺は一之瀬の方へ向かう。

「大丈夫だったか？一之瀬」

「にやはは・・・幸い何もされてないから大丈夫だよ」

「そうか「でも・・・」ん？」

笑っていた一之瀬が俺に抱き着いてくる。肩を震わせて弱々しい声で言った。

「怖かったよお・・・ッ！」

そんな様子を見た俺は一之瀬を抱きしめ返して頭を撫でながら俺には似合わないことを言った。

「・・・頑張ったな一之瀬。もう安心だ」

「うん、うん、ありがとう・・・八幡君」

それから俺は一之瀬達を寮へ送った。綾小路が生徒会室へ戻った後、俺は寮へと戻るその途中に一通のメールが届いた。相手は龍園からだ。

〈今回はお前等の勝ちだが、次はこうもいかねえぜ？首を洗って待つてな〉

〈めんどくせえから止めてほしいんだが・・・あと何か今度奢れ〉

〈は！お前も俺の獲物だ。今回は気分良いから奢ってやるよ。焼肉でいいか？〉

〈あいよ〉

そしてメールを終えたところで非通知のメールが届く。内容は・・・

〈お前は誰なんだ？〉

謎のメールだった。俺はメールを無視して寮の部屋に入った。

今回の事と言い、なんかめんどくさい事態に巻き込まれてないか俺。

「米花町の某死神かよ……」

自分には過ぎた役目だろ……と静かに一人ベッドに倒れて呟いた。

閑話 小さき頃の思い出 坂柳編①

懐かしい日の夢を見た。あの暖かく、あの心地よかった日々を。私こと坂柳有栖の『始まり』と言つていい出逢いを。

そうそのきっかけはある1人の少年との出会いからだつた。

あの日はとても寒かつた。お父様に私があの施設に連れられて行つてとても興味深い少年を発見してから1年が経つた時のことで小学4年生になる年の頃。体が先天性の疾患によつて私の体は常人の体より弱く、杖を突かなければ歩けないのだ。

その分なのだろうか、私は頭が良かつた。同年代の何倍もの知識、洞察力、精神力、物事の見込みが優れていた。それも成熟した大人と遜色がないレベルな程に。お母様譲りの生まれ持つての才能であり、私もそのことを誇りに持つていた。

しかし、自分はその才能を誇りに思っていたとしても周りは必ずしも褒めたり、羨ましがったりすることはない。身内には私のことを凄く、物知り、大人びている、などと言ってくれるが、それ以外の他人たちからは畏怖や怯え、あるいは嫌悪といった感情を持たれ、私にぶつけてくる。

『怖いよ』

『何でそんなことまで……気持ち悪いわ』

『けつ、俺達より頭が良いっていう自慢かよ。体は弱いくせに』

私はただ、普通に接しているだけなのに。どうしてそこまで怖がられたり、嫌がられたりしないといけないのか、全く理解出来ない。一個性として受け入れられないのか、人間は太古から今という歴史までに『差別』というものを失くすことは出来ていない。現代社会はいじめや差別、戦争は駄目なものと掲げてはいるが、『弱肉強食』今までの自然の摂理が人間の遺伝子レベルで刻まれている。そのため、人間は差別やいじめなどを

してしまう。

そして何より、多くの人が集団の中で流されて生きている。『人間地動説』とはよく言ったものだと思う。誰かが偉いわけでもなく、強制しているわけでもないのに。あいつらがやってるから、この人がやっているなら私も、といった人達ばかりで私は辟易していた。なんてつまらない人達なんだろうと。

私の家の関係で出る政界や財界の関係者が集うパーティーでもそのような人達ばかりで、私は思ってしまった。

『ああ、大人も子供もみんな同じだ』と。

そんな風に冷めたような感じで生活していると私のそんな様子が気に入らなかつたのかは分からないが、学校でいじめられるようになった。最初は子供の幼稚な悪戯、と思いつつておいたが、いじめはエスカレートしていった。始めは物を隠したりや無視するといった感じが、暴言や教科書を破られるといったものに変わり、ある時には歩行するために必要な補助の杖が盗られたりすることもあった。

しかし、私は決してやり返したりはしなかった。自分の体が弱いのもあるが、ボイスレコーダーや携帯などで録画して証拠をそろえて置き、タイミングを計ってそれらをインターネットなどで拡散するためだからだ。

その日の放課後も絡まれたのでいじめの証拠を撮るために子供の遊びにあえて乗っていたところ。

「きやあッ!？」

いじめてきた男子グループが私が杖を突きながら歩いていたら後ろから突き飛ばして来た。急なことで体が弱い私はバランスが取れず、倒れてしまう。杖を離してしまったが、何とか地面に両手を突いたことによつて痛みは少なかった。

それを見た男子グループはやりすぎたと思ったのか、慌てて一目散に逃げ去った。倒れた私は何とか一緒に倒れた杖を掴もうとした時。

「おい、大丈夫かよ……」

不意に後ろから声がかけると、1人の男子がこつちまで来て杖を私に掴ませ、私を立たせた。

「誰でしょうか？ 貴方は」

その男子に目を向ける。何の変哲もない髪にはひよこつと主張気味のアホ毛、それに顔立ちは整っているが目は少し濁っている。そんな男子が私を見て気まずそうな表情を浮かべていた。

「たく、あいつらもやりすぎじゃねえのか……？」

「……名前を聞いているのですが」

無視されたので、私は少し不機嫌になっていった。すると彼は動揺したのかあたふたしながら言った。

「おおぅ……そんな睨み付けんよ。……比企谷八幡だ、気づいていないかもしれないが一応お前と同じクラスだ」

……まさか、同じクラスだったとは。こんな目が特徴的な人に私が気づかないなんて。

「そうですか。ではこちらも、私は坂柳有栖といいます。以後お見知りおきを。失礼ですが影が薄いんですね」

「本当に失礼だな……とりあえず一応、怪我してるかもしれないから保健室に行くぞ。歩けるか？」

そう聞かれるが、倒れた衝撃で足が少し痺れて立てはするが歩くのは少し難しい。そんな私の様子を察したのか、比企谷君は背を向けて私に向け屈んだ。

私はその様子に理解が追いつかなかったが、比企谷君が言った。

「おぶるから乗れ。足が動かないんだろ？」

そうして彼の行動を察した私は素直に従って背中におぶさる。すると彼は少し驚いたように聞いてきた。

「減茶苦茶軽いなお前．．．ちゃんと飯食つてんのか？」

そんなことを今まで聞かれたことはなかった。確かに私は一般人の平均体重より軽いことは分かっていたが、そこまで驚かれることなのだろうか？

「三食毎日食べてますよ」

「そうか」

それから私と彼が保健室に着くまで一切会話はなかったが、不思議と居心地の悪さはなかった。お父様以外に初めて男性の背中に乗ったがその背中是不思議と暖かった。

今まで、クラスの男子とともに喋る機会はなかった。あつたとしても下心がある浅ましい人や私を蔑んでくる醜い人ばかりだったからだ。しかし、彼、比企谷八幡はそれといった感情が見られない。そのことが私はほんの少しだけ……嬉しかった。

保健室に着いて比企谷君が杖を持っていない右手でノックする。しかし中から返事はない。どうやら外出中のようなだった。鍵が開いているかどうかの確認のためにドアノブを捻って扉を押し開ける。

鍵は掛かってなかったようで扉が開き、比企谷君は誰もいないことを確認して保健室の中に入ろうとする。そこで私は聞いた。

「良いのですか？勝手に入ってしまつて」

「良いんだよ。先生が鍵とか何も掛けてねえし、それにお前が怪我してるっていう正当な理由があるんだから。先生が戻ってきたら説明すればいい」

比企谷君は屁理屈を言いながら保健室に設置してあるベッドに私を座らせて、私が怪我をしてないか診てきた。

「・・・特に怪我はなさそうだな」

特に異常がないことを確認すると、フツと浅いため息をつく。そのあと何故か私に向かって頭を下げて言った。

「あー、今までお前のクラスでの立場を無視していて悪かったな」

比企谷君が言っているのはおそらく私が受けているいじめの事だろう。しかし、特に私は彼に助けを求めたわけではないため謝られることではない。

「謝らなくてもいいですよ。特に私があなたに助けを求めたわけでもありませんし。それに助ける必要はないですよ？今までいじめてきた人たちの証拠は全部取ってありますから。後はタイミングを見計らってインターネットにたれ流せばいいだけなので」

そう言うとは企谷君の顔が引きつった。

「おおぅ……遅しすぎんだろ坂柳さん」

子供の悪戯に付き合ってるだけですからね。まあ、それ相応の報いは受けてもらいますが。すると比企谷君は何やら考え込んで私に聞いてきた。

「なあ、いつそれを実行するんだ？」

「何のために聞くんですか？……まあ、実行するなら今度の冬休みに入った後でしよ
うね。邪魔は入らないですから」

不思議に思いながら言うと、比企谷君は、そうか。と呟いてその後続けた。

「いや、俺もいじめられる側の立場だったからどうやり返すのか気になったただだ。ん
じやまあ、怪我も特にないみたいだし、俺は帰るわ」

そう言つて立ち上がる比企谷君。私はそこで彼の服の裾を掴んだ。驚いた顔で私を見る。

「・・・何だよ」

「昇降口まで送ってください」

そう私は言つた。そのようなことを言う気はなかったのだが、まだ彼と話したいのだろうか？・・・私が思っている以上に私は寂しがり屋だったようだ。

「何でだよ・・・」

嫌そうな顔を向けてきたが、私は構わず笑顔で言つた。

「貴方の質問に答えたのですから、交換条件としてですよ」

したり、といった感じで私は微笑みを向けると比企谷君はうへえ、と失敗したことを

後悔するようなため息と声を漏らした。

「はあゝ……分かったよ。昇降口までいいんだな？」

「はい。エスコート、お願いしますね？比企谷君」

そして2人揃って保健室を出る。そして昇降口に向かって歩く。学校の窓硝子に反射する太陽はもうすでに西日で、空は茜色とオレンジ色に染まっていた。比企谷君は自然に窓側の私の右斜め半歩前を歩いていた。私の歩行速度に合わせてくれているのだろう。

面倒くさがっておきながら義理堅い。捻くれ具合がまた何とも可愛げがある。思わず笑みが漏れてしまう。すると私のそんな様子を見ていたのか怪訝そうな表情で聞てきた。

「……どうした？」

「んんっ、いえ、何でも。ただこうして誰かと学校を歩くのは久しぶりと思っただけです」

本当に久しぶりだった。低学年の時は何度かクラスの人と帰ったりもしたが、私という人の成りを知るとすぐに離れていった。

「……そうか。俺も久しぶりだな」

「影が薄いですから、存在が認知されてないのでは？」

「おい、いきなり罵倒を挟んでくんなよ。確かに今年クラスメイトに話しかけたことも話しかけられたことのなくてボツチやってたがな……」

それは本当に可哀想ですね……。比企谷君も同意見のようだった。そういえば比企谷君もいじめられていると言っていた。

「貴方もいじめられてると言っていましたか、何故ですか？」

聞くと、彼は少し苦笑しながら言った。

「くだらない理由だよ。俺のこの目が少し濁っているから気持ち悪いって言われていじめられてた」

溜息を吐いて言う比企谷君。言われて気づいたのが彼も私も何らかの『差別』を受けてきているということ。いじめてくる人達はどうやら相当、人を見る目がないらしい。こんな捻くれながらも暖かな優しい少年をいじめるなんて。

私は彼の前に回り込む。すると彼は訝し気に眉を顰めて聞いてきた。

「……何だよ」

問いには答えず、暫く彼の瞳を見つめる。気恥ずかしくなったのか、数瞬で目を逸らしてきた。しかし、そんな短い間でも私にははっきり視えた。彼の瞳には私が今まで生きていた中、その出会ってきた人達の中で誰よりも――

「……………誰よりも優しい光が宿っていたことを。」

それを自覚すると私の鼓動は速くなり始めた。顔が紅潮しているのが分かる。すると、比企谷君は私を心配そうに見つめて聞いてきた。

「ど、どうした？ 顔が赤いぞ。坂柳」

今までこんな感覚に陥ったことはなかったが、小説で読んだことがある。あの施設にいた彼を見た時とは違う別の感情だった。まさか、この気持ちは……………

私は悟られぬように微笑んで、いえ、夕焼けの所為でしょう。と誤魔化した。そして止めた足を再び動かして昇降口に向かう。そして昇降口に着いて比企谷君は言った。

「着いたぞ。……………これでお役御免だな」

そして彼は自分の下駄箱のある所に行こうとしたところを私は呼び止める。

「待って下さい。・・・エスコートして下さいありがとうございます。比企谷君」

「・・・おう。どういたしまして」

そして今度こそ彼は下駄箱のある所に向かって行った。私も自分の靴を脱ぎ変える。そして正門から出ようとしたところで今度は私が呼び止められた。

「坂柳」

「?何でしょう?」

振り返ると比企谷君はこつちを真剣に見つめて言った。

「明日からの学校、楽しめるといいな」

それだけ言い終えると彼は私の返事も聞かずに私を追い抜いて正門を出て去って

いった。そんな彼の様子を不審に思いつつも私は家へと向かい始める。明日から彼ともっと話したいと私は考える。この気持ちの正体を知るために。何故帰り道も彼と一緒に帰ろうと誘わなかったかという私の今の気持ちを整理するためだ。

「・・・ふふ、明日から少し学校が楽しみになりましたよ。八幡君」

私はそう呟くと、暗くなりつつある空をチラリと眺め、家に帰っていった。

そして次の日登校すると、周りがざわざわとしている。それだけならいつも通りだが、今日はどこか違和感があった。教室に行き、いつも通り授業の準備をする。ふと、周りを見渡すといつも私をいじめてくる人達が私の席とは違う席に群がって何かをしていて、暫くすると散り散りに離れていく。

あの席は確か・・・まさか？

私はあることに気づいた。いつもはいじめてくる人達が朝のHRの前にも何らかの悪戯を仕掛けてくるのだが、今日は何もないことに。

そして今彼等がいる席は彼、比企谷八幡君の席だということに。そしてそれに気づいた私は更なる違和感に気づく。

クラスメイト達が何やらひそひそ話していることに。近くから内容が聞き取れた。

「ヒキタニが女子を脅したってよ」

「まじかよ、あいつ目がキモいからそんなこともしてると思ってたんだよなあ」

比企谷君が女子を脅した？どうやらそんな内容の噂が飛び交っているようだ。私が考えていると、件の比企谷君が教室に来た。

いつもは私が受けるであろう悪意の視線が比企谷君に寄せられていた。彼はそれに気づきつつもいつも通り席に座ろうとする。

しかし彼はその椅子が変なことに気づく。そして何やら椅子に仕掛けられた何かを取ってゴミ箱に捨てた。仕掛けた人達は小さく舌打ちをしていた。

私は気になってゴミ箱を確認しに行く。そのゴミ箱に捨ててある物を見て私は目を見開いた。数個ほどの画鋏の姿があつたからだ。

そこで私は確信した。

比企谷君は私の受けていたいじめを自分に悪い噂を自分で立て、肩代わりしたのだ。

そうでない限り目立たない彼が急に悪意ある視線などに曝されるわけがない。それから彼は私の受けてきた悪戯の数倍のものを一日中受けていた。それでもなおを毅然とした表情は崩れなかった。

思った以上に精神力が強いらしく堪えた様子はない。そしてそのまま時間は進んでいく。放課後になった。教室にはいじめの後始末のため残っている比企谷君と、その彼と話すために残った私だけとなった。今更だが教師は気づいていないのだろうか？……いや、気づいているだろうがこの事案を対処したくないのだろう。

比企谷君が散らかされている紙くずやごみの類をちようど処理し終えたタイミングを見計らって話しかける。

「……誰が助けてほしいと頼みましたか？比企谷君」

「あ？いや別にお前を助けたわけじゃないぞ。たまたまブームが俺に移っただけだ」

おどけながらそういう彼に私はこう切り返す。

「女子を脅すなんて貴方にできるのですか？昨日、私たち以外に生徒はいなかったようですが」

今日の早朝にそれを実行しようにも時間が足りなすぎる。よって自分で黒板にでも噂を書き綴っておいて誰かに目撃させればいい。そして事実確認で問い詰められたときに慌てて黒板を消せばますます真実なんじゃないかと思ひ込み、噂は出来上がる。それを今日の朝早くか、昨日私が帰った時にやれば完成する。

「分かんねえだろ。初対面で俺がどういう奴かなんて」

「分かります」

私は即答する。すると彼は大きく動揺した。その様子を見ても私は意に返すことなく続けて言った。

「貴方はこんなに捻くれてて、影が薄くて、目が濁っていて、友達もいなさそうな人です」
「おい、貶し過ぎだろ」「ですが――」

私は近づいていくと比企谷君の頬にそつと手で触れる。彼は驚いて咄嗟に目を逸らしたが、私が逃がすわけじゃないでしょう？

「――――私を救ってくれた。そんな優しい男の子ですよ」

そう言い、私は微笑んだ。彼は、そうかよ。と照れ臭そうに目を逸らしながら頬を指で掻いた。

そこで夢は暗転して終わった。目を覚ましてベッドから体を起こすと私は呟いた。

「早く思い出してくださいね？八幡君」

今日は良い一日になりそうだった。また続きが見たいと願いながら。

魔性の女ってハイスペックな人ばっかだよな

蒸し暑い気温とぎらりとした太陽に照らされる。天気は快晴でお出かけ日和だろう。一般的には。俺は冷房の効いた寮でアイスを食いながらだらだら過ごす予定だった。

そう、予定だったのだ。が、今現在俺はお外のお日様の姿を拝む羽目になっています。えっ、何故かって？その理由は……

「八幡君、一緒に泳ごうよ！」

惚けつと空を眺めていると、俺の目の前に立ち、遊ぼうと誘ってきた人物がいた。その人物は我がBリーダー的存在、一之瀬帆波であった。最近になって俺を遊びに誘う姿も慣れてきたのだが、いつもと違うポイントが1つある。

一之瀬の格好はいつもの制服や私服ではなく、青色の結構際どめの男子が思わず前屈みになってしまうビキニの水着姿である。俺は目の前に広がる光景に思わず目を逸ら

しながら一之瀬に言った。

「嫌だよ。疲れるし」

俺の即答に一之瀬は苦笑しながらこう言い返した。

「じつと座り続けてたらいらないよ？だってここは——————」

一之瀬は後ろを振り返りながら指し示す様に言った。太陽の眩しさに一瞬目を細める。

「————ここは豪華客船のプールなんだから」

今、俺達高度育成高等学校の1年生は豪華客船の船内にいる。何故こうなったのかは3日前に遡る——————

暴力事件と佐倉のストーカー事件から1週間が経って1学期も終わりに近づいてきた。クラスメイトも他クラスの奴も夏休みの予定について話している。何をするやら、何処に行くやら、彼氏彼女を作りたいやらとリア充同士の会話が繰り広げられていた。俺はそんな相手すらないので寮に引きこもって肅々とだらだらする予定だ。べ、別に話し相手がいないからって理由じゃないんだからねっ！・・・止めよう、きめえわ。

授業も何も滞りなく終わりに近づき、そしてSHRで星之宮先生にバカンスが夏休み中に実施されることが知らされた。うわー、絶対唯のバカンスじゃねえ・・・部屋でごろごろする計画があると言うのに。

帰る準備をしていると視界の端で一之瀬とBクラスの参謀的な存在の神崎がこつちに近づいてくるのが見えた。一之瀬は俺に声をかけてくる。

「ちよつといいかな、八幡君」

「・・・何だ？一之瀬」

俺は荷物をまとめながら一之瀬に聞く。あの事件から一之瀬は俺を名字でなく名前で呼んでくるようになった。何でかと聞いてみたところ、『・・・内緒』と頬を赤く染め上げながら誤魔化されてしまった。そして俺もそれ以上踏み込むことはしなかった。だって地雷がありそうでやばそうだからな。

一之瀬は少し恥ずかしげにしながら要件を話し始める。

「その、夏休みって暇かな・・・？」

俺の予定について聞いてくる。何故、俺の予定を知りたいのかは分からないがあまり気にせずに言う。

「悪いが、忙しいから無理だ」

そう言う和一之瀬はシュンと落ち込んだ表情を見せてくる。あまりに悲しそうだったので罪悪感が湧いてきた。それに待ったをかけるように神崎がすかさず聞いてきた。

「待ってくれ。忙しいってどんな予定か教えてくれないか？」

「・・・それはな」

俺が溜めるように言葉を区切る。一之瀬と神崎は何故か緊張したような面持ちで俺の言葉を待っている。そして俺は口を開いた。

「寮でダラダラ過ごしながらゲームとか本とかを読みまくるっていう予定なんだよ！」

そう答えた瞬間2人の顔がポカンとなる。理解が追い付いたのか、神崎は呆れた顔で溜息を吐いて、一之瀬は苦笑しながら言った。

「そ、それは忙しいのかな・・・？」

忙しいっていう定義は人それぞれだしな。図書館で椎名と一緒に本を読んではいるがまだまだ読み切れていないものだらけで気になるのだ。

「何で予定を聞いたんだ？何かあるのか？」

そう聞くと、一之瀬は意を決したように言った。

「予定がないんだったら、その・・・私と一緒に出掛けて欲しいなって」

その答えに俺は断ろうとするが、神崎が頼む。と言うような懇願の眼差しを向けてくる。

「俺なんかと一緒に行ったら変な噂が立つちまうだろうし、止めといた方がいいと思うぞ?。」

俺は小学校や中学校で悪意ある噂を立てられるのは慣れているから大丈夫だが、一之瀬は慣れていないはずだ。葉山の上位互換だしな。陰湿ないじめに在ってはいないだろうからダメージは大きいと思う。それに・・・そんなことに巻き込ませたくない。

俺の言い分に一之瀬は少し怒るようなそれでいて悲しそうな眼差しを向けてきて言い返した。

「・・・八幡君。私と2人で出かけた程度で噂が飛び交うならそんなものは無視すればいいし、言わせておけばいいの。私はそんなことは気にしないよ? だからそんな『俺なんか』って自分を卑下にしなくて欲しいな」

一之瀬の言葉に思わず黙り込む。中学の時の俺なら『自分を卑下になんてしてない』って言い張って屁理屈を並べ立てて誤魔化したんだと思う。しかし一之瀬には自分の過去を話した。そして否定でも肯定でもなく、ただただ受け入れてくれた。俺の欲し

くてたまらない”何か”になつてくれるかもしれない奴だ。そんなこの少女に下らない誤魔化しで逃げるのは俺が一番嫌う『欺瞞』だ。

俺は自己嫌悪した。これでは葉山グループとまるで同じだ。薄氷のようなあの薄っぺらい関係性を誤魔化しながら続け、何かの拍子で崩壊してしまうようなあの関係に。そして何より失礼だった。この真っ直ぐな少女に。

「……済まん」

「……良いよ、許してあげる。その代わりに私と一緒に出掛けてくれる？」

その問いかけに俺はほんの少し救われた気がした。この暖かく優しい少女に。

「……分かった、いつに出掛けるかは夏休みに入った時に教えてくれ」

俺が了承すると一之瀬は微笑んで頷いた。神崎は俺達の事を静かに見ていたので、用件は？と聞かずに、特にない。と答えてきた。じゃあ何で一之瀬と一緒にこつちに来

たんだ？と疑問に思ったが気にしないでおいた。

そして一之瀬達と別れ、帰る準備を終えて教室を出ようとするとスマホに着信が入った。帰れると思ったのに誰だよ、と内心悪態をつきながらメールをチェックする。着信元は……。

『From 堀北学』

To 比企谷八幡

Subject 南雲の件について』

どうやらまだ帰れなさそうだ。俺は盛大に溜め息を吐き、密会の場に向かった。

生徒会室について中に入ると、そこには堀北生徒会長と、何故いるのかは分からないが陽乃さんがいた。名前呼びについては強制されました。俺が来たことに気付くと、陽乃さんが話しかけてくる。

「お、やつと来たんだ比企谷君」

「やつとつて……今さっきメールが来てすぐにこっちに来たんですが」

扱い酷くない？それに南雲の件とか本当はどうでもいいし、帰りたいんだが。内心げんなりしていると堀北会長は俺のそんな様子を見かねたのか溜息を吐いて目線で椅子に座れと促してきた。俺はそれに従って椅子に掛けるとすぐに本題に入り始めた。

「今回、比企谷を呼び出した理由だが南雲の調査を中断して、もう片方の勢力にメスを入れてもらいたい」

もう片方の勢力……？そんなもんがあんのか？

「比企谷君は知らないのは無理はないよ。正直に言うとな、今までの調査はそこまでの重要性はなかったの」

陽乃さんから意外な言葉が出てきた。俺は疑問に思ったので聞き返す。

「では何で・・・？」

「実はその勢力のリーダーの子が本当は厄介でね。その勢力の反対の南雲派から調べていつて徐々にその子の情報を洗い流したかったんだけど・・・南雲君の狙いが分かったからそんな悠長なことを言ってられなくなったんだ」

南雲の狙いって確か堀北会長と陽乃さんがいる3―Aを下のクラスに引きずり下ろすことだったよな。でも学年が違うんだから大丈夫なはずではないのか？

「学年が違うんですし、大丈夫なのは？」

「南雲君だけだったなら全然余裕なんだけどねえ。件のリーダーの子が絡んでくると厄介なんだよね」

俺が魔王と恐れるあの陽乃さんが厄介とはつきり言うなんて相当な奴なんだな。こ

の人がここまで言うとは思わなかった。

「そこまでなんですか？」

「ぶつちやけて言つちやうと基本的なポテンシャルは私と同等かもしれないからそれ以上かもしれないだよ。このことは真正面からぶつかるのは私としても避けたいくらい」

陽乃さんと同等か、それ以上って……やばくね？ 3—Aのトップクラスの実力を
持つてるはずだからな、陽乃さんは。

俺がその言葉に戦慄していると堀北会長が言葉を継ぐように続ける。

「しかもそいつは、pポイントは3000万以上は所持している。しかも何の不正もない」

おいおい……2000万を集められている生徒は現時点で学校にはいないって聞いたぞ？ ということは……

「学校側が知らないってことですか？それにそんな金額が動いているなら・・・」

「ああ、おそらく生徒間の中で箝口令が敷かれているのだろう。教師にばれないレベルのな。生徒会も相当な根回しをしてやつと手に入れられた情報だ。しかし、これはプライベートな情報だ。だから生徒会の一部の生徒しか公開はできない。教師も知っているのはそいつのいるクラスの教師のみだろう」

一体どんな方法でそこまで稼いだんだ？しかも教師にもばれないほどの絶対的な箝口令を敷けるなんて、相当なカリスマ性だな。頭脳は下手をすれば坂柳以上と考えたほうがいいな。

「俺には荷が重いと思うんですけど。何で新参者の俺に？」

正直、もっとベテランで信頼の置ける人物の方が良いんじゃないか？俺より能力が高い奴は生徒会には沢山いる筈だ。

「だからこそだ。お前は生徒会に入って日が浅い、逆に言い換えればそこまで情報が得られていない筈だ。警戒は段違いに低いと俺は考えている」

成る程な……。それは一理あるな。でも情報の全くない新人だからこそ警戒される可能性があるんだが。断りたいが、強制なんだろうなあ。やだなあ、憂鬱だなあ。俺は座右の銘『押ししてダメなら諦める』に従うように溜め息を吐いて了承する。

「はあ……。とりあえず了解しました」

俺が了承すると陽乃さんが意外な物を見るような目で見て言った。

「およ？意外だね。てつきり断るのかと思ったよ。比企谷君のことだから」

「断つてもどうせまた頼みにくるんでしょう？なら、抵抗するだけ無駄ですよ」

「あはは、比企谷君らしいね。その潔いところ、お姉さんは好きだよ？」

やめて欲しい。簡単に好きだって言うのは、いくらエリートボツチの俺でもドキつと
するから！話がまとまったところを見計らって堀北会長が言う。

「……では頼む、比企谷」

「……うつす。では失礼しました」

そうして俺は生徒会室を出て、寮への帰り道に歩みを進める。

「堀北君、本当にあれで良かったの？比企谷君のことを侮ってる訳じゃないけど流石にあの子を相手させるのは早いと思うんだけど」

陽乃は若干堀北を諫める様に言う。しかし、堀北は表情を一切変えずに言い返した。

「どの道遅かれ早かれぶつかることになる。それに南雲の計画の思う通りにさせれば少なくとも1年からは大量の退学者がでる。それは俺がこの学校にいる間は避けたい」

堀北の言葉を聞いて陽乃はニヤリと揶揄うような表情になり、言った。

「妹ちゃんのためなんですよ？携帯の待ち受け画面を妹ちゃんの写真に設定してるくらいだもんねえ」

その言葉に堀北はフツと笑い、言い返した。

「その言葉そっくりそのまま返す」

陽乃は苦笑すると会話はそこで途切れ、堀北は呟くように言った。

「彼奴は本当に手強いぞ。――――白鷺千聖は」

昇降口に向かって歩いていると、まだ校内に生徒が残っていたようで前から生徒が歩いてきた。しかし俺が気にすることではないためすれ違おうとしたとき、その生徒に呼び止められる。

「ちよつといいかしら？ その眼が独特でアホ毛が目立つ人」

俺ではないかもしれないと思ったので無視しよう……ん？『眼が独特でアホ毛が目立つ人』って、まさか……いやいやいや、他にもそんな人がいるかもしれないし、やっぱり素通りで行こう。そして俺は反応を返さず通り過ぎようとしたとき、肩を叩かれた。

「流石に無視はないんじゃないかしら？それとも聞こえなかった？」

「……自分のことを呼ばれているとは思わなかったんですよ」

そして相手の姿を見据える。身長は俺とそこまで変わらない少し長身の女子だった。見た目は白に近い金髪でセミロングより少し長め

で肌は雪のように白い。瞳は宝石のルビーのような紅色で顔立ちは恐ろしい程に端正でスタイルも出るところは出て、引っ込んでいるところは引っ込んでいるというまさに男の理想の体型だった。思わず息を止めてしまう程、見惚れてしまった。

そんな俺の様子を訝しげに見ながら聞いてきた。

「……どうしたのかしら？」

「……いえ、何でもありませんよ。で、何の用ですか？」

何とか誤魔化して用件を聞く。すると相手の纏う雰囲気が変わり、まるで心臓を鷲掴みにされたような感覚に陥る。そして妖艶な微笑みを浮かべて言った。

「貴方が最近、南雲君の周りをコソコソ嗅ぎまわってる生徒会の子の比企谷八幡君かしら？」

ツ!? 何でそれを……。いや、動揺するな。カマをかけているかもしれない。可能性は低いが……。何とか平静を装って言った。

「いや、違いますけど……。俺は八幡英斗やはたえいとです」

咄嗟に偽名を使ったが……。聞いた相手は一瞬だけ目を細めたが、すぐ笑顔に戻って、そう。と言った。ここで気付いたが、この人陽乃さん以上の強化外骨格持ちじゃない

いですかやだー！俺が内心絶望していると、その人は言った。

「君が名乗ったからこつちも名乗りましょうか。私の名前は白鷺千聖よ。よろしくね？
やはた八幡君」

よろしくしたくないなあ・・・そんな憂鬱感など出せるわけもなく、はい。と返事する俺氏。早くこの場から立ち去りたいので早々に会話を切り上げ、では失礼します。と言って立ち去ろうと歩き出したその時、白鷺さんが耳元で囁いた。近い近い良い匂い！！

「……………堀北先輩に言っておいてちょうだい。私は南雲君と組むつもりはないて」

!!・・・堀北生徒会長から名前を聞くのを忘れていたが、まさかこの人が……………白鷺さんは耳から顔を離して俺から離れていく。俺は言われたその言葉に立ち止まっていたとき、白鷺さんは踵を返してこつちに戻ってきた。

「忘れてたわ。携帯貸してちょうだい、メールアドレスを交換しましょう」

有無を言わせない様子で言われたので思わず貸してしまった。そして一瞬で登録されて返された。アドレス帳に『白鷺千聖』の名前が増えていた。そしてまた耳元で囁かれた。

「今度、時間があるときお茶しましょう。貴方と話してみたいわ。――――後、偽名を使うならもうちよつと考えた方が良いわよ。八幡君♪」
はちまん

そして頬に柔らかいものが当てられ、リップ音が響いた。そして白鷺さんが微笑んで去って行くのを俺は茫然と見送るしかなかった。空はもう既に茜色に染まりかかっていて俺は独りごちた。

「俺の周りの人、強化外骨格の人多くないか・・・？」

その言葉はカラスの鳴き声にかき消されたのであった。

愚か者の地獄の序章

暑い夏の日差しを俺は避ける為に冷房の効いている船内に逃げる。過去に思い馳せた後、一之瀬も一緒についてきた。もちろん水着は着替えており、動きやすいジャージになっている。船内を巡っていると一之瀬が言った。

「いやー、それにしても船内は広いねえ」

一之瀬の言う通り、この豪華客船はかなりの規模を誇っている。地上5階、地下4階となっていて3階が男子のグループ部屋、4階が女子の部屋になっている。内装はきちんと清掃されていて the・セレブというような豪華さだ。レストランは勿論のこと、屋上のプールにエステやマッサージ、カジノまで完備されている。しかも施設の利用は無料だ。普通なら数十万から数百万円は吹き飛んでもおかしくない。

「迷子になりそうだがな．．．ここまで広いと」

本当に迷子になりそうで怖い。一之瀬は俺の言葉に苦笑する。するとお腹の虫がなった。その音を聞くと一之瀬は顔を赤らめて、俺は思わず笑ってしまう。

「あはは、泳いで動いたからお腹減ったのかなあ?・・・一緒にご飯にしない?八幡君」

一之瀬はさつきまで結構泳いでいた為、外に連れ出されたがビーチチェアに座って惚けつとしていた付き添いの俺よりは腹は減っているだろう。しかし、俺も腹が空いてきていた為、断ることはせず、頷く。そして適当なレストランに移動しようとした時、声を掛けられた。

「あら、比企谷君に一之瀬さんではありませんか」

その声の主のいる方を向くと、坂柳と椎名が一緒にいた。一之瀬は坂柳の存在に若干驚いていた。

「坂柳さん!?!・・・良く豪華客船に乗れたね。体は大丈夫なの?」

差別している訳ではなく、純粋な驚きと心配で坂柳に聞く一之瀬。その問いに笑って坂柳は答えを返した。

「豪華客船に乗る程度なら大丈夫なので。と真島先生を説得したんですよ。流石に無人島での宿泊は無理ですがね」

説得したんだな……。確かに無人島での宿泊は環境とかはがらりと変わるから先天性の疾患を抱えてる坂柳には厳しいだろうからな。まあ、その理由は建前って俺は知っているが。

2日前ーーーーー

俺は放課後に坂柳にーーーー強制的にーーーー呼ばれていた。待ち合わせのカフェで待っていると、坂柳が神室を引き連れてやってきた。なんか、本当に主人と従者みたいだな。神室は坂柳の鞆を持ってるし。2人が椅子に座ると坂柳が口を開いた。

「待ちましたか？比企谷君」

「そこまで待つてねえよ」

そんな俺の返事を聞いて、坂柳は意外そうなものを見る目で見つめてきた。俺は思わず、何だよ。と聞き返した。

「いえ、比企谷君なら、『待たされた』位は言いそうだったので」

「俺の印象はお前の中でどれだけ失礼なの？ 先天性の疾患を抱えてるお前にそんなこと言うほど俺は腐ってないからね？」

坂柳のペースなら仕方ないと思ってるので10分位待たされても別に怒る理由にはならない。流石に1時間はきついけどな。すると坂柳がなにやら頬を赤らめて呟いた。

「……ぱり、八幡君はやさ……いですね」

小声で所々聞こえなかったが、今此奴、俺のことを名前で言わなかったか？ 少し脳の

奥から何かが開いたような感覚がした。

「・・・どうした？」

「・・・いえ、何でもありませんよ。今回私が貴方を呼び出したのは2日後のバカンスの件で頼みたいことがあったからです」

此奴が俺に頼みたいことって絶対面倒くさそうな感じがするんだが。俺が面倒くさそうな雰囲気を出してるのを他所に坂柳は話し始める。

「今回のバカンスがただのバカンスとはこの学校の仕組み上は有り得ないと思ってます。おそらく何らかの試験の様なものがあるのではないかと考えています」

だろうなあ・・・中間試験や期末試験で赤点を出したら退学っていう鬼畜なこの学校がこんな甘い事するはずがない思っていた。生徒会長も試験があるって言ってたしな。試験内容までは聞かされなかったが無人島でバカンスとか言つといて、クラス対抗試験とかやりそうだな。

「……で、そこで俺になにをさせたいんだ？」

大体予想はついてはいるが一応聞いておく。

「試験の内容によりますが、もし試験がクラス対抗だった場合には貴方にAクラスの葛城派の妨害をしてもらいたいのですよ」

ですよねー。ていうか派閥が違うとはいえ、同じクラスなのに容赦ねえな。マジっべーわあ。思わず中学の時にいた騒がしい彼奴の口調が移ったわ。……海老名さんに告白出来たんだろうか。修学旅行の時から関わる事がなくなったから行く末は知らない。

坂柳の言葉に神室が顔を引攣らせながら反応する。

「あんだ、本当に容赦が無いわね」

「葛城君の方法ではそう遠くない未来に下クラスに落ちてしまうので早く芽は摘まないといけませんからね」

「……話しは分かった。お前には世話になったから、条件付きで受けよう」

過去の俺の話しを聞いても拒絶せずに俺を受け入れてくれた坂柳には少なからず恩があるしな。それにBクラスにとっても旨味があるし、断る理由はない。……まあ、坂柳が完全なリーダーになったらきついかもしれないがな。まあ、それは追々考えるとしてしよう。

「ありがとうございます、比企谷君。条件は最大限絶対に呑みましょう。お約束します。そして条件はなんでしょう？」

うーむ、そうなんだよなあ。pptは今月で500万になったから困ってないし、かと言って2000万で個人でAクラスに上される権利の為にAクラスから融資を受けたいわけでもない。……まあ、特に思い浮かばないし、これだけでいいか。

「ああ、条件は—————」

俺のその条件を言うと坂柳はクスツと微笑んで、神室はどこか眩しい物でもみたかのような表情になった。そして坂柳は優しげに言った。

「分かりました。ですが、その条件は依頼が失敗したとしても呑みましょう。バカンスには私も船までは同行することにします。それにしても比企谷君らしい条件ですね」

その言葉に俺は照れ臭くなり、思わず頬を赤くしてそっぽを向いて言った。

「……………うつせ」

その様子を聖母のような微笑みで坂柳は見つめてきた。何これ……

—————これが2日前に起こった出来事である。坂柳と結んだ契約は俺個人が受けている。Bクラスにも影響するのだが、無駄な混乱を避ける為に申し訳ないが一之瀬達には何も話していない。それにしても坂柳が付き添いの奴を付けていないのは珍し

いな。

「神室や橋本はどうしたんだよ？」

「彼等にも自由な時間は必要でしょうから自由行動させていますよ。縛ってばかりではストレスも溜まりますから」

一見したら坂柳は良いやつっぽく思えるが、本当は不満とかを生み出して裏切りや反逆する可能性を防ぐ為にやっているのだと思う。まあ、此奴が本当の意味で仲間を切り捨てるとは思わんけどな。龍園や葉山ならやるだろうが。

「そう言えば一之瀬さんや八幡君はレストランに行くところでしたか？」

会話の話題が切り替わり、椎名は聞いてきた。すると、一之瀬と坂柳は若干驚いた様に目を見開いた。俺のこと名前で呼んだからだと思うが。椎名もこれまでの間に名前呼びがしたいと言ってきた。そして、俺は断れ切れるわけもなく、椎名の天然に押し切られる形で俺の名前呼びが決定した。だって断ろうとしたら涙目になるんだもん、抗え

る術を俺は持つてない。

俺は椎名の質問に頷く。……何か2人の視線が怖い。坂柳も一之瀬もニコニコ笑つてる筈なのに目が氷点下に達する程冷たい気がする。ふええ……怖いよおお。どこか椎名の顔は勝ち誇つていると思うのは俺の見間違ひでありたい。

「……とりあえず分かりました。一之瀬さんに八幡君、私達も同行しても良いですか？」

「え、ちよ「良いよ」、私も色々と話したいことが出来たからね」

嫌な予感があった為に俺は断ろうとしたが、一之瀬の見事なまでの絶対^可零度^機な微笑みを見かけられながら遮られ、本能的に逆らったらヤバいと感じ、逃げられないと悟った俺は項垂れながら3人にドナドナされてついでに行くことになった。解せぬ。

そして、レストランに着く。内装は綺麗でなかなかの数の全クラスの生徒達がいる。俺達のことを見ると周りはやはりというか騒っている。思わず俺の胃がキリキリとするが、この空気を生んだ当の3人は気にする様子もなく、席に着いた。座るのを躊躇った俺の様子に気付いたのか一之瀬が手招いて隣に座るのを薦めてくる。もうどうにでもなれ、と考え諦めて座る。

一之瀬の隣に俺、それと向かい合う形で坂柳と椎名が座っている。・・・さつきから視線の嵐を浴びてるからめっちゃ辛いんですけど。メンバーが1年のトップでAクラスのリリーダーである坂柳とBクラスのリリーダーでめっちゃ人気者の一之瀬、更にはCクラスで唯一龍園が支配していい椎名がいるのだ。この異色の3人にBクラスのモブが中にいれば不思議に思うのも仕方あるまい。

いつまでも店に何も頼まず居る訳にもいかなないので適当な料理を全員頼む。そして料理が運ばれるのを待っていると坂柳が口火を切った。

「それで八幡君、一体いつから椎名さんに名前呼びをされているのですか？」

誤魔化しは一切認めないと、強い瞳を向けながら聞いてくる坂柳。そして一之瀬も黙って答えを言うのを待っている。はあ・・・別に隠すことじゃないし、言うか。

「1週間前に、親しくなってきたから名前と呼びたいって言われたんだよ」

急な頼みだったが、一之瀬に名前と呼ばれるようになってから名前と呼ばれることに

羞恥心はあまりなくなった。小町ちゃん、俺、女性慣れしてきたよ。ぶっちゃけこの学校に来てから殆ど女子生徒とばっかり話しているので耐性がついたのかもしれない。

その答えに坂柳は何やら考え込んだ後に言った。

「そうですか・・・一之瀬さんにも名前と呼ばれているのですか？」

「ああ」

短い肯定をすると、坂柳はまた何か長考した後に一之瀬と椎名に目を向けて、そして俺に視線を戻した。

「では、3人共に名前と呼ばれている八幡君に頼みがあります。私達を名前で呼んでください」

その言葉に一瞬だけ理解が遅れた。今の俺は間抜け面を晒しているだろう。そして、理解がやつとの事で追い付くと俺は言った。坂柳の提案に一之瀬と椎名が頷いた。

「……や、何でそうなる？」

正直意味が分からん。何故、俺に名前呼びをさせるのか。坂柳は真剣な表情でこう返してきた。

「私達が八幡君を名前で呼んでいるのに、八幡君は私達を苗字呼びしているのに違和感があるですよ」

そんな理屈(?)じみた理由に俺はうぐつ。と唸る。そして押された俺に考える隙を与えないかのように一之瀬が言葉を継いだ。

「正直に言うとな、私も違和感を覚えてたんだ。今までで私達はそれなりに親しくなつたと思う。そしてもっと八幡君のことを知りたいんだ。だからね、その証として私達を名前で呼んで欲しいなって」

一之瀬の真っ直ぐな言葉に更に俺は唸る。そしてトドメとばかりに椎名が言った。

「私達は八幡君ともつと仲良くしていきたいのです。……多分私達が想っていることは同じ筈です」

……ここまで踏み込んできたのはこの3人が初めてだ。そして俺の過去の事も知っていて尚、受け入れてくれた。1度は拒絶されて見放された俺に居場所をくれた、だったら恩返しとしてそれくらいの要望は大したことではないのだ。後に布団の中で悶えればいいだけなのだから。

そして俺は一息置いて、瞑目して直ぐに目を見開いて言った。

「……分かった。有栖、帆波、ひより。……改めて宜しくな」

この時の八幡の表情は普段の腐った眼ではなく、とても澄んだ淀みのない瞳に加え、滅多に出さない穏やかな優しい笑みを浮かべていたらしい。その笑みを見た3人は顔が成熟しきった林檎のように赤かったそう。遠くから見ていた周りの女子生徒も何人か顔を赤くしていた程だった。

そしてその後は適当に雑談に入っていた。そして料理が運ばれてきて全員食べ始めようとした時。離れた席の方から言い争う声が聞こえてきた。片方は聞き覚えのある声だったのでそちら側を向くと……

「何であんたにここに来ちゃいけないって言われなきゃいけないの!?別にいいじゃん！」

「はっ！お前のような品のない馬鹿がここで飯を食べる資格はないんだ！大人しくジャンクフードでも食つてろよ」

その声の主は由比ヶ浜と見覚えの無い男子のものだった。Dクラスのグループで食事していたところを邪魔されたのか？すると坂柳が呟いた。

「あれは、戸塚弥彦君……」

「有栖が知ってるって事はAクラスの奴か？」

「ええ、彼は葛城派の幹部の人です。．．．それにしてもこんな公共の場で騒ぎを起すなんて」

有栖が呆れた表情を見せる。まあ、見ている限りあんな騒ぎを起こす奴を有栖が自分の派閥に入れるとは思えないしな。それにしても俺の知る戸塚とは大違いだな。

「こりや完全に葛城の監督責任だな。．．．ん？」

ふと目を右にやると橋本がいて、携帯で撮影していた。有栖の依頼もあることだし、俺も録画しとこ。

そうしているうちに口論は止むどころか、どんどん大きくなっていく。周りにいる生徒が迷惑そうに見ている。それを見た帆波は止めに入る為なのか、立ち上がる。正義感の塊だからな。

「行くのか？」

「うん。あのまま誰も止めに入らなかつたら周りの人とお店の迷惑になっちゃうし」

やはりというか、何というか……本当に生粋のお人好しだな。

「……一応付いて行くわ。面子がアレだからな」

その俺の返事に一瞬、帆波はきよんとするとクスツと微笑んで言った。

「ふふつ、ありがとう八幡君」

「素直じゃないですねえ、八幡君は」

有栖の弄りに俺は小さく、うつせ。と言い返すと言いつ争っている2人の所に行く。有栖とひよりも付いてくるようだ。ひよりはともかく、有栖は色々打算はあるだろうが、一応リーダーとして止めに入るのだろう。

「はい、ストップストップ。これ以上は周りとお店の迷惑になるよ」

「お前は……一之瀬か」

止めに入った一之瀬に戸塚は一時言い合いを中断する。そして今度は一之瀬に向けて口を開く。

「Bクラスのリーダーのお前には関係無いだろう。俺は此奴らにDクラスに^{不良品}に相應しい過ごし方を教えてやっているだけだ」

その言葉にDクラスのグループの奴等は戸塚に殺氣を向ける。俺は店内を見回す。テラスの席でコーヒーを飲んでいてこの状況に気づいていない葛城がいた。……おいおい、何で一緒にいるのに葛城は止めに入らないんだよ。普通は気付くだろう。俺は有栖に小声で聞いた。

「おい、有栖。葛城派は余程の選民思想に塗れた奴等の集まりなのか？」

「どうでしょうね、Dクラスを不良品と蔑む人達は少なくないですから。彼の派閥も例外ではないでしょう。特に戸塚君はその傾向が強いようですが」

「マジかよ。引くわ」

この会話が聞こえていたらしく戸塚はこつちを睨んできた。何故か由比ヶ浜も俺達を睨んでくるのだが。そのほかの奴等からの視線も向けられる。

「何だと……！お前、葛城さんの悪口を言いやがつて！」

「いや、そりゃあそうだろう？お前みたいなクラスの差別を言うような奴を派閥に葛城は入れてるんだろう？俺なら絶対に入らないね」

俺の切り返しに切れたのか怒鳴ろうしてくる戸塚だが、その前に有栖が言った。

「Aクラスの貴方が差別のようなことを公共の場で言うなんて思いもありませんでした」

「坂柳……調子に乗るなよ……！他クラスに絡んでいくお前がリーダーなんて務まるわけがない！！相応しいのは葛城さんなんだからな」

「いえいえ、調子になんて乗ってませんよ。それにそのリーダーとなる葛城君の派閥の貴方がこんな騒ぎを起こせば葛城君の評価が下がりますよ？」

有栖の言葉にハツとした戸塚は周りを見渡すと、Aクラスの葛城派の数人が戸塚を睨んでいた。なんて余計な事をしてくれたんだと言う感じで。戸塚は青ざめる。差別的発言をした戸塚の評価は大きく下がるだろう、この店にいるほぼ全員が証人なのだから。そして上司である葛城も監督責任として相対的に評価が下がり、派閥の奴等は坂柳派に移るだろう。恐ろしいな、本当に。そしてここでやつと騒ぎを聞きつけた葛城がやって来た。

「戸塚、これは何の騒ぎだ！」

「葛城さん、これは……」

「貴方の部下である戸塚君がDクラスに差別的発言をしていましたね。余りにも酷かったので止めに入ったというわけですよ」

有栖の証言に眉毛を顰めつつ、戸塚に視線を向ける葛城。それに思いつきり萎縮する戸塚。

「……そうか。Dクラスの皆、誠に申し訳ない！」

葛城はそう言つて綺麗な90度のお辞儀で謝罪した。それを見た戸塚は慌てる。

「葛城さん!?! な、何で……」

「黙れ。お前の理由が何であっても差別的発言をして良いことにはならない。Aクラスの模範としてあつてはならないことだ! それに周りを不快にさせてしまったのならば謝罪するのは当然だ」

リーダー争いをしている有栖の言葉を素直に受け入れ、誠意謝罪することは葛城の良

いところなのかもしれない。葛城の言葉に戸塚は俯きながらも謝罪する。そして周りに向けても謝罪して、お店の店員にも謝罪して出て行つた。しかし、謝罪だけでは怒りが収まらないのか怒つた様子のままこちに絡んでくるやつが1人いた。

「用は済んだし、戻「ヒッキー!」・・・何だよ由比ヶ浜」

そう、由比ヶ浜結衣の存在だ。俺は鬱陶し気に顔を向けると由比ヶ浜は言つた。

「何で私達を助けてくれなかったの!?!」

「は?。」

意味が分からなかった。何故、俺がDクラスを助けないとならないのか。て言うか形的にはDクラスを助けたんだが。

「何で助けないといけねえんだよ」

「私達は理不尽に責められてたんだよ!?!なら助けてくれたって良いじゃん!!」

・・・駄目だ頭が痛い。すると、帆布が俺の代わりに反論してくれた。

「あの言い争いに八幡君は全く関係無いよ。私の頼みを聞いて付いてきてくれたただだからね」

その正論に対して由比ヶ浜はとんでもない事を言った。

「そうだとっても止めに入っただったらこつちを助けるくらいはしたって良いでしょっ!?!」

その言葉に思わず頭を抱えてしまう。駄目だ、此奴・・・やつぱり話しが通じねえ。そして有栖と帆布とひよりの顔が怖い。特に有栖と帆布、笑ってるのに殺気がダダ漏れだ。周りの生徒が怯えてるし。Bクラスの何人かの奴も由比ヶ浜を睨んでいる。

そして更に事態は面倒な方向に進んでしまう。ある1人の生徒が絡んできたからだ。

「そうだ。結衣を庇うくらいは出来たんじゃないのかい？」

そう、葉山隼人だ。どう聞きつけたのかは知らないが、そう言つて乱入してきた。そして有栖と帆波の殺気が更に強くなった。怖いよ、怖過ぎる……

「……別に俺には関係無いことだろうが」

「同じ部活仲間だっただろう！」

「同じ部活仲間だろうが何だろうが、俺を罵倒し続けて、俺の言葉をまともに聞かない奴を俺が助ける訳ねえだろ……」

俺も流石に苛立つてきたのでそう言い返すと、由比ヶ浜は憤慨して言った。

「あれはヒッキーが悪いんだし！人の気持ちを考えずに！本当に何で一之瀬さん達はヒッキーなんかと一緒にいるのか意味分かんないよ！」

「本当にそうだよ。あの坂柳さんと一之瀬さんが君のような奴と関わりを持つなんて……底が知れるよ。椎名さんも何でこんな奴を気にいったのか」

2人は嘲笑して、こつちを見下した視線を向ける。由比ヶ浜がいたグループは由比ヶ浜に困惑した目を向けていた。

——その言葉が引き金だった。引き金がふり絞られ、俺の奥深くにある『何か』が押された。周りの空気が変わったがもうそんなことはドウデモイイ。

「あ?」

俺は今までで出したことのない殺気を出したのであった。

逆鱗

俺は15年間生きてきて、人に向けて怒りを打つけたことはほとんど無かった。どんなに人から何を言われ、何をされても最終的には自分が1番の原因だと思って納得していたからだ。故に人に赴くまま怒ったことはない。

唯一、他人が原因で怒りたいと思ったのは文化祭の時に最後まで往生際が悪かった相模のことだ。彼奴、人の努力を全て水の泡にするところだったからな。修学旅行は葉山に利用されて奉仕部の2人から拒絶されたことは置いておいて、俺の拒否も甘かったし、あの方法よりもっと上手く出来る方法があったと思う、俺が原因の一因を持っていると思ったからだ。

だから、葉山は兎も角として奉仕部の2人にはある程度何を言われても仕方がないと思って見逃していた。だが、もう限界だ。怒ったことが余りないから加減が難しいからやり過ぎるかもしれないが、いいよなあ？葉山に由比ヶ浜。

俺が信じられない程の低い声と殺気を溢れさせる。周りの空気は完全に凍り付き、緊張感が流れる。周りの何人かの生徒は怯えて震え始める。しかしこの程度はまだマシで、殺気を諸に受けた葉山は青い顔でガタガタと震え、由比ヶ浜は腰が抜けたのか、地面に尻餅をついて涙目になって怯えている。

俺の変貌に帆波とひよりが目を見開いて驚いていて、有栖は何故か笑っていた。しかし今はこの葉山と由比ヶ浜が最優先だ……！

「おい、そろそろ良い加減にしろよ。俺が強く言い返さない事を良い事に罵倒しやがって……」

俺の事をびびりながらも葉山は抵抗するかのように言い返してくる。

「じ、事実じゃないか！事実を言って何が悪いんだ!!」

「……確かに俺の事に関しては事実だ。だから俺の事は何を言おうと気にしない。……だがな、葉山」

俺は一拍置いて、葉山を睨め付けながら言い放った。

「この3人は俺に居場所をくれた。俺は間違っていないと、俺は俺のままで良いんだと拒絶せずに許容してくれた。その俺にとつては掛け替えのない3人に対しての罵倒は絶対に許さん……それに葉山、お前がそんな事を言える立場だと思うなよ?」

その言葉に葉山はビクリと反応して冷や汗を流し始める。此奴には1度、徹底的に地獄を見てもらわないとな。

「お前には黙ってたが、あの件の事は全部録音してある。それをバラしたらお前はどんなになるんだろうなあ? 皆の葉山隼人」

それを聞いた葉山は目に見えて動揺し始める。そして俺は更に続けて言った。

「中学の時はクラスメイト含める全学年の支配者なようなものだだったから大きな顔を出来ただろうな。俺みたいな根暗なぼっちを虐める程度は。しかしこの学校でのお前の

影響力は皆無に等しい、クラスの支配者は龍園だからな。しかも同学年でお前より遥かに優れてる奴は有栖や帆波、ひよりを含めての何人もいるからな」

龍園や噂で聞いた高円寺に俺的に一番警戒している綾小路などだ。その他にも隠れた実力者はまだまだ存在する筈だ。

「お前が調子に乗って罵倒するのは勝手だが、お前の得意な『皆』はほぼ使えない。それに前の中学の時の俺だと思うなよ？」

正直この程度の殺気で震えるなら、俺は絶対に倒せない。生徒会長にも稽古の時はこの数倍の殺気を浴びせても平然としているからな。此奴もサッカー部で運動神経はまあまあだが、今の俺には対抗できない。それを思い知らせる為に俺は、左手の人差し指でクイクイと挑発する。

「ツ!!ヒキタニイイイイイ!!」

普段はこの程度の挑発には乗らないであろう葉山はこっちの予測通りに堰を切った

かのように殴りかかってきた。しかし焦っているのか、冷静ではない葉山の攻撃は単調だ。振りかぶられた右手を左手で受け止め、足払いをかける。呆気ないほどに引つかかり、体勢を崩したので俺は葉山の前から横に身体をずらす。そして葉山は前に頭から倒れた。

俺は葉山を冷ややかな視線を一瞬だけ送ると、まだ尻餅をついて呆然とアホ面を晒してる由比ヶ浜に言った。

「なあ、由比ヶ浜」

「ひ、ひいつ!」

俺が声をかけた瞬間、身体を跳ね上げて怯える由比ヶ浜。おいおい、まだ何もしてないだろ。その程度で悲鳴なんか上げるなよ、俺の中学の時に受けてきた虐めの方が数倍上だぞ? 由比ヶ浜の様子を俺はゴミを見る目で言った。

「この際だから今までに言われた分を返してやる。お前は俺が中学の時にいじめられて

たのにも関わらず、助けるどころか虐めてきた連中と笑ってたよな？そして俺の事を散々キモイとか言う癖に依頼でいざ困ったら俺や雪ノ下に頼ってお前は美味しいところだけ掻つ攫つて汚い部分は俺に押し付ける。そして俺が利用出来なくなったら拒絶したもんな？」

俺の言葉に周りは由比ヶ浜に驚きと軽蔑の眼差しを向ける。と言つても驚いていたのは同じクラスของกลุ่มの奴等だけで他はほぼほぼ全員だ。良い評価を聞かないみたいだ。まあ、人の話をまともに聞かない自分だけが正しいと思っている傲慢になっちゃまった奴だ、自業自得だ。

俺の言葉に由比ヶ浜は違うと子供がイヤイヤとする様に頭を横に振る。

「ち、違う、違うのツ！私はそんなつもりじゃ・・・」

「違わんだろ。実際俺がそんな目にあつたんだから・・・修学旅行の件は俺にも一因があつたから助けてくれとは言わない。だが、俺の事を虐めてきた連中と同じような行動を取るか普通は？同じ部活仲間一度はお前の家族を救った奴に対して、そんな態度は

取らんだろ。つまりお前は」

「――俺を見下してたんだろう？と、俺は前々から思っていたことを言った。その言葉に由比ヶ浜は俯いて嗚咽を漏らし始める。何か俺が悪い事をしてるみたいだから止めて欲しいんだが。」

「！八幡君ッ!!」

ひよりが焦ったような声を出す。しかし、葉山が起き上がって後ろから殴りかかってくることは予想していたので、横に飛んで避ける。

「ツヒキタニ・・・!!」

恨みが籠った目で睨んでくるが、此奴、本当に今の状況を理解出来てないな。俺は葉山に言う。

「お前さあ、この状況で殴りかかったらどうなるかぐらい理解しといた方が身の為だぞ

？お前の味方は今誰もいない」

現時点で葉山の味方は誰1人としていない。側からすれば絡んで散々いちやもん付けた挙句、こつちが少し言い返したら殴りかかってくるんだからな。1回目はこつちがあからさまに挑発したから殴ってきた。それならばまだ味方はいた筈だ。でもこの2回目は挑発無しにも関わらず殴りかかったんだ。弁護士なんて出来る筈がない。しかも胸ポケットに未だ録画中のスマホがあるし、証拠も揃っている。

「弁護士を目指している賢い頭のお前なら分かるだろ。今のこれだけでも暴行罪だ。俺が受け止め無かったら傷害罪も入っていたな。お前の行動は録画してるし、何より此処にいる全員が証人だ。ここで俺が学校側に訴えたら、お前は悪くて退学、良くて停学だ」

葉山は青ざめて怯え始める。まあ、退学の方が此奴には良いだろうな。停学なんかしてCクラスの足を引っ張った暁には、龍園の地獄が待っているだろうからな。山田アル何とかの暴力は受けたくないね。俺が此奴の立場だったら舌嚙んで死ぬまである。

まあ、俺としては訴えても良いんだが、此処で龍園と敵対するのは面倒だから今はしないけど。

「まあ、もうお前らと関わりたくないからはつきりと言っておくとするわ。俺にもう絡んでくんない。そうすればこの事も黙っておくし、お前の行動の邪魔もしない。ほら、簡単だろ？『誰も傷つかない世界』の完成だ。皆の葉山隼人君」

そうして俺達は飯を食う気が失せたので、店員さんに店で騒いだことやその他諸々込みで謝罪する。すると店員さんは嫌な顔や文句も言わずに、逆にこつちを大変でしたね。と氣遣つてくれた。俺はお礼を言つて店から出て行つた。

そして船の休憩スペースまで出て適当に座る。そしてそれまで沈黙していた有栖達が聞いてきた。

「良いのですか？葉山君を訴えなくて」

どうやら俺が葉山を訴えない様子を怪訝に思つたらしい。俺は苦笑しながら答える。

「ああ、此处で葉山を訴えて龍園と敵対することになったら面倒だからな。それに龍園も彼奴の事を簡単に切れるだろうし。退学してペナルティーがあつたとしてもそれは同時にCクラスの足手まといを消すことにもなる。だつたら足手まといを残しといって、Cクラスの保険のカードを増やしておいた方がこつちにとつては特だ」

俺の思惑を聞くと有栖とひよりは感心した様に、帆波は苦笑した様な複雑そうな表情を浮かべる。

「あはは・・・八幡君はえげつない事考えるんだね。・・・それにしても八幡君」

「どうした？」

帆波が顔を赤らめながら俺の名前を呼んだので怪訝に思いながら聞く。

「八幡君って私達の事を掛け替えの無い存在って思ってたんだね」

帆波の言葉で有栖とひよりの顔も赤く染まる。……うああああああ！
何言ってんだ俺ええー！滅茶苦茶恥ずかしいじゃねえかよーこれじゃ俺がプレイ
ボーイみたいになる。はっずッ！俺は思わず片手で顔を覆い隠す。赤面で顔が燃えて
いる様に熱い。そしてそのまま言葉を振り絞るように言う。

「す、すまん。怒りで冷静じゃなかったから口走っちゃった」

「ううん、謝る事じゃないよ。私達、物凄く嬉しかったし」

「「ええ（はい）」」

そう言って嬉しそうな表情を浮かべる3人。そう思ってくれるならありがたいが。
そして話が戻って、葉山の事と由比ヶ浜の事になる。

「それにしてもやっぱり個人的にはあの2人の事は許せないので、今度は徹底的に潰し
ましょう」

有栖がそう言ってきた俺は苦笑するが、帆波とひよりは頷いている。

「流石にちよつと目に余るからね。普通は反対するけど今回は賛成かな」

「私もです。八幡君にあれだけ好き勝手言っておきながら何も無しというのは・・・」

・・・俺が思うのもあれだが、あの2人には少し気の毒に思えてきたな。同情はしないが。・・・自惚れかもしれんがこの3人が此処まで怒ってくれるのに嬉しくもあった。そしてふと、男子生徒が笑いながら声をかけてきた。

「くはは、いつの間に囲ったんだよ？比企谷よお」

龍園が1人でジュースを飲みながらこつちに來た。俺は面倒臭い雰囲気と態度を隠さずに言い返す。

「俺にそんな度胸あると思うか？誰もそんな関係じゃねえよ。そう言うお前こそいつも部下を囲ってる癖に今回は1人か？」

「つは！ 気紛れに決まっただろうが。それと坂柳、今回はお前んとこのクラスに仕掛けるから楽しみにしとくんだな」

「あらあら、それは楽しみですね。貴方の戦略か葛城君の戦略、どっちが勝るでしょうかね？」

どうやら龍園が今回動く様で有栖に戦線布告した。龍園もこのバカンスで何らかの試験があると予想しているようだ。まあ、刺激を追い求めているであろう龍園らしいやり方だ。有栖も有栖で不敵な笑みで迎えるというな。こういうところは似てるんだよねあ。

帆波は苦笑し、ひよりはぼうつと何処かを眺めている。ひよりは自由だなあ。そして此処で船内アナウンスが流れる。

『生徒の皆様にお知らせします。お時間がありましたら、是非デッキにお集まり下さい。まもなく島が見えて参ります。暫くの間、非常に意義ある景色をご覧頂けるでしょう』

ちょうど良くデッキの近くの休憩スペースにいたのでデッキに向かう。それにしても意義ある景色、ね……

「こりゃあ、俺の想像通りかもしれないな」

龍園が呟くように言った。既にデッキ内は大勢の生徒で混雑しており、島の様子は窺えない。

「邪魔だ。どけよ雑魚ども」

龍園は相変わらずな態度と言葉遣いで退くように言う。すると偶々生徒達がCクラスの奴だったようで慌てて退いていた。他クラスは龍園に敵意を見せているがそれだけだ。俺はそことは別のところで島が見える位置を確保していたので問題ない。ひよりは一応龍園と合流していて、いるのは有栖と帆波だけだ。近くにいたBクラスの生徒が有栖を警戒しているが有栖自身は気にした様子はない。

旋回が少しだけ早い。島の外観ははつきりと把握出来た。俺が把握したと同時に思わず愚痴ってしまう。

「やつぱり怪しいとは思ってたがペンションがないじゃねえか。洞窟に小屋とかはあるが……無人島のサバイバルでもさせる気だな」

「あんまり想像したくないけど、そうかも知れないね」

「私は此処で留守番ですから。2人共頑張ってくださいね、体調管理に気を付けて」

「ああ、ありがとな」

「うん、気をつけるよ。ありがとう坂柳さん」

そして島にそろそろ到着するであろう時にまた船内アナウンスが流れる。

『これより、当学校が所有する孤島に上陸致します。生徒の皆様は三十分後、全員ジャー

ジに着替え、所定の鞆と荷物をしっかりと確認した後、携帯を忘れず持ちデツキに集合して下さい。またしばらく御手洗に行けない可能性がありますので、きちんと済ませておいて下さい』

有栖と別れ、アナウンスの指示に従って一度部屋に戻ってジャージに着替え、鞆と荷物と携帯を揃える。そしてトイレを済ませて、纏めた荷物を持ってデツキに集合する。

そして遂に試験が行われるであろう孤島に到着した。俺は息を吐き、これからやるであろう試験に向けて呟いた。

「さてと……ぼちぼちやりますかね」

そんな俺の無人島生活が始まった。

思わぬ収穫と出来事

島に到着した俺達は、携帯などの電子機器を預けさせられて船から降りる。大半の生徒が旅行気分で浮かれていて騒がしい。まあ、先生からは島でペンションに泊まってバカンスをすると知らされていたので無理もないんだがな。

しかし、先生の不可解な動きに疑問を浮かべることになるのは先生達がパソコンや先生用と思われるテントなどといったバカンスのイメージとは掛け離れる物を設置し始めてからだ。そんな様子に生徒達に動揺が走り始める。しかし、そんなことにはお構い無しといった様子で真島先生が生徒達の前に立った。

「静かにしろ。中には先生達の動きや島の様子で気付いた生徒もいるだろうが、大半の生徒は不可解に思っただろう。今から君達の疑問を解消する。これより、今回本年度最初に行われる特別試験について説明するのでよく聞くように」

その先生の言葉に更なる動揺を生徒達が見せる。そんな中でも先生は気にした様子

はなく、そのまま説明を続ける。

「今から君達にはこの無人島で1週間過ごしてもらう。本試験は8月7日の正午を持って終了する。尚、この試験では君達主体で動いてもらう為、私達教師は試験に関して以外は一切関与しない。そしてこの試験は実際にある企業の研修として存在すると予め言っておく。今から試験内容について説明する」

「ちよつと待つてください。無人島で1週間寝泊まりするってことですか？」

「そうだ。寝泊まりに必要な食糧や飲料水など全て自分達で用意してもらう。もちろん、寝泊まりする場所もだ。尚、試験中に乗船するのは基本、正当な理由で無い限り認められない。試験開始時点で、各クラスにテント2つ、懐中電灯2つ、マッチを一箱支給する。また、歯ブラシに関しては各生徒に1セットずつ、日焼け止め、女子生徒のみ生理用品は無制限で支給する。各クラスの担任に願い出るように。以上だ」

正当な理由ねえ……体調不良とかなら戻れるんだな。仮病で休めるって覚えとこう。女子への若干の優遇措置は納得出来るが、それにしても余りに物資が中途半端だ

な。特に衛生面がやばい。これだけでは流石に厳し過ぎる。ってことは……

「ちよつと待つし！そんな無人島で1週間過ごすなんて急に言われても無茶だし！」

説明を遮つて、1部の生徒が叫び喚くが真島先生は冷たい様子で言い放った。

「ほう、無茶とは言うが何故、無茶と思う？君はそんな状況に陥ったことが無いだけなのに何故無茶と分かる？君はそんな濃い人生を歩んできたのか」

先生の言葉に口を閉じる。すると今度は違う生徒が言った。

「しかし先生、今は夏休みですし、この行事の名目は旅行のはずです。企業研修なら、こんな騙し討ちのような真似はしないと思います」

その生徒の言葉に納得したのか、先生は普通に答える。

「なるほど、確かにそういう点では不満が出るのも納得できる。だが特別試験と言って

も深く考えなくていい。この1週間、君らは何をしようと自由だ。海で泳いだり、バーベキューをしたり。キャンプファイヤーで友と語り合うのもいいだろう。この試験のテーマは『自由』だ」

自由・・・何をしてもいいのか。生徒達は混乱する。それはそうだろうな、試験なのに自由って言われたんだから。

「この無人島における特別試験では、まず、試験専用のポイントを全クラスに300ポイント支給する。これを上手く使うことで、君らはこの試験を乗り切ることが可能だ。今から配布するマニュアルにはポイントで購入できるものが載っている。食料や水のみならず、無数の遊び道具なども取り揃えている」

それで必要物資とか、娯楽器具とかを揃えるのね。喧嘩になりそうだなあ、黙って買物しそうで。しかも300ptって単位はcptの単位だろうなあ。つてことはどう考えても・・・

「つまりその300ポイントで欲しいものがなんでも買えるってことですか？」

「そうだ」

「で、でも試験っていうくらいだから、何か難しいのがあるんじゃない……」

「いや。2学期以降への悪影響は何もない。それは保障しよう」

悪影響がないと言うことは逆に良い影響があるって事だろうな。で、大方の予想が俺の中で付いた中、真島先生は言った。

「この特別試験終了時には、各クラスに残ったポイントをそのままクラスポイントに加算し、夏休み明け以降に反映する」

真嶋先生の言葉が風と共にビーチを吹き抜けて砂埃が舞い上がった。また面倒な事になりそうだな……

俺は内心で思いつ切り溜め息を吐いた。

そして此処からは各担任の元で説明や質問を受け付けているので俺達Bクラスは星之宮先生の元に集合していた。

「真島先生からある程度、説明されたから此処からは配布物やクラスに関係する重要なことを説明するわね。まず1つ目、この腕時計を着けてもらうわ。この時計は心拍数や血圧の測定に計温機能が付いていて防水機能もある優れものだから。貴方達の位置情報はGPS機能でこっちが確認していて、もしもの緊急事態のときはそこに付いてるボタンを押してね？壊れたり失くしても先生に言ってくればまた替えの物を配布するから安心してね」

使うような状況にならない事を祈ろう。使ったら他クラスに情報を与えることになるし、どんなペナルティーがあるか分からんからな。

「2つ目、貴方達の中でリーダーを決めてもらうわ。此処の島にはいくつかの特定の場所に『スポット』となる場所があつて、そこを占領すれば1日に1pt増えるから。でも、占有権は8時間までだから必ず更新してね。そして1日に2回、スポットで午前と

午後の8時に点呼を行うわ。1人でも揃っていなかった場合、支給した300ptから1人当たり5pt差し引く事になるから注意してね。そして体調不良などの理由で船に戻る場合は30pt差し引かれる。この場に参加出来なかった生徒も例外ではないから、Aクラスは270ptからスタートとなるわ」

そしてリーダー専用のキーカードを渡される。そして先生は続ける。

「3つ目は追加ルールで他クラスで決まったリーダーを1週間の最後で当てる時間があ
るんだけどその時にリーダーを当てれば、ボーナスで50pt獲得出来て他クラスのp
tを50ptとスポットで占有して生じたptから引かれる事になるから余裕が有れ
ば頑張ってみてね。でも、それはこつちも同じだからくれぐれもリーダーを決めるとき
は注意してね」

ああ、これは完全にクラス対抗だな。誰をリーダーに決めるのが重要になってくる
な。そしてマニュアルが配布されるので俺は書いてあるであろう注意事項と必要物資
の内容を確認する。

・他クラスの生徒への暴力行為が発覚した場合は、失格とし、スポットのptや他クラスのリーダーを当てて生じたpt分を全て没収とする。更に暴力行為をした生徒は学校側の判断で罰を与えるものとする。

・大きく体調を崩したり、大怪我をしたりして続行不可能と判断された場合はマイナス30ポイントとなり、その者はリタイアとなる。

・環境を汚染する行為を発見したら、マイナス20ポイント。

・午前午後8時の1日2回ある点呼に遅れた場合、1人につきマイナス5ポイント。

・スポットを占有するためには専用のキーカードが必要である。

・一度の占有につき1ポイントを得る。占有したスポットは自由に使用できる

・他クラスが占有しているスポットを許可なく使用した場合、50ポイントのペナルティを受ける。

・キーカードの使用権はリーダーのみ

・正当な理由なくリーダーを変更することはできない。

説明と同じようなことが書いてあった。必要物資はキャンプの経験者がいないと分からないものもある。そして粗方確認を終えたのを見計らって帆波が先生に聞いた。

「そう言えばお手洗いはどうすれば良いんですか？」

「それについても説明するわ。トイレはこの災害時用の折りたたみ式のトイレが支給されるわ。用をたす時に臭いが気になる人対しては特別にビニール袋は何枚でも支給するから」

先生の話聞いてクラスに動揺が走る。特に女子は青ざめてしまっている。流石に抵抗はあるよなあ。俺も遠慮したいし。

「む、無理だよ私！絶対に嫌！」

「落ち着いて千尋ちゃん。他に方法を考えるから」

若干パニックになりかけたクラスを沈静化させる帆波。流石が委員長ポジションだな。俺はトイレの消費ptを確認する。30pt・・・これまた微妙な。

「取り敢えず皆、スポットを先に見つけよう。衛生面の問題や他の事はスポットを探し

た後に皆で話し合おう」

帆波の言葉に頷く。そして移動を開始するが、ふと、周りを見渡すとDクラスだけがまだ揉み合っていた。

「絶対無理だし！私はこんなトイレなんて御免だから！」

「このくらい我慢しろって由比ヶ浜！トイレにPも使わなかったらPが浮くんだから」

由比ヶ浜を含める何人かの女子と池？だったか、を含める男子がトイレの事で揉み合っていた。雪ノ下は関わっていないみたいだが。おいおい、他のクラスはもう移動してんぞ？

俺は呆れながら移動するクラスメイトの後を追っていく。そして拠点となるスポットを見つけたので帆波は話し合いに入る。

「取り敢えず、先にトイレ問題を解決しようか。まず、トイレにp.t.を使いたくないって人はどのくらいいるかな？」

帆波が聞く。しかし、流石に折りたたみのトイレを皆は使いたくないのか手を挙げる奴はいない。それを確認すると帆波は言った。

「じゃあ、男子用と女子用で2つ購入するのが私の考えなんだけど反対意見はあるかな？」

そしてこれにも反対意見は上がらず、帆波の意見が通ることとなった。帆波を皆は信頼し切っていてスムーズに話が進む。まあそれが帆波の美德でもあるのだが。まあ、これくらいは必要経費と割り切った方が賢明だろう。ここで仲間割れは面倒だからな。そして次の議題に移る。

「じゃあ次に役割を決めていききたいんだけど・・・」

すると神崎が意見があるようなので神崎が話し始める。

「大きく分けて3つで何人かのグループで纏まって行動するのが良いと思う。主に食糧調達班とスポット探索班と此処の見張り番という感じだがどう思う？」

「良いんじゃないか？」

「それが妥当かと思います」

クラスメイトも納得したようで賛成する。そして役割は食糧調達班は運動神経が良
い奴が中心的に組んで日替わりで交代、スポット探索班は帆波や神崎といったクラスの中
心人物が探索して、その他は見張りになる。俺はスポット探索班に入った。有栖の依
頼があるからリーダーを探らないといけないしな。無かつたら見張り班に入っていた
と思う。

大方、方針も決まったところで最後、リーダーの役割を決める。

「じゃありーダーについてなんだけど・・・やりたい人、いる？」

誰も手を挙げない。まあ、責任重大だからな。こんなこと余りやりたくないに決まってるか。最終的に網倉という女子がやる事になった。俺はここで意見を話す。

「あー、ちよつと良いか？」

俺が言うと、聞く体勢を見せるクラスメイト。あれ、ここまですんなり受け入れてくれるとは思わなかった。

「どうしたの？ 八幡君」

「スポットを更新する時に正午を過ぎてからにした方がいいと思ってな。それと更新する時も男女混合で何人かを連れてジャージで顔を隠して、男子は詰め物で女子に変装、女子は細身の奴を男子っぽく変装させてリーダーが分からない様にする。もしも力づくで来られてもこれなら大丈夫だからな。キーカードもスポットに登録する時以外は他の奴が持っておいた方が良い」

暴力行為の対策としてはこれで大丈夫だろう。俺の意見に納得してくれたのか、関心した様な眼差しを受ける。その視線がむず痒いので俺はそっぽを向いて、頬をかく。

「八幡君の言う通りのことを実行するけど良いかな？皆」

そう全員が賛成してくれた。その後はキャンプ経験者がクラスにいたようで、その意見を元に工夫して過ごしやすくなった。幸い水が近くにあつて上流を流れていた為、水質は綺麗だった。更に早い内から食糧調達をしたので p t が浮く。今消費している p t はトイレ2つにウォータージャワーが男女兼用に1つ、更にテントが追加で2つだから。

トイレ×2・・・60 p t、ウォータージャワー×1・・・15 p t、テント×2・・・40 p t。300―1115＝185 p t が暫定である。後もう少しだけ p t を使う可能性が高い為、なんとも言えないが。

その後、俺はテントの設置を手伝い、休憩を貰ったので各クラスの c p t を整理していた。

Aクラスは1004cpt、俺達Bクラスは810cpt、Cクラスは552cpt、Dクラスは87cptで、中間試験後の数字だ。AクラスとBクラスの差はそこまでないのでこの試験でAクラスに昇格する可能性はある。まあ、逃げ切れる可能性は極めて低い。有栖に勝てる生徒はそうはいない。帆波には悪いが勝てる確率は2割もない。龍園なら4割近くだろう。

さてと、動くなら明日からだな。そう思い、俺達の無人島生活の初日は過ぎていった。

そうして無人島生活の最初の朝を迎えた俺は、無事に点呼を終えると、帆波に話し掛けた。

「なあ、帆波。スポットを1人で探してきても良いか？」

「駄目、つて言いたいけど、八幡君は一人で行動した方が良いと思ってるから……」

単独行動は危険だと思いながらも俺の活かし方を考慮すると悩むらしい。ぶつちやけここからは俺も単独行動したい。その方が依頼もこなしやすい。帆波はしばらく考え込んだ後、意を決して言った。

「……良いよ」

「……ありがとな「ただし……」？」

「4時までには戻ってくることに、そして怪我をするような危険な事は絶対にしないこと。この2つを守ってね？」

2本の指を立てて、俺に言ってくる帆波。俺はそんな帆波に苦笑しながら言った。

「分かった分かった。お前は俺の母ちゃんかよ……」

「心配だなあ……八幡君、何かと事件に巻き込まれやすいから」

俺は鞆から取り出したボールペンでマニュアルに載っている島の地図を細かくメモ帳に書き写して、そのメモ用紙を折ってポケットに入れた。そして、俺がスポットの敷地内から出ようとした時。

「行つてらっしゃい八幡君」

その言葉は小町に言われて以来何カ月ぶりだろうか、不思議と胸が暖かくなった。後ろを向くと帆波が微笑んでいた。俺もそんな帆波の様子につられて言った。

「……行つてくる」

そうして俺はスポット探索に出掛けた。

俺は森が生い茂る中を迷うことなく進む。何故迷うことなく進められるのか、俺が目

指しているのは船が旋回した時に記憶していた洞窟だ。洞窟は幾つかあつて俺が向かつているのは一番大きな洞窟だ。そこにスポットがある可能性は高いと睨んでいる。そこを張り込めば他クラスのリーダーが通るのでリーダーを絞れる。

そしてスポットがあるであろう洞窟を発見する。そして森の中で俺の18番『ステルスヒッキー』で息と気配を潜めて張り込みを開始する。そしてその20分後に人影が現れた。

「おい、此処にもスポットがあるぞ！」

現れたのは戸塚率いるAクラスの奴らだった。Aクラスもカモフラージュの為何人か連れて行動している。此奴等は3人で行動しているようだ。しかし今回のリーダーであろう葛城は見当たらない。Aクラスを纏めるのに時間がかかってんのか？

「おい、あんまり大きい声で叫ぶな。聞かれてたらどうするんだ。そんなんだから坂柳派に揚げ足を取られんだよ。俺達は見張つとくからさっさと行ってこい」

Aクラスの葛城派の2人は左右を見張って、洞窟の中に入っていったのは――戸塚弥彦だった。……此奴等は阿保なのか？全員で中に入って隠しながら更新すれば1/3の確率で分らなかったのに。キーカードの使用権は本人のみなのでこれは確定だな。

ともあれリーダーは戸塚弥彦だ。後は此奴等が此処を去るまでじっとしておこう。それにしても呆気ないな。此奴が仮病を使つてリーダーを変えるような真似はしないだろう。真面目な葛城を心酔している奴だ。後、此奴は葛城の役に立ちたがっているのはわかるので本当に体調不良になったとしても自分からptを減らす事はしない。

そうして葛城派の3人が去つて5分経つた後に動き出す。割と早めの終了だったので、これからどうしようか考える。適当に散策しながら今度はCクラスのところに行つてみるか。

そう思い、俺は欠伸をしながらCクラスが拠点としているスポットに向かった。

そうして暫く、歩いているとCクラスの拠点スポットのビーチに着いた。そこで目に

した光景に俺は驚く。

「おいおい、遊具ばかりじゃねえか」

そこにあつたのはビーチチェアにパラソル、水上スキーにBBQセットといった娯楽のアイテムが揃っていた。すると俺は声をかけられた。

「おいおい、誰かと思ったら比企谷じゃねえか。ククツ、クラスの居場所がなくなったのか?」

歩いてきたのは龍園だった。俺も笑いながら言い返す。

「散歩に決まってるだろうが。で、お前はバカンス満喫して仮病を使って船に戻る気か?」

その俺の言葉を聞いて更に愉快そうにしながら言った。

「クハハハハ！流石だな比企谷！見ただけで分かるとはな」

クラスメイトを顎で使うような奴がこんな試験を協力して乗り切るわけがない。ちらつと視線を移せば楽しそうに騒ぐCクラスの生徒。

「ゆつくりして行くといいぜ。お前がクラスのリーダーを教えるならpptも付けて待遇を良くしてやるが、どうだ？」

「それは無理だ。だけどAクラスのリーダーなら教えてやれる。ptかけてもいいぞ」

「へえ、誰なんだよ？」

面白そうな表情で聞いてくる龍園。有栖の依頼を遂行する為に手は打っておかないとな。そして俺はそのリーダーの名前を言った。

「戸塚弥彦だ」

「・・・ハハッ！良いぜ、のってやるよ。20万ptでどうだ？」

「違ったらこつちが20万送る。それで良いか？」

「ああ」

契約を結んだ俺はCクラスのスポットを去る。長居は余りしない方がいいだろうかな。そして少し歩くと声をかけられた。声をかけてきたのは暴力事件の時にいた。近藤という奴だった。

「少し良いか？」

「何か用か？」

近藤は少し悩むような苦しそうな表情で言った。どうしたんだ此奴？

「お前を椎名さんが呼んでるって、何か2人きりで話したいって言ってたぞ。そっちの

森の方に行ったから、一応伝えてくれって伝言を頼まれた」

なんか違和感があるが、ひよりが俺と入れ違った可能性もあるので、分かった。と伝えてその森の奥に行った。

暫く歩くが一向にひよりの姿は見えない為、引き返そうとしたその時、後頭部に鈍器で殴られたような痛みと衝撃が走る。

「ガッ・・・!?!」

何だ!? 一体何が起こった!? 状況を冷静に整理しようにも痛みの所為で全く脳が働かず、意識が暗くなっていく。身体が倒れて沈みかけた意識の中、最後に見えたのは――

――石を振り落とした体勢の葉山隼人の姿だった。

「――近藤をつるのは簡単だった。レストランで恥をかかされた俺は、比企谷にどう復讐するか考えていた。そんな時に始まった特別試験を利用してやることに決めた。」

しかし、俺が直接話しかければ怪しまれるので俺はクラスメイトを利用することを思い付いた。近藤に10万ptを払って誘き寄せろと頼んだ。

近藤もレストランにいて、女子に囲まれる姿を見ていたので妬ましかったらしい。2つ返事で協力してくれた。そしてまんまと引つかかってくれた比企谷を石で後ろから殴って気絶させる。そして死んでいないか脈を確認する。・・・生きてるみたいだな。

念のため腕時計も破壊しておくか。そしてキーカードを持つてないかの確認をする為、服を漁る。此奴がリーダーだったら俺の手柄になる。そして龍園に代わってCクラスの支配者になれる。しかし、キーカードは入っておらず、入っていたのはメモ用紙一枚だけだった。俺は舌打ちしてメモ用紙を破く。

「まあ、いいだろう。復讐は出来た。それとお前と一緒にいる坂柳さんや一之瀬さん、椎名さんを俺の物にしてやるよ。その時のお前の顔が楽しみだよ」

そして比企谷を此処とは少し離れた場所に運ぶ。

「精々頑張つて生き延びるんだな。比企谷」

そうして葉山は森の奥に消えていった。

だが、葉山隼人が自分で破滅の道に進んでいるとは知らない。その行動を見た人物を見逃していた為に。

「こんな場面を目撃するとはね．．．坂柳に何て言えば良いのよ」

そう言つて、その人物は倒れている八幡の元に行つたのであつた。

小屋の中、2人きりの状況で・・・

・・・ん、何だ？身体が動いてる。意識がはつきりしてきたので、俺は身体が動いてる原因を知る為に閉じている瞼をゆつくりと開けた。目の前が霞んでいて良く分からないが人だろうという予測はついた。そして俺の前に映っている人物が気付いたように話しかけてきた。

「起きた・・・？」

その声を聞いてもまだ誰なのか判断がつかなかったが、此処でようやく霞んでいた光景が徐々に鮮明になり始めた。そしてその人物の正体が分かった為、俺は眩くように言った。

「神室か・・・？」

「そうだよ。まだ、あんまり動かない方が良いよ？頭の手当て今済んだばかりだから」

頭の手当て・・・？・・・！そうだった。確かひよりに呼び出されて探したけどいなかったから、違う所を探そうとした時に後ろから葉山に殴られて気絶したんだったな。俺が確認する為に頭を触ろうとした時その途中で柔らかい物に触れた。その時、神室が擦ったような声を挙げる。

「んっ・・・ちよつと、擦りたいからあんまり動かないでよ」

此処で俺の身体が今、どういう状況に置かれているのか理解した。この後頭部に当たる柔らかい感触に神室の顔が目の前に映っているってことは・・・置かれている状況を完全に理解した俺は慌てて身体を起こした。そして神室と少し距離をとろうとした時、頭に痛みが走った。

「痛ッ・・・」

「はあー・・・だからあんまり動かない方が良かったのに。ほら、もうちよつと膝を貸してあげるからちやつちやと横になちなさい」

そうして起き上がった俺の身体を引っ張って再び横にして、頭をゆつくりと膝に乗せる。俺は渋々受け入れて神室に言った。

「さっきの口振りだと神室が手当てしてくれたんだな。ありがとな」

俺が礼を言うと神室は少し照れ臭くなったのかそっぽを向いてぶつきらぼうに言った。

「・・・別に、倒れてるのをそのまま放っておくのはどうかと思っただけ。・・・で、葉山の事はどうするの?」

「・・・見てたのか」

「殴る直前からだけどね」

そして神室が目撃する前まで何をしてたのか話しを聞いた。どうやら俺が通って

いた森の少し先でＡクラスの拠点があったらしく、神室はその時は非番だったようで散歩していた時に俺がひよりを探しに歩いている所を見たらしい。そして俺が葉山に殴られた所を目撃。そして俺は神室から話を聞いている途中で気付いたのだが、今の俺は小屋にいる。葉山が立ち去った後に気絶している俺にその場で所持していたp tで購入した応急手当での道具を使つて手当として、近くにあったこの小屋まで俺を何とか運んで俺が目を覚ますのを待つていたと言う。

「そうか・・・済まん。もしもの時の応急手当での道具を使わせちゃつて」

「別に良いよ。・・・どうせ使う様な状況なんてないだろうし。私は坂柳派だからp tをなるべく消費させろつて命令を受けてたからね。まあ、契約があるから大したこと出来ないけどね」

「契約・・・？」

「あんたは坂柳から依頼を受けてたから話しておくよ」

神室が言う契約はこんな内容だった。どうやら葛城と龍園が契約を結んだらしく、AクラスにCクラスの半分のp tを使って、必要な物資を送るのその他のリーダーを探し当て、Aクラスに伝える見返りとしてAクラスの生徒は坂柳を除く全員、龍園に卒業するまで1万5千p tを1カ月に1回送るというものだった。俺は思わず溜め息を吐きたくなった。葛城は馬鹿だった。龍園がそんな馬鹿正直にクライアントの頼みを聞くような奴ではないと分かっている筈だ。坂柳派が優勢なのをどうにかしようと思わなくて手柄を作ろうとした感じが。

そして、神室は話題を切り替えて俺に聞いてきた。

「そう言えば、比企谷。Aクラスのリーダーは分かった？」

「ああ、思った以上に簡単にな。戸塚弥彦だろ？」

俺がそう言うのと神室は少しだけ目を見開いて、驚きを顔にした後に関心した様子で言った。

「正解……思った以上に遥かに早かったね。あんたが優秀なのか、戸塚がズボラなのか……まあ、両方か」

「もつとダメージを与える為に龍園にも教えてやった。俺のクラスやDクラスの奴にも教える予定だ」

すると神室は俺に引いた様子で言った。止めて！引かないで！地味に俺シヨツクだから!!

「あんた、鬼だね。これでAクラスは――150ptで、Cクラスのptも底をついてるからこれだけでも120ptになる」

「で、葛城はリーダーを当てようとしてんのか?」

俺が聞くと、神室はどうだろうね……と呟いた後にこう言った。

「あんたのクラスとDクラスは分からないけど、Cクラスは狙ってると思う。契約の内

容はAとCも互いにリーダーを当てに行つてはいけないとは書いてなかったから」

あー、じゃあ葛城は終わつたかもしれないこれは。

「じゃあ、――200ptになるかもな」

「?・どういうこと、それ」

俺はこの試験の追加ルールに抜け道が存在すると分かったので、近くに人の気配はしないが、一応小声で話すことにした。

「この試験の追加ルールでリーダーを変えることは正当な理由が無い限り無理って言つてただろう? 実は抜け道があるんだよ」

俺が言うと神室は驚いて、本当? と真偽を確認するように聞いたので俺は頷いて続ける。

「ああ、龍園が気付いてるかはわからんが、リーダーの奴が体調不良になつていなくなつたら代わりの違う奴がリーダーになる。多分、仮病でも通じる。龍園がこの抜け道に気付く可能性は極めて高い。彼奴のクラスの連中は遊びまくった後に仮病で、船に戻ろうとしてたからな。聞いてみたらビンゴだった」

しかし、龍園と恐らくだが他の何人かは島に残る筈だ。ちらつと見たがビーチチェアは1個だけだった。そこに龍園が座つてただろう。その横のテーブルにトランシーバーがあつたからな。悪ふざけでトランシーバーを購入する訳が無いし、龍園が残ることはもう確定だ。そして、龍園のやりそうな事は思い付いてる。まあ、まだ行動に移してないから確証は無い。

「彼奴の本命は追加ルールだからPとGが0になつても気にしてない。だからリーダーのキーカードをワザと見せて信用させた後にリーダーを変える筈だ」

「つてことは十中八九、葛城は騙されてるわね。龍園がキーカードを見せてたし・・・」

あの真面目な奴がこんな方法を思い付く可能性は低い。これで葛城派の勢力は弱ま

るだろう。

「これではぼ詰める手段は揃った。後は6日待つだけだ」

俺がそう言うのと神室は俺を眩しいものでも見るかのように目を細めて聞いてきた。

「・・ねえ、あんたは前に坂柳に世話になったって言ってたから依頼を受けてるのは知ってる。それでも普通はそこまでしないと思うんだけど、何で？」

そう聞いてくる神室に俺は過去の事を話すべきか考える。・・・まあ、此奴が手当てしてくれなかったら死んでたかもしれんし、答えるか。頭の痛みが引いたので身体を起こして、神室と向かいあう。

「頭、もう平気なの？」

「ああ、平気だ。ありがとう・・・で、何でか、だったな。答えても良いが気持ちの良い話じゃないぞ。それでも聞くか？」

「・・・うん。あの坂柳と仲が良さそうなのも気になるし。私自身も興味ない訳ではないから」

そうして、俺は自分の過去を話す。葉山の関係性についても、そして嫌われて、誰も俺のことを話しすら聞かずに、受け入れてくれなかった中で有栖や帆波にひよりはちゃんと話を聞いた上で、間違いない。と受け入れてもらったことも。俺の話を静かに聞いていた神室が話を終えた後に聞いてきた。

「あんたは何でそこまで自分を押し殺して依頼を遂行出来るの?・・・別に由比ヶ浜や雪ノ下になって言われても断れば良かったと思うんだけど、そんな正反対の依頼なんて。私ならそうするよ」

・・・確かにそうだ。でも、あの時は守りたかったんだと思う。理屈じみた自分らしくない行動だったとしても、当時あの空間だけが俺が俺でいられた、受け入れてくれた。そんな空間を崩したくなかった。あの2人という空間が・・・まあ、俺の勘違いだったかな。元々の罵倒の量も異常だったし。今では何で怒らなかったのが自分で

も不思議なくらいだ。

「そうだな。俺も少し甘かったのかもな」

「・・・それと、少し一之瀬と坂柳と椎名が羨ましいとも思った」

そう、神室の表情は少し寂しげで、瞳は儚さを帯びていた。そして続けて言った。

「私を受け入れてくれる友達はいなかったから。私はあんなのように優しい訳でも人の事に関心がある訳でもないから友達が特段欲しいと思うこともなかった。しかも、万引きしてたからどっちにしろ受け入れてくれる友達がいるわけないだろうし・・・でも、あんたが坂柳に出したあの条件と橋本からレストランの話しを聞いて何だか羨ましいと思ってた」

俺が優しいかどうかと橋本のことは置いておいて、神室は誰かに必要とされたことや大切に思われたことがないのかもしれない。その気持ちを万引きで満たしていたとすれば納得出来る。だから俺は言った。

「神室は充分優しいと俺は思うぞ?」

「・・・何でそう思うの?」

「だって俺が葉山に殴られて気絶してた時に無視せずに手当てして、俺が起きるのを待っていてくれただろ? 普通は無視するか、手当てして放置でも構わないのに」

その言葉を聞いて神室はぶつきらぼうに顔を背けて言った。顔は少し照れているのか赤い。

「・・・見捨てたら、坂柳に何か言われると思ったからやっただけ」

「そうか・・・まあ、有栖もお前の事を信頼してると思うぞ? それに、側に置いているのは万引きの監視もあるだろうが、お前と喋ってる時の彼奴は楽しそうだからな」

そうでなかったら側に置いたりはないだろう。

「・・・そ、別にどっちでもいいけどね」

そう言いながらも顔は嬉しそうだぞ、ツンデレかな？ 神室さん。若干ゆる百合の空気がするんだが。話に区切りがついたので、そこで俺は今、何時なのか確認しようとする。だが、時計は壊されていた。葉山の奴・・・他に盗られた物がないかの確認としてポケットに手をつ込むが地図を書き写してあったメモ用紙もない。

そして神室が再び話を戻して聞いてきた。

「話しが逸れたね。・・・それで葉山の事はどうするの？」

俺はその言葉にしばらく悩む。そして長考の末に出した結論を口にする。

「・・・・・・・・・・試験結果次第だが、俺は葉山を訴えないつもりだ」

俺の出した答えに神室は不満そうに目を細めて俺を睨むように聞いた。

「どうして・・・別に証言しても良いんだけど？」

「・・・ぶつちやけ今、龍園と対立したくないんだよ。それに訴えたら葉山という足手まといを消す事になる。訴えるならもう少し後だ」

今回のこの試験、龍園が取っている作戦は成功しないと俺は踏んでいる。成功したのであれば訴えるつもりだ。レストランの証拠もあるしな。

「・・・まあ、万が一Cクラスが1位になった時に頼むわ」

「・・・分かった」

俺の狙いが分かったのか、渋々だが納得してくれた神室。そして俺は神室に聞きたいことがあったので聞く。

「神室、今何時だ？」

「2時30分だけど・・・」

まだ割と時間に余裕があるな。地図は持っていないし、とりあえず来た道を何とか思い出して進むか。この島は整備されているから、絶対に遭難しないようになっている。

「そうか・・・じゃあ帰れるな」

「もう大丈夫なの？」

少し心配そうに聞いてくるので、安心させるように言う。

「ああ、大丈夫だ。心配してくれてありがとな」

「・・・ッ、急に何？」

神室は驚いた様子で聞いてくる。いつの間にか俺のお兄ちゃんオートスキルが発動

したようで、俺の手が神室の頭を撫でるといふ凶行に走っていた。俺も気付いたので慌てて手を引つ込める。

「あっ・・・」

何故か神室が少し寂しげな声を出した。やめて！そんな残念そうな顔しないで！！勘違いして告白して振られちゃうからっ！！

「済まん。妹を安心させる為にやってた癖が出ちゃった」

すると神室は意外そうな顔を向けて言った。

「へえ・・・あんたに妹がいるんだ。意外だよ」

「意外って何だよ、意外って。目に入れても痛くないくらい可愛いんだからな。俺と違って目が腐ってないし、コミュ力抜群の天使だ」

俺の熱いトークに神室は少し引いた様子で言った。

「・・・シスコン」

「違う、俺はシスコンじゃない。俺はただ妹を愛してるだけだ」

「それをシスコンって言うんだけど・・・」

俺の様子に呆れた表情を浮かべる神室。別に千葉県民の兄弟ならこれくらい普通だ
と思うんだが。流石に兄弟エンドはないが。

「・・・羨ましい」

「ん？何か言ったか？」

神室が何か言ったのは分かったが聞こえなかったので聞いてみる。しかし何故か睨
まれながら言われた。

「・・・何でもない！・・・バカ」

えー、何で。・・・とりあえずそろそろ戻ろう。そうして俺は立ち上がって小屋を出ようとする。神室もそれに続く。そして扉を開け、外に出る。

「・・・色々と世話になった。今度、何か礼をするわ」

「・・・その礼の内容って私が決めて良い？」

そう聞いてくるので頷く。しかし余り無茶なお願いを言われても困るので、断りを入れておく。

「出来るだけ要望には答えるつもりだが、あんまり無茶なお願いはやめてくれよ？」

「・・・大したことじゃないから安心して」

「なら良いんだが・・・じゃあな、神室」

別れの言葉を言つて顔を前に向けてBクラスの拠点へと足を進める。

「うん・・・じゃあね、八幡」

俺は名前で呼ばれた事に驚いて動かしていた足を止めて、神室の方に振り向いたが神室はもう遠ざかっていた。俺は溜息をついて苦笑する。

「俺ってリア充になったのかねえ・・・」

そう言つて俺は再び前を向いて止めていた足を進めるのであった。

『神室は充分優しいと俺は思うぞ?』

そんなことは言われた事はなかった。私に近づいてくる人は私のことを無愛想、冷たいと言うのがほとんどだったから。

私は拠点に戻りながら考える。今、私が抱いている感情は何なのか。こんな感覚、一度も感じた事はなかったが不快とは思わない。むしろ暖かくて心地よい。頭の撫でら

れた感触を思い出す。男の手なのでゴツゴツしていたが、優しい手つきだった。撫で方なんて初めて撫でられたので比較は出来ないが、上手いと思う。

「これじゃあまるで・・・!」

いや、幾ら何でも早計だろう。この気持ちを断定するのは。そして私はAクラスの拠点に戻ると私を探していたのか橋本がこつちに来た。

「おい、神室ー。どこ、言ってた・・・ん? んん?」

「・・・何?」

橋本の様子がおかしかったので聞いてみる。すると橋本は怪訝そうに言った。

「いや、お前のそんな表情は今まで見た事なかったからな。だって今のお前――――――」

――――― 凄
い幸せ

「そう
な乙女
の顔だ
ぜ？」

「そう
言われ
、思わ
ず橋本
を叩い
てしま
ったの
は揶揄
った橋
本の所
為だろ
う。」

迷った末のやり直し

俺は小屋を去って、Bクラスの拠点に向かって歩いてきた。気絶する前に辿って来た道を記憶から呼び起こしているのだ。これで無事に帰れると——そう思っていた時期が俺にあった。この島は整備されているのである程度目印になる場所にスポットがある。だが、今俺が歩き続けている道はそのようなものが全く発見出来ない。

どうやら、思った以上に森の奥に来てしまっていたようだ。方向感覚が狂い、今どこにいるかは定かではない。はあ……俺は雪ノ下じゃないんだけどな。流石に此処まで奥にいれば迷うのも仕方ないと思う。まだ、今日の食事は1回も取れていないので腹も減っている。

「とりあえず、日が沈む前に何処かのスポットに着けばいいんだが……」

小屋からも大分と離れた。結構な距離を歩き続けているので、時間もそれなりに経っているだろう。空を見上げると赤みがかかってきた。不慣れな道を歩き続けていたの

で流石に体力もキツくなり始めた。Bクラスのスポットに戻ったら1日は休暇を貰おう。しばらくは働きたくねえ。他クラスのリーダーの情報を持って帰るので許してもらえるはずだ。

「糖分摂りたい・・・MAXコーヒーイ・・・」

都会の日常生活が恋しくなるのでこれ以上は考えないでおこう。小町の顔でも思い浮かべとくか。そうしてしばらく歩いてみると、ある事に気付く。声が聞こえるのだ。

「何処かのクラス拠点のスポットの近くに來たのか・・・？」

声は複数聴こえるので、集団で行動しているのだろう。だからこの近くにクラス拠点がある可能性は極めて高い。俺は声を頼りに道を歩いていく。そして道が開けた。俺の目に飛び込んできたのは、川とその近くで建てられているテントだった。ちらほら生徒がいるのでクラスのスポット拠点だろう。

とりあえずこのまま侵入する訳にはいかなないので誰かに事情を説明しないといけな

い。俺がそう考えていると俺の姿を見た生徒が声をかけてきた。

「誰だ、うちのクラスに他クラスの生徒が何の用だ？」

眼鏡をかけた如何にも真面目そうな生徒が用件を聞いてきた。流石に警戒されているな。

「あー、自分のクラスに戻ろうとしたら道に迷っちゃまって、しばらく歩いてたら此処に着いたんだよ。リーダーを探る気は無いから安心してくれ」

警戒を解くために正直に事情を話す。すると俺の言葉に相手は考え込むと、また聞いてきた。

「そうか・・・ちなみに何クラスだ？」

「Bクラスだ」

そして更に考え込むと、結論が出たようで俺に言った。

「……とりあえず他の奴にも事情を話してくるから、此処で待っていてくれ」

俺は頷くと、男子生徒は他の生徒がいる方に歩いていった。そしてそこまで時間は掛からず、他の生徒を連れて戻ってきた。何人か見覚えのある顔ぶれが揃っていた。そして代表として爽やかリア充臭がぶんぶんするイケメン男子生徒の平田が俺に話しかけてきた。校内で結構有名だったから名前は知ってる。

「事情は聞いたよ、とりあえず名前も教えて貰ってもいいかな？」

笑顔でそう聞いてくるので若干きよどりそうになるのを必死に耐えながら名前を言った。此奴、中学の時の葉山に雰囲気がつくりだな……

「……比企谷八幡だ」

俺の名前を聞くと聞き覚えがあつたのか、今度は雪ノ下にそっくりな女子生徒で生徒

会長の妹の堀北が言った。此奴等2人がいるってことは此処はDクラスの拠点か。それにしても裁判の時にも見たが本当に雪ノ下にそっくりだな・・・双子って言われても納得出来るレベル。

「貴方が一之瀬さんの言っていた比企谷君ね」

「彼奴が・・・?どういう風に言っていたんだ?」

帆波の事だから悪口は言っていないと思うが、なんて言ってるか気になる。

「Bクラスには私達の他にも優秀な男子生徒がいて、その人の考えが私達には思いつかないものを考えつくから物凄く参考になると言っていたわね」

そう言われて安心する。本当に真っ直ぐな奴だな、帆波は。そして俺の素性が分かっ
て安心したのか他の奴の警戒も緩まり、弛緩した空気が流れ始めた。そして平田が歓迎するように言った。

「ある程度比企谷君の事情も知れたし、僕達は歓迎するよ」

「・・・感謝する。とりあえず水を飲ませて貰っても良いか？後、済まないがトイレも。トイレは折りたたみの方を使うから」

迎え入れて貰ってすぐに注文するのは申し訳ないのだが、此処までトイレも我慢して歩いていたので早く行きたかった。それに水も飲みたい、喉が滅茶苦茶乾いて仕方なかったからな。

「そんな遠慮しなくても良いのに。ちゃんとしたトイレはあるからそっちを使いなよ」

「いや、こっちは迎え入れて貰っている側だから申し訳ない」

そうして俺は折りたたみトイレがあるとこを聞いて、用をたす。かなり臭いがキツかったが何とか堪えてトイレを済ます。そして端の方の川辺で手を洗う。此処で環境汚染と言われたらたまらないが、バレないようにするしかない。そして水を掬って喉を潤す。

とりあえず今が何時なのか知らないといけなかったので誰か近くにいる奴を探す。そして探していると声をかけられた。

「ヒッキーが何で此処にいるの!？」

今、話し掛けられたくない人物の由比ヶ浜がいた。最悪のタイミングだな。俺は振り返り向いて言った。

「道に迷ったんだよ、そして此処に着いたんだ」

「嘘でしょ!絶対裏があるに決まってるし!!」

どんだけ俺のことを否定したんだよ此奴は……。俺が無視して他の場所に行こうとしたその時、由比ヶ浜の声が聞こえたのか他の奴もこつちに来た。そしてその人物を見て俺は顔を顰める。その人物も俺を見て驚きを顕にした。

「比企谷君……どうして此処に」

「……雪ノ下」

この状況の中、再び3人が揃ってしまった。俺はこの状況をどう乗り切るか考えていると、雪ノ下が由比ヶ浜に言った。

「由比ヶ浜さん、佐藤さん達が貴女を呼んでたけど行かなくてもいいの?」

「えっ、本当? ゆきのん」

「ええ、行つた方がいいんじゃないかしら。比企谷君とは私が話をつけておくから」

一体どういう事だ? この状況の中、雪ノ下が由比ヶ浜を移動させようとしてる様に見えるが……ともあれ都合だ。そして由比ヶ浜は一瞬だけ悩むそぶりを見せるが即決したようで。

「じゃあゆきのんに任せるね！ヒッキー！絶対に修学旅行の事とレストランで私に怒った事、謝ってもらうからっ！」

そう言つて雪ノ下にこの場を任せると、由比ヶ浜は呼び出した人物の元へ走つて行つた。絶対にレストランの事は謝る気はない。彼奴の悪口が事の発端だからな。そして雪ノ下と2人になった中、気まずい空気が流れる。俺は喋る気はないが、雪ノ下も喋ろうとする様子はなく、互いに無言の状態が続く。しばらくその状態が続いたが、やがて俺は痺れを切らして言つた。

「……それで？俺になんか用か？」

「……ええ、貴方にどうしても聞きたいことがあつたのよ」

聞きたい事だと？一体どういう風の吹き回しだ？しかも俺の事を罵倒してこなくなったのも気になる。俺は警戒していると雪ノ下が本題に入る。

「……貴方が修学旅行で受けた依頼が海老名さんと葉山君のものもあつたのは本当の

事かしら?」

「……何?」

一体何処でそれを知った? 俺は混乱するが、とりあえず頷く。そう、と雪ノ下は呟いた後、俺は目の前を疑う光景が映った。雪ノ下が頭を下げたのだ。そして言った。

「今まで本当にごめんなさい、比企谷君。私達が依頼を受けたのに、何も出来なかった上にその依頼を解消してくれた貴方を拒絶してしまつて……本当にごめんなさい!」

俺は急な展開についていけず、雪ノ下がその結論に至るきつかけについて聞いた。

「待て、話しについていけん。とりあえず頭を上げろ。まず、どうやって海老名さんと葉山の依頼の事を知ったか教えてくれ」

話しはそこからだ。俺が言うと、雪ノ下は頭を上げて申し訳なさそうな表情で事情を説明し始める。

「実は、一之瀬さんと比企谷君が自然公園で話しをしている所を偶然聞いたの……」

あの時か……。俺は更に雪ノ下に聞く。どうやってその結論に至ったのかを聞くために。

「とりあえず分かった……。それで？何でその結論に至ったんだ？」

あんなに俺の事を否定していたのに急に考え方が変わった理由……。そこが俺の一番気になってる点だ。

「貴方が部室にこなくなった2日後に……。その、葉山君が部室に来ただけけど。それまで私は比企谷君が何で嘘告白をしたのかを考えていたのよ。そうしたら葉山君が、比企谷は俺達グループの中でカップルが出るのを妬んでやった。文化祭で悪評も出ていたからその腹いせとして……。」

何だそりゃあ……。ぶつちやけ葉山グループの中でカップルが出来ようがどうでも良

かったんだが。俺は大体その先の展開が読めたので溜息をつきながら確認として聞いた。

「……んで、お前らはまんまと騙されたわけだ」

「ええ……その時の私は冷静ではなかったから。由比ヶ浜さんは自分のグループが卑下にされたと思っただろうから余計に」

こう聞くと葉山が1番ヤバイ奴になるな。そして雪ノ下は続ける。

「そして貴方が部室に来なくなった時から葉山君が頻繁に奉仕部に顔を出し始めたの……当然、私は彼を信用していない部分もあったけど修学旅行の件で、千葉村の時のような嫌悪感は抱いていなかったと思う」

千葉村の時は葉山の意見を全否定する程嫌ってたからなあ。とても幼馴染とは思えんくらいは。まあ、葉山は雪ノ下と寄りを戻そうとしていたのかもしれない。千葉村のバンガローで好きな人のイニシャルが『Y』って言ってたし。由比ヶ浜とか三浦の可能

性も若干あつたが……

「その後一色さんの依頼が来て、貴方は依頼に関わらないで私は言った。でも、貴方が解決してしまった。私は色々な意味で裏切られたと思つた。何で私達の依頼解決を貴方は先に出来てしまうんだらうと。そして貴方に嫉妬もしていたんでしょね。貴方は私には持つていないモノを持つていたから、貴方に負けていると思つたから……だから貴方と決別した」

人には得手不得手がある。雪ノ下は雪ノ下のやり方で正面から真つ直ぐに正々堂々やつて解決するつもりだったのだらう。俺のやり方はその反対で卑屈で陰湿で最低だった。しかし、雪ノ下は正々堂々とやるやり方しか分からなかった。此奴は逃げが嫌いだったからこれ以外の他の方法を知らなかった。だからこそ他のやり方を持つていた俺に嫉妬という感情が芽生えたのかもしれない。

「……修学旅行で貴方が嘘告白した時、物凄く痛かつた。嘘告白と言う方法が一番嫌だったのだと思う。嘘と言うのもあるけれど、それ以上に別の何かが……痛かつた。だから貴方を拒絶した。だけど、私も貴方に任せると言つてしまったからこんな事

を言う資格はないし、そもそもは最初の依頼の時点で貴方が反対していたものね」

「・・・で、まだお前が俺に謝るに至る結論を聞いていないぞ」

「・・・そうね。貴方の話を聞いた後、私はもう一度考えたの。どうして貴方が嘘告白をしたのかを。そして思い返していたら一人だけ、依頼者で違和感を持った人物を思い出したの」

十中八九、海老名さんの事だな。

「最初、聞いた時には依頼ではなくただ話しにきたと思ったけど、あれが依頼についてのメッセージで貴方にだけ分かるように言っていて、尚且つ戸部君の依頼の反対の依頼だったとしたら貴方の行動の全ての辻褄が合う。・・・比企谷君、今更おかしいのは分かっているし、許してくれないと思うけれど。これだけは、言わせて。ーーーーー今まで貴方の事を話をろくに聞かずに拒絶して本当にごめんなさいっ！」

そう言つて雪ノ下はもう一度頭を深々と下げた。俺は雪ノ下の話を聞いて瞑目しながら考える。そしていつまでそうしていただろうか、目を開いて今もなお頭を下げている雪ノ下に俺は言つた。

「・・・・・・・・雪ノ下、俺はな。あの依頼を解決した時、お前らに望んだことがあつたんだ。——————『お疲れ様』つて労いの言葉、ただその一言が欲しかつたんだ」

「ッ!!」

「でもそんなのは傲慢だ。俺のやり方が最低な事は分かつていたからお前らに俺の傲慢な願いを押し付けていたに過ぎなかつた。・・・・・・・・でもな、俺はお前らを信じたかつたんだ。あの空間で、言い合いみたいな会話して、お前の入れる紅茶を飲みながら、お前らの会話を聞いて・・・・・・・・楽しいと思えた。俺が俺でいることが出来る、そんな俺を受け入れてくれるお前らを守りたいと思つた。依頼が失敗すれば、俺だけじゃなくお前らも責められると思つた、あの関係が崩れると思うと怖かつた・・・・・・・・」

当時の俺には他の方法があることが分からなかった。どんなにやり方が最低だと周知から言われても、此奴らのことは守りたかったから。だが……

「でも、お前らに拒絶された。やり方が納得がいけないのは俺も分かっている、だけど、せめて訳だけでも雪ノ下や由比ヶ浜には聞いてもらいたかった。それを今更気付いたからと言われて、謝罪されても許す気はなかった。文化祭のスローガンの終わりの時に言ったが、『解は出た時点で解き直すことは出来ない、誤解でもな』ってな」

雪ノ下は俺の言葉を頭を下げ続けたまま聞いている。俺は尚も続ける。

「実際、今も許す気はない。――でも、お前のその誠心誠意に謝罪する姿を見て思った。俺が懂れた雪ノ下雪乃のままだったな」

雪ノ下は俺の言葉に驚いて顔を上げてこっちを見た。

「解は出てるなら誤解でも解き直せないと俺は言った。でも、お前は由比ヶ浜の誕生日にこう言ったな。『もう1度、0からやり直すことは出来る』と……だから、俺達も

0 からならやり直せると思うぞ？ 何故なら白紙の状態だからな。で、どうすんだ？」

俺はニヤリと笑って手を差し出して、言った。俺の言葉で雪ノ下の頬に1筋の光が流れ落ちた後、そして微笑んで手を取る。

「・・・ふふつ、全く呆れそうな屁理屈じみた意見だけど。でも・・・とても貴方らしいわね」

「・・・初めましてだな。雪ノ下」

「・・・！ええ、初めまして。比企谷君」

こうして俺達は和解、否、やり直すことが出来たのであった。

そして俺達は由比ヶ浜の事はどうするのか話しあった。俺は正直、やり直したくはないのだが、雪ノ下が信じたいと言ったので雪ノ下が真実を伝えて、由比ヶ浜が話し合いに応じるならというのを条件にした。それでもこっちの話しを聞かないのなら……その時は雪ノ下も縁を切るらしい。

「……そう言えば今何時だ？」

「5時15分よ」

やばい、1時間以上過ぎてるじゃねえか。帆波が本気で心配してるかも知れん。俺は雪ノ下にマニュアルとメモ用紙とシャーペンを借り、朝にやった要領で地図を写す。礼

を言うとしてメモ用紙は貰ってもいいと言われたのでポケットに畳んで入れる。

「とりあえず、心配かけてるかも知れんから急いで戻るわ。平田にも礼を言つといてくれ」

俺の言葉に雪ノ下は意外そうに言つた。

「意外ね・・・貴方がそこまで氣遣う人がいたなんて」

「おい、俺は氣遣いの権化だぞ？氣遣いすぎて空氣に溶け込むレベル」

俺が突つ込むと雪ノ下は笑う。懐かしい空氣、心地良い。

「・・・じゃあな雪ノ下」

「ええ・・・また。比企谷君」

そう挨拶して俺はDクラスのスポット拠点を出て、今度こそ迷わない様にちよくちよくメモ用紙を確認してBクラスのスポット拠点がある場所に全力で走って向かう。そして走りながら今日あった事を思い返す。

今日はAクラスのリーダーを探ったり、龍園と賭けをしたり、葉山に気絶させられて神室に手当てされたり、道に迷ってDクラスに立ち入って雪ノ下とやり直したりと本当に色々あった。

「・・・明日は絶対に休もう。働きたくねえし」

俺はそう決意しながらBクラスのスポット拠点に走り続けるのであった。

静かなる決別

朝の日差しが寢床である男子のテントを仕切り越しに照らし、俺はその日差しで目を覚ました。そのままのつそりと起き上がる。周りを見るとまだ寝ている奴が多い。二度寝したいところだが、8時を過ぎたらやばいので寝ない。

「・・・少し早起きだったか」

俺は目蓋を擦り欠伸をしながら、周りの寝ている奴を起こさないように注意してテントを出る。テントの仕切りを捲ると、日差しの光が目に見え、切り入ってくるので、思わず目を細める。それに耐えてテントの外に出る。

外に出ると何人かのクラスメイトが既に起きていて、楽しそうに雑談している。その中に帆波の姿もある。俺はまだ寝惚けている意識を覚ますために顔を洗いに水辺のあるところに行く。そして顔を洗っていると神崎に声を掛けられる。

「良く眠れたか？比企谷」

神崎は俺の横にきて同じ様に顔を洗う。・・・何でこう、イケメンって何をやっても様になるんだろうなあ。世の中不公平だな。と思うが表面には出さない様にしつつ、言った。

「眠れはしたんだが、まだ少し怠い」

「そうか・・・お前は一之瀬の言う通り、何かしらに巻き込まれるからな。そう言ったことに關しては疲れやすいのだろう」

神崎の言葉に異議を申し立てたいが、事実でもあるので何も言えない。昨日は急いでクラス拠点に戻った時、俺が頭に包帯を巻いている姿を見て案の定、帆波から本気の説教をくらった。帆波が怒った時、クラスメイトは何故か俺の事を生暖かい目で見ていた気がする。白波は俺を睨んでいたが。心配をかけてしまったことに關しては俺が悪いので必死に謝った。土下座する勢いで。

最終的には泣きそうな表情で『もう、この6日間は絶対にクラスの誰かと一緒にいて！』と言われてしまい、俺は約束した。帆波は俺が1時間以上過ぎても帰ってこないの
で、何人か一緒に俺を探索しようとしていたくらいだ。本当に申し訳ない気持ちになっ
た。

「俺も巻き込まれたくはないんだがな……」

「一之瀬は1時間以上過ぎてもお前が帰ってくる様子がないから本気で心配していた
ぞ。何せその事を考え過ぎてクラスの誰かが話しかけても反応しなかったからな」

神崎の言葉に思わず、バツが悪くなった俺は頬を搔いて明後日の方向に視線を逸らし
てしまう。説教が終わった後に頭の怪我についても当然の如く聞かれ、葉山に殴られた
と言う訳にもいかない為、転じた時に怪我をして、近くで手当て道具がないか探してい
たところを偶々神室が通りがかって怪我をしていた俺を発見。そして近くにあった小
屋に行き、持っていた手当て道具で手当てをしてくれたと嘘と事実を混ぜた理由で誤魔
化した。帆波に嘘をつきたくはなかったが、俺の計画を知られたくはなかった為と言っ
た。

その後、俺が収獲したAクラスのリーダーの情報とCクラスはほぼ全員がリタイアする可能性があるとの趣旨を説明すると、帆波を含むクラスメイトが全員驚いていたが、俺の情報を信用してくれた。帆波の方はスポットを占有はしていないと言っていた。リーダーを知られるリスクを回避する方を取ったらしく、スポットは此処だけを占有する方針になった。そして情報の共有をした後に明日は休んで良いかを帆波に聞くと、逆に休んで。と言われた。なので今日は非番である。

「もうしないって猛省してるから、その話題は勘弁してくれ・・・」

「そんなつもりはなかった、済まないな」

俺に一言、謝る神崎。俺は別に神崎は悪くねえよ。と言ってスポット中心部に戻る。クラスメイトはもうほとんど起きてきていた。俺は端にある木に寄りかかって惚けつと空を眺めていると今度は帆波に声を掛けられた。

「おはよう、八幡君。昨日は良く眠れた？」

「ああ、まだ身体は怠いけどな」

俺の言葉に帆波は苦笑する。慣れない環境の中に加えて、昨日は色々あったからな。本当、何で俺がこんな働いてるんだろう。

「慣れない環境だから、仕方がないよ。昨日のこともあるし。でも今日は休みだからゆっくり出来るんじゃないかな？」

だと、良いんだがなあ……。そう思いながら談笑しているクラスメイトを眺めるのだった。

その後は無事に点呼を終えた俺達は、まだ道具が足りていないか話し合う。そして意見としてウオーターシャワーと、少しはこの無人島生活を満喫したいと、ハンモック2つを注文する。食糧と水は余裕があるので要らない。

ウオーターシャワー×1・・・15pt、ハンモック×2・・・10pt。だから、185―25＝160ptになった。まだptには余裕があるが、ptはあまり使わない方針に決まった。まあ、必要物資はもう既に揃ってはいるので節約するのは悪くないだろう。

その後は食糧調達班の役割を担当している人以外はスポットの拠点から動くことはなく、ワイワイしている様子を俺は木に寄りかかって眺める・・・特にすることがねえ。せめて本でも持ってこれたら良かったのになあ。やる事が無さ過ぎるって事も考えものだなあ、と思いながら近くにあった木の棒で地面に絵を描いたり、蟻の観察をしていると。

「おーい、皆あー！」

クラスメイトに呼びかける柴田の声が聞こえたので、気になった俺は向かう。すると、柴田の横にクラスには見ない男子生徒の姿があった。眼鏡をかけたショートボブの髪をした奴だった。見覚えのない男子生徒の姿に集まったクラスメイトは驚いたが、驚いた原因はそこではない。驚いた原因は男子生徒の頬に殴られた跡のようなものがあつたからだ。

帆布が代表者として事情を聞いた。食糧を探しに森に入ったところを件の男子生徒――金田が木のところで頬をさすりながら座り込んでいたところを発見して一緒に連れ帰ってきたらしい。そして金田からも事情を聞いた。金田がいるＣクラスでトラブルが起き、リーダーである龍園に抗議したところ、龍園に殴られてクラス拠点から追放されたらしい。そして鞆だけを持って彷徨っていたところを保護されたという。その話を聞いて俺を含むクラスメイト全員が顔を顰めた。ただ、俺が顔を顰めた理由は金田を殴った龍園の話ではない。龍園が取っているであろう作戦が読めたからだ。

リーダーを知ろうとしているな・・・恐らくはスパイだ。龍園が意味もなくクラスか

ら追放する訳はない。地図を持っているかは知らんが、何も持っていないとすれば餓死するかもしれないからな。こつちが見つけなかった場合は。まあ、地図を写したメモの様なものは持っているだろう、龍園がそんな初歩的なミスをする訳がない。金田がクラスメイトに歓迎され、スポット内を案内されていく。ふと、後ろ姿を見ると金田のズボンのポケットが膨らんでいることに気付く。

膨らみ具合と大きさ、形から見て恐らく電子機器の類い……小型カメラか？まだ確信を持ちきれない俺は帆波にある頼みを言うために話しかける。

「おい、帆波。少し頼みたい事があるんだが良いか？」

「何かな？八幡君」

「少し調べたい事があるから、Dクラスのスポット拠点に一緒に来てくれないか？」

俺の言葉に帆波は一瞬だけ考えて、真剣な表情で聞いてきた。本当は単独行動が一番やりやすいのだが、帆波との約束を破れないので一緒にについて来てもらう。

「……それは重要な事だよね？」

「ああ、かなりな」

「……分かったよ。神崎君、私は八幡君と一緒にDクラスのスポット拠点に行くから。皆の事をお願い出来るかな？」

神崎は頷いてくれた為、俺達はDクラスのスポット拠点に向かい始める。昨日と同じようにメモ用紙に書き写してある地図を見ながら。もう迷うのだけは嫌だからな。歩いていると俺の行動が気になったのか帆波が聞いてくる。

「ねえ、八幡君。何でDクラスに行こうとしているの？もしかして金田君の事が関係してる？」

俺は頷いて、周りに細心の注意を払いながら小声で話す。もしもここで龍園とかに聞かれたら厄介な事態に陥るからな。

「正解だ。俺は金田の事をCクラスのスパイだと思っている」

帆波は俺の言葉に目を見開いて驚く。そして俺が何故、金田をスパイと思っているかの理由を説明する。

「まず、俺が昨日Cクラスはほぼ全員がリタイアする可能性があると言っただろ？」

「うん。ポイントを全部使って娯楽を楽しんだ後に全員でリタイアするって言っていたよね」

「ああ、この無人島にいる日は、完全なバカンスとして成り立たせるなら今日か明日でリタイアするだろう。但し、龍園や複数の生徒は除いてだな」

「……まさか、八幡君。DクラスにもCクラスの生徒が潜りこんでいるってことかな？」

俺は頷く。話が早くて助かるな。ただクラスを追われたにしてはタイミングが良過ぎる。それにCクラスの拠点にあったトランシーバーを見つけた時点ではほぼ確信するが、まだ本当に仲間割れの線が俺の中で消えてないので、Aクラス以外にDクラスにもスパイが送り込まれているのかを確認してみるためにDクラスに行くのが俺の目的だ。

龍園なら本当に気に入らない奴は追い出す可能性も否定は仕切れない為、何とも言えないのだが・・・それもDクラスに行けば自ずと見えてくるだろう。

そして俺達はDクラスのスポット拠点に着いた。スポット前で止まり、誰かに訪問しに来たことを知らせようと適当な奴に声を掛けようとした時、俺達の存在に気づいた女子生徒が声を掛けて来た。

「あれ、一之瀬さんに比企谷君だ。どうしたのかな？Dクラスに何か用？」

その女子生徒は櫛田桔梗だった。俺は少し面倒臭いな、と思いながらそんな様子はおくびにも出さず、事情を話す。

「ちよつと知りたい事があつてな。後、昨日は世話になつたから礼も言いに来た。とりあえずリーダーのことを知りに来た訳じゃないから安心してくれ」

「分かつたよ。とりあえず皆に知らせるね」

櫛田はそう言つて、俺達が訪問しに来たことを他の奴に知らせに行つた。そして平田を連れて戻つてきたので、平田に礼と事情を話す。

「昨日は世話になつた、ありがとう。それで今日の訪問しに来た理由なんだが、そつちにCクラスの生徒はいるか？」

「ううん、いないよ。それがどうかしたのかい？」

その理由を説明しようとした時に、綾小路がこつちに来た。何かあつたのか、急いでいるみたいだ。そして平田に話しかける。

「話しをしているところ、遮る様で悪い。平田、少しこつちに来てもらつていいか？」

「うん、分かったよ。一之瀬さんと比企谷君、済まないけど綾小路君が急いでいる様子だからちよつと行つてくるよ。その間、スポット内で待つていてくれないかい？」

平田がそう言うので俺は少し考える。このタイミングということとは、まさか……と思つたので平田にこう言つた。

「なあ、悪いんだが俺達もついて行つてもいいか？ 少し、気になることが分かるかもしれない」

平田は少し考えた後、頷いてくれたので、綾小路に案内されてついて行くことになった。そして案内されると、1人の男子生徒に4人の女子生徒がいた。その中に今関わつたら面倒臭い人物、由比ヶ浜と昨日に関係のやり直しをした雪ノ下がいた。そして裁判で証人として参加していた佐倉もいる。手には細い木の枝を持っているので焚き火用の枝を拾いに行つていたのだろう。そして俺はもう1人の女子生徒を見て、確信に変わる。

何故なら、その女子生徒はＣクラスの伊吹であつたからだ。これで確実に龍園はスパイを送り込んできているな。帆波も伊吹を見て驚いている。そして俺達は知りたい事を確認した為、面倒臭い事態にならないように平田に、入り口に戻る。と小声で言おうとしたのだが。

「ヒツキー、何でまた此処に居るの！」

どうやら、俺はとことん運に見放されているらしい。由比ヶ浜に俺達存在がばれてしまい、また絡まれる。思わず溜め息を漏らす。面倒臭い事態になるな・・・これは。俺は雪ノ下に視線で、話したか？と確認すると雪ノ下は横に首を振った。まだ話していないのか、それともダメだったのかは判断がつかない為、俺は由比ヶ浜の問いを無視して平田に入り口に戻ると言う、平田は由比ヶ浜さんは良いのかと視線で聞いてくる。俺は相手にしたくないと視線を送り返すと、平田は困ったような苦笑をして頷いてくれる。どうやら由比ヶ浜の相手をしてくれるようだ。済まないな、と小声で伝えて帆波と一緒にスポット拠点の入り口に歩いて行く。

「ちよつとヒツキー！何で無視するの!？」

「まあまあ、落ち着いて由比ヶ浜さん。2人は昨日のお礼を言いに来ただけだから戻っただけだよ。無視している訳ではなくて比企谷君には聞こえなかったんじゃないかな。考え事してたし」

と、苦しい言い訳をして平田は由比ヶ浜を宥めようとする。が、平田の頑張り虚しく、由比ヶ浜は言った。俺との関係を永遠に別つ決定的な、その一言を。

「ゆきのんや私を裏切ったヒツキーを信じられる訳ないじゃん！ゆきのんに修学旅行の事で言い訳して許してもらおうとしてるくらいなんだからっ!!」

俺はその一言で一瞬だけ、足を止める。ああ・・・雪ノ下でもダメだったのか。そんな俺の様子に帆波は心配そうにこつちを見る。俺は帆波に心配をかけないよう、何でもないと意味を込めて首を振ると足を再び動かして入り口に戻る。その後も何か言っていたが全て無視した。もう、話し合いをしようとしたところで由比ヶ浜には俺の言葉は言い訳に聞こえるだろう。俺は誰にも聞こえないように小さく呟いた。

「……本当に、さようならだ。由比ヶ浜結衣」

そして入り口に戻った後、再び平田と合流して、知りたい事が何なのか説明する。そしてDクラスと同じ様にBクラスもCクラスの生徒を保護した事を伝えると平田は驚いていた。伊吹には注意しておけ。と同盟を結んだクラスとしての忠告をする。と平田

は頷いていた。そして、俺達はDクラスの方が済んだのでBクラスのスポット拠点に帰ろうとした時、平田が聞いてきた。

「比企谷君、関係の無い僕が聞いていいかどうか分からないけど・・・その、由比ヶ浜さんと一体何があつたんだい？ 由比ヶ浜さんの口ぶりじゃ、雪ノ下さんも関係しているようだけど」

平田の言葉に俺は言うかどうか悩む。昨日は助けられたが、平田は葉山のようなタイプなので納得するか分からない。だからこう言った。

「中学校で同級生で同じ部活仲間だったんだよ。部活の内容は相談窓口の様なものだった。でも相談窓口とは少し違って、相談者側にアドバイスをして、相談者側が解決すると言う感じだな。そしてある相談が持ちかけられたんだが、その内容が厄介なものだったんだ。俺達にはどうにも出来ないものだったんだが、相談者の友達だった由比ヶ浜が助けになってやりたいと勢いで受けちゃったんだ。最初から反対していた俺と同じ部活仲間で部長の雪ノ下も押し切られて、受ける羽目になったんだ。その後にその相談者の1番の関係者の奴も相談に来た。しかも最初の相談の内容とは真逆で、しかも世間話

に來ただけかのような感じで分かりにくく相談してきたんだよ。由比ヶ浜と雪ノ下も分からなくてな、俺も分かった時にはほとんど考える余裕がないし。咄嗟に俺が思いついた方法で解決したんだが、その方法が気に入らなかったのか由比ヶ浜と雪ノ下が怒って、俺のその解決方法を否定したんだ。・・・これ以上詳しく聞きたかったら雪ノ下に聞いてくれ。それでどう思うかは平田の自由だ」

俺を否定しようと由比ヶ浜を否定しようと平田の自由だ。俺の敵になるのだとしたら全力で反撃するがな。俺の話を聞いて平田は頷いた。そして俺達は自分達のスポーツ拠点に戻った。

私は由比ヶ浜さんを取りあえず落ち着かせ、テントに戻らせる。由比ヶ浜さんは私が言っても比企谷君を責める態度は変わらなかった。由比ヶ浜さんの態度を変わらせるには葉山君の口から真実を伝えるしか方法はない。海老名さんは此処にはいないので唯一残った解決方法である。

私はどうしたものかと考えていると、櫛田さんが話しかけてきた。

「ねえ、雪ノ下さん。比企谷君と由比ヶ浜さんとの間に何があつたの？あの様子は普通じゃないよ」

櫛田さんは由比ヶ浜さんの様子が気になったのか、私を関係者と断定して訳を聞いて

くる。私は話していいものか迷った。櫛田さんは姉さんと似ている部分があるため、苦手だ。悩みに悩んだ結果、遠くないうちに比企谷君が話すかもしれないので同じと判断した私は修学旅行の事を伝えた。すると、櫛田さんの目が険しくなつて纏う雰囲気が変わる。この感覚は姉さんと同じ感じ……！

「……ふーん、そうなんだあ。で、雪ノ下さんと由比ヶ浜さんは比企谷君に謝ったの？」

「……ええ、私は謝つて関係を0からやり直してもらつたけど、由比ヶ浜さんはまだ……」

「3人全員に責任があるのに由比ヶ浜さんは自覚していないと……馬鹿なのかな？」

最後に言つた言葉は聞き取れなかった。しかし、櫛田さんは何故此処まで怒っているのかしら、葉山君に似た考えを持つ彼女が本気で怒つたところなど今まで見た事が無い……まさか。私はある考えが浮かんた為、聞くことにした。

「櫛田さん……もしかして、由比ヶ浜さんか比企谷君の知り合いなのかしら？」

私の問いに櫛田さんはその質問を待っていたと言わんばかりに、微笑んで言った。

「前者は違ふよ、後者かな。比企谷君は少し前に唯一私を見つけてくれた人なの」

その答えを聞いて、私は予感した。そう遠くないうちに起こるであろう出来事を。――――由比ヶ浜さん、もう貴女が戻ろうとしても手遅れみたいよ。その地獄の道からは……もう、私には貴女を元の道に引つ張つてあげられる力はないわ。

私はそう思つて由比ヶ浜さんのいるテントを見た。一緒にいる筈なのに、見えない分厚い壁が私達の道を分けているように感じられた。

緊急事態の要請

あれから2日経った。他のクラスの拠点に行くこともなく、Cクラスを追放された金田も特に怪しい動きはない。が、金田の持ち物を神崎から聞いたところ、俺の予想通りに小型カメラがあつたらしい。今は朝食の準備に取り掛かっている。

金田が動くとしたら明日か明後日だろう。そう考えながら俺は朝食を取っている。金田を見るとクラスメイトの人の良さもあつて上手く馴染んでいる。まあ、龍園の話を聞いて上手く同情を誘っているので疑う奴はそこまでいない。クラスを騙せていると考えているだろうが甘い。金田がいなくなったとき、リーダーを変更すればいいのだからな。

そして各々で朝食をとり終わり、点呼も無事に済んだところで事は起こった。他のクラスの奴が何やら急いだ様子でこのクラスのスポット拠点にやって来たからだ。クラスメイトはその生徒に注目する。帆波が用件を聞くために近寄る。

名も知らない生徒は女子のようで、とても焦った様子で近づいてきた帆波に此処に來た理由を話し始めた。

「あ、あのっ！誰でも良いので私達のクラスに来てくれませんか？大變な事があつて……」

「少し落ち着いて、貴女は確かDクラスの王さんだったよね？一体そんな慌てて何があつたの？」

帆波はDクラスの王を落ち着かせて事情を聞き出す。王も帆波のおかげで少し落ち着けたのか一息置いて、ゆっくり事情を説明し始めた。俺も少し気になるので聞き耳を立てる。

王が言うにはDクラスで女子の下着が盗まれていたらしい。それも1人だけではなく、複数人の下着が。そして女子生徒達は男子達を疑うのだが、最初は否定していた男子の鞆から下着が出てきたために罵倒を女子達がぶつけ始めた。しかも、運の悪いことにクラスで強い影響力を持つ女子生徒の下着だったため、男子と女子の全面戦争の様な

状態になってしまったらしい。

クラスの纏め役である平田が抑え込んでいたが、それもすぐに抑えられなくなる程状況が悪化してしまい、女子が男子を罵倒し続けていて、男子は男子で責任のなすりつけ合いになっている。Dクラスで状況を冷静に把握して纏められる生徒は片手で数えるほどしかない上にクラスの暴走を止めるので手一杯らしく、堪らず違うクラスの助けを求めてBクラスに藁をもすがる思いでやってきたらしい。

しかし、俺達が介入したところで下着を盗んだ犯人が出てくるはずがない。俺は関わりたくないで端の方に歩いて行くが、神様は俺の事が嫌いなのか、王が俺の姿を捉える。そして頼み込んで来た。

「・・・ああの、昨日、一之瀬さんとクラスに来ていた人ですよね・・・？出来たら一之瀬さんと一緒に来てもらっても、い、良いですか？」

王の言葉にクラスメイトの視線が俺に集まってしまった。俺はその様子にげんなしながら王に言った。

「……はあー……俺達が行っても何も根本的な解決にはならないだろ。寧ろクラスの違いが口出ししてしまつたら余計に悪化するぞ」

修学旅行の様な依頼と同じように、デリケートな問題で、しかも他人が直接的であれ間接的であれ、関わる問題は第3者が介入すれば悪化する可能性の方が遥かに高い。実際に修学旅行で最悪な状態に陥つたので間違いない。王も俺の言葉を理解したのか落ち込んだ様子を見せる。

「そ、そうですよね……」

「八幡君……」

助けになるのなら行きたいが、俺の言つたりリスクも分かっているからか、帆波は俺の名前を呼んだだけで何も言わない。勢いで決めないのはとてもありがたい。王は解決しなくても良いので、クラスを落ち着かせるのを手伝つて欲しい。と頭を下げてくる。

「八幡君。犯人を捜すんじゃないくて、その場を落ち着かせる事は出来ると思うの。だからお願い、八幡君」

帆波も王の意見に納得がいったのか、俺に頼んでくる。俺は少し考える。……まあ、犯人捜しじゃないなら大丈夫か。それに、雪ノ下の顔もちらつく。俺は息を吐いて了承した。

「……分かったよ。3日前の礼として状況を鎮静化させるだけなら手伝う。ただ、犯人捜しの手伝いはしないぞ。それでいいか？」

「あ、ありがとうございます！」

そう頭を下げてお礼言ってくる王。神崎に指示を任せ、そうして俺達はまたDクラスに訪れることになった。俺はDクラスへ向かいながら呟くように言った。

「それにしても、この無人島生活をしてる中で問題を増やすような馬鹿はいるか？」

「下着を盗んだ誰かが下着の持ち主を恨んでるとか？」

「そうだとすると、クラスの協力が不可欠なこの試験で盗まないだろ。c p tがかかってるんだし、幾ら女子と寝食を共にするとはいえ」

俺の言葉に帆波と王が、確かに……。と納得がいったように呟く。ていうか俺は予想ついてるんだがな。絶対、伊吹の仕業だろう。それが1番可能性が高い。クラスを混乱させておいてリーダー情報の警戒網が緩んだ隙に証拠を掴むのが目的だろう。俺は思いつ切り溜め息を吐く。何で毎回面倒ごととに巻き込まれるんだよ……

そしてDクラスのスポット拠点に着く。今回は断りをいれている暇もないので、そのまま入る。怒号が混じった声が聞こえてくる為、まだ揉め続けているのだろう。女子の罵倒が飛ぶ。

「良い加減に白状しなさいよ!!男子の誰かが盗んだんでしょッ!!」

「そうだしっ!さっさと認めてよ!!」

「だから、俺達男子は盗んでねえって！」

男子は言い返そうとするが、男子の鞆から下着が出てきたので言い返しても女子は聞く耳を持たない。予想以上にヤバイ状況だな、これは。女子の怒りを鎮静化出来るか？取り敢えず、誰かから女子の誰の下着が盗まれているのか聞かないと策も思いつかないので、近くにいた綾小路から聞くことにした。あまり女子を刺激しない為に小声で。

「おい、綾小路」

「お前は確か……比企谷だったか。どうして此処に？」

「お前らのクラスメイトからヘルプをもらったから、この状況を鎮静化しにきた。取り敢えず、女子の誰の下着が盗まれたか教えてくれ」

小声で頼むと綾小路は頷いて話し出す。それにしても綾小路の奴、こんな状況なのに無表情って、ある意味凄いな。普通は何らかの感情が見える筈だが。感情の起伏が小さ

いのか？

「平田の彼女の軽井沢とそのグループのメンバーの佐藤と松下、後は由比ヶ浜だな」

小さく指で指し示しながら名前を言う綾小路。指し示された奴は目元が赤いので、恐らく泣いたのだろう。1人は彼氏持ちで、彼氏持ちのグループのメンバーの2人、後はグループが関係ない由比ヶ浜か。俺は帆波に視線を送って頷くと、帆波は俺の首肯の意味を理解してくれたようで、手を叩いて大きな音を出して全員の注目を集める。

「はい！皆、1回落ち着こうか。このまま冷静にならないままだったら何も解決にならないからね」

急に帆波が現れたことに驚くDクラス一同。混乱しているのか、声を荒げることなく聞いてきた。

「ちよつと、Bクラスの一之瀬さんがどうして今此処にいるの？」

「Dクラスの人が助っ人を求めてきたからだよ。それで、言い合いは一旦止めて状況の整理をしようか」

帆波の行動と言葉にある程度の怒りは削がれたのか、大半の生徒は落ち着きを取り戻す。しかし、下着を盗まれた女子達は怒りは収まっていないうで、急に割り込んだ帆波に吠えるように言った。

「状況の整理って、そんな事する必要はないと思うんだけど？明らかに男子しかやってないでしょ」

「私もそう思うんだけど」

「そうだよ！男子の誰かがやったに決まってるじゃん」

完全に男子の誰かが盗んだと思っているらしく、状況の整理より犯人を捜そうとするが、こんな状況で出てくる訳ねえだろ。帆波に代わって、俺が話し出す。

「割って入っていくように悪いが、本当に男子だけが疑わしいのか？ 女子は男子の誰かが盗んだところをみたのか？」

俺が話すとやはりというか、由比ヶ浜が俺の言葉に憤慨した様子で反論した。

「何言ってるのさヒッキー！ 男子の他にやるような人なんている訳ないじゃん！ それより何でヒッキーが此処にいるの!？」

俺は由比ヶ浜の言葉を見殺しして、俺が考えた理由について話し始める。もう一々反論するのもしんどいので無視することに決めた。どうせ、修学旅行の事を謝れ。って言うてくるだけだろうしな。

「下着を盗まれた奴の中には彼氏を持つ奴だっている。そして彼氏はこのクラスの人気者の平田だ。こんな事をすれば女子を全員敵に回して男子からの信頼もなくなると分かっているだろう。そんなリスクを負ってまで男子が下着を盗んだと思うか？」

俺の言葉にある程度納得がいったのか、女子は考え始める。しかし、納得のいつてい

ない女子もいるようで直ぐに反論してくる。

「そんな事を考えずに盗んだんじゃないの？男子つて直ぐにイヤらしい目で女子を見てくるし」

その言葉に大半の男子の顔に青筋が浮かび、再び女子と睨み合いになるが帆波と平田と冷静な生徒達が抑える。俺は内心溜め息を吐きながらこう言う。

「まあ、その可能性も否定出来ないがな。でも男女の協力が必要不可欠なこの試験でわざわざ仲間割れを起こす男子はいるのか？しかもこの試験はc p tを稼ぐチャンスがある試験だ。寝食を共にしているとはいえこの試験中に盗むのか？俺なら絶対にしないな。だってクラス全員から後ろ指を指されるから」

その言葉で俺に反論してきた女子は口を閉ざす。男子は俺の意見に、そうだそうだー！とか言つて頷く。しかしそれを言つたチャラそうな男子2人は女子に睨まれ、直ぐに萎縮して黙る。あんまり女子を煽ることをすんなよ・・・折角、落ち着く寸前なのに再熱しちゃうだろ。

まあ、Dクラスの男子の誰かが他のクラスと契約して、クラスをかき乱す代わりに報酬を貰っているなら話しは別だが。そんな男子はいなさそうだしな。それを言えば女子の線も挙がってくることになる。その考えを松下だったか？が言った。

「Dクラスの男子の誰かが他のクラスと繋がっていることもあると思うんだけど・・・」
「それを言えば女子だって可能だぞ？」

俺がすかさずそう答えを返すと、そうだね。と引き下がった。そして俺はこう続ける。

「下着を盗まれている女子の共通点もないからな。最初はグループのメンバーと思ったが、グループと関係ない奴だっている。見た目の特徴も別々だ。適当に盗んだなら話しは別だがな」

俺がそう言うと、女子も落ち着きを取り戻し始めた。しかし、まだ容疑は晴れ切れて

いないようで依然、男子を睨みつけている。まあ、罵倒が消えただけマシだな。俺はその様子を見て言った。

「取り敢えず少しは落ち着いたようだし俺達は戻るが、後は自分達で解決してくれ」

俺は帆波に、帰るぞ。と視線を送る。帆波は頷くと最後にDクラスに言った。

「皆も落ち着いてくれたみたいだから私達は戻るけど、くれぐれも言い合いをしない事と女子も余り男子を疑いすぎて酷く言い過ぎない事、それだけはお互いに注意してね」

人気者の帆波の言う事はやはり影響が強いようで男子も女子も頷いた。平田や王、堀北や雪ノ下、男子の何人かが帆波と俺に礼を言うので、気にするな。と言つてDクラスのスポット拠点から出ようとしたその時。

「待つてよヒツキー！」

・・・はあー、何で追いかけてくるんだよ。俺はそのまま無視を貫いて歩くが、肩を

掴まれ引き止められる。俺は振り払おうと肩を動かすが、その前に由比ヶ浜が言った。

「あのさヒツキー、ヒツキーにも犯人を捜すの手伝って欲しいんだけど・・・」

「嫌だよ」

「何で!?!ヒツキーなら――」

「・・・あのさ、お前のクラスで起こった事を俺に解決させようとするの、止めて欲しいんだが。お前そうやって直ぐに人に頼りすぎなんじゃねえの?」

しかも一方的に突き放した相手に頼むようなことじゃないだろ。俺は掴まれた肩を動かして由比ヶ浜の手を振り払う。そしてそのまま帆波と一緒に自分達の拠点に戻る。始める。その背中に視線がずっと感じられたが、再び引き止められることはなかった。

俺達は拠点に戻る途中で帆波に礼を言った。最初に注意を逸らしていなければ、もつと時間がかかったはずだからな。

「Dクラスの注意を逸らしてくれて助かった。
．．．．．ありがとな」

お礼を言い慣れていないせいか、照れ臭くて頬を掻きながら目を泳がせてしまう俺。そんな俺の様子に帆波は首を横に振ってこう答えた。

「ううん、八幡君が上手く話してくれたから皆も落ち着いたんだと思うよ。私はそこまですで大したことはしてないよ」

その大したことない行動を俺は取れないんだがなあ。しかし、このままでは帆波の性格的に押し問答になると思うのでこう言った。

「……じゃあ、どっちも頑張ったということにしておくか」

実際に注目を浴びながら話すのを頑張ったからな。悪意の視線による注目以外は慣れてなかったし。俺がそう言うのと帆波は嬉しそうに頷いた。その後も上機嫌な様子だったので、それを不思議に思った俺は聞いてみた。

「……何で嬉しそうなんだ？」

「うん?・・・ん、八幡君が素直に自分を褒めてたからかな?八幡君、謙虚な部分があるから。八幡君の新しいところに気付いて嬉しいのもあるけどね」

・・・此奴の恐ろしいところって有栖や陽乃さんと違って、ひよみみたいに恥ずかしい事を躊躇なく言えるところなんだよなあ。そして告白したりなんかしたら振られちゃうんだろうなあ・・・悲しいことに。と、そんな事を思っていないと恥ずかし過ぎて反応もまともに取りれない程に俺は帆波の言葉に顔が熱くなって動揺する。やだ、俺ってば単純過ぎ?・・・ふう、これで少しは落ち着いたな。そしてクールになった俺は平然と答える。

「しよ、しょうか・・・」

全然クールじゃなかったわ。噛み噛みだわ。思わず、恥ずかし過ぎて死にたくなっちゃったぜ。俺の様子に帆波はクスツと微笑んだ。黒歴史が増えちまったよ・・・と内心悶えながら拠点に戻った。

拠点に帰ると神崎が慌てた様子でこっちに駆け寄ってきた。

「一之瀬、ウォーターシャワーが一台故障してしまった」

「ええっ！どうして故障したの？」

「分からない。食糧調達にいった男子が一回戻ってきてシャワーを使おうとしたら壊れていたらしいんだが……」

神崎の言葉を聞いて俺は少し考えた後、聞いた。

「……神崎、その前にシャワーを使っていた奴はいなかったか？」

「いや、今日はその食糧調達班の男子が最初に使っていた。その前にシャワーに入った人はいないし、昨日の一番最後は女子だった」

考え過ぎか……？もし壊されたなら昨日の夜中頃だろうな。女子が壊すとは考えず

らい。俺は、そうか。と答えると話を聞いていた帆波が言った。

「もう一台あるから、回しながら使う……うーん、それだと時間がかつちゃうなあ。……ptがまだ半分残ってるから購入するべきか」

「買っておいの方が良いんじゃないか？後に不満が出る事になりかねないと思うが」

俺がそう口を挟むと、帆波は少しだけ悩んだ後に頷いて言った。

「……そうだね。皆の精神衛生面が不安だし、回しながら使うのも余り現実的じゃないからね。購入しよっか」

そうして、替えのウォーターシャワーを購入してBクラスのptは160—15—145となった。シャワーの替えを直ぐに頼んだ事と帆波のケアによってBクラスは落ち着きを取り戻した。喧嘩も起きなかったのが不幸中の幸いだった。犯人は分からないままとなったが、疑心暗鬼になって団結しているBクラスをバラバラにするのは良くないと帆波は判断した。この試験中は特に。まあ、大体目星はついてるしな。

そして俺は落ち着きを取り戻したクラスを見つつ、ある人物の事を観察していた。此処からが本当の正念場だと、俺は予感するのだった。

夏風邪を引くと長引くよね

結局、ウォーターシャワーを壊した犯人は出てこなかった。そして今日が試験6日目だ。金田はまだクラスにいる。クラスの警戒も殆ど消えて、クラスメイトともかなり打ち解けたようだ。しかし、俺はそんなクラスメイトと逆に警戒を上げていた。

今日は俺がキーカードを持っている。金田が盗み取れないようにポケットに入れてある。なるべく接触もしないようにしている。俺は金田がいつ消えるのかを観察しながら今日はスポット内でのんびりと過ごしている。俺がスポットの端で惚けっとしていると帆波が話し掛けてきた。

「今日で最後の試験日だね。八幡君」

「そうだな・・・早く終わって欲しいわ、何でもいいからちゃんとした飯と飲み物が欲しい。もうこんな試験は勘弁だよ」

帆波は俺の言葉に苦笑する。Bクラスもかなり工夫をこらして生活をし易くしたが、やはり無人島暮らしをしていると元の生活のありがたみが今になって良く分かる。このような試験がもう1回あったら俺は仮病を使って休む事も考えている。Cクラスの大胆さが羨ましいものだ。

「船に戻ったらゆつくり出来るんじゃないかな？」

「どうだろうな……俺はこの学校がこれで終わりにするとは思えないんだよなあ。船の行き帰りを込みで2週間を使うって言ってたし、この試験では行きとこの試験を合わせて1週間しかまだ経ってない。もう1つくらい試験を入れてくるんじゃないかと思ってるんだが……」

帆波もその言葉を聞いて考え込む。夏休みは実際には明日からなので船に帰る日がただ1週間続くと言うのはどうしても考えにくい。まあ、推測でしかないんだが。ここで余計な事を言って混乱させる訳にもいかない為、俺は思考を切り替えて言った。

「まあ、今は試験を乗り切ることが最優先だ。余り深く考えても仕方がない」

「そうだね・・・」

金田の動きによって俺の計画が変わる。今日は6日目、恐らく動くなら夕方以降だろう。まあ、夕方ぐらいに動いてくれたら都合が良いんだが。俺はクラスメイトに混ざって朝食の準備を進めていった。

そして昼過ぎになった頃、俺は食糧調達の手伝いをした後の帰り道を一緒に手伝いに来た神崎達と辿っていると、空が曇り始め、天気が怪しくなりだした。神崎も空を見上げて目を細めて言った。

「これはひと雨ありそうだ。早く戻ろう」

俺は頷くとクラスのスポート拠点に向けて走り出す。幸い、足の速いチームで来たのでスポート拠点にはそう時間はかからないだろうが、問題はいつまで曇りがもつかだ。周りには雨宿りに利用出来る場所がないので降り出さないうちに戻らなければならな

い。しかし、何とかもつていた不安定な天気もついに崩れ始めて雨が降り出した。

「ヤバイ・・・降ってきやがった」

俺は悪態をつきながら余り濡れないうちに全力で走る。神崎達も速度を上げて走る。道は結構劣悪だが、そんな事に構っている暇はない。暫く走り続けると、クラスの拠点が見えてきた。それで緊張が緩んでしまったのか、泥濘み始めた道で滑ってしまい、体勢を崩して転んでしまった。その拍子に思いつ切り泥がジャージについた。転んでしまった俺を、神崎達は心配してくる。幸い俺は食糧は持っていないので食糧も犠牲になることはなかった。

「大丈夫か比企谷！」

俺は、大丈夫だ。という意味を込めて首を振って、倒れた身体を直ぐに起こして再び走り出す。それにしても泥がジャージに着いてしまった。雨に濡れたのも相まって泥の冷たさが体温を奪う上に感触が気持ち悪い。これはシャワーに入らないと寒いな。まだ夏だから余り寒くないだけマシだろう。冬だったら風邪引く自信がある。

スポット拠点に着くか否や、帆波が雨が降ってきたから心配だったと駆け付けて俺の今の惨状を見ると「早くシャワーを浴びて温まってきて、替えの着替えやタオルは濡れないようにテントの前に置いて置くから」と言われた。神崎達は俺に「泥が着いたお前の方が寒いだろ、先に入れ」と言ってくれたのでありがたく先に入ることにした。

テントに入ってジャージを脱いで、着いている泥を払う。そして折りたたんでキーカードをポケットから出して、折りたたんだ服の上にキーカードを置いておく。テントの前に誰もいない事を確認してシャワーを浴びる時に濡らさないようにテントの入り口前に置いた。テントの先には濡れないようにカバーが入り口前を覆っているのが濡れる心配はない。そして身体を洗う。その時一瞬、影がテント越しに映るのが見えた。シャワーの水圧を緩めて音を小さくする。その影は暫く動かずにいた後に『ピッ』という電子音が雨音に混ざる。そして影はその場から去った。

身体を温めると同時に洗い終えた俺は、俺の鞆に入っていたのを、シャワーに入る前に帆布が用意してくれた鞆と着替えのジャージの上に置いてあったタオルを取って身体を拭く。俺の身体洗うところなんて誰も得しないのでカットである。・・・誰に言っ

てんだろうな。着替えた後に、隣にある脱いだ後のジャージを見るとカードは畳んであったジャージの上に乗っていた。

「好都合だな、これは・・・」

キーカードを今、俺が着ているジャージのポケットにしまい込む。多分、金田はこれで此処を出ただろう。キーカードが取られたらヤバかったが、周りの事を警戒したのか、カメラに収めるのに留めたようだ。俺も動かないとな。俺は神崎達にシャワーが空いた事を知らせた後にリーダーを担当している網倉に若干、勇気を出して話しかける。

「・・・悪いんだが、少し良いか？」

「?..どうしたの?..」

俺が急に声をかけてきたので不思議そうに聞き返してくる。リーダーの事について話しがあるから2人で話そう。と言ったら怪訝そうにしながらも頷いてくれた。そしてスポットの端にあるテントに入る。そして俺は本題を切り出した。

「本題だが、網倉の口からは、今から言う事を帆波にしか言わない事と驚くかもしれないが大きな声は出さないで欲しいんだよ。お願い出来るか？」

すると網倉は頷いてくれる。俺は素直に頷いてくれた事に驚きつつも本題を話す。

「・・・ありがとな。で、話すんだが、網倉・・・午後のいつでも良いからリタイアして欲しい」

「・・・ええっ!？」

驚きの声を漏らしてしまったので俺は咄嗟に口に人差し指を立てる。網倉もそれに気づいて咄嗟に両手で口を抑えた。そして周りに気配や人影ないか確認して小声で、それと雨の音で聞こえにくい為、網倉には嫌だろうが耳元に近付いて俺の策について話した。途中でこそばゆいのは分かるけど「ンッ・・・」と艶やかな声を漏らすのは勘弁して欲しかった。マジで色々危ないから。

「……って訳何だが、やってくれるか？」

俺の策について全て話し終えて、俺は網倉に頼む。網倉は少し考えた後に頷き、そして言った。

「……分かったよ。私はリタイヤするよ」

「…悪いな、こんな感じで。後で帆波にも伝えて、俺もクラスに出来る限りお前をフォローしとく」

俺が謝ると、網倉は首を横に振って言った。

「ううん、謝らなくても良いよ。比企谷君の事を帆波ちゃんは信賴しているし、実際に比企谷君は頭の良い人だっと思ってえたからね。それに最初は少し怖いって思ったけど、優しいし、私も信用しているから」

網倉の言葉に俺は頬を掻いて言った。

「：別に。俺はただ、c p tを増やしてp p tをもつと得ただけだ。だから優しいってのは違うし、頭が良い奴なら帆波や神崎の方が上だ。俺は感性が普通の人とずれているだけにすぎないんだぞ？」

どっちかと言えば龍園に近いしな。網倉は俺の言葉を気にする様子はなく、そっかと短く答えた。俺は直ぐに話題を戻す。

「今は俺の事はどうでもいい。取り敢えずリタイアする時は、道中で顔を見られないようにする為に顔を隠して体型も変えて欲しい。それと、リタイアした後にはリーダーを更する時に、カモフラージュでお前の他にも俺ともう1人ついて行くことにする。もちろん顔も隠して体型も変える」

他のクラスの生徒と出くわしても、誰がリーダーにしても、誰がリーダーになったかを誤魔化せるからな。顔は持参したタオルを巻いて、その上からジャージをフードのようにすればいい。しかし今は雨が降っているので濡れながら船の停留所に行かないといけない。

「多少濡れるが、我慢してくれるか？」

「うん、大丈夫だよ」

今の時間を確認する。3時半か・・・午後の点呼をしてから行きたいが、雨が酷くなる可能性もある。今から行ったほうがいいな。

そして、網倉と俺ともう一人の奴はきつちりと変装した後、船の停留所に行く事になった。網倉は体調不良で船に戻るという事をクラスメイトに言っている。疲れが溜まって熱を出したという具合に。

「・・・じゃあ行くぞ。もし、他クラスの奴に話しかけられたとしても喋らずに無視して進んで欲しい。声でもバレる可能性は充分にあるからな」

2人は俺の言葉に頷いてくれたので、俺達は移動を始めた。なるべく早く移動しつつもバテないようにしながら。幸いな事に道中も俺達の他に気配は無かった。そして無事に船の停留所に着いた。俺達は要件を伝えて、網倉をリタイアさせた後にリーダーを変更した。そして残った俺達はクラスのスポットに足早に戻った。

さてと、これで打てる手は全て打った。後は試験の結果を待つだけだ。今現在のBク

ラスの p t は、145130115 p t だ。ここからどうなるか・・・

そして当日になった。網倉以外の B クラスの生徒は全員無事に点呼を終えて、リーダーを当てる時間となった。俺達は A クラスのリーダーのみに絞る事にした。その理由は、C クラスは龍園が同じような策を使っている可能性があるからだ。D クラスに関しては休戦同盟の関係なので除外、よって解答用紙には、戸塚弥彦のみ名前を記入した。解答時間は終わり、B クラスの生徒全員が今ある荷物を纏めて、最初に試験の説明が行われた浜辺に移動する。

そして丁度、正午の時間に船の停留所である浜辺に全生徒が集まった。C クラスの方を見ると、龍園のみがいた。その他の生徒は誰も居ない。そんな予想はしていたが：：まあ、良いか。殆どの生徒は龍園を見て騒ぎいていた。当の本人はそんなことは気にせず D クラスに絡みに行っているが。すると、隣にいた神崎が言った。

「……やはりCクラスは別次元だな」

「行動が予測しにくいから皆は動揺してるね」

神崎の言葉に帆波がそう返す。まあ、もしリーダーを当てられずとも龍園に損はないがな。Aクラスの有栖以外からpptを1万5千pptを月1で貰うんだから。そして暫くすると、真島先生が生徒全員の前に出てきた。

「そのままリラックスしていて構わない。既に試験は終了しているので、今は夏休みの一部のようなものだ」

そうは言っても試験結果が発表されるんだからリラックスなんて出来ないと思う。この試験でリラックス出来る程神経が図太い生徒は殆どいないだろう。

「それではこれより、特別試験の結果を発表したいと思う」

真嶋先生の言葉により、一気に緊張感が走る。

「なお結果に関する質問は一切受け付けていない。自分たちで結果を受け止め、分析し次の試験へと活かしてもらいたい」

真嶋先生はそう言つて、試験の結果を言い始めた。

「ではこれより特別試験の結果を発表する。最下位は——Cクラスの0ポイント」

そう口にする。同時に笑い声が聞こえてきたので見てみれば、須藤と由比ヶ浜が龍園を馬鹿にしていた。対する龍園はショックというよりも何がなんだかわかってない表情を浮かべていた。リーダー当てで失敗したのだろう。BクラスとDクラスのリーダーを当てられなかった感じだな。だが、少なくともAクラスよりはまだ得をしていると思う。真嶋先生は3位を告げる。

「続いて3位はAクラスの20ポイント」

その言葉にAクラスの生徒、否——葛城派の奴が愕然としていて、逆に坂柳派の奴からは動揺の色は見られない。大方、有栖から聞かされていたんだろう。葛城は葛城派の奴等に詰め寄られていて、その葛城は龍園を睨んでいる。これで有栖からの依頼は完了だな。内訳は多分こうだ。

270(元のpt)ー150(B、C、Dクラスにリーダーを当てられる)ー50(Cクラスのリーダーを外す)ー50(B、Dクラスのリーダーのどちらかを外す)＝20ptになる。龍園を通じてリーダーの情報は受け取っていたが、リスクも考えてどちらかのリーダーを除外した。全て当てにいったら0ptになってただろう。俺は思わず笑いを漏らした。そして真島先生は2位を告げる。

「・・・2位はBクラスの186ptだ」

そう告げられたBクラスの生徒達は俺と帆波と、そしてリーダーのカモフラージュに協力してもらった神崎以外が驚く。2位か・・・そしてこのptの内訳はこう。

115(昨日の暫定のpt)+21(1日3pt×1ヶ所のスポットを1週間占有)+

50 (Aクラスのリーダーを当てる) 1186ptになった。まあ、スポット1ヶ所だけ占有していただけたが上出来だな。だがBクラスが2位ということは1位は……

「そして1位は……」

真島先生は一瞬だけ言葉を詰まらせるが、直ぐに発表した。

「……Dクラスの225ptだ。以上で試験の結果発表を終了する」

そう結果が告げられた。Dクラスは一瞬理解が追いついていなかったが、誰かが雄叫びのような声を挙げて、それが伝染する形で大歓声が沸き起こった。うるせえ……というか、このpt数つてことはDクラスも俺の思い付いた策と同じようなものを実行したみたいだな。俺は実行したであろう人物を見た。

「2位になったね、八幡君。Dクラスが225ptもあつたのは少し驚いたけど」

「そうだな。まあ、Aクラスの差もこれで大分と縮まったし悪くはないと思うぞ」

帆波が言うので、俺はそう答えた。真島先生が試験の終了の合図すると、Aクラスから順に乗船していく。Aクラスの雰囲気は葛城派がお通夜で、坂柳派は逆に嬉しそうだ。そして俺が試験の結果発表前の休憩で返された携帯が鳴る。3通のメールが来ていた。見られないように確認すると、有栖と神室、そして龍園からだった。有栖の方から確認する。

From 坂柳有栖

To 比企谷八幡

Subject 試験お疲れ様です。お見事でした。私の依頼は成功です。報酬の件に関しては私がいる部屋で話しましょう。部屋は4階の403号室です。後、用がなければ食事でも一緒にどうでしょう？

そう来ていたので、用はあるから後で連絡する。と返信しておく。そして次は神室の内容を見る。

From 神室真澄

To 比企谷八幡

Subject 葉山の事、学校に言わなかったけど、本当にこれで良いの？

その内容に、別に良いぞ、心配させるようで悪かったな。と返信する。すると、乗船する直前だった神室はこつちを見た。俺は小さく頷いておくと、神室は頷き返して乗船した。橋本が何かこつちを見てニヤついているので若干イラッとした。そして龍園の内容を確認する。

From 龍園翔

To 比企谷八幡

Subject 今回はやられたが、次の試験でお前らのクラスを徹底的に潰して

やるから覚悟しておくんだな。お前や坂柳の他にDクラスにも裏で動いてる奴がいるから退屈しなさそうだぜ。

そう来ていたので、隣にいる龍園を見ると龍園もこつちを寧猛な笑みを浮かべて見ていた。そして俺は、絶対お前の相手はしない。後、葉山の事で話しがあるから、ロビーに來い。と返信して置いた。やっぱり次の試験について考えてるし、本当に龍園は相手にしたくねえな。そしてもう1通メールが來た。ひよりからだった。

From 椎名ひより

To 比企谷八幡

Subject 試験お疲れ様でした。昨日の天気は雨でしたが、体調は大丈夫ですか？後、用がなければ食事を一緒に取りませんか？

ひよりにも有栖と同じように食事に誘われたんだが。俺は、そっちもお疲れ。用があるからまた後で連絡する。と返信しておく。そしてBクラスも乗船していく。そして

各々で喜びあっていた。まあ、予想外に p t が多かったからな。これで全クラスの c p t はこうなった。

Aクラス 1 0 0 4 + 2 0 || 1 0 2 4 c p t。

Bクラス 8 1 0 + 1 8 6 || 9 9 6 c p t。

Cクラス 5 5 2 + 0 || 5 5 2 c p t。

Dクラス 8 7 + 2 2 5 || 3 1 2 c p t。

と、いった感じでAクラスとBクラスの差はほぼ無くなった。DクラスもCクラスに追いついてきた。しかしAクラスの指揮は今度からは有栖がするので厳しい闘いになるのは間違いない。有栖と帆波では相性は悪い。後はポテンシャルの差だ。どうしても有栖には見劣りしてしまう。龍園みたいなやり方もあるようになれば良い勝負になると思うが、やっぱりそのやり方は合わないだろうな……

帆布はどうしてこのようなptになったのかをクラスに説明している。もちろん俺が思い付いたということは伏せてもらっている。目立ちたくないから。俺は説明を帆布に任せてロビーに向かう。その途中から頭痛がしてきたが、気にせず誰もいないロビーで龍園が来るのを待っていると、龍園がきた。そして龍園は愉しそうに用件を聞いた。

「ククツ、俺に一体何の用だよ。Bクラスの影の王さんが」

「止めろ、その厨二臭い呼び方。ちょっとかっこいいが、別に俺はお前みたいに支配している訳じゃねえんだから。・・・んで、用ってのは葉山が契約違反した」

その言葉に龍園は笑っていた顔を真顔にして聞いてきた。

「・・・何時の事だ？」

俺はこの試験が行われる前に起こった、船のレストランで録った録画を見せる。龍園はそれを見ると、笑って言った。

「クククツ・・・まあ、これは確かに違反だな。で？pptを払わせれば良いのか？」

「いや、pptはいらん。その代わり徹底的に葉山を潰して欲しい」

ぶつちやけ葉山を絡んでこさせないようにした方が俺にとっては得だからな。それを聞いた龍園はまた愉しそうに笑う。

「クハッ！容赦ないなあ・・・良いぜ、乗ってやるよ。彼奴の独断専行は目に余ってたしな」

そして、Aクラスの情報を渡した報酬を受け取って別れた。貰えるとは思いつたが、筋はしつかりと通すようだ。pptは『5, 298, 760pt』となった。色々と掛け試合してたら此処まで貯まった。無駄遣いはしないようにしな。そう思っていると、頭痛が酷くなったので思わず顔を顰める。

そして俺は有栖にメールで、部屋に今から行くが他にAクラスの奴はいるのか？と送

信する。そして直ぐに、退室をお願いしたので来て下さっても大丈夫ですよ。と返信が来た。余り女子のフロアに行きたくないが、有栖だから仕方がないと割り切るしかない。何とか誰にも見つからんようにしないとな。俺はゆつくりと歩き出す。

それにしても肌寒いな・・・と、考えながら何とか誰にも見られることなく有栖のいる部屋に到着した。そして扉をノックする。そして、どうぞ。と有栖の声が聞こえたので、やけに重く感じるドアノブを回して扉を開けて中に入る。

「・・・来たぞ」

「特別試験、お疲れ様でした。早速ですが、報酬の件についてお話しを・・・」

そこまで言つて有栖がこっちを向く。すると俺の顔を見て目を見開いて驚いていた。俺の顔に何か着いてるか？不思議に思つた俺は有栖に聞こうとするが、その前に有栖が言つた。

「八幡君、顔色が優れていませんが・・・大丈夫ですか？」

そう有栖に心配そうな表情で言われた瞬間、急に眩暈がしてきた。ヤバい……気分悪い……。頭痛も酷く、何とか答える。

「はあ、はあ……。わ、悪い……。気分が……。悪い、から……。はあ……。じ、ぶんのへやに……」

そう言って戻ろうとするが身体は鉛がのしかかった様に重く、思うように動かせない。

私は八幡君の状態を冷静に分析する。慣れない環境で慣れない生活、更には昨日は雨も降っている。1週間に溜まった疲労で風邪を引いてしまったのだろう。私は急いで言った。

「取り敢えず、このベッドまで何とか歩いて横になって下さい!」

八幡君は朦朧とする意識の中、私の言葉に従って、何とかベッドまで歩く。そして、仰向けに倒れ込んで意識を失った。私は一瞬、慌てて八幡君を呼びかけたが直ぐに冷静さを取り戻して教職員に電話をする。何とか伝えて電話を終えた後、八幡君の体温を確認の為、額に手を当てる。

「物凄い熱ですね……」

此処までかなり身体を酷使させたのだろう。そして結果が分かつて一気に緊張が解けて、疲労で発熱といったところと断定した。私は自分の鞆からタオルを取り出して、洗面所で冷水で濡らして絞った後、折りたたんで鞆から怪我をした時に使うと思つて購入した冷却スプレーを掛けて簡易版氷枕にする。八幡君の頭を持ち上げてその下に敷く。そして頭をゆっくり下ろし氷枕に後頭部を当てる。すると苦しそうな表情は少し和らいだ。そして予備のタオルとブランケットを取り出して、同じような処置をタオルに施して八幡君の額に乗せる。ブランケットは身体にかける。

そして出来る限りの処置を終えて、先生が来るのを八幡君の手を握って待った。無事に治ることを祈りながら。

閑話 小さき頃の思い出 坂柳編②

これは或る日の夢である。少年は夢を見た。記憶を失ってから決して想い出されなかった出来事。幼い頃の記憶、当時の自分には心に留めておこうと思う程には大切だと思つた回想。それが今、紐解かれる。

小学生で友達100人出来るかな。と思つた奴はどのくらいいるのだろうか。実際、作れる奴は本当に尊敬する。だが、現実は甘くない。俺は小学4年だが、現時点で友達は0だ。本当に最初の頃は友達作りに励んだ。元々俺は内向的な性格で、他人とも積極的には話さないのだ。それでも友達が欲しいからと勇気を振り絞つて行動した。

しかし、内向的な性格が裏目に出てしまい、俺をいじると反応が面白いからと、悪ふざけで絡んでくる奴が続出した。そしてそれがどんどんエスカレートして行き、『いじり』ではなく『虐め』になっていった。その所為で自分の眼が濁ってしまった。それが

気持ち悪いと言われ、更に虐めは酷くなった。

そこから他人というものを信用しなくなった。家族にも相談しようとしたが、妹に悪影響を及ぼしてしまうと思い、相談せずにいた。そしてそんな俺にとって嫌な毎日を過ごして小学4年に進級した時、俺は虐められないために全力で存在感を消していた。もし標的になったら、と思って万が一に備えて独学で武道を身に付けておいたが、素人に毛が生えた付け焼き刃程度なので何処まで通用するか分からない。なので武道だけでなく知識も身に付けておこうと毎日本を読んで、知識を溜め込んで、身体を鍛える毎日を過ごしていた。俺にとって平和な毎日にするために。

そして目立たない毎日を送っていると、ある少女にいたずらしている生徒達がいた。とは言ってもその少女の持ち物を本人がいない内に持ち去ったり、教科書に汚い落書きをしたりと、少女に直接嫌がらせをしていた訳ではない。時たまに給食を少女に配膳しなかったりもしていたが、少女は平然としていた。給食については俺がバレないように少女が席を立つ瞬間を見計らい、給食をこっそりと配膳している。俺のスキル『ステルスヒッキー』に掛かれば簡単だった。

幸い周りの奴には先生以外——先生も怪しいが——俺の存在は見つかつてないのだ。あれ？自分で言つてたら虚しくなつて来たぞ？目から塩っぱい水が……

その虐められているであろう少女は虐めてくる連中に対して何もしようとしていなかった。少女は何かしらの持病を患つていて杖を付かなければ歩くことが出来ない程、身体が弱い為に抵抗出来ないのかと思つていた。しかし、少女を観察するに連れて、それは間違つていると思うようになっていった。

少女はこの小学校の生徒の中では随一の頭脳を持つていると噂される人物で、大人である先生も知識面では負けると言われている。テストも5分で全て解き、100点以外を1度も見たことないらしい。そんな少女が、虐められている中で何もしない筈は無かった。宝石のような綺麗な瞳の奥に寒気がする程の冷たさがあつたからだ。何かを企むような冷笑を浮かべていたのが分かつた。

少女——坂柳有栖は、確実な報復を企んでいる。何を実行するかは知らないが少なくとも今虐めている連中は無事では済まなそうだ。

坂柳は虐めを受け続けた。しかし、毅然とした態度は変わらない。そしてそのまま冬休みが間近に迫ってきた頃、何時ものように目立たず過ごして放課後になった。帰りの準備を纏めていると尿意を感じたのでトイレに行く。そしてトイレを済まして教室へ戻っている途中、坂柳とその数メートル程離れた位置から尾行のようなことをしている男子生徒達がいた。て、何時も坂柳にちよつかい出してる奴等じゃねえか。

嫌な予感がしたのでバレないように気配を消して様子を窺う。すると案の定、坂柳が後ろから男子生徒に押されて転けてしまった。すると男子生徒達は慌てた様子で離れていく。俺は丁度曲がり角の死角となつてゐる場所に隠れて、男子生徒達が去っていくのをやり過ごした。今まで坂柳に直接手を出す奴はいなかった。手を出してしまい、目立つ所に怪我を負わせてしまえば嫌でも教師は対応しなければならぬ。教師に調べられたら直ぐに犯人が特定される。それを危惧して虐めている連中は直接手を出さなかった。

しかし、半ば悪ふざけで遂に手を出してしまった。本当に胸糞悪い。俺は関係無いがこんな場面に出くわして、見捨てるクソ野郎になりたくなかったもので倒れている坂柳に近寄って隣に一緒に倒れている杖を坂柳に掴ませて、坂柳を起こして立たせた。

「誰でしょうか？貴方は」

「たく、あいつらもやりすぎじゃねえのか・・・？」

「・・・名前を聞いているのですが」

無視された事が気に障ったのか、こちらを鋭く睨みつけてくる坂柳。怖っ！女子小学生の出せる眼力じゃねえだろ。八幡ちびつちやいそう・・・

「おお・・・そんな睨み付けんよ。・・・比企谷八幡だ、気づいていないかもしれないが一応お前と同じクラスだ」

そうビビりながら自己紹介すると、坂柳はほんの僅かに目を見開いた。え、何その反応、そこまで存在感なかった？何それ悲しい。

「そうですか。ではこちらも、私は坂柳有栖といいます。以後お見知りおきを。失礼で

すが影が薄いのですね」

やっぱり知られていなかった。もう俺つて隠れんぼしたら一生見つかることなく終わるんじゃないやね？いや、そもそも隠れんぼに付き合ってくれる友達もいなかったわ……そんな心の中で大泣きしつつ、言った。

「本当に失礼だな……とりあえず一応、怪我してるかもしれないから保健室に行くぞ。歩けるか？」

歩けるか確認するが、足を見てみると転けてしまった事で痙攣してしまっている。俺は動けない事を察して坂柳に後ろを向いて屈んで言った。

「おぶるから乗れ。足が動かないんだろ？」

そう言うのと坂柳はゆっくり俺の背におぶられる。その時、女の子特有の良い匂いと柔らかな白魚のような繊細な手が首に回される。何で女子ってこんなに良い匂いすんの？男子は大概、汗臭いの。マジで不公平だ。俺は理性で慌てないように努めながら坂

柳から杖を回収して、移動を開始しようとしたが、背負った時に思ったことを思わず聞いてしまった。

「滅茶苦茶軽いなお前……ちゃんと飯食ってんのか？」

「三食毎日食べてますよ」

そう返してきたが、それにしても軽過ぎる。給食を食べる様子は見ていないので分からないが少食なのかもな。

そして俺は怪我をしていないかを診る為に保健室に向かつて歩いていく。なるべく坂柳に負担にならないように注意しながら。しかし、他人をおぶるなんて妹の小町以外で初めてだな。

そして保健室に着き、保健室のベッドに坂柳を降ろして怪我がないか診る。何処にも傷はない、痙攣も治ってるし大丈夫だな。俺はヤケに緊張していた肩の力を抜いて息を吐いた。そして、今までクラスでの此奴の立場を見て見ぬふりをしていた俺は申し訳な

くなつたので坂柳に頭を下げて言った。

「あー、今までお前のクラスでの立場を無視していて悪かったな」

「謝らなくてもいいですよ。特に私があなたに助けを求めたわけでもありませんし。それに助ける必要はないですよ？今までいじめてきた人たちの証拠は全部取つてありますから。後はタイミングを見計らつてインターネットにたれ流せばいいだけなので」

うわぁ・・・思つた以上にやる事がエゲツないな。もう虐めてきた連中、絶対に敵に回したらいけない奴を敵に回したな。思わず俺は顔を引攣らせながら言う。

「おおう・・・遅すぎんだろ坂柳さん」

本当に遅い奴だ。虐められていて味方もないのに堂々として報復すると言う坂柳。俺も虐められてきたが真正面から立ち向かうことは出来なかった。しかし、その瞳は何処か寂しげにも見えた。

それでも此奴は強い。そして俺はいつの間にかそんな生き方、立ち振る舞いが出来る此奴に―――憧れたんだ。俺は心内で笑った後に坂柳に何時それを実行するか聞いた。

「なあ、いつそれを実行するんだ？」

「何のために聞くんですか？……まあ、実行するなら今度の冬休みに入った後でしやうね。邪魔は入らないですから」

「いや、俺もいじめられる側の立場だったからどうやり返すのか気になっただけだ。んじゃまあ、怪我も特にないみたいだし、俺は帰るわ」

そして帰ろうとして、坂柳に引き止められて、送れ。と言われてしまった。そして渋々従った俺は坂柳と昇降口に向かって歩き始めた。その間ある程度会話をしつつ、昇降口に送って坂柳が正門に向かうその後ろから俺は言った。

「坂柳……明日からの学校、楽しめるといいな」

その言葉を聞いて坂柳は怪訝そうな表情で口を開きかけるが、俺は坂柳を追い越して正門を出た。

別に助けて欲しいと言われた訳ではない。憧れたからこそ、その生き方、立ち振る舞いでいて欲しい。そんな俺の理想を俺は押し付ける。だから坂柳の為じゃない、俺の為に坂柳を助ける。

Q、敵が多く味方がいない奴がいます。世界は残酷で助けてくれる人は誰一人としていない、そいつが今おかれている世界を壊すにはどうしたら良いでしょう。

A、そいつよりも目立つ共通の嫌われ者を作ること。

そして俺はこの小学校で一番の嫌われ者になった。クラスの奴が俺の噂を広めたらしい。噂とは『比企谷八幡が、クラスの女子を泣かせた』と言う噂だ。それにより坂柳がされていた虐めは俺に移った。幸い妹は俺の学校にはいない為、妹が被害を被る事はない。

親父は一緒に同じ学校に居て、小町が親父以上に俺に懐くことを恐れたから俺の通う学校から少し離れた家に近い学校に通わせている。しかしそんなことをしても小町は俺に懐いちゃってるんだけどな。この前なんて親父が仕事から帰ってきた時に小町に

ハグしようとしたら小町が嫌がって、俺に泣きながら抱きついた事で親父がガチ泣きしたのは記憶に新しい。その後、母ちゃんに小町を泣かせた事で説教されていた。マジでドンマイ親父。しかし、腹いせに小遣いを減らしたのは許さん。まあ、母ちゃんからはその分多めに貰ったので変わらなかったが。

俺は虐められていたが、冬休みに今まで虐められていた坂柳が録っていた全ての証拠をインターネットに拡散した事で虐めに関与した連中の全員が転校や引き籠もりになった。抵抗しようとした虐めに関与した連中の親は、坂柳の父親に直談判したが、坂柳の父親が国でもそれなりに有名な権力者なのを知ると顔を真っ青にしながら家族全員で引越したと坂柳が教えてくれた。ついでに俺に対しての虐めの証拠も坂柳は録って流していたので俺が虐められることもなくなった。噂も？と言って広めてくれたので完全に疑いの目は晴れた。

そして虐めに対応しなかった担任や他の何人かの教師も懲戒免職で教師免許を剥奪されて、校長先生と教頭先生も半年の減給になった。しかし、校長先生と教頭先生は誠意を見せた対応をしたので良い人なのだろう。坂柳と坂柳の父親と俺の両親と俺に土下座して謝ってたし。

それから坂柳の父親に感謝されて、困った時は是非とも力になる。と言ってメールアドレスを交換した。ついでに坂柳とも――強制的に――交換した。そしてその日は俺の両親が珍しく高級な店で俺も含めて外食させてくれた。

そして坂柳と一緒に行動する事が増えて、5年生になった年の夏休み。俺は坂柳が身体の調子を診る為に夏休みに入って定期的に2週間程入院している病院に面会しに行った。面倒臭いと最初は渋ったが、坂柳の泣き真似に騙されて行くことを了承してしまった。マジで坂柳の泣き真似上手い、子役になれんじゃねえの？

病院に面会しに来た事を受け付けの人に告げ、坂柳のいる病室に行く。病室を知っている理由は此処の訪問が実は2回目だからだ。扉越しにコンコンコンとノックする。

「ぶっぶっ」

短いた承の返事が聞こえたので病室に入ると、透明なカーテンが風になびいて揺れ、窓から見える澄み渡る青空をベッドに座って眺める坂柳がいた。

風によって坂柳の銀髪がふわりと揺れ、シャンプーの香りが入り口に立っている俺にも匂ってきた。思わずその幻想的な光景に見惚れる。坂柳はこちらを向いて、俺を見ると微笑んで挨拶した。

「こんにちは、比企谷君。約束通りに来て頂いてありがとうございます」

「おう。と言ってもお前が毎日来いって強制的にさせられたんだけだな」

「酷いです比企谷君。女の子にそんなことを言ったら嫌われますよ？」

「泣き真似で俺の事を騙してきた坂柳さんの方が酷いんじゃないんですかねえ……」

そんな会話をしつつ、俺は坂柳のベッドの近くに椅子を置いて座ってコンビニで買ったお菓子を袋から出して言った。

「ポッキーを持って来たけど、食べるか？」

「そうですね、頂きます」

俺はお菓子のカバーを開けて、坂柳に渡そうとする。そこで坂柳が言った。それはそれは何かを企んでいる良い笑みを浮かべて。嫌な予感が……

「じゃあ比企谷君が食べさせて下さい」

此奴は……今年、また坂柳と同じクラスになって、更に隣の席になったのだ。しかも何度か席替えしても坂柳が隣の席——絶対何か根回しされてる——になるのだ。そして給食の時には何を思いやがったのか知らないが、食べさせ合いをしようとしてくる。虐められていたが、此奴は容姿が抜群なので少なからずファンみたいな奴等もいる。食べさせ合いの時にそいつ等は睨んでくるが、断つて坂柳に？泣きをされたらもつと睨まれる。流石に虐めの件もあるので直接絡んではこないが、流石に居心地が悪い。そして坂柳も当然その事を分かっているやるので尚、タチが悪い。

「いやだよ。自分で食えるだろうが、出来ることは自分でやりなさい」

「良いではないですか。減るもんじゃないでしょう?」

「現在進行形で俺の精神はすり減っていつてるんだけど・・・」

マジで揶揄い倒してくるの好きすぎんだろ。坂柳程、ドSな奴はいないんじゃないかねえの。

「比企谷君、何か失礼な事を考えましたか?」

「い、いや?特に考えてないぞ?」

坂柳の鋭い視線から逃げる様に視線を逸らして言う。怖い、怖いよ。何で俺の考えることが分かんのか?エスパー?家族でさえ俺の考えてること分からないって言うてるのに。あれ?俺って身内に理解者がいないって事?何それ泣ける。

「・・・しょうがないですね。じゃあ私が比企谷君に食べさせてあげましょう」

俺が脳内でふざけた事をやっている、坂柳はポツキーを一本取って俺の口に向ける。俺は首を振って逃げる為に首を横に向けようとするが、その前にポツキーが入れ込まれる。本来のほんのり甘いチョコレートの味と香りが良く分らない。それ以上に坂柳に受けた行動で顔が熱い。

「お、おおおまつ、何やってくれてんの!？」

「ふふつ、顔が真っ赤ですよ？比企谷君。それよりもポツキーまだ途中ですから食べて下さい」

そんなやり取りをして、ポツキーを何とか……多大なる羞恥に精神を蝕まれることになったが……食べ終え、俺は坂柳の話し相手となっていた。何か病院は同世代が少ない為に会話が弾みにくいらしい。その上、坂柳が話す相手で一番なのは俺と言われてしまったので渋々了承した。

かと言ってもポツチの俺と元ポツチの坂柳、話せる話題が殆どない。唯一の共通の話

題である読書について話す。坂柳は大人顔負けの知識と推察力と洞察力があるので俺が知らない本を教えてください。俺は逆に坂柳が手を付けなさそうな漫画やライトノベルを教える。すると坂柳は興味深そうに話を聞いていた。

話しをしていると、ふと、坂柳が聞いてくる。

「・・・比企谷君。あの時、貴方はどうして私を助けてくれたんですか？」

あの時、というニュアンスは虐めのことしかないだろう。誤魔化そうとするも、坂柳は本当のことを教える。と有無を言わせない眼差しを俺に眼を逸らすこと無く聞いてきたので、その様子に半ば諦める様に俺は溜め息を吐いて言った。

「・・・これは知り合いの知り合いの話だ」

その話しの入り方に坂柳はクスツと笑った。俺は話を止めること無く続ける。

「ある一人の少年がいた。その少年も俺達と同じような虐めにあつていて、味方もいなかった。家族に相談しようにも下の子がいるので心配をかけさせたくなかったから黙っていたらしい」

「そしてそんな日常を送つていて少年はある奴が目にと留まつていたんだ。ある一人の少女、それいつも少年と同じように回りから虐めを受けていたんだ。少年は同じような境遇の奴がいると知つて密かに同族意識を持っていた。そして同時に自分と同じように味方がいないから、怯えながら過ごしていていると思つていた」

普通、味方がいない状況をたつた一人で虐めに耐えきれぬ奴は殆どいない。仮に耐えきれたとして報復を考えて実行しようにもかなりの勇気と知恵が必要だ。

「……………だけど違った。少女は周囲からの虐めを物ともせず、逆に虐めてきた連中の虐めの証拠を録っていたらしい」

でも、強かった。たった一人で弱音も吐かず、身内にも頼る事無く虐めてきた連中に立ち向かい、最終的にそいつ等全員を叩き潰した。

「そんな凜とした立ち振る舞い、自分の意志を貫くことが出来る強さに少年は憧れたんだ。少年には決して出来ないものだったから」

「だからその憧れた立ち振る舞いを、強さを少年は真似た……と言うより俺も出来ると思ってたんだ。つまり思い上がりだ。少女に助けは求められてなかったから余計なお世話だったけどな」

そう言い終えると坂柳は黙って聞き続けた後に静かに口を開いた。

「……途中から3人称から1人称になってましたよ？比企谷君」

「……………」

「此処からは私が自己解釈をしています。この話に出てくる少年は比企谷君、少女は――私、ですネ?」

その言葉を聞いても俺は反応しなかったが、坂柳は構うこと無く続けた。

「……私はずっと差別の様なものを受け続けていました。傲慢に聞こえるかもしれませんが、私には才能があります。その才能に身内以外の他人からは畏怖と嫉妬の反応しか返されませんでした。誰一人、私の個性として受け入れてもらえなかったんです」

人は集団で行動していると、必ず集団の中で『常識』と言う縛りを作る。その『常識』

と言うものは、多くの人が同じ行動を起こして多くが賛同する考え方をして、共通の身体的特徴があること。大半はそれに無意識に従い行動をしていると思う。しかし、『常識』の許容範囲外である『異質』な存在は従来の『常識』では測れない為に多くの人に受け入れられず、理解もされない。そして集団から弾き出される。

「私には心底理解出来ませんでした。何故、畏怖の様な反応をされないといけないのか。そして失望したんです。――このような人達ばかりなのか、と」

『異質』の差は集団には関係無い。目の腐りだけで気味悪がられたりするのだから。才能で畏怖と嫉妬を抱かれた坂柳もしかり。

「それを理解した時、私は周りを気にせずに過ごそうと思っただけです。誰にも理解されずとも自分やお父様は理解してくれている、それで充分と思っただけです。……………」

でも」

それでも坂柳は求めたのかもしれない。意識的ではなく無意識に。

「貴方は、比企谷君だけは違ったんです。貴方は私の才能を知っても、態度も、様子も、視線の奥にある感情も何も変わらずに私の個性の存在が当たり前という様に只々受け入れてくれた。私は……それが嬉しかった」

互いに探し求めたんだ。俺は憧れと言うものを、坂柳は安らぎを。差別と言うものを受け続けた者同士。

「側から見れば傷の舐め合い。嘲笑われたりするでしょう。何故ならこれは……ただの依存に過ぎないんですから」

そう、坂柳の言う通りだ。俺達は互いに抱いた感情を理由に心を余裕を持たせているに過ぎない。散々な目に遭った俺の嫌いな上辺だけの欺瞞。

……それでも。

……それでもっ。

「……それでも、どんなに嘲笑われ、罵られて、間違いだと周りに言われても、理解がされずともっ……私は、私は……この感情が依存だと言いたくないっ、だって、私達を結び付けてくれた大切なモノだから……」

決して周りには良いモノだとは思われないだろう。自分もそう思わない。粘着質で、汚れていて、到底美しいとは言えない。だけど、間違いだとは思わない。だって俺達は……救われたのだから。

「だから、私は言います。ありがとうございます、比企谷君。例え、助けてくれたつもりがなくて私の思い上がりだとしても、私は貴方に……救われました」

そう言つて今までで1番の微笑みを浮かべて言つてくれた坂柳。その微笑みを見て俺の目頭が熱くなる。しかし、そんな状態でもこれだけは絶対に言わなければならぬ。俺は自然と口角が上がつた状態で言つた。

「俺も……ありがとう。坂柳に憧れて、本当に良かった」

そう言うと、坂柳の眼から1滴の雫が流れる。しかし、それは悲しさからきている訳じゃないと、俺は思ったのだつた。

そ
し
て
そ
こ
で
目
の
前
が
暗
転

し――――

微睡む意識がはつきりしてきて、瞼越しに光が差し込み、眩しく感じる。そしてゆっくりと瞼を開けた。真っ先に目に飛び込んできたのは白い天井だった。

そして手に温もりを感じたので視線を移すと、銀髪のサイドテールの少女が俺のすぐ隣で俺の手を両手で握って穏やかな寝息を立てて寝ていた。そこで俺は自分が熱で倒れ込んだ事を思い出した。そしてその反対側を向くと青がかった銀髪の少女とストロベリーブอนด์色の髪の少女が隣で寝ていた。もう片方の手に2人の手が重ねられていた。

「・・・心配かけたな」

「・・・ええ、本当に心配しましたよ。八幡君」

俺の眩きに返答が来たので声の主のいる方向を見ると、穏やかな笑みを浮かべた有栖が俺を見ていた。

「……調子は如何ですか？」

「……しんどい」

「そうですか……では先生に『特別試験』には不参加と言うことを伝えても良いですか？」

特別試験……？やっぱりまだ何かあったのか。俺は有栖に聞こうとするが、その前に俺は別の事を言った。

「坂柳」

「……………何故、苗字で呼んで……………」

「……………お前は変わらないな。俺が憧れた時のままだ」

その言葉を聞いて有栖は驚きに目を見開いて、そして夢の最後に見たように一滴の雫を眼から流し、同じように万感の想いを込めた微笑みを見せてくれた。

「……………おかえりなさい。比企谷君っ」

「ああ・・・ただいま」

そんなやり取りに窓に映る夕焼けが俺達を淡く照らしていた。

恩を仇で返せば待つのは地獄

八幡が目覚める3時間程前、有栖は熱で倒れ込んだ八幡の容態を職員に連絡して、職員が来るのを待っていた。応急処置を施した状態の八幡の手を両手で握って。

「……一之瀬さん達に連絡して置いた方が良いでしょうかね」

八幡君に無理をさせたのは私の責任だ。それに彼はBクラスの生徒、少なくとも同じクラスの人物に事情を説明して謝罪をしなければならぬ。それに……少なくとも一之瀬さんや椎名さんは私と同じ感情を彼に寄せている筈だから。

そう思った私は、特別試験が行われる前に一之瀬さん達と交換して置いた連絡先にメールを送る。

へ八幡君が熱で倒れてしまつて私の部屋で看病しているので、403号室に来て下さいへ

そう連絡を送り、その僅か5分後に一之瀬さんと椎名さんが部屋に入ってきた。2人は慌てた様子で私に聞いてきた。

「八幡君！……坂柳さん、八幡君に一体何があつたの!？」

「事情を説明願えますか？坂柳さん」

八幡君の様子を見て、かなり焦っているのだろう。私は、1回落ち着いて下さい、お2人共。と落ち着かせる。そう言うのと2人は我に返ったのか1度深呼吸をして気持ち落ち着かせた。そして落ち着いた様子を見て私は事情を説明しようとした時、再度部屋の扉が開かれてBクラスの担任の星之宮先生と、この豪華客船の常駐している医師が入ってきた。他にも何人かの医療従事者が担架を持って入ってきていた。

「連絡が入ったから飛んできたけど。坂柳さん、比企谷君が熱で倒れた事情を知っているのなら改めて説明をして貰えるかな。比企谷君はとりあえず船の医療室に運ぶから事情は医療室の待合の所でお願いね」

「分かりました」

私は了承して、一之瀬さん達と共に部屋を出る。そしてベッドから応急処置で施した氷枕ごと八幡君は担架に移されて運ばれる。そしてその担架の後ろからついて行こうとすると、私達の後ろから声がかけられた。

「これ、一体何があつたのさ。坂柳」

私の派閥の人間の真澄さんだった。この騒ぎに訝しげな表情で近づいてきて、前の担架で運ばれる八幡君を見て驚いていた。そして動揺した様子で呟いた。

「比企谷が……まさかあの時の傷が……」

あの時の傷とは一体何なのだろうか。何らかの事情を知っている様子で小さく呟いた真澄さんに私は聞いた。

「八幡君がこうなってしまった一因を知っているんですか？真澄さん」

私の問いに真澄さんは一瞬だけ悩んだ様子を見せた後、意を決したのか小さく頷く。一之瀬さんや椎名さんはその反応に驚く。お2人には全く私の依頼について話していないようです。と言っても私も詳細を知らないのですが。事情を知っていると判断した星之宮先生は真澄さんも同伴する様に言うと、真澄さんは頷いた。

そして医療室へ担架に乗せられている八幡君が中に入って行き、私達は星之宮先生と隣の応接室に通された。そしてテーブルの中央の端に1つ、そのテーブルを挟むように2つずつ椅子が配置されているので、星之宮先生が中央の端の席に座ったので続く形で一之瀬さんと椎名さん、私と真澄さんが座った。

「じゃあまず、さっきまで比企谷君と一緒に居た坂柳さんから事情を説明してくれるかな?」

星之宮先生にそう言われたので、私は小さく頷いて八幡君の特別試験前に結んだ契約を話し始めた。

「特別試験の2日前に私はAクラスで対立している状態の葛城君の派閥を弱体化させようと、八幡君と契約を結んで葛城派を妨害してもらったのです」

私の言葉に事情を知っている真澄さんを除く3人は驚愕といった反応を見せた。すぐさま、一之瀬さんは確認をするように言った。

「葛城君の派閥の弱体化を頼んだのは何で……?」

「……私の派閥との拮抗状態を破りたかったからです。自分の力だけで行うには少し時間がかかりすぎる、かと言っても自分の派閥の人間に頼んでも葛城派に警戒されて膠着状態が続いてしまう。他クラスで葛城派を崩すことの出来る程の実力、そして私が信頼の置ける人物と考えた結果、八幡君に頼みました」

そう私は正直に話した。八幡君自身と、八幡君が信頼している一之瀬さんと椎名さんに申し訳なく思いながら。一之瀬さんは俯いて表情が窺えない。そして入れ替わるように今度は椎名さんが力強い眼差しを向けて聞いてきた。

「……坂柳さんは妨害する方法については指定はしましたか？」

一見、普通の聞き方のように思えるが、言い換えれば、それはつまり『八幡君に負担となるような方法を実行させたのか？』と暗に聞かれている。私は首を横に振って否定する。

「いえ、方法については指定していません。無理の無い範囲で。と言いましたから……」

椎名さんはその言葉に安堵した様子で、そうですか。と言った。私は彼女の優しさに感謝と罪悪感を感じた。そして言い訳が出来たと僅かに思ってしまった自分自身に自己嫌悪した。

「……なら、私は坂柳さんを責めないよ」

一之瀬さんが私の話を聞いて伏せていた顔を上げて言った。私は目を見開いて驚いた。正直、彼女は一二言は言うだろうと思っていたのでこの返答は予想外だった。一之瀬さんは続けた。

「確かにきつかけ坂柳さんだし、無理を強制させたんだったら問題だけど、八幡君自身がそうしたくてやった事なら、尊重するよ。まあ、クラスの誰かに話してくれなかったのは少し寂しいけどね。それに—————」

そう言葉を区切って、一之瀬さんは真っ直ぐな瞳と柔らかな慈愛に溢れた微笑みを向けてきた。瞳には羨望のようなものが写っているように見えた。

—————八幡君なら、全部俺が勝手にやったことだ。って言うだろうから。

その言葉を聞いた私達は納得するように頷いてしまった。八幡君は否定するだろうけれど、彼の取る行動はほとんどが他人の為になることだ。捻くれた言動はするし、他人を警戒するけれど他人に寄り添って背中を押してくれる人。他人の為に自分の事は厭わない人。優しい人だ。それでも彼は皆の中には自分が入っていないと真面目に言うのだろうけれど。

その謙虚さと、さりげない、それでいてとても暖かい彼に私は、私達は惹かれるのだ

ろう。一之瀬さんの言葉に私は八幡君を見守ってくれる人がいる事に対しての嬉しさと嫉妬を感じた。嫉妬に関しては触れないでおこう。私は、頭を下げて謝罪を言った。

「八幡君がこうなるきっかけを作ってしまったのは私なのでもう一度謝ります。申し訳ありませんでした。八幡君が目を覚ましたら謝ります」

私の謝罪を受け入れてくれた椎名さんと一之瀬さんは頷いてくれた。そして一度私の話しが済んだので星之宮先生が次に移った。

「さて、坂柳さんの話しが済んだから今度は神室さんの事情を聴こっか。神室さん、話せる？」

「・・・・・・はい」

私達の視線が真澄さんに集中する。そして一拍置いて事情を話し始めた。

「無人島の生活の1日目の昼過ぎ位に、森の奥に散歩しに行つて、散歩してたら比企谷

を見つけたんだけど、葉山も近くにいたの」

私は葉山君の名前が出たことに思わず目を細める。視界の端に映る一之瀬さんや椎名さんも眉目が鋭くなっている。また何かいちやもんを付けようとしていたのだろうか。そう思ったが、真澄さんから口にされた言葉はその想像を遥かに超えたものだつた。

「比企谷は誰かを探していたようで辺りを見渡して進んでたんだけど、その後ろから葉山が石で後頭部を殴りつけてた」

「[[[[.]]]]」

真澄さんが言った事に対して、この場にいる全員が声を洩らした。室内が凍りついてその様子に真澄さんは怖れるようにしながら更に言葉を続ける。これ以上、何があるのでしょうか？

「そして、気絶した比企谷のメモと付けていた時計を壊して去っていったのよ」

「時計を替えにきたのはその所為だったのね・・・」

星之宮先生は辻褄が合ったのか、そう呟いた。そして真澄さんはまた続ける。

「そして葉山が去った後に、気絶した比企谷を近くにあつた小屋まで運んでp tで購入した応急手当てキットを使って頭の治療をしたってかんじかな」

真澄さんが治療していたのか。その迅速な対応をしてくれたことに感謝しなければならぬ。今度、何処か寛げる場所を紹介しよう。そして真澄さんは星之宮先生に聞いた。

「比企谷は葉山の事を訴えないで良いって言ってたんですけど、もし此処で私が訴えたらどうなるんですか？」

真澄さんの質問に星之宮先生は少し考えた後、静かに答えた。

「……実際やってみないと分からないけど、本人の訴えよりも正当性も弱い上に処分も出来るかどうか分からないかな。神室さんは第3者だから出来たとしても嚴重注意程度だと思う。それに本人が訴えないと言っているならそもそも何も出来ないし」

「……ですよね」

星之宮先生の回答に期待は余りしていなかったのか表情を変えることなく相槌をうった真澄さん。それにしても何故、八幡君は訴えないのだろうか？龍園君と敵対したくはないと言っていたが、ここまでされていて訴えないのは少し変だ。それとも……まあ、それは追々八幡君に聞くとしよう。

「とりあえず比企谷君がこうなった事情も分かったわ。後で神室さんが話した事を一

応、比企谷君にも聞いてみるわね。・・・それにしても色々巻き込まれているみたいだね比企谷君は」

星之宮先生の呟きに全員が頷く。総武中の因縁がこの学校と絡み合っていて八幡君からすれば面倒臭いことこの上ないだろう。八幡君は平和に暮らしたいだけなのに。とぼやいていたが、それはもう不可能だろう。自覚があるのかはわからないが、八幡君はBクラスの主力だ。私からすれば一之瀬さんよりも遥かに厄介なのは八幡君だ。考え方もそうだが、彼の強みは思考を止めず、本質を見極められる頭脳と人の心理を容易く読み解く観察眼だ。そして最も感心したのが、『集団の心理の利用』だ。

文化祭の時や小学校のあの出来事であったが、八幡君が問題解決、及び解消する方法は人の心理を巧みに読み取って利用するというものが主だ。私が持っているコールドリーディングやホットリーディングと似ているが少しだけ違う。私は1対1の時に利用するが、彼は1対多数の時に利用している。それだけの心理掌握力を彼は持っているということになる。しかし、コールドリーディングやホットリーディングは極めれば心理と感情を掌握することも可能だが、八幡君は感情を余り利用出来ておらず、未完成だ。それでも十分な効果は発揮されるのだが。

「そうですね。何かとトラブルに巻き込まれやすい体質なのかもしれません。あんまり事件とかに関わりたくないって言ってましたから」

一之瀬さんは小さく苦笑を洩らして星之宮先生に言う。中学の因縁が無ければ彼の負担は大分マシになっていただろう。八幡君の能力は高校生の中では非常に高い。Aクラスの中でも上位に入るだろう。中学の事件さえ無ければAクラスに入れた可能性は極めて高い。もしも八幡君が『彼』と同じホワイトルーム生だったら『彼』以上の能力を持ったかもしれない。

「トラブルに巻き込まれやすいと言っても此処までのレベルは滅多にないと思うけどね……」

「そうですね。八幡君の周りにはかなりの問題を抱えている人が集まりやすいですから」

真澄さんと椎名さんがそんな言葉を口にする。その通りだ。八幡君に絡む人、雪ノ下

雪乃さんは最近大人しいが、葉山隼人^{愚者}と由比ヶ浜結衣^達は自分の行動を省みずに八幡君を苦しめ続けている。葉山隼人は集団に良い顔をしただけで八幡君を犠牲にして自分は安全なところで高みの見物、そして八幡君を使い潰して切り捨てた卑怯者。挙句の果ては傷付いた八幡君のフォローもしない。由比ヶ浜結衣は人の顔色を伺い、かと言って空気を読めると思えば八幡君の気持ちを無視し、能力も低いのに友達だからと許容範囲を超えた頼みを安請け合ひして深くも考えずに人を捲き込む厚顔無恥な人。更に自分が受けた頼みをこれと言って自分の解決策を提示せず他人にどうにかさせ、しかし理想通りにならないければその解決方法を否定し、拒絶する傲慢不遜な行動。最低も最低だ。

更に、八幡君が洩らした様に言っていたが、由比ヶ浜結衣は自分の犬を彼に交通事故から救われている。雪ノ下雪乃さんは加害者側の立場とは言え、彼女が直接事故を起こした訳では無いからまだ納得がいく。が、由比ヶ浜結衣は事故の原因をつくった人間だ。その上で直接八幡君へ謝罪をした訳ではない。それも入学時から2年の時まで話題にも上げようとしなかった。八幡君は、俺は他人に言い洩らすつもりもなかったが、余りにもあの態度に苛立ってしまつて愚痴ってしまった。と言っていた。一般的に見て由比ヶ浜結衣は相当な不義理である。

「……とりあえず八幡君のこの取り巻く環境を改善しなければいけないでしょうね」

私は静かに、それでありながらとてつもない怒りを乗せて呟く。すると一之瀬さんと椎名さんは頷き、真澄さんは私の表情と声を聴き、顔を引攣らせ、星之宮先生は苦笑する。

「あはは、比企谷君って此処まで愛されてるんだねえ。……坂柳さんがそこまで怒るとは、葉山君にちよつとだけ同情しちゃうなあ」

星之宮先生が呟くが何を同情する余地があるのかは想像通りでしょう。八幡君に黙ってやるのは申し訳ないですが、もう葉山隼人と由比ヶ浜結衣は潰してしまいたいです。八幡君が受けた痛みは100倍にして返しましょう。……それこそ死ぬ方がマシと思うほどの絶望を。

まあ……

「死んで痛みから逃れようとする 것도 絶対に許しませんがね……」

嗚呼、今から楽しみです。あの2人の絶望へと堕ちた顔が。

話しが済んだので、私は八幡君のいる場所に向かった。今後の動きと今まさに出来た
由比ヶ浜結衣と葉山隼人
玩具を使った『娯楽』を愉しみにして。

募らせる恋慕は焦りとなって

高熱で倒れて医療室に搬送されてから数時間が経過した。再び目が覚めてから有栖と会話していた。帆波やひよりはトイレに行ってる。気絶している間、見た夢——というか記憶——で思い出したが、有栖と俺は所謂幼馴染だった。何処かで見た感覚はしたが、まさか小学校で関わりがあるなんてな。

「思い出したんですね。あの時の事を」

その言葉に頬を掻きながら頷くと、有栖はとても嬉しそうに微笑んだ。正直、あの頃の記憶は恥ずかしい出来事ばかりだった。だって有栖といちやいちやしているなんて思わねえし。ていうか中学の時の俺と別人じゃねえか。

しかし、何で小学校の頃の記憶が微妙に途切れてんだろうか。1年から4年生の記憶は残っているのに、5年の頃からの記憶は今さっき思い出されるまで忘れていた。あの記憶は、多分だが中学で雪ノ下に会って抱いた憧れとほぼ同じ感情を抱いていた。つま

り俺の憧れは雪ノ下が原点ではなくて有栖だった。しかも物事の解決方法もあれが原点になっている。かなり重要な出来事だったのだが、忘れてしまうとは……

そんなことを考えていると、星之宮先生と医師が入って来た。星之宮先生は俺を見ると安堵したように溜息をついた。そして表情を切り替えて話しかけてきた。

「目が覚めたところでいきなりだけど、坂柳さんと神室さんから事情は聞いたから。何があつたか一応比企谷君からも聞かせて欲しいんだけど良いよね？」

ちらつと有栖を見ると、頷いたので俺は分かりました。と答えて事情を説明する。

「……神室さんが言ったことと相違ないわね。分かつたわ、ありがとう。それで比企谷君は葉山君を訴えるつもりはあるの？」

その言葉に思わず言葉に詰まってしまう。此処には星之宮先生だけでなく有栖もいる。有栖は知リたそうに目を向けてくるが、俺としてはあまり話したくない。主に恥ずかしいからだ。俺は有栖に申し訳なく思いながらも言った。

「有栖、悪いが部屋を出てもらえないか？」

「・・・何故でしょうか？私には知られたくないのですか？」

俺は頷くと、有栖は俺の目を見てくる。俺も目を逸らさず見つめ返す。ここで目を逸らしてしまえば、有栖は此処に残るだろう。此奴は意外に頑固だからな。そして数秒間その状態が続いた後、有栖は溜息を吐いていった。

「はあ・・・、分かりました。理由は聞きません。でもいつか話してくれることを約束して下さい」

「・・・ああ、約束する」

俺は有栖の言葉に頷くと、有栖は静かに部屋を出て行くこうとするのでその背中に向けて言った。

「すまんが、帆波やひより、神室が此処に来ても入れないで欲しい」

「分かりました。ではまた」

有栖は俺の頼みに頷いてくれて、部屋を出て行き、扉を閉めた。それを見送っていると星之宮先生が疑問を浮かべた様子で聞いてきた。

「いいの？坂柳さんは君の事、本当に心配してたけど」

「ええ、これは俺の問題なので俺自身が解決しないといけませんし。あんまり巻き込みたくないんですよ」

そう言うと、星之宮先生は冷ややかな、それでいて悲しそうな視線を向けてきた。何でそんな視線を向けてくるんだよ。そんな視線を向けてくるとは思わなかったので動揺していると、先生は言った。

「……本当にそう思ってるのかな？」

「……そうですけど?」

「先生としてはあまり感心しないわ。だって坂柳さんは貴方の力になりたいと思ってるはずだもの。もちろん一之瀬さんも椎名さんも神室さんも。理由を聞かせて欲しいと思ってるんじゃないかしら?」

そのどこか曖昧な言い回しに俺は思わず苛立ちを込めて睥睨しながら聞いた。この人の他人を食ったような態度が如何にも気持ち悪い。

「……何が言いたいんですか?」

「本当は分かってる癖に。先生、そう言う気づいてない振りをして逃げる人は一番嫌いな」

「俺はその他人を食ったような態度といつもその繕った顔で接してる貴方は苦手ですよ」

先生は眉をピクリと反応させると笑顔を向けてくる。崩れた表情を見せない為だろう。それに目が怖い。まるで玩具を見つけたと言う様な感じだ。思わず冷や汗が流れる。この人に何があつたかは知らんし興味も無いが、闇が深そうだなあ。しかし、それも一瞬だけで直ぐに元の雰囲気になつて言つた。

「話しが逸れたから戻そうか。それで比企谷君は葉山君を訴えるのかな？」

「今は訴えるつもりはありません。これで良いですかね」

「理由は？」

「龍園に処分を頼んだんでそれで充分ですから」

別件で龍園に葉山の処分を任せているので今頃、あのサングラスを着けたムキムキ黒人にぼこられてそうだな。葉山の立場だったらゾツとするが同情はしない。星之宮先生はそれを聞いて納得していない様子だが、聞き出すこともせずに言つた。

「そう。まあ、比企谷君が気にしていないならそれで良いんだけど。だけど先生としては報告して欲しいかな。心配しちゃうもの」

俺の頬を指でつんつんしながら楽しそうに言ってくる。前のめりなんの止めて！そのたわわな2つのものが強調されて思わず八幡の八幡が反応しそうになるから！後、アホ毛引つ張らんで下さい、結構痛いんで。

俺は内心辟易して先生の弄りをやり過ぎしていると、先生はふと思い出したように聞いてきた。

「そう言えば体調は大丈夫？」

「聞くの遅くないっすかねえ．．．まあ、結構マシにはなりましたよ」

目覚めたときは結構怠かったが、熱も引いてきて吐き気も無くなった。そして俺は起きた直後の有栖とのやり取りを思い出して聞いた。

「『特別試験』の事ですか？」

俺の言葉に先生は一瞬目を見開くと、溜息をそつと吐く。当たり前みたいだな。十中八九面倒臭いだろうなあ、働きたくねえなあ……

「まあ、予想はついちゃうか。試験内容は言えないけど当たりよ。それで参加出来る？」

おっと、これはもしかしてサボれちゃう？じゃあ「仮病使っても良いけどクラスに影響出るかもしれないわよ？」……何で俺の考えが読めるの？俺はサトラレなの？表情には出してないはずなんだがなあ。俺は溜息を吐いて言った。

「参加しますよ。サボってクラスに後ろ指向けられて悪目立ちするよりマシなんで……」

「ふふ、じゃあ参加という事で良いのね？」

俺は頷くと先生は用件は済んだのか、安静にしててねー。と言って部屋を出ると、有

栖と帆波が入ってきた。2人はさつきまで座っていた椅子に座って聞いてきた。

「お話しは終わったようですね。それで体調は如何ですか？」

「マシになったから大丈夫だ。特別試験も出れる」

「そうですか。なら良かったです」

「それにしてもやっぱり特別試験があつたみたいだね。無人島の試験みたいな体力を使う試験ではないと思うけど無理しちや駄目だよ？八幡君」

俺だつて無理したくないが、試験内容次第だから何とも言えないんだよなあ。帆波の言葉に頷く。そしてふと見てみると何か帆波の表情が堅い。俺は気になったので聞いてみる。

「何かあつたのか？表情が変だぞ？」

すると帆波は、何でもないよ。と何時もの表情に戻った。そして暫く雑談しているとひよりと神室も入ってきた。

「あ、八幡君。体調は大丈夫ですか？」

「顔色は良くなってるけど・・・」

大丈夫だ。と答えるとひよりと神室は安心したかのように息を吐いて、ひよりも近くの椅子に座る。神室は立ったまま雑談に参加する。そしてふと、帆波が聞いてきた。

「八幡君、坂柳さんに依頼を頼まれたんでしょ？」

「・・・ああ」

「何を坂柳さんに頼んだの？」

俺は有栖を見る。すると微笑み返される。いや、微笑み返されても困るんだが・・・

多分、さっきの腹いせか。俺は溜息を吐いて話し始める。押して駄目なら諦めろ、だしな。

「……『Aクラスを特別試験で妨害して有栖の派閥の援護をする代わりに、この1年間試験以外の時にBクラスに損害となる行動はしないで欲しい』これがその条件だ」

その言葉に帆波は驚く。俺は頬を掻きながらそつぽを向いた。すると帆波に頬を掴まれて視線を合わせさせてくる。あまりに真剣な眼に思わず唾を呑み込んだ。

「……八幡君、私は、いや私達は貴方だけに抱え込ませる気はないよ。だから今後は絶対相談すること。これを約束して」

「……ああ、分かった」

そして帆波は笑顔になると話しは変わり、そのままのように無人島で生活したかという話しになった。4人とも葉山を何故訴えないのかと聞いてはこなかった。俺はその気遣いに感謝しつつ話を聞いていた。そこで俺は気付けなかった。

帆波の顔が曇っていたことに。そして有栖が不敵な笑みを浮かべていたことに。

数時間前――――

八幡君は私達を余り頼ろうとしない。それは今まで一緒に行動していて分かったことだった。彼は他人と距離を置いて踏み込ませない、踏み込もうとすると更に距離を置いてしまう。

私が彼に抱いた第1印象は掴めない人という感じだった。クラスにもあまり溶け込もうとせず、一歩引いた所からそれを眺める。まるで他人と関わりたくないというように。

しかし彼と接していく内にその考えは間違っていると思うようになった。彼は人一倍優しい。面倒臭そうな顔していてもやる事はちゃんとやるし、話しだつて聞いてくれる。私が悩んでいて相談したときは捻くれた物言いながらもアドバイスをくれる。クラスの子が困った時助けているのを見たこともある。

佐倉さんのストーカー事件の時も駆け付けて守ってくれた。何より私の過去を聞いて受け入れてくれた。私の罪を罰して、導いてくれた。私が彼と一緒に過ごしたいと思

い始めたのもこの時。そして気付いた。

彼は他人の事を警戒しているのだ。特に好意は。無理もないと思う。彼は信じていた人に拒絶されて傷付いた。だから他人と距離を置いて、皆の様子を眺めるのだ。でも、困ったら寄り添ってくれる。そして背中をぽんと押して元の場所に戻して、八幡君はまたその様子を眺めるのだ。

特別試験で彼が行動している理由を知って、私は悲しみと嬉しさが混ざった様な思いを抱いた。私達を頼ってくれなかったという悲しみと私達を守ろうとしてくれたという嬉しさだった。

私は一度心の整理をする為に八幡君が寝ている部屋を出て一人で考えていたので、区切りを付けた私は八幡君の部屋に戻ろうとする。すると待合室の所で坂柳さんが座っているのを見つけた。

「あれ？坂柳さん、話は終わったの？」

「いえ、八幡君が星之宮先生と2人で話したいと言われたので此処で待っているのですよ」

そうなんだ。と相槌を打つ。丁度2人しかいないし、聞いてみよう。

「ねえ、前から思っていたんだけどね。坂柳さんって八幡君の事どう思っているの?」

「おや、一之瀬さんから話し掛けられるとは思いませんでしたよ。ふむ、八幡君をどう思っているのか、ですか」

坂柳さんは私の言葉に少し考える様子を見せる。さっきの坂柳さんの葉山君達への言葉。

『まあ、死んで痛みから逃れようとするのも絶対に許しませんかね』

八幡君に並々ならない想いを持っているのは確かだろう。正直そこまで言うとは思わなかったからとても驚いた。そして坂柳さんは口を開いた。

「まあ、彼は私を助けてくれた人なんですよ」

八幡君に助けられた・・・私と同じ。そしてそのまま続けた。

「正直、私はこの世の中がつまらないと思つてます。上部しか見ず簡単に判断する愚かな人達。才能に嫉妬し、努力せず汚い方法で蹴落とそうとする人達。そんな人達を沢山私は見てきました」

「でも、彼は違う。見た目で、才能で、強さだけで判断しない。中身を見て、誰も知ろうとしない努力を見て、深く、深く知ろうとしてくれます。弱さを認めてくれます。彼自身、虐められてきたという理由もあるのでしょう。痛みを知っているから、痛みを、辛身を、全てを見ようと」

弱さ、私の罪・・・そうだ、彼は受け入れてくれた。

「自分が傷つくのが一番怖いはずなのに、嫌な顔を見せずに一人で抱え込もうとする彼

が、とても愛しいんです」

それは愛の告白だった。すごいなあ、此処まで想っているなんて。純粋な坂柳さんの想いに私は思わず尻込みしそうになる。そして坂柳さんは言った。

「まあ、一言で言うなら私は彼が幸せになつてくれるなら”死んでも構わない”のですよ」

その言葉に私は言葉を失う。嘘を言っているようには見えない程の強い瞳。敵わないと思つてしまいそうになる。すると坂柳さんは私に聞いてきた。まるで品定めするような目をしながら。

「一之瀬さんは八幡君の事をどう思っているのですか？」

その質問に言葉を詰まらせてしまう。私も彼が好きなのだと思う。しかし、坂柳さんの程の想いを持っているのかと訊かれれば答えられない。坂柳さんに対抗出来る程の覚悟を今の私は持ち合わせていない。

「ふふ、意地悪でしたかね。彼のこと想うのは自由です。でも一之瀬さん、貴女がもし彼のことを傷付けたら―――――覚悟をして下さいね？」

吞まれそうになる程の気迫に冷や汗を流す。恐らく彼女は彼が傷付けられたと判断すれば容赦無く潰そうとしてくるだろう。それも殺す事も厭わないと言う様に。

そして星之宮先生が部屋から出たので坂柳さんは中に入ろうとする。その後、このように続いた時、耳元で呟かれた。

―――――中途半端は許しませんよ？―――――

その言葉に答える術を私は持っていなかった。

番外編

その日は誰もが幸せである日と願って

眩しい……ん、んう、朝なのか……？

目蓋越しに光を感じたので、ゆっくりと目を開く。視界がぼやけてはつきりせず、その他の感覚も曖昧でまるでふわふわしているような不思議な感覚だった。

しかし、段々と視界がはつきり見えてきて他の感覚も分かってきた。そして俺の視界が白い天井を映した。俺はゆっくりと頭を働かせ始めて此処が何処なのか考えて、答えに辿りついた。此処は豪華客船の医務室で、俺は昨日は此処のベッドで寝たんだったな。

そう考えていると、頬を誰かにゆつくりと撫でられた。そして声が掛けられる。

「起きましたか……？おはようございます八幡君」

その声のする方に目を向けて、俺はその人物に向かって言った。

「ん．．．ひよりか．．．おはよう」

そこに居たのはひよりだった。少し意外に思った。ひよりが居るとは思わなかった。時計の設置してある場所に視線を移す。時刻は朝の6時半だった。俺は寝起き直後特有の浮遊したようなはつきりしない頭で喋る。

「早いな．．．ひより、何でこんなに早く此処に来たんだ．．．？」

俺が聞くと、ひよりは少し微笑んで俺の頬を優しく、ゆつくりと撫でながら言った。
ん、撫で方気持ちいいな。

「少し八幡君が心配だったの、何かあった時に対応する為に早起きました」

「そうか．．．心配かけたな」

気を遣わせてしまった事が少し申し訳なかったので、そう言うときひよりは首を横に振って、優しい微笑みを浮かべたままで言った。今度は俺の頭を撫で始めた。少し擦りたい感覚に俺は目を細める。

「いえ、大丈夫ですよ。顔色と今の様子を見て、安心しました」

俺は、ありがとう。と言うと、そこで会話が途切れる。時計の秒針になる音だけが聞こえる。ひよりは俺の頭を撫で続けているが俺は止めない。ベッドに横になったままゆっくりと頭を撫でられるのが凄く心地よいからだ。会話がない沈黙が気まずいなんて事は思わず、撫でられたことで再び生み出された微睡みと太陽の程よい光と暖かさ、また眠りそうになる。

暖かいな。いつ振りだったか、こうやって頭を撫でられたのは。親父や母ちゃんに撫でられたのは幼稚園の頃ぐらいだったか？小町も偶に撫でてくれたが、小町は俺が撫でる側だったからな。しかも、此処まで優しく撫でられた事は2、3回位しか覚えがない。

久しぶりの感覚に俺は身を委ねる。そしてひよりに言った。

「……また少し、寝る」

「はい。病み上がりなので、ゆっくり休んでくださいね。良い時間になったら起こしますから……」

俺はその返答に、まるで夫婦になったみたいだな。と途切れかけた意識の中で夢の様な事を考えて、その後と言った。

「……おや、すみ」

そして俺はひよりの太陽によって幻想的とまで思える微笑みを最後に見て意識を手放した。心地よい暖かさに包まれながら。

誰かに揺さ振られる。そして徐々に耳が周りの音を拾う。誰かに呼びかけられていくようだ。

「……………まん君、はちま……………八幡君、起きて下さい」

優しく呼びかけてくる声に従い、俺は再び目をゆっくり開いた。2度目なので1度目より早く意識がはつきりしてきた。声の主はひよりだった。そしてひよりの居る方を向くと、そこに有栖と帆波が加わっていた。俺が目覚めたのを見て全員が微笑んだ。

「おはようございます。八幡君、身体の調子は如何ですか？」

「……ん、もう怠くも無いし、身体も調子が戻った」

「良かった。これでまた何時もみたいに動けるね」

俺の言葉に有栖と帆波は穏やかな声で言った。時刻は9時で、日も更に暑さと眩しさが増した気がする。流石に2度寝したおかげで眠くもならないので俺はゆっくりと身体を起こして聞いた。

「それで、何か用があるのか？」

「私達は調子を見にきたのと、食事を運びに来たのですよ。ひよりさんは随分と早くて驚きましたか……」

有栖がそう言つて、帆波が車輪付きの机を俺のベッドに通してラップが掛かった状態

のトレイに乗せてある朝食を置いて、朝食の内容を言ってくれた。

「病み上がりだから御飯少量にお浸し、後栄養が取れる様に少し野菜が多めの味噌汁に白身魚のソテーにしたよ。味付け海苔も付いてるから食欲は出ると思うよ」

昨日はそのまま何も食わずに寝てたから何時もより食欲はある。しかし、俺の事を考えてくれたようで病み上がりを考慮して量とメニューを調整してくれたようだ。何から何まで至れり尽くせりの対応に、俺は申し訳無いと思って言った。

「何から何まで済まないな。朝食まで用意してくれるとは思わなかった」

俺の言葉に有栖と帆波は首を横に振って言った。

「いいえ、元はと言えば私の依頼がきっかけなので謝らないで下さい。それにこれはお礼でもあるのですよ」

「待て、俺が倒れたのは自分がそうなるような行動を自分自身で取ったから――」「だか

ら謝らなくていい。と、やはりそう言うと思いましたよ」っ

俺の言葉を遮って言葉を言う有栖。その目は真剣そのもので、俺は思わず言葉を詰まらせる。そして有栖は言った。

「貴方はそう思ってくれていたとしても私はそう思えないのです。責任を伴うことに人を巻き込んでしまったなら責任は負わなければなりません。責任から逃げるのは私が一番嫌いな事です。依頼の事は本当に申し訳ありませんでした。そしてありがとうございます」

有栖は頭を下げて謝罪とお礼を言った。俺はその様子に苦笑してしまった。

有栖はこういう奴だったな。他人に期待や理想を押し付けて勝手に勝手に失望してきた俺が憧れた、否、今も憧れている彼女は。だったら俺も難しく考えるのは止めよう。

難しく考え過ぎて、言葉を聞き、観察する毎に俺は裏が無いかと疑ってきた。この思

考も、捻くれていると言われる言動も、他人が怖かったからだ。信頼すれば俺は勝手に失望して、裏切られたと思ってしまう。

その事が、その見えない醜い感情が怖かったから。文化祭も修学旅行も、その子供の癪癪の様なものから少し離れて視野を広げればあんなに拗れたりしなかったのかも知れない。

俺は1度失敗した。その思考を持つて壁にぶち当たった。だからこそ失敗しない為に、いや、失敗を素直に受け入れて。『変わらない自分の肯定』から『変わった自分の否定』になることじゃない。

『変わったからこそ、今まで歩んできた道のりを肯定出来る』そんな人間に、俺はなろう。

素直に、受け入れて良いよな。そう思って俺は有栖に言った。

「……………ああ、受け取るよ。ありがとう」

俺の言葉に有栖は頭を上げて、そしてひよりと帆波と共に驚いた様な表情になった。
ん？何で驚いてんの？そんな意外だったのか。何それ酷い。

3人が驚いたのは反応の事ではないのを八幡は知らない。何故なら、その時の八幡の表情は……………

……………純粹で何一つ屈託の無い、笑顔だったから。

そして俺は3人が通常の状態に戻った後、食事を摂ろうとしたのだが。今現在、ついさっきの矜持を撤回しそうになる出来事が起こっている。それは……

「八幡君、あーん」

魚の解された身が掴まれた箸を帆波が俺の口に運んでくる。俺は顔を逸らして帆波に苦言を洩らす。ジト目で睨んでいる有栖とひよりに冷や汗を流す。

「いや、帆波さん？俺は自分で食えるってー」

「にやあにー？八幡君、もしかして口移しの方が良かったかにやー？」

「滅相もございせんッ！」

そんなこの状況で最も恐ろしい事を言われたので即撤回する。だって帆波の言葉に有栖とひよりのジト目が絶対零度の視線になって身体から黒いオーラが洩れ始めたんだもん。怖え……。それに帆波がキャラ崩壊を起こしたのか頬がゆるつゆるで、語尾に、にやーって猫の語尾が付いてる。こんなんクラスの誰かに見られたら黒歴史確定だ。

「何故さつき私はグーを・・・」

有栖とひよりは今まで見た中で一番悔しそうな顔で自分の右手を見つめながら呟いている。3人は俺に御飯を食べさせようとした。そして誰が俺に食べさせるかと同じやんけんをした。あそこまでシリアスな空気じゃんけんしているのを見るのは初めてだったわ。この光景を材木座が見たら発狂すんだろうな。と、現実逃避しながら俺は帆波から運ばれる朝食を食べていた。

そして、後から悶える様な食事を済ました後、俺は疑問に思った事を聞く。

「何でここまでしてくれるんだ？」

俺の質問に有栖とひよりは呆れ気味に溜息を吐いた。え、俺、何か溜息つかれる様なことした覚えはないんだけど。俺は頭を捻って考える。ちなみに帆波は自分の言動を思い返して身悶えてる。

「はあー、今日はー」

有栖が答えを言おうとした時、ノック音があった。医師の人か? と思って、どうぞ。と言うと扉が開かれてそこから現れたのは。

「見舞いに来たぜ、比企谷」

「相変わらず揃ってるわね。4人共……」

Aクラスの有栖の部下である神室と橋本に。

「倒れたって聞いたから来たけど、大丈夫かー? 比企谷」

「ちよつと声がでかいから静かにしろ。柴田」

「一之瀬さんつ来ましたよ」

「千尋ちゃんは本当に帆波ちゃんが好きだね……。比企谷君、調子は大丈夫?」

Bクラスの戸部ボジの柴田、参謀の神崎、帆波大好きっ娘の白波、そして無人島試験でリーダーを勤めた網倉。

「……大丈夫か、比企谷」

「無表情だと不審に思われるわよ。綾小路君」

「綾小路君、もうちょつと感情を込めようよ……比企谷君、お見舞いに来たよっ」

「比企谷君、貴方また無茶をしたようね」

Dクラスの、何故来たのか分からん相変わらず無表情の綾小路、生徒会長の妹の堀北、俺の苦手とする強化外骨格を着けた櫛田、ついこの間やり直した雪ノ下がいた。

俺は目を見開いてここにいるメンバーを見て驚いた。

「AクラスとBクラスは兎も角として、Dクラスのお前らはどうして来たんだ？」

俺が聞くと、代表として雪ノ下が言った。

「貴方達に下着窃盗事件の解決を手伝ってもらったお礼を代表として私達が言いに来たのよ。平田君は少し軽井沢さん達に付き添っているから来れなかったから伝言、ありがとう。だそうよ。……由比ヶ浜さんには伝えてないから大丈夫よ」

最後に俺だけに聞こえるような声で伝えられた事に俺は、そうか。と言って納得する。由比ヶ浜が此処に来たら命がヤバいからな、由比ヶ浜の。有栖とひよりは俺と雪ノ下のやり取りを見て驚いた様な表情を浮かべた。そう思えば雪ノ下とやり直した事を言つてなかつたな。帆波は下着窃盗事件の時に察しがついてたのか驚きはなかつた。

まあ、それは後として、さつき有栖が言いかけた事が気になった俺は聞く。

「それで有栖、さつきは何て言いかけたのか教えてくれ」

「……今日は、貴方の……比企谷八幡の誕生日ですよ」

……えっ、今日は何月何日だ。俺はスマホの電源を入れてホーム画面に表示されている日付けを確認する。『8月8日』と表示されていた。

「あ、マジだ」

俺の反応に皆呆れ気味だった。あの無表情の綾小路でさえ、視線に呆れの色が混じっている。それと俺の反応見て爆笑した柴田と橋本は後でしほこう。そして帆波が苦笑しつつ、言った。

「にやはは……八幡君って私の誕生日を祝ってくれた時も前日に神崎君に伝えられて気付いたって言ってたもんね」

「いや、休日だったし。特に誕生日とか聞く機会が訪れなかったしな」

聞く機会がなかっただけで、聞くことがあれば小町に躰けられた俺ならば祝った可能

性もなきにしもあらず。きつと、多分、恐らく。だから白波さん睨んでこないでえ!! 怖すぎる上に黒いオーラがダダ漏れだからあ!! 本当に帆波大好きフリスキー（ガチ百合）だな。

———3週間前の7月19日の事———

俺が何時も通りに授業を受けて昼休みを過ごしていると、一之瀬がやって来て俺に話し掛けた。

「八幡君、今時間空いてるかな？」

「いや、今あれがあれだから———」

「八幡君がそう言うのって時間が空いている時の台詞だよ。もう誤魔化されないからね！」

俺はこの言葉で2度、一之瀬を騙した事があったのだが、基本的に他人の意見を最大限信用している一之瀬に使うと罪悪感が半端ない。じゃあ何で繰り返すのかって？ まあ、軽い冗談のつもりなんだが。これ以上は流石に申し訳ないのでこれ以降はやめる。

一之瀬は戸塚と一緒に純粹過ぎるために騙されやすい。まあ、意外と鋭いところも多いのでオレオレ詐欺には引つかからんだろうが、訪問販売とかだったら買わされそうなんだよなあ。と考えながら俺は言った。

「……まあ、暇だけ。で、何かあんのか？」

そう聞くと一之瀬は、若干緊張しているような面持ちだった。俺は怪訝に思いながら言葉を待つ。やがて言った。

「明日、2人で出掛けたいんだけど良いかな？」

その言葉を言った一之瀬は真剣な表情だが、瞳は不安が隠せてないのか揺れている。茶化せる雰囲気ではない為、こつちも真剣に考える。まあ、世話になつてるし……こつちも何かで返そうと思つていたから丁度良いか。

「……良いぞ。あんまり人が多過ぎるところは勘弁な」

「本当？ありがとうございます。八幡君！」

そう嬉しそうな表情でお礼を言ってチャイム5分前着席で一之瀬は自分の席に戻った。そんな嬉しそうな表情されたら勘違いしそうだからやめて欲しいものだ。

そしてその日の夜に待ち合わせの時間と何処に行くかを聞いた後に神崎から――一之瀬の計らいによつてBクラスの何人かとメルアドを交換したのでその内の1人――メールが届いた。

〈明日は一之瀬の誕生日らしい〉

〈そうなのか〉

〈俺達も何かやってやりたいが、何をしてあげられるんだろうな〉

そんなやり取りをした俺は静かに1人寮の部屋で言った。

「誕生日ねえ・・・」

そして2人で出掛けたのだが、その内容はまたの機会にする。

—————現在—————

「八幡君？」

思い返していると、有栖に呼び掛けられた為に意識を戻す。そして俺が意識を向けたのを確認して言った。

「まあ、今は誕生日プレゼントが用意出来てないので祝いの言葉だけ先に。八幡君——」

『誕生日おめでとう！（ぎざいます）』

「ッ!!」

打ち合わせしていないだろうに、揃ったその言葉を聞いて俺は言い表せない暖かさに言葉を失う。そして有栖が一步前に来て俺の頭をゆっくり撫で始めた。慈悲む様な手付きに何故か目の奥がじんとした。俺は今浮かべているであろう表情を見せない為に俯く。

「―――本当に大きくなりましたね。また貴方の歳を重ねた瞬間を見る事が出来て私はとても嬉しいですよ」

「・・・ッ」

何時もなら、お前は俺の母ちゃんか。と突っ込んで誤魔化せるのに、場の空気に当て

られたのか、言葉が出ない。目の前が滲んできた中、有栖は俺の頭から手を離し、後ろに下がった。そして今度は。

「八幡君、私からはね。――何時も、助けてくれてありがとう。面倒臭いつて言いながらも色々話しに付き合ってくれたり、やる事に最後まで手伝ってくれてありがとう。私の為に怒ってくれたり、私の弱さを受け止めてくれてありがとう。そんな私を見守ってくれてありがとう。生まれて来て、私達と出逢ってくれてありがとう。こんなに嬉しくさせて大切だと思える様々なモノをくれて――――――――――本当にありがとう」

俺の両手を包み込む様に帆波の両手で持つて、帆波はそう言った。何か暖かいモノが両頬を伝いポタポタと落ち始める。帆波も離れて後ろに戻る。そして近づいて来たのは。

も小町だけだし、小遣いだって貰うし、買いたい物だって買ってもらったので愛情を貰えてないと言う訳では無いが、両親から誕生日を祝ってもらった事は殆ど記憶にない。プレゼントは貰っているが、5千円札だけ。明確な祝いの言葉も殆ど小町からしか聞いた事がない。

中学だって、奉仕部という場所があつて初めて祝つて貰う位で、それが無ければ祝つて貰うどころか、そこで出逢う雪ノ下や平塚先生、戸塚、材木座、川崎、城廻先輩に後輩の一色。その誰一人として深く関わる機会すらなかっただろう。

『ヒキタニの奴来やがつたよ。もう消えれば良いのに』

『空気悪くなるし、学校の評価下がって、俺達の内申にも響くからひっそりとバレないように死ねよマジで』

『あんな屑、私達と同じ空気を吸って欲しくないよね。ほんと』

『ハハッ！お前はストレス解消のサンドバッグ兼財布なッ!!』

そんな侮蔑や嫌悪といった感情と傷が残る程では無いが、それなりの暴力を受け続けた中学3年の毎日。本当にキツ過ぎて自殺だって頭に浮かんだ。

それでも支えてくれる小町と家族の為に。

励まし続けてくれた平塚先生と戸塚達の恩を返す為に。

生き抜いて、生きる希望を棄てないで、学校に通い続けて。

卒業して、そしてこの学校に逃げて、誰も信頼しないよう最低限しか関わらない様に意識をしながら生活して。

それでも俺を追うように来た由比ヶ浜達の姿があつた事に諦めだつてした。どんなに上手く立ち回ろうとしても台無しになるんだと、俺はこうやって生きるのに苦しむ。運命論者じゃない俺でもこれが運命なんだと思つてしまう。

でも、それでもこうやって言つてくれる彼女達が居れば、それだけで良い。それだけで良かったんだ。俺が欲しかったものは、すぐそこにあつたから。

何も言わずとも完全に理解出来るとか、悍ましくて、傲慢で、何処までも浅ましい利己的な願い、そんなモノは未だに見つからないけれど。

それでも俺が望んだモノは見つかった気がする。そんな形が無くてどう表現したら良いのか分からないモノ。だから名前をつけられないけれど。それもいつか分かる日が来る事を願ってこの想いと、彼女達が居れば分かる気がするから。

だから探し続けよう。願わくは彼女達と歩んでいけることを。俺はこの日を絶対に忘れない。何があろうと、絶対に。

俺は情け無い泣きつ面で、それでも晴れやかに、こう言った。

「ありがとうッ・・・」

祝ってくれて、他人との出逢いを尊いものだと思わせてくれて、大切なモノを見つけてさせてくれて、何とも思っていなかった日をこんなにも愛しいと想わせてくれて。

この日は誰もが幸せである日と願って。

Happy Birthday . . .

■ ■ ■ は羨んだ。こんな表情が出来る目の前で泣いている少年に。どうしたらそんな表情が出来るのか分からなかったから。

だから、この少年を見て学ぼう、学習しよう。そうすれば……

「オレは、『俺』になれる……」

そう周りに聞こえない声で、小さな、されど消えることない願いを呟いた。

最悪な組み合わせの特別試験

夜空を見上げると、そこには都会では中々観ることが出来ない満天の星空だった。8月10日の午後9時、俺は船のデッキから空を静かに眺めていた。

俺はイヤホンを付けてデッキの所に設置してあるベンチに座って曲を聴いている。聴いている曲はこの空に関する曲だ。

「小町に写真撮って見せてやりてえな……」

そう呟きが洩れるくらいには綺麗だと思える星空。小町は元気でやってんだろっか。男とか作ってないだろうな、あの川崎大志とか言う小僧と付き合ってたらお兄ちゃん、殺りに行っちゃうよ？もちろんん大志を。あ、でも親父に殺られるだろうから大丈夫か。

そんな事を星空を眺めながら考える。そうして数分間ボーっとしていると眠気が襲ってきた。部屋に戻るか。俺はベンチから腰を上げて部屋に戻ろうとした時、スマホ

が振動した。

「何だ・・・？」

こんな時間に掛けてきそうな奴は知り合いにはいない。見当がつかない中、確認してみると予想にもしなかった人物名が表示されていた。『白鷺千聖』と。俺はげんなりしてしまふ。無視してえ・・・しかし無視すれば今後の学校生活の平穏が脅かされそうなので、諦めて出ることにする。

「・・・もしもし」

『もしもし、今はもう帰りの船の中かしら？』

電話越しでもよく通る声だ。思わず力を抜いてしまいそうになるが気を引き締め直して俺は用件を聞くことにした。なるべく会話の主導権は握らせないように細心の注意を払いながら。

「……そうですけど。こんな時間に一体何の用ですかね」

『……ふふ、せっかちな男は嫌われるわよ。と普通なら言うのだろうけど、私は嫌いじゃないわ。寧ろ好きよ』

最後の言葉は今直接耳元で囁かれたような感覚に陥った。早速会話の主導権を握ってこようとしたな。その事を予想していた俺は何とか早まった鼓動を鎮めつつ、動揺が悟られないように努めつつ、息を吐いてもう一度聞いた。

「……そういうのいいんで。用件を言って欲しいんですが」

「あら、こういうのはお嫌いかしら？まあ、いいわ。調子是如何なのか聞きたかったのと、デートはいつにするかをね。後、生徒会の事で貴方に耳寄りの情報をね」

何故この人が俺にそんな事をしてんだ？それに耳寄りな生徒会の情報って、この人は生徒会に属してなかったはずだ。

「デートは勘弁して下さいよ……それに白鷺先輩って生徒会所属してましたっけ？何処から情報を？」

『デートは拒否したら噂になるわよ？生徒会の情報は朝比奈ちゃんから貰っているわ』

噂になるって、どんだけ人気あんだよこの人。退路無いじゃねえか……。それと朝比奈って聞いた事あるが、誰だったか。俺は少し記憶を引つ張り出していると、白鷺先輩は話題を無人島試験の事に変えて聞いてきた。

『無人島試験はどんな風に立ち回ったのかしら？』

「聞く必要があります？それ。別に面白いものでもないですし』

『面白いかどうか判断するのは私よ？それに話したくないなら別に良いわよ。どうせ調べから』

その言い方からして絶対調べられるって言う感じだな。それならこの人の情報を引

き出す為の交渉材料にした方が良いか。この人の素性が一つも掴めていないしな。俺は溜息を吐いて話し始めた。

「Aクラスのリーダーが分かったんでCDのクラスと共有して、Aクラスにダメージ与えた後、俺のクラスはリーダーを『変えたわけね』・・・そうです。こっちも質問して良いですか？」

俺の言葉が意外だったのか、少し驚きの反応を見せた。

『興味あるのかしら？良いわ、答えましょう』

「先輩の時は無人島試験をやりましたよね。この先の試験ってどんな感じなんですか？」

『・・・普通は答えるのは駄目なのだけど、話しをしてくれたお礼に少しヒントをあげる。試験の本質をよく考えること。先生の言葉をよく聞いておく事。これくらいかしら？』

これがヒントね。試験の本質を考え、先生の言葉をよく聞いておく。ヒントと言うよりはアドバイスみたいな感じだな。

「ありがとうございます、先輩。それで次に生徒会の情報って何ですか？」

『ええ。今、堀北生徒会長が南雲君の事を抑えようと動いているのは知っているわね？』

如何やら白鷺先輩は俺が生徒会に所属している事が筒抜けのようだ。……あの時に調べられたんだろうなあ。

「知ってます。それで？」

『その南雲君が貴方のクラスの一之瀬ちゃんを生徒会に入れたのよ』

一瞬時が止まったような感覚に陥った。帆波を南雲副会長が……？一体何を狙っている？

「そう、ですか・・・何時頃あたりに気付きましたか？」

『暴力事件の少し後くらいからかしらね。・・・気をつけておきなさい。彼のお眼鏡にかなってしまつたら、かなりしつこく狙われるわよ』

暴力事件の少し後・・・先輩の言葉からしてまずい状況かもしれない。しかし、何故俺と帆波が今まで会うことが無かつたんだ？余りにも偶然では片付けられない・・・まさか。

「こつち側の動きが密告されている可能性がある。いや、副会長の権限で学校の情報を見たときに知られている、か」

生徒会長の権限と副会長の使える権限の差は意外と大きいが、それでも巨大だ。学校内での生徒の動きは殆ど筒抜けとも言える。恐らく調査している俺の事を知って、その俺と知り合いである帆波から情報を貰って俺から生徒会長の動きを読もうとしている？いや、単純にお眼鏡にかなってしまっただけか？貰うと言っても帆波は俺と生徒会で全く会っていないし、生徒会に入ったことも言っていない。探りを入れようにも無理があ

る。つてことは本当に偶然か・・・

『考え事をしているところ悪いけれど、私の情報は役に立てたかしら？』

「・・・ええ、まあ」

『そう、それなら良かったわ。じゃあデートの件、付きあってもらおうわよ』

「それは勘弁して下さいよ・・・」

そんな俺の切望は届く事もなくスルーされ、電話は切られた。はあ・・・、面倒な事になってきたな。とりあえず、帆波の事は今は良い。優先するのはこの後の特別試験の事だ。

恐らくこの船の中で行われるだろう。一週間も船の上で生徒をゆつくりさせるとは思えない。嵐の前の静けさだろうと俺はデッキから部屋に戻る中、考えていた。

そしてその翌日、俺は帆波達と一緒に夕食を摂っていた。帆波に生徒会の事を聞こうと考えたが、人数が多い為に中々切り出せないまま夕食を摂り終えた後、この後どう過ごすかの話しに移った。

「この後スパに行かない？八幡君」

「スパね・・・別にいいが」

この船の中で多くの生徒がもう試験が終わったと、気を抜いているようで遊び惚けている。まあ、俺も熱とかで出遅れたし、試験が始まるまでは普通に楽しんでいるがな。温泉やサウナも堪能したし。

そして帆波とスパの所に行く途中で、キーン。とモスキートーンのような甲高い音が鳴り響く。この音は学校側からの連絡がある時に携帯からなる音で、俺と帆波は顔を見合わせながら内容を確認する。

『生徒の皆さんにご連絡いたします。先ほどすべての生徒宛に学校から連絡事項を記載したメールを送信いたしました。各自携帯を確認し、その指示に従ってください。また、メールが届いていない場合には、お手数ですがお近くの教員まで申し出てください。非常に重要な内容となっておりますので、確認漏れがないようお願いいたします。繰り返し返します———』

俺はこの後に行われる事に察しがつき、内心げっそりしながらも内容を見る。

『間もなく特別試験を開始いたします。各自指定された部屋に、指定された時間に集合してください。10分以上の遅刻をした者にはペナルティを科す場合があります。本日19時30分に2階208号室に集合してください。所要時間は20分ほどです。で、お手洗いなどを済ませた上、携帯をマナーモードか電源をオフにしてお越しく下さい。』

と記載してあった。俺は溜息を吐き、呟いた。

「19時半って、また微妙な……」

「えっ、八幡君は19時半なの？ 私は18時丁度だけど……」

そう言っただけで携帯を見せ合う。帆波は18時丁度で210号室だった。生徒事に違ふのかよ……。2度手間な。そんな事を考えていると神崎や柴田からメールが届いた。

〈特別試験が始まった。俺は18時に206室へ集合だ〉

〈俺は19時半に208号室だった。一緒の人いるか？〉

どうやら俺は柴田と同じ時間、同じ部屋に呼ばれたようだ。帆波もクラスの誰かからメールが来たようで確認した後に言った。

「私は浜口君達と一緒にだったよ」

「……何人かの小グループに分かれてるみたいだな。帆波はもう行かなくていいのか？」

すると帆波は時間を見て慌てた様子で言った。

「そ、そうだった。八幡君、スパはまた後で行こうね！」

そして走り去って行く帆波を見ながら俺は時間になるまで暇を潰しにデツキに行った。

そして19時20分に208号室への道を歩いていると、途中で柴田と合流した。

「比企谷も一緒だったのか！少し安心したぜー」

「お、おう……」

此奴のテンションが戸部と同じ感じで苦手なんだよなあ。そんな事を考えながら208号室に着いたので中に入ると、中には茶柱先生が居て、対面する形で3つの椅子が置いてあった。

「来たようだな。早速だが椅子に座って後1人が揃うまで黙って待て」

その言葉に従い、俺は端の席に座って、柴田は真ん中の席に座った。そして数分間黙って待っているとBクラスの女子が入って来て、先生に促されて座った。そしてそれ

を確認して茶柱先生は話し始めた。

「さて、今回の特別試験では1年全員を干支になぞらえた12のグループに分け、そのグループ内で試験を行う。試験の目的はシンキング能力を試すものとなっている。」

シンキング。日本語で簡単に言えば思考力つてところか。どうやら今回は体を動かさなくて済むだろうが・・・しかし干支ね。わざわざ干支で分けたつてことはそこに何かしらあると見た。

「社会人に求められる基礎力は大きく分けて3つの種類があり、アクション、シンキング、そしてチームワーク。それらを備えた者が初めて優秀な大人になる資格を得る。前回の無人島の試験ではチームワークに比重が置かれていたが、今回はシンキング。すなわち考え抜く力が必要となってくる。現状を分析し、課題を明らかにする力。問題の解決に向けたプロセスを明らかにし、準備する力。想像力を働かせ、新しい価値を生み出す力は社会の中で必要不可欠な能力と言っている」

社会に出て必要な推察力と問題解決力の両方を鍛えるための試験だつてことか。

「そこで、今回の試験では12のグループに分けて試験を行う形となるが、ここまでで何か質問はあるか？」

「はい」

俺は手を挙げる。この学校の仕組み的に今までの試験的にクラス対抗だったから、今回はこのグループで競い合うとは考えにくいが一応の確認だ。

「何だ？比企谷」

「小グループずつ俺達を分けたように多分、他のクラスの奴等も分けられていますよね。俺達の他に参加しますか？」

茶柱先生は俺の質問にほう、と言う。すると柴田が聞いてきた。

「どう言う事だ？」

「……俺達がこういう形で分けられたんだったら他のクラスの奴等もこういう形になっている筈だ。しかも今回は茶柱先生が言ったがシンキングだ。チームワークじゃない。てことはこのグループだけで挑む試験とは考えにくい。多分、他のクラスの奴等も一緒にやるだろう」

柴田の疑問に答えると、納得顔になる。そして茶柱先生は俺の質問に答える。

「比企谷の言う通りだ。他のクラスの奴等も参加して挑む試験になっている。この部屋は干支の『未』のグループとして分けられている。今から参加者の表を配る。良く目を通しておけ」

そう言つて人数分の表が配られる。そしてそれに目を通すと、思わず溜息が洩れた。原因は参加者の名前だ。

【未】

Aクラス

秋本浩司

木崎優太郎

辻良子

山岡麗華

Bクラス

柴田颯

比企谷八幡

細川舞美

Cクラス

近藤修介

田辺黎人

葉山隼人

Dクラス

佐川裕也

日向誠子

前原圭人

由比ヶ浜結衣

「……最悪な組み合わせだな。こりやあ試験に集中できるか？俺はげんなりして
いる中、そんな様子も露知らず茶柱先生の説明は続く。」

「今回の試験の各グループにおける結果は4通りだ。例外など存在せず、必ずその4つ
のいずれかにしかならないので注意しろ。口で説明するより資料を配るのでそっちを
見た方が早いだろう」

【夏季グループ別特別試験説明】

本試験では各グループに割り当てられた『優待者』を基点とした課題となる。定められた方法で学校に回答することで4つの結果のうち1つを必ず得ることになる。

○試験開始当日、午前8時に学校から1学年全生徒に向けてメールを送る。『優待者』に選ばれた者には同時にその事実を伝える。

○試験の日程は明日から4日後の午後9時までとする。(一日の完全自由日を挟む。)
○1日に2度、グループだけで所定の時間及び部屋に集まり、1時間の話し合いを行うこと。

○1時間の過ごし方は各グループの自主性に全てを委ねる。

○試験の解答は試験終了後、午後9時30分から午後10時までの30分までの間のみ、優待者が誰であったかの答えを受け付ける。なお、回答は1人1回までとする。

○解答は自分の携帯端末を使い、指定されたメールアドレスに送信すること。この方法以外での回答は認められない。

○『優待者』にはメールにて答えを送る権利が無い。

○自分が配属されたグループ以外への解答は無効とする。

○試験結果については、最終日の午後11時、一学年全生徒に向けてメールにて知らせる。

他にも細かいルールやら禁則事項やらが書いてあり、かなりの情報量だ。・・・無人島試験の注意事項より多くね？覚えんのクソだるいんだが。

そして・・・その次に書かれているのがさっきの試験結果。この様になっている。

【試験結果】

○結果Ⅰ——グループ内で優待者及び優待者の所属するクラスメイトを除く全員の解答が正解していた場合、そのグループ『全員』に50万ポイントを支給する。さらに、優待者にはその功績を称え、50万ポイントポイントが追加で支給される。

○結果Ⅱ——優待者及び所属するクラスメイトを除く全員の答えで、1人でも未回答や不正解があった場合、優待者には50万ポイントポイントを支給する。

頭が痛くなってきたな。分かりやすくしろよマジで。訳すと・・・結果Ⅰの場合、大體1グループに3〜4人の各クラス生徒が集まり、未グループである俺たちが結果Ⅰを残せば、俺と柴田と細川やその他優待者以外にそれぞれ50万pointがもらえる。優

待者に選ばれた奴は追加で50万pptで計100万pptが貰えるってこと。

結果Ⅱの場合、単純に優待者だけが50万プライベートポイントを手にする事になる。

例えば、未グループで俺が優待者に使われたとする場合、未グループでの回答は俺が正解となる。そして、それを同じ未グループの連中に教えて、試験最終日である30分の回答時間にグループ全員（優待者のいるクラスは除く）が『比企谷八幡』と名前を書いて指定されたメールアドレスに送信すれば結果Ⅰになる。

俺以外の人物の名前を誰か1人でも書いていたら結果Ⅱになると。

「結果ⅠとⅠって優待者は滅茶苦茶お得だよな」

そう、柴田の言う通り、結果ⅠとⅠは優待者が必ず優遇される結果になる。しかし、それでは公平じゃない上に選ばれるには運に任せるしかなくなるので試験として成り立たなくなる。だから残りの2つの結果が重要になってくる。

【試験結果】

なお、以下の2つの結果に関してのみ、試験中24時間いつでも回答を受け付けるとする。また試験終了後30分間も同じく回答を受け付けているが、どちらの時間帯であつてもペナルティが発生する。

○結果Ⅲ——優待者以外の者が、試験終了を待たずに答えを学校に告げ『正解』だった場合、答えた生徒の所属クラスはクラスポイントを50ポイント得ると同時に、正解者にはプライベートポイントを50万ポイント支給する。逆に、優待者を見抜かれたクラスは50クラスポイントを失う。なお、その回答を行った時点で終了とする。優待者と同じクラスメイトが正解した場合は答えを無効として試験を続行する。

○結果Ⅳ——優待者以外の者が、試験終了を待たずに答えを学校に告げ『不正解』だった場合、答えを間違えた生徒の所属クラスはクラスポイントを50ポイント失う。逆に、優待者には50万プライベートポイントが支給され、優待者の所属するクラスにはクラスポイントを50ポイント支給する。優待者と同じクラスメイトが不正解だった場合は答えを無効として試験を続行する。

「まるで人狼ゲームみたいだね」

細川はそう呟いた。結果1ー1は優待者を全員で当てにいく事をせず、優待者以外の誰か（優待者のいるクラスグループ以外）が優待者を当てさえすれば50c p tをもらえて、更に当てた奴に50万 p p t ももらえて、優待者のいるクラスグループは50c p tを払わないといけない。

結果1ーVは優待者を外した場合、優待者のいるクラスグループに50c p tを払い、優待者が50万 p p t をもらえる。

つまり、優待者を当てにいく場合に生じるリスクは大きいが、その分のリターンも大きい。まさにハイリスクハイリターン。優待者とそいつの居るクラスグループ以外が得になる結果が1ー1。結果1ーVは結果1ーと殆ど変わらない。

これは人狼ゲームに似ているが少し違う。人狼ゲームは市民と他の役職の奴が基本的に人狼と裏切り者を見つけて処刑するか、裏切り者と人狼に喰われるかのゲームだ

が。この試験は優待者と優待者のいるクラスグループが市民側で、それ以外は全員が裏切り者兼人狼。結果ⅠとⅠとⅠⅤが市民側の勝利、結果ⅠⅠⅠは裏切り者側の誰かⅠ人とそのクラスの勝利になる。

つまりシンプルに言うとなり切り者兼人狼は追いかける側で、市民側は逃げる側。

「さて、ここらまでで何か質問はあるか？」

「はい」

茶柱先生に今度は全員が挙手する。そして先ず柴田からの質問。

「優待者ってランダムで選ばれるんですか？」

「優待者はこちらが厳正な調整をして選ぶ。次、比企谷」

「・・・話し合いの場合以外で裏切れることは可能ですか？」

「説明にも書いている通り、可能だ。次、細川はもう良いのか？」

「2人と同じ内容ですから大丈夫です」

「そうか、最後に言っておく。無人島試験同様、結果に対しての質問は受け付けない。優待者を選ばれた場合は全力で隠し通せば良いが、優待者を選ばれなかった場合、優待者を見つけ出すには1度クラス全体の関係を見無視しろ。そうする事がクラスの勝利の近道になる。とだけ言っておこう」

そして説明が終わると俺たちは部屋を出た。そして柴田が言った。

「一之瀬か神崎に此処のメンバーの表を渡しに行こうぜ」

「そうだね」

「……帆波達のメンバーがどうなってるのかも気になるしな」

そして俺たちは帆波達が今何処に居るのかをメールで聞いて、デツキの休憩所がある所に居ると帰ってきた為、そこに向かった。

先生の言ったランダムという言葉ではなく、厳正な調整。そしてクラス全体の関係を無視すること。それと、グループ分けで使われている『干支』。

先輩に言われた、先生の説明をよく聞いておくことと、『本質』をよく考えること。この情報でおそらく優待者が分かるような『法則』を導き出せば良い。俺はもう1度メンバー表を見た。

【未】

Aクラス

秋本浩司

木崎優太郎

辻良子

山岡麗華

Bクラス

柴田颯

比企谷八幡

細川舞美

C クラス

近藤修介

田辺黎人

葉山隼人

D クラス

佐川裕也

日向誠子

前原圭人

由比ヶ浜結衣

葉山と由比ヶ浜とぶつかり合わないといけない。その事に俺は辟易しつつ、試験の事を考えていた。

混沌とする思惑と想い

帆波達と合流した後、俺達『未』グループに分けられたメンバー表を帆波達に見せて、俺は帆波が分けられた『卯』グループのメンバー表と神崎の分けられた『辰』グループのメンバー表を見ていた。

【卯】

Aクラス 竹本茂 町田浩二 森重卓郎

Bクラス 一之瀬帆波 浜口哲也 別府亮太

Cクラス 伊吹濤 真鍋志保 藪奈々美 山下沙希

Dクラス 綾小路清隆 軽井沢恵 外村秀雄 幸村輝彦

兎グループには綾小路が居るようだ。そして下着泥の被害を受けた軽井沢も。このグループで1番警戒すべきなのは綾小路だ。正直彼奴は有栖や龍園より読み切れないからな。暴力事件の策と無人島試験の結果は彼奴がやったはずだし、帆波も警戒しているだろう。まあ、此処は良い。問題は神崎達の辰グループのメンバーだ。

【辰】

Aクラス

葛城康平

坂柳有栖

西川亮子

的場信二

Bクラス

安藤紗代

神崎隆二

津辺仁美

Cクラス

小田拓海

鈴木英俊

園田正志

龍園翔

Dクラス

櫛田桔梗

平田洋介

堀北鈴音

雪ノ下雪乃

な に こ の

じ ご

く。メンバーがヤバ過ぎる、多分全クラスの

主力が全員集まってる。Aクラスなんか2トップの葛城と有栖がいるし、Cクラスは龍

園が入っている。ただ、ここで気になるのは帆波がいない事だ。ここから考えられることは1つ……十中八九、星之宮先生が外したのだろう。多分このグループは学力の高い生徒が集まっている。龍園は多分、坂上先生が入れたな。このことから絶対にランダムでは選ばれていない。つまり『優待者の法則』があるという事だ。

俺は神崎に同情しながら言った。

「……頑張れよ。大変だろうけど」

「……ああ、何とかするよ」

神崎は俺たちが来た時から遠い目をしていた。このメンバーで話し合いとか軽く言って胃が爆発しそうだもんな。龍園が煽って煽って煽りまくって、有栖も面白げに受けて立つのが目に浮かぶ。そしてそれに巻き添えをくらう他のメンバーが。最大で4日はこのメンバーと話し合いの場で会わないといけないとは本当に気の毒だ。

そんなことを考えていると帆波は俺のグループのメンバー表を見て心配そうに俺に

言った。

「八幡君こそ大丈夫？このメンバーで……私、心配だよ」

このメンバーというのは、Cクラスの葉山とDクラスの由比ヶ浜の事だろう。未グループのメンバーについては完全にランダムな選び方をしたのだろう。由比ヶ浜は成績最下位クラスで、葉山の成績は恐らくだが上位の筈だ。俺も平均よりは上だからな。ただ、星之宮先生が俺を何らかの意図があつてこの中に入れた可能性は少し、いやかなり高い。先生は無人島での事を知っているからな。

流石にこの試験中に目立つ行動は取れないだろう、龍園にも処罰を頼んだしな。と思ひ、俺は帆波の心配に苦笑して言った。

「……流石にちよつかいは掛けてこない……筈だ」

「そこは言い切つて欲しいよう……ううゝ八幡君、何かされたら先生か私やクラスの誰かに言つてね？もちろん坂柳さんにも頼るんだよ？」

まるで母親が言うような事を言ってくる帆波。その様子に神崎達は苦笑して、俺は気恥ずかしくなりながら頷く。何か誕生日以降、帆波の包容力が増した気がしなくもない。そして俺は、帆波と神崎達のグループのメンバー表のプリントを持参していたメモ帳に書き写す。優待者の法則を見つける手掛かりになるだろうしな。

ふと、急に俺の携帯が鳴る。学校専用の音では無く、普通のメールの受信音だった。俺は表示された名前を見る。そこには『網倉』と表示されていた。誕生日の時に交換して置いたのだ。それにしてもあんな大勢の前で泣いた日には悶え続けたせいで本当に寝れなかった。忘却の彼方に消しさろうとしても、全く頭の中から離れなかった。逆に鮮明に思い出してしまいうからマジでタチが悪い。幸いこの事をネタにしそうな奴はあの中には居なかったたので良かったが。龍園とかに知られた日には・・・考えたくないな。

そんな事を考えながら送られたメールの内容を確認する。そこには特別試験のグループのメンバー表の事が書かれていた。

From 網倉麻子

To 比企谷八幡

Subject 私の【子】グループのメンバーはこういう感じだったけど、比企谷君のグループは？

【子】

Aクラス 神室真澄 沢村智史 袴田創一

Bクラス 網倉麻子 島田誠 本田慎太郎 渡辺忠

Cクラス 鮎川美香 咲本友希 安田勝 吉村真希

Dクラス 佐藤麻耶 津川草太 松下千秋

俺は、自分のグループのメンバー表の内容を送って、このメールは見たらすぐに削除して、内容は見て覚えるかメモか何かに書き写して、他のクラスの奴に見せないようにしておいてくれ。と送る。俺はメモ帳に網倉のグループのメンバー表をメモっておいて、そしてメールを削除する。

その後も特別試験の事を話していると、声が掛けられる。

「おいおい、早速揃ってんじゃねえか。なあ、一之瀬？」

声を掛けてきたのは龍園だった。相変わらず獰猛な笑みを浮かべていて、石崎や伊吹、山田も連れている。もう完全にヤクザか極道に見えてきたんだが。Bクラスのクラスメイトは警戒するように睨み、帆波は変わらない笑みを浮かべて返事する。

「特別試験の事でねー。龍園君はどうして此处に？」

「この試験でBクラスを潰しにかかるから、わざわざ言いに来てやったんだよ。無人島試験では予想外に一杯食わされたからなあ」

そう言つて俺に視線を向けてくる龍園。うつわー、めんどくせえ……完全に目をつけられたようだ。龍園の言い草に更に両クラスの空気が緊張して、重くなる。暫く睨み合いの状態になっていると、更に空気を緊張させる人物達が来た。

「おやおや、BクラスとCクラスの皆さんがお揃いで」

不敵な笑みを讃えた有栖達が来た。神室や橋本、高校生の風貌には思えない鬼頭を連れている。

「ククツ、随分と楽しそうだな坂柳。俺の財布となつたのに余裕そうじゃねえか、おい」
無人島試験でAクラスとP P tの契約をした龍園がその事で煽る。有栖はその煽りに乗る事無く、笑みを濃くして涼しげと言わんばかりに返す。

「いえいえ、逆にこちら側がやり易くなつたので感謝してますよ。少しは張り合いが無
いとつまらないですから」

逆に煽り返して石崎が拳を握るのが見え、それに鬼頭も反応する。正に一触即発の空気に龍園は愉しそうに笑う。

「ククツ、葛城がハマしたのにその余裕、何か秘策でもあるのか？」

そう聞くと、有栖は声を出して小さく笑った後に言った。

「・・・フッフ、秘策と言うほどのものではありませんが、この試験の攻略法・・・優待者の法則は解りましたから」

その発言にBクラスとCクラスの奴等は騒めき出し、帆波と神崎は身を強張らせる。俺は驚きつつ、有栖の言ったことが本当だと判断する。目には余裕が映っていて、自信があると物語っている。おいおい、もう分かったのかよ。相変わらずの天才ぶりだな。つまり有栖は、この試験を終わらせる鍵を手にしたということだ。

そんな声も出ない驚愕に空気が包まれる中、唯一龍園だけが愉しそうに笑う。此奴も此奴で予想外だろうに。本当こう言うスリルというか、逆境に立たされることを楽しむよなあ。

「ク、ククツ、ハハツ！……これは流石に予想外だったぜ。やはりお前は俺が最後に潰すのに相応しい価値がある相手だ。Bクラスの一之瀬やDクラスにいるであろうキレ者よりも愉しめそうだぜ。それで、お前はどの試験を終わらせるのか？」

その問いに有栖は首を横に振って言う。

「いえいえ、直ぐに決着を着けるのは流石に興が冷めてしまいますし。貴方達の相手よりも先に邪魔な相手がいるので……」

邪魔な相手というのは葛城派の事だろう。行きの船の戸塚が起こした騒動と、無人島試験の龍園と契約を結んだ上に惨敗した事で派閥の人間は減った筈だが、まだ根強い支持を受けているのだろう。

「俺達は眼中にねえってことか？なら精々余裕ぶってるんだな。油断してるとその喉笛搔つ切られるぜ？」

もう話をする気は無いのか、そう最後に言い残して俺達の横を通る。そして俺と龍園がすれ違う瞬間。

「葉山は処分したが、お前の事に未だにご執心みたいだぜ？」

そう囁かれ、俺は悟る。これは思った以上に面倒くさくなりそうだな。そして龍園達の背中を見送っている後、有栖達と対峙した。Bクラスは警戒をしているようだが、変わらず有栖達は涼しげな様子を崩さない。帆波は有栖にさっきの発言の事を問いかける。

「優待者の法則を見つけたのは・・・ハツタリじゃないんだよね？坂柳さん」

「ええ、ここでハツタリを言うようでは負けを認めるようなものですから」

不敵な笑みを崩さないまま、帆波を見つめる有栖。俺は気になることがあるので聞いた。

「有栖、すぐに勝ちにいかないのは葛城派を潰す為だよな？」

俺の問いに有栖は微笑みながら答える。

「その通りです。まあ、Aクラスの7割は私の派閥に入っているので、この試験を最後に葛城君にはリーダー争いから完全に降りてもらおう為に敢えて今回も私達は葛城君を龍園君に叩き潰してもらおうとしているのですよ」

「どんだけ追い込むの好きなのん？少しドS過ぎない？八幡引いちやうよ。帆波は苦笑いしているし、神崎達は凄え引いてるし。……ん、待てよ？何かおかしい。言い回しに違和感がある。葛城を龍園につて事は……！」

「おいまさか、有栖……。今回、葛城と別々の方針で動く気だろ。龍園と手を組んで」

俺の言葉に有栖は目を見開くと、更に笑みを濃くする。目には妖しげな光が灯つていて妖艶にすら見える。そして何か小声で呟いた。

何を言ったのかは聞き取れなかったが、視界の端に帆波が何やら反応したように見えた。そして有栖は何時もの表情に戻って言った。

「・・・流石ですね、八幡君。ですが、少し違いますよ。葛城君の行動はこの試験では結果Ⅰを狙うでしょうから私達は結果Ⅲを狙って、葛城派の人がいるグループの所は龍園君に優待者の法則を見抜いてもらって潰してもらい、私の派閥の人には優待者を伝えて裏切らせるのですよ」

葛城の取る作戦より有栖が取る作戦の方がAクラスに取って良いと思わせる為か。これが成功すれば葛城派は完全に失墜するが、龍園が乗ってくるとも限らない。しかし、有栖にはそこも計算に入れているだろう。

「龍園がその優待者の法則に気付くまでには裏切らせないのか？」

「ええ、1、2日で龍園君なら気付くでしょう。1日置いたら私は動きますので」

有栖は手を組むというよりは、利用する選択を取ったようだ。つまり有栖が動くまでには俺達も優待者の法則を見つけないければと負けるといふ事。そして有栖は俺と帆布に言った。

「八幡君の所のメンバーは葛城派のメンバー達で固められているようですし、一之瀬さんの所には私の派閥の人が1人いますが、葛城派の人が多いので葛城君の作戦に乗るように言っているのでチャンスはありますよ」

つまり葛城派のメンバーが多いグループは葛城の取った作戦で行動させているので邪魔はしない、という事のように。それなら龍園が気付くまでがタイムリミットになる。

そして有栖達は俺達から通り過ぎていき、廊下の奥へと歩いて行った。チャンスは多く見積もっても2日。それまでに気付かないと負ける。

「これは厳しい戦いになるね．．．．」

帆波のその呟きに俺達は頷くしかなかった。

俺は部屋に戻って早速、有栖が見抜いた優待者の法則を推理していた。幸い誰もいなかった為、集中し易い。自分のグループのメンバー表を見る。

【未】

Aクラス

秋本浩司

木崎優太郎

辻良子

山岡麗華

Bクラス

柴田颯

比企谷八幡

細川舞美

Cクラス

近藤修介

田辺黎人

葉山隼人

Dクラス

佐川裕也

日向誠子

前原圭人

由比ヶ浜結衣

此処から重要になる『クラスとの関係を見捨てる』と『本質』と『干支』だ。先ずクラスとの関係を見捨てる。これをこの紙で表してみる。

【未】

秋本浩司

木崎優太郎

辻良子

山岡麗華

柴田颯

比企谷八幡

細川舞美

近藤修介

田辺黎人

葉山隼人

佐川裕也

日向誠子

前原圭人

由比ヶ浜結衣

となる。続けて本質、これは紙に示してある事に目を向けろということか？名前順で並んでいる以外は思い浮かばない。

まだ絞れないので保留にしよう。続けて干支、干支は十二支で表記されている。未は8番目だ。そしてここで俺は行き詰まった。

「後、何か……もうちよつとの気がする。もうちよつとで掴めそうな気がするんだが……」

メモっておいた他のメンバー表を見比べてみるが、同じところで止まってしまった。

「法則を1発で見抜く有栖は規格外だなあ……マジで敵に回したくねえ……」

記憶を思い出した事で分かったが有栖は天才だ。記憶が無い状態でも油断すれば瞬殺されると警戒していた彼女。Bクラスではやはり有栖率いるAクラスには勝つ事は難しいだろう。しかし、不可能だとは思わない。Aクラスに『絶対的頭脳』があるとするなら、Bクラスには『絶対的統率力』がある。

「俺がこんな前向きに考えるなんて……学校に染まってきたのかねえ……」

俺はそう独り言で呟き、優待者の法則を見抜きに掛かるのだった。

私は八幡君達と別れた後、同部屋の子達とも別れて船のデッキで坂柳さんが呟いたことを考えていた。時刻は8時で、空は暗くなっていて星が瞬いていた。

『ああ、やはり八幡君はBクラスに埋もれさせておくのは惜しい……。Aクラスに来てもらいたいものです』

私は思わず拳を強く握った。私達では八幡君の力は引き出せていないと言われている

るように思えたからだ。眼が語っていた。

『貴女程度では八幡君は不釣り合いだ』と。

冗談じゃない！と思いたいが、それ以上に私の中で不安があったからだ。

『私は八幡君に依存しているのではないのか？』

今まで、Bクラスが此処までAクラスに詰められたのはクラス皆が団結してくれた事もあるが、それ以上に八幡君の策が上手くいつていたのもある。入学時のポイント格付けの時、中間テストの時、暴力事件の時も。何時も八幡君が助けてくれた。

弱い、私は弱い。だから依存してしまう。そして依存した状態を良しとしてしまった。こんな状態をいつまでも良しとしたら、八幡君が弱っていった時、私はともに助けることも出来ない。1番助けたい、支えたい人を私は見捨てる事になってしまう。

これまでに想った八幡君への気持ちは、否定したくないし、否定だって誰にもさせな

い。だってこの気持ちは『本物』だから。だから、私は、私だけが出来る方法で八幡君を助けよう。八幡君とは対等でありたいから。

『偽物』にはなりたくない。仮初めの、依存からくる気持ちじゃなくて私だけの『本物』を……彼に伝えたい。彼が助けてくれたからじゃない。

彼を見て、話して、考えて、彼の考え方を知って……そんな時間があつたから。

好きなんで、軽い気持ちじゃない。私は彼を、比企谷八幡君を……

「……………愛してるの」

そう呟いた時、頭が熱に浮かされるように熱くなって身体がふわふわした不思議な感覚になった。しかし、決して不快ではない。寧ろ気持ち良い感覚だった。

キュンツ……

下腹部が熱くなった。身体が疼き、細胞に至るまで沸騰しているのではと思う程。まるで私の身体が彼を、彼の細胞に至るまでの全てを欲しがっているかのよう。

私は、この熱が冷めるまで船のデッキに居たのは考えるまでもないだろう。

無駄な時間は早めに終わらせるにかぎる。

結局あの後も優待者の法則を見抜こうとしても、行き詰まってしまった俺はそのまま1日を終える事となった。そして試験1日目の午前7時前。俺は部屋の中で静かに1度リセットした頭で法則を見抜こうとしていた。

「……ん、神崎？」

法則について考えていると、スマホが振動した。メールではなくて電話のようだ。こんな時間に掛けてくるとは珍しい。ていうか初めてだった。俺は周りを起こさないように注意して部屋を出て、電話に出る。

「もしもし、こんな時間にどうした？」

『寝てたところだったらすまないが、その様子だと早起きだったようだな。……比企谷は優待者の法則は分かったか？』

どうやら神崎も見抜きに掛かっているが、口振りから行き詰まっている事が分かった。俺は現状の法則の推察について神崎に周りに聞かれていないか注意しながら伝える。すると神崎も同じところで行き詰まったらしく、著しくないようだ。

「分かつてる事と言えば、クラス全体の関係を無視すること、名前順の表記、干支の何らかの関係性だな」

『……確実性を追い求めるなら、グループディスカッションの時に相手の様子から見抜くのが正攻法だが……メンバーがアレだから簡単にはいかないだろうな。優待者の法則が当てはめて解けるなら良いんだがな』

神崎のグループは簡単にはぼろは出さないメンバーが多いからな。選ばれる奴次第だが、有栖や龍園はポーカーフェイスが上手いだろうから話し合いで見抜くのはキツイだろう。……ん？神崎は当てはめて解けるなら良いんだがなって言ったよな。……『当てはめて』……ッ！

そこで俺は閃いた。俺は部屋に戻って自分のメンバー表を見る。そして一つずつ整理しながら当てはめていく。

【未】

秋本浩司

木崎優太郎

辻良子

山岡麗華

柴田颯

比企谷八幡

細川舞美

近藤修介

田辺黎人

葉山隼人

佐川裕也

日向誠子

前原圭人

由比ヶ浜結衣

これに先ず当てはめるのなら千支の順番だ。未は8番目だから……

【8】

秋本浩司

木崎優太郎

辻良子

山岡麗華

柴田颯

比企谷八幡

細川舞美

近藤修介

田辺黎人

葉山隼人

佐川裕也

日向誠子

前原圭人

由比ヶ浜結衣

そして次は名前順に並べる。クラスの関係を無視して並べてみると……

①秋本浩司

②木崎優太郎

③近藤修介

④佐川裕也

⑤柴田颯

⑥田辺黎人

⑦辻良子

⑧ 葉山隼人

⑨ 比企谷八幡

⑩ 日向誠子

⑪ 細川舞美

⑫ 前原圭人

⑬ 山岡麗華

⑭ 由比ヶ浜結衣

となる。そして干支の順番と当てはめると――――

俺はまだ通話中の神崎に言った。

「神崎、優待者の法則・・・解けたかもしれん」

『本当か・・・!? 如何やったんだ?』

俺は情報を整理して当てはめながら組み合わせてみる。と言うと、神崎は答えにたど

り着いたのか、感嘆の声を洩らす。やつぱり此奴は頭は回るな。俺は予め情報があつて分かつたからな。

『これだと納得がいくが……しかし、試験が始まる前だ。万が一のこともある1度話し合いで様子を見ておいた方がいいな』

「そうだな……」

試験が始まった瞬間に終わらせるのは万が一、この推察が外れていたときのリスクがある。様子見で少し仕掛けてみてからにするか。どっちにしろ今日で試験を終わらせるつもりだしな。俺はそう考え、他の奴にもこの情報を回すべきか考える。

「この情報は言っておいた方がよいな……」

『ああ、一応様子見を頼んでおこう。それと比企谷』

俺の事を何処か神妙そうな声で呼んだ神崎。俺は怪訝に思いながら言葉を待つ。や

がて言った。

『試験ではお前に頼りつきりになつてしまつて済まない。本当なら俺達も気付くべきことなのにな……』

神崎は申し訳なさそうに謝つてきた。……本当に此奴はいい奴だ。普通だつたら気付けてラツキー。つて言つても可笑しくはないのに。前までイケメンの此奴とは仲良く出来ないだろうと思つていたが、今はそこまで忌避感はないのはこういった神崎の人格故か。総武中がこんな奴ばつкаだつたら過ごし易かつたかもしれない。……ないか、ないな。

「別に謝らんでいい。この学校にこういう邪道なやり方が相性が良いだけで、王道のやり方でこられたら立場は逆だろ。こういうのは気付く奴が気付けばいいんだよ。適材適所、アウトソーシングつて言葉があるんだからな」

正直学力では神崎と帆波には総合力では及ばない。純粹な学力勝負の試験では俺は足を引っ張つてしまうだろう。ただ、搦め手やハツタリとかで何とかなっているだけ。

王道を進める此奴等と、邪道を進んでいる俺では相性が悪いだけ。実際に使えるようになれば俺は此奴等の足元にも及ばなくなるだろう。

『そうか……』

神崎はそんな声を洩らして沈黙する。俺もそれ以上言葉が続かず、沈黙してしまつて通話している筈なのに静寂が辺りを支配しているのではないかと錯覚してしまう程、物音がしない。ふと、気付いた事があつたので神崎に言う。

「Bクラスの優待者はどうする？ ばれんように話し合いに応じないつつう事も出来るが……」

この試験では余程の自信のある奴以外は裏切らないだろう。有栖は派閥の奴がいなければいいし、龍園とかに優待者の法則が気付かれたら終わるが、万が一に気付かれなかった場合、如何するか考えなくてはならない。話し合いに応じない手もあるが、その時点で絞られる可能性もある。

『いや、それよりも携帯のSIMカードを入れ替えればいいんじゃないか？』

！その手があった。そうすれば優待者の法則が分からない限りは大丈夫だろう。しかし、動揺してしまえば看破されるので動揺しない事が必須だ。携帯を余り使わないから思い浮かばなかった手だ。そこは友達の少ない俺よりも友達の多い神崎の方が分があるだろう。

そして俺達は優待者の法則とSIMカードの事についてBクラスの各々のグループのメンバー一人にメールしておいた。多過ぎると情報漏れがあるかもしれないからな。

裏切るのは確信した時以外は裏切らないでおいでくれとも付け足しておく。これでもやみには使わないだろう。メールは神崎からだ。俺より信頼されている神崎の方が説得力はあるだろうしな。グループである柴田や細川には伝えていない。裏切るのを反対されるかもしれないからだ。

帆布にもメールしようとすると、神崎に止められる。神崎が言うには、俺にいつまでも頼っている訳にはいかない。と言われていたらしい。もしも優待者の法則が分かっ

たとしても教えないで欲しいとも。……帆波が選択したならそうさせるべきだろう。勝とうが負けようがそれで後悔しないというのなら。強制する訳にもいかんしな。

粗方やる事も終わったので朝食を食べに行く。廊下を歩いていると、前から上裸の金髪でガタイの良い生徒が歩いてきた。彼奴は、高円寺か。何で上裸なんだよ、服着ろよ。そんな事を思いつつ通り過ぎようとする、声をかけられる。

「おや？君はBクラスの腐り目ボーイじゃないか」

腐り目ボーイってなんだよ。そんな印象的かよ俺の目は。俺は抗議の視線を向けると高円寺は笑いながら言った。

「ハツハツハ、気に入らなかつたようだねえ。まあ訂正する気はないがね。それよりも君がBクラスの参謀だろう？」

「別に参謀でも何でもないんだがな。んで何か用か？自由人」

唯我独尊の此奴から声をかけられるなんて思わなかったな。まあ、俺から声をかける事もないだろうがな。

「フツフツフツ、他クラスのガール達と何時もいる君とは話してみたいと思っていたんだよ。女性のリードの仕方を私がレクチャーしよう」

何の気まぐれだよ。噂でしか聞いたことはなかったが、此奴は入学当初は女子の先輩と一緒にいる事が多かったらしい。多分御曹司だからと擦り寄られていたのだろう。

「女性のリードって・・・それと女子と何時もいる訳じゃねえよ」

「いくらまだまだ未熟な君とガール達とはいえ、君がガールに向けられている少なくとも好意の気持ちに応えてあげるのが紳士の役目と言うものだよ」

そう言われ、沈黙する。俺はラノベ主人公のような鈍感ではない。寧ろそう言った感情には敏感だ。だからこそ気付いてはいる。しかし、後一步踏み込むのが怖い。裏切られるのが怖いんじゃない。信じているからこそ期待してしまう。そして裏切られてし

まえば勝手に失望してしまうのが怖い。

あの時の奉仕部のように。誕生日に素直になつてみようとも思ったが、やはり振り切れていない。俺は動揺している様子を知られない様にしながら言った。

「……遠慮しとくわ。そんな事より何で上裸なんだよ。女子に見られたら色々言われんぞ」

「ふむ、私の究極の肉体と美しさを保つ為のトレーニングをしているから服を着たままではトレーニングするのに煩わしいから脱ぐのさ。女子に何を言われようとも構う気は無いねえ」

服を脱ぐ程のトレーニングってどんなやつをやつてんだよ。しかし噂通りの自由人だが実力はヤバいのも本当だろう。俺も生徒会長の怪物級の強さの堀北先輩を相手して見てただけである程度なら分かるようになったが、此奴は隙が見当たらない。下手をすると堀北先輩より強いだろうな。学力もトップクラスというのは聞いたことはあるからな。

「それでは私はトレーニングを再開する為にもう行くでしょう。しかし私は君に興味がある、だから暇がある時にまた声をかけることとするよ。See, you」

そう言つてオリンピック選手レベルの速さで走つて行く高円寺。俺はその姿を見送る。やっぱり彼奴も要注意だな。この試験では動くか分からないが優待者の法則を見抜いている可能性が高い。グループは違うが、此奴の動きも注意しといった方がいいな。そう考えつつ俺は朝食を食べに行つた。

そして朝食を食べているとキーンという学校側からのメール受信の音が鳴った。恐らく優待者の事だろう。俺はメールを見てみる。そこには予想通りの事が書かれていた。

『厳正なる調整の結果、あなたは優待者に選ばれませんでした。グループの一人して自覚を持って行動し試験に挑んでください。本日午後1時より試験を開始いたします。本試験は本日より3日間行われます。羊グループの方は2階羊部屋に集合して下さい』

そして朝食の時に一斉に送られて来たメールに朝食を食べている途中の生徒達のざわめきが多くなった。俺は特に騒ぐこと無く朝食を食べ終えて席を立とうとする。す

ると声がかけられる。

「比企谷君」

俺は声ができる方へ顔を向けると、朝食を乗せたトレイを持った雪ノ下がいた。

「・・・雪ノ下か。今から朝食か」

「ええ、比企谷君は食べ終えたところよね」

「ああ。んで、わざわざ声を掛けてきたって事は用があるんだろう？」

俺が聞くと雪ノ下は頷き、真剣そうな顔で俺に言った。

「貴方のグループの事なのだけど・・・由比ヶ浜さんと葉山君が一緒だけど大丈夫なの？」

少し心配そうな様子で俺を見てくる雪ノ下。此奴がこんなに俺を心配そうにすると

はな。大分と角が取れたみたいだ。俺は表情を変える事なく言った。

「ん．．．まあ、大丈夫だ。何とか出来るしな。それよりもお前の方がヤバイだろう」

「ええ．．．相手が相手だし、上手くやるしか無いわ」

そう言つてこめかみに指を置いて溜息を吐く雪ノ下。如何やらかなり緊張しているようだった。まああのメンバーじゃあ雪ノ下には分が悪いだろうしな。

「優待者の法則を見破られれば終わりだからな．．．」

俺の呟きに雪ノ下は目を見開いて驚きながら言った。

「．．．貴方、そう言うつて事は優待者の法則を見破つたの．．．!?!」

幸いざわめきの中で雪ノ下の声は掻き消えたようで、周りに気付いた奴はいない。俺は口到人差し指を立て、静かに言った。

「お前のグループは辰……竜だろ？だから優待者は櫛田の筈だ。一応連絡して聞いて欲しい」

何でメルアド持っているのに俺が聞かないのかと言うと、俺は彼奴が苦手だからだ。雪ノ下は俺の言葉に頷いてくれて、櫛田にメールを送る。と言うか、頼んだ俺が言う事じゃないだろうけど、雪ノ下つて櫛田とメルアド交換していたのか。これで櫛田が優待者なら完全にこの法則は正しい。そして応答が返ってきたようで雪ノ下は言った。

「……当たりのようよ。はぁ……つくづく貴方つてこういう捻くれた問題に関して
は神がかった頭のキレを見せるわよね。普段はだらしないのに」

ピンゴか。俺は内心ほくそ笑みながら雪ノ下の言葉に抗議する。

「おい、俺は休む時はきっちり休んでるだけだから。そんな毎日怠惰に暮らしてないから」

中学の頃はともかく今はそこまで気が抜けない。この学校がこんなに鬼畜仕様じゃなければ中学と同じようになっていただろう。本当、テスト赤点取ったら即退学とか、クラス対抗とか、特別試験とかでんこ盛り過ぎい！俺の平穩どこ行つたよ……ああ、マイスウィート小町と戸塚……元氣にしているかな。後、平塚先生は結婚出来たのかね？……悪寒がしたからこれ以上は辞めておこう。

「俺はもう行くわ。これ以上お前と一緒にいる所を由比ヶ浜とか葉山に見られたら面倒だしな」

「……ええ、また試験が終わった後に」

「ああ」

そう言つて俺は雪ノ下と別れて、学校側の特別試験専用メルアドに優待者である者の名前を入力しておく。後は送信ボタンを押すだけなのでグループディスプレイが始まった瞬間に裏切れば良い。正直現時点で裏切られるのならそうしたいが、ここで俺はミスをしてしまった。

試験説明時に茶柱先生に俺が聞いたのは『話し合いの時間以外でも裏切られるのか』だ。先生は可能とは言っていたがそれがグループディスカッションの前も可能なのかは言ってなかったので出来ない。万が一のペナルティーが怖いからな。

そして俺はグループディスカッションが始まるまで温泉やスパなどに行つてのんびりと過ごすのだった。

そしてグループディスカッション5分前の時間となったので、俺と柴田と細川は羊グループのメンバーが割り当てられた部屋に入った。

入るとほとんどのメンバーが揃っていた。しかしDクラスの由比ヶ浜がまだ来っていない。椅子に座って黙って待とうとした時、小声に柴田に聞かれた。

「なあ比企谷。お前の事を葉山がめっちゃ睨んでるけど何かあったのか？」

そう、俺を見た瞬間、葉山が殺意の宿っているであろう目を向けてきた。細川も疑問に思ったのか、こちらに向けて目で問いかけてきた。無関係な奴を巻き込みたくはない為、色々濁して言う。

「……まあ、色々あったんだよ。それ以上聞かないでくれ」

俺はポケットに手を入れながら椅子に座って始まるまで待つ。2人共、それ以上言う気がないと察したのか引き下がった。しかし細川からの視線が何故か離れなかった。

そして1分前に由比ヶ浜が入ってきた。俺以外の全員が注目している。

「ごめん、さっきまでトイレに行ってて遅くなったの」

「……良いから早く座れ」

「はい」

そして由比ヶ浜は椅子に座る。その時に俺を睨んできたが無視する。相手したら無駄に疲れるだけだしな。そしてグループディスカッションの合図が鳴った。

『ではこれより1回目のグループディスカッションを開始します』

その放送が流れた瞬間に俺はポケットに突っ込んだ手の中にあるスマホを操作して優待者である『葉山隼人』の名前を入力してある状態で止めているので送信した。葉山と由比ヶ浜が居る時点で話し合うつもりはないしな。

『未グループの試験が終了いたしました。未グループの方は以後、試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

着々と追い詰めていくならやっぱり必要なのは・・・

『・・・・・・は?』

キーンと言う音と共にそんな放送が流れた為、俺とある1人以外は呆然となった。

「ツッ・メールは誰が送ったんだ!」

Aクラスの生徒がそう言ったので他の奴もメールを送った人物を探し始める。俺はそんな騒然とした中、言った。

「あー、それ、俺だよ」

そう言うのと全員の注目が集まる。ああ、こういう視線はマジで苦手だ。だが、さつさと終わらせたいので我慢するしかない。葉山や由比ヶ浜は兎も角、ある1人を除いた奴以外の全員が険しい表情で俺を見る。そして代表としてAクラスの秋本が聞いてきた。

「何故、裏切ったんだ？」

「何故って、優待者が分かったからに決まってんだろうよ」

俺がそう言うのと、やはり喚いたのはこの2人だった。

「絶対嘘だし！話し合いもしてないのに分かるわけないに決まってんじゃん！」

「そうだ。ヒキタニはどうせ話し合いをしたくないから適当に選んだに決まってる……」

「葉山隼人」

葉山の言葉を待たずして俺は名前を呼ぶと言葉が止まる。そして俺は言った。

「……………お前が優待者だ」

そう言うのと、葉山を含むCクラスの生徒は青ざめた反応を見せる。ポーカーフェイス下手過ぎんだろ、話し合いでもばれんじゃねえの？その反応に他の奴も葉山隼人が優待者であることに確信を持ち始めた。俺は葉山から視線を外してAクラスの葛城派の奴等と言った。

「Aクラスのお前らは恐らく結果Iを狙った筈だ・・・そうだろう？」

「何が言いたい・・・？！」

俺の言葉に聞き返してくるが、俺は続ける。

「Aクラスは葛城派と坂柳派に分かれているのは此処にいる全員が知っている。だからこのグループのメンバーであるお前らは葛城派だってこともな・・・」

その言葉に対して驚きを隠せない様子のAクラス陣。そして俺は再度続ける。

「お前らは葛城の指示で優待者を当てに行かないようにこのグループのメンバーに言う筈だった。まあ、優待者の法則を見抜いた俺が潰したが」

「……そうだ！この試験は足並みを揃えれば誰もが得が出来る試験内容だったんだ。なのに……」

怨みがましいという様に俺のことを睨んでくる。俺は葛城の真の狙いが分かっているために呆れた視線を向ける。すると、葉山が言い出した。

「その通りだ！結果Iでこの試験を終えたら皆が50万pptを貰える筈だったんだ！なのにヒキタニ、お前が台無しにしたんだぞ!」

その言葉に呼応するようにCクラスとDクラスのメンバーが睨んできた。隣の柴田も戸惑いの視線を向けてくる。俺は呆れて溜息を吐きながら言った。

「優待者であるお前が100万pptなんだ、お前からすればこの試験では目指したい結果だっただろうよ。だからAクラスからその話を聞いたら乗るつもりだった」

「だがな、その案には全員が全員得をするように見えて、実際にはAクラスだけが得するんだよ。何故なら結果Ⅰはc p tが変動しないからな」

その言葉にある一定数の奴等は気付く。由比ヶ浜は未だに分かつていないようだが。本当に此奴どうやってこの高校に入ったんだ？裏口入学とかだろ。俺の言葉に苦虫を噛み潰したような表情になるAクラス。

「この試験ではお前らは他のクラスはともかく、28c p t差しか無いBクラスには差を詰めて欲しくない。だからこの逃げ切り戦法である結果ⅠかⅡを狙う予定だったんだ」

ぶつちやけ裏切るのはリスクが大きいと思っていたのだろう。失敗すれば――50c p tになつてBクラスに現時点で落ちるからな。まあ、俺が裏切ったから一緒だが。迷惑を見抜かれてAクラス陣は悔しそうな表情をする。そしてCクラスとDクラスの生徒は俺ではなくAクラス陣を睨み出す。まあ、折角のc p tを詰める機会を潰そうとしてたわけだから分からなくもない。しかし俺を睨みながら葉山が言った。

「だからって誰もが得する機会を潰さなくてもいいだろ……！」

本当に此奴はいつまでそんな皆の葉山隼人の仮面を被っているつもりなのか。本当は自分の事しか考えてねえだろ。そんな事を考えていると今度は由比ヶ浜が喚く。

「そうだし！折角皆が50万pptを貰えるチャンスだったのに何で台無しにするの!? 裏切んなくても良いじゃん!!」

「はぁ……、俺がお前らの事まで考えてやる訳ねえだろ。折角Aクラスに上がれるチャンスに棒に振るとか馬鹿のやる事だ。お前らだって優待者の法則が分かれば裏切るだろ」

俺の切り返しにCクラスもDクラスもだんまりする。図星かよ、と俺が呆れていると由比ヶ浜が在ろう事かこんなことを喚き出す。

「ヒツキーの所為で50万pptが貰えるチャンスが消えたんだから、他のグループの

優待者を言つてよ！」

「言うかアホ……」

他のクラスの奴等に試験の要となる優待者の法則を教えるとかどんなにアホだったとしてもやらんぞ。Dクラスは同盟関係ではあるが、お互い対等な協力関係であり、利益に反しない程度に手を貸すだけだ。優待者の法則が欲しければそれと同等か、場合によつてはそれ以上の報酬が無くては話しにもならない。ていうかいつまで俺に絡んでくるんだ此奴は……

「教えてくれないか？ヒキタニ」

「はあ……、お前も分からん訳じゃねえだろ。優待者を教えて欲しければそつちも同等かそれ以上の利益となるものを用意してから言え。後、交渉する時に人の名前を間違えて言うとか、やる気ねえだろ」

葉山は悔しげに顔を歪めるが、当たり前のことだろ。ぶつちやけCクラスから月に

4、5万pptを貰うぐらいじゃないと釣り合わない。人の名前を間違えた状態で交渉しようとするなんて、即お引き取り願われるぞ。それかドンパチやるか。俺はこれ以上何か言うのも面倒なので最後にこう言った。

「もうどつちにしろ試験は終わったんだ。お前らも解散して情報の共有でもした方が良
いぞ……」

俺はそう言うのと部屋を出る。そしてこの余った3日間はどう過ごすのかを考えながら廊下を歩くのだった。

『未グループの試験が終了いたしました。未グループの方は以後、試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

その放送が流れて私達Dクラスを含めた辰グループのメンバー全員が驚いた反応を見せる。いや、語弊があつた。正しくはAクラスの坂柳さんとCクラスの龍園君だけは驚きだけでなく愉悦と言った類が表情に混ざっている。そして坂柳さんは心底楽しそうにしながら言つた。

「おや、未グループはもう終了したようですね。やはり葛城君の作戦は上手いかないようですよ？」

流し目で坂柳さんは呆然とした様子の葛城君を見ながら言う。そして次に龍園君が実に愉しそうにしながら言った。

「おいおい、葛城の作戦は一秒も経たずにおじゃんかよ。お粗末なりーダーだなあ?」

龍園君の煽りに悔しそうな表情を浮かべる葛城君。そして坂柳さんはふむ、と言った後、驚くべき事を言った。

「気が変わりました。もう終わりにしましょう、正直この話し合いに意味はありませんし。あとは頑張って下さいね?」

「この話し合いに意味はない? 貴女、一体どういう意味で言っているのかしら?」

坂柳さんの言葉に堀北さんや平田君、櫛田さんは警戒しながら聞く。私は何やら嫌な予感を感じた。おそらく未グループで裏切ったのは……そう考えていると龍園君が何やら訳知り口調で笑いながら言った。

「ククク……もう恋しくなったのか？随分ご執心だこった」

龍園君の言葉に坂柳さんは不敵に微笑む。その微笑みは何処か妖艶な雰囲気があった。

「ええ、正直龍園君が優待者の法則について見抜くのはそう時間は掛からないでしょうし」

「っは、言われるまでもねえな」

そう言葉を交わして坂柳さんは携帯を取り出して、操作を始めた。私達は哑然とする中、そして1秒も経たずに。

『辰グループの試験が終了いたしました。辰グループの方は以後、試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

という放送が流れた。メールの受信音もなり、この放送が現実のものと裏付ける証拠だった。Dクラスと龍園君以外のCクラス、Bクラスが先程よりも驚いた反応を見せるが、最も驚いているのはAクラスの葛城君だった。

「なっ・・・裏切ったのか！坂柳！」

「裏切りましたよ、しかしご安心を。優待者は分かっているのでAクラスが損をする事はありません。ねえ？このグループの優待者である榎田桔梗さん？」

坂柳さんに言われ、動揺を悟られない様に努める。此処で動揺してしまえば情報を他の人にも与えてしまうからだ。しかし、僅かに榎田さんの肩や堀北さんと平田君と私の表情が強張ってしまう。それを龍園君は目を細めてさながら肉食獣の様な目で不敵に言った。

「・・・どうやら本当みたいだなあ。ククッ、でも良いのか？敵に塩を送るもんだぜ？」

そう、榎田さんが優待者であることを知られたら恐らくそこから優待者の法則が他ク

ラスの龍園君に勘付かれてしまうだろう。何故坂柳さんがそんな真似をするのだろうか。

「いえいえ、私からすればむしろ潰してもらいたいのですよ。今の環境は私には煩わしいので」

そして坂柳さんは立ち上がって部屋を出ようとする。そして出て行く前に振り向いて言う。

「葛城君の戦略ではこの先やっていけない事を覚えていて下さいね。もうBクラスはすぐそこなのですから」

そう言い残すと坂柳さんは部屋を出て杖をツカツカと鳴らしながら去っていった。そして取り残された私達は呆然と動けない中、龍園君が立ち上がって笑いながら言った。

「クッククク……やっぱり此処は退屈しねえぜ。未グループの裏切り者が、Aクラス

の坂柳が、Dクラスに在るであろうキレ者が、全員俺を飽きさせねえ。行くぞ、いつまで呆けてんだ」

龍園君はそう不敵に言うと、我に返ったCクラスの生徒達を連れて部屋を出る。そして続く様にBクラス生徒達が立ち上がって出て行く。その際に私達Dクラスに神崎君が静かに口を開いた。

「まだ試験は始まったばかりだ。結果に打ち拉られるのも無理はないだろう。だが切り替えなければ上には行けないぞ」

「そうだね……僕達も坂柳さんの言っていた優待者の法則について考えよう！」

その言葉にDクラスの私達は頷き、立ち上がってBクラスに続く様に部屋を後にした。そして最後に残ったのはAクラスの葛城君と葛城派の人達だった。

「比企谷君、少し良いかな？」

試験が終了して船内の展望台でのんびりと過ごしていると、声を掛けられた。俺は振り向いて言った。

「細川か……なんか用か？」

俺の後ろに立っていたのは細川舞美。普段は関わり合いがないBクラスの女子生徒で、俺が裏切った事に驚かなかった人物。見た目は金色の瞳に紺色の髪を後ろに短くポニーテールに纏めた体型もバランスの良い普通に美少女の奴。笑顔でいるのだが先程とは違う雰囲気だった。

「話があるんだけどね。ちょっと比企谷君に頼みたいことがあるの」

そう真剣そうに言う細川に俺は疑問に思っただけで聞いた。

「何だ？」

「と、飲み物買ってきたから飲みながら話そっか。あ、お金は良いからね？」

そう言って渡してきたのは何とマッカンだった。俺は驚いて聞いた。

「これ売ってる自販機、何処にあったんだ？教えて欲しい」

「やっぱりそれが好きだったんだね。それなら船内の2階の端にあったよ」

何やら細川は俺の好みを把握しているらしい。少し背筋に寒いものがよぎったが、悪意の類は感じなかったので気にしない事にした。俺はお金を払おうとしたが、頼みたいことがあるからそれが代わりのお駄賃で。と言われた。そしてマツカンを飲みつつ、頼みたいことが何なのか聞く。

「……………んで、本題の頼みたいことって何だ？」

「……………私がAクラスに上がるのを手伝って欲しいの」

……………お駄賃高すぎない？釣り合っていないよ？何なら俺が手伝って欲しい側まであるんだが…………俺はその言葉に戸惑いつつも聞く。

「何でそんな事を俺に言うんだよ。それにAクラスだって近いんだから別に――」

「BクラスがAクラスに上がったとして3年間その座を守りきれるとは私は思えないし、比企谷君だって本当はそう思ってるんじゃない？」

その言葉に俺は言葉に詰まる。BクラスがここまでAクラスに迫れたのは正直、有栖と葛城の派閥が対立していた上に有栖が余り特別試験に関わってこなかったからだ。だが、この試験を最後に有栖がAクラスを纏めれば今のBクラスでは9割方は敵わないだろう。Aクラスにも戸塚弥彦のような間抜けはいるが、基本的なポテンシャルはBクラスの生徒を上回っているだろう。

「……だから、個人で上がりたいから手伝って欲しいと？」

「うん。比企谷君が無人島試験やさっきの様に動いてBクラスを底上げしたのも、何なら入学当初のpt格付けの時だって比企谷君が対策してたのは知ってるから」

どうやら誤魔化そうとしても無理なようだ。俺がやってる事に確信している様な目

だからな。俺は細川の言葉に溜息を吐いて首を横に振った。

「……無理だ。お前をＡクラスに上げることは俺には難しい。大体２０００万のpptを集めるのもかなり時間が必要なんだ」

「……２０００万のpptを集めるのを『不可能』じゃなくて『時間が必要なんだ』って言うってことはpptを増やす方法を知っているって事だよな？」

どうやら試験を終わらせて気が緩んだのだろう。初歩的なところでミスってしまった。俺に詰め寄ってくる細川に俺は観念して学生証を見せる。そのpptの桁を見て細川は目を見開いて驚いた。

「５００万以上のppt……」

「賭け事で稼いだんだ。オンラインや部活で先輩等がボードゲームで稼いでる。運動部も多分やってるだろうよ」

俺は学生証をしまう。そして細川は真剣そうに言った。

「別に1年以内で上がりたいわけじゃないの。3年の時でも良いから私をAクラスに上げて欲しい。その代わりって言ったら何だけど・・・」

細川は何処か妖しげな笑みを浮かべて言った。

「多分だけど比企谷君が嫌ってる葉山君と由比ヶ浜さんを退学させるのを手伝うよ?」

その言葉に俺は目を見開いた。前から思っていたが俺は葉山と由比ヶ浜を追い詰めて早いうちに退学させたいと思っていた。前に星之宮先生や有栖達に理由を言わなかったのは俺の問題に巻き込みたくなかったただでなく、有栖達は言うとは思って無いが、何処かで察知されるのをおそれたからだ。

「・・・分かった。あの2人を退学させるのを手伝ってくれと言うなら俺もお前がAクラスに上がるのを手伝ってやる」

如何してこうまで簡単に手伝うと言ったのか、それは今後の生活の平穩を妨げるであろう葉山と由比ヶ浜が消せるから。そして細川のポテンシャルが想定より遥かに高かったから。俺がこの試験で裏切ることも言っていないのに驚いていないと言う事は恐らくこいつも優待者の法則に辿りついた可能性が高い。それに細川とは関係性がビジネスパートナーの様なものになる。余計なしがらみが無いので契約を切ることも可能だからだ。

「・・・うん、契約成立だね。じゃあこれからよろしくね♪」

「・・・多分録音してんだろ？」

「あはっ！流石に鋭いね。如何して分かったの？」

「制服の胸ポケットが不自然に膨らんでるからだよ」

「え、って事は胸を見てたってことだね。・・・エッチ」

「いや、何でそうなの？ちよつと見ただけでガン見してたわけじゃ無いよ？不可効力だ」

いやマジで、ハチマンウソツカナイ。後、ちよつと頬赤らめて身体抱きしめるとか何処その後輩みたいにあざとい。俺じゃなかったら告白して振られてるよ絶対。

そうして俺は思わぬところで協力者を得たのであった。

次々と終わりゆく試験

『未グループの試験が終了いたしました。未グループの方は以後、試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

『辰グループの試験が終了いたしました。辰グループの方は以後、試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

放送が流れたのは、1回目は試験が始まった瞬間。2回目はその数分後だった。オレ達卵グループはその放送を聞いて動揺していた。同じDクラスの幸村が驚きの声を洩らした。

「なっ?!?裏切ったグループがいるのか!」

「これは拙者も驚きが隠せないでござるよ」

博士もさつきまで高○健の真似をしていたのに最初の口調に戻っている。隣を見ると軽井沢の表情も堅い。オレは未グループと辰グループの裏切り者が誰なのかを予測する。辰グループはまだ絞り込み切れないが、未グループは十中八九あの暴力事件の時の生徒会裁判や佐倉のストーカー騒動で関わった比企谷だろう。

既に優待者の法則を見抜いていた可能性が高い。予想以上に比企谷は危険だ。Cクラスの龍園も危険だが、それ以上に読めない。恐らく比企谷もオレと思考が似ているな。茶柱から脅されたオレとしてはこの結果は著しくない。

AクラスとCクラスはともかく、Bクラスはやり易いと思っていたが考えを改めないといけないな。俺はある生徒を見ながらここまで組み立てた算段を再び組み直すのであった。

展望台で俺と今さつき協力者となつた細川は喋っていた。主に今後の動きや契約の
中身について。

「で、比企谷君は葉山君と由比ヶ浜さんを退学させたら後は誰も退学させることもない
の?」

「ああ、今は特に無い。細川はAクラスに上がったならそこで契約を解消で良いのか?」

俺が聞くと、細川はうーんと唸りながら言った。

「今のBクラスがもし今回の試験でAクラスに上がったとしても契約は切る気はないよ。3年に上がってAクラスで卒業出来るのが確定したらかな？だから長い付き合いになるね♪」

良い笑顔でそう言う細川に俺は内心舌打ちする。やっぱり扱き使うつもりだな。俺は溜息をつくと細川は俺の心内を見抜いたのか、こう言った。

「ああ、でも安心して良いよ？私と比企谷君の関係性は対等だし、比企谷君が得になる手伝いもするつもりだから。龍園君や坂柳さんみたいにするつもりはないからね」

「……それ聞いて安心したわ」

有栖はともかく龍園みたいに下僕の如く駒として扱われるのはごめんだからな。細川は結構優秀はいから龍園みたいな暴力で屈服させることや有栖のようにカリスマで纏めることは無理でも部下は作れそうだな。葛城は……カリスマじゃなくて損得勘

定が保守勢に合っただけだな。

そんな事を考えていると、辰グループが試験終了したという放送が流れた。絶対に有栖だな。1日置くと言っていたが気が変わったようだ。細川は少し驚きの声を洩らす。

「辰グループも終わったのは予想外かな……でも裏切った人は坂柳さんか龍園君かだね」

まあ初日で裏切るような大胆な行動を取るやつは限られてくる。幾らc p tを増やすチャンスだったとしても当然リスクを省みて止める奴の方が多いからな。

「これでこの試験は荒れまくるだろうな。正直言つて優待者の法則を見つけたとしてもこうやって初日に裏切る行動を取るやつは少ないだろ」

さて、有栖と龍園が他のグループを終わらせにかかるだろうな。俺はどうするか……ぶっちゃけ他のグループのメンバーが分かればc p tを下げないようにする事も出来るが12グループ中、自分を入れて4グループしか知らないしな。とりあえず網倉に連

絡を後で入れよう。

「・・・・・・・・後1時間は暇だからカフェでも行くか」

俺の独り言に細川は反応した。

「じゃあ私も付いて行っても良いかな？やる事ないし」

「やる事ないからって俺に付いてくるって物好きだな・・・・・・・・まあ良いが」

「パフエでも食べよっかな！」

廊下を機嫌良さそうに歩いていく細川に俺は付いて行つた。

そしてカフェに着いて貸し切り状態の店内の近くの席に座る。そして適当にメニューを頼む。

「ブレンドコーヒーにパンケーキ。それと練乳つてありますかね？」

「私は紅茶に3種のベリーパフェをお願いします」

そして頼んだ物が来るのを待つ間、俺は適当にスマホで電子書籍を見ていると細川が話しかけてきた。

「もう比企谷君はこの試験で動く気は無いの？」

「ん、動けるなら動きたいが必要な情報が揃ってないしな」

「私は全グループのメンバー知ってるけどどうする？」

「もうちよつと後にする。Bクラスも混乱するだろうしな」

「ん、分かったよ八幡君」

「ん？何故に名前で呼んだ？」

「協力者なんだから円満な方がいいかってね。駄目だったかな？」

少し不安げに聞いてくる細川に俺は、別にいい。と言った。

無人島試験前の俺なら多分止めただろうが、此奴とは唯の協力者で深い意味合いで言っている訳ではないと分かっているのでも思わない。別に周りの勘違いを煽る行動を取る気ないし。細川はクラスほぼ全員の連絡先を交換しているようだ。こういう奴は他クラスにもパイプがあると俺は思った。細川には他クラスの情報も得られるだろうからやつて貰うかと俺は考えた。そして――

そう思った時、放送が流れた。

『猿グループの試験が終了いたしました。猿グループの方は以後、試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

細川はその放送を聞いて驚く。

「猿グループ．．!? 一体誰が終わらせたの．．．?」

俺もその事について俺も思考するもグループメンバー自体知らないのでお手上げだ。俺は再び電子書籍に視線を戻そうとしたとき、近づいてくる人物を見つけた。

「八幡君も此処に居たんですね」

近づいてきた人物は有栖だった。試験を終わらせてそこまで時間が経っていないのに此処に来たという事は休憩するつもりだったのかも知れない。有栖は初対面であろう細川を見て不思議そうな表情で聞いてきた。

「あら? その方は一体誰ですか?」

「初めまして、八幡君と同じクラスの細川舞美です。よろしくね」

有栖は眉根をほんの少し寄せて俺に笑顔を向けてきた。しかし目は笑っていない。はいよ、しかもなんか周りの気温が下がって寒く感じるんだけど。何やら地雷に足を踏み込めてしまったようだが何なのかはわからない。とりあえず事情を説明しよう。

「あ、あー。細川は利害関係が一致した協力者なんだよ。俺はあの2人を退学させる為に、細川は個人でAクラスに上がる為にな」

有栖はその言葉に先ほど纏っていた雰囲気霧散させ、意外そうな表情を浮かべた。

「ほう、個人で八幡君に手伝ってもらって上がると。意外ですね。一之瀬さんクラスにそんな方が居たとは思いませんでしたよ。でも良いのですか？Bクラスを裏切るような真似に思えますが」

「あはは。うん、正直坂柳さんが纏め上げるクラスと戦うよりも個人でAクラスに上がった方が良いかなって。Bクラスに不満は無いんだけど、Aクラスに上がって卒業したいから」

「ふむ、もし上がってきたら歓迎しますよ。見た所は葛城君よりも遥かに優秀そうですし」

そう言って有栖は細川の雰囲気から優秀そうと判断した。そして有栖は俺の隣に座り、メニューを選び始めた。そして有栖がメニューを頼むとほぼ同時に細川と俺の頼んだ物がきた。それを食べている途中でふと有栖に聞いた。

「なあ、有栖。猿グループで裏切った奴の心当たりってあるか？」

「……ふむ、グループメンバーの中に気になっている人はCクラスの椎名さんとDクラスの高円寺君ぐらいでしょうか」

間違いない高円寺だ。あの噂の唯我独尊が服を着たような奴は試験は煩わしいと思っているだろう。あの余裕がある表情は優待者を既に見抜いていてもおかしくない。ひよりはそんな目立つ行動はしないだろうしな。

そんな事を考えていると突如スマホに電話があつた。件名は龍園。俺は思わずげん

なりしながらも出ないと面倒な事になりそうなので出た。

「・・・もしもし」

『おい、比企谷。さっきの裏切りはお前の策略か?』

「違う。猿は多分高円寺が裏切った」

「高円寺・・・噂の自由人か。知りたいことは知れた。じゃあな」

そう電話は切れた。正直最低1日で優待者の法則を見抜くだろうからこの試験も終わるのも時間の問題だな。そして有栖が聞いてきた。

「龍園君は何と言っていましたか?」

「あの猿グループの裏切りは俺なのかどうかの確認に電話してきた」

「そうでしたか。じゃあ私も動きましょうか」

有栖はメールを送る。そして数秒後――

『西グループの試験が終了いたしました。西グループの方は以後、試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

『戌グループの試験が終了いたしました。戌グループの方は以後、試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

『丑グループの試験が終了いたしました。丑グループの方は以後、試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

という放送が流れた。残りは6クラス。あとは恐らく龍園に潰させるのだろう。

「これで仕込みは終わりました。ふふ、葛城君の慌てる姿が目に見えますよ」

ドSだな・・・と遠い目をしていると細川がない事に気がついた。

「ん？細川は？」

「どうやら誰かに呼び出されたようですよ」

有栖の言葉に、気にすることでもないか。と思つて練乳をたつぷりと入れたコーヒーを飲む。うん、MAXコーヒーだな。と堪能していると高笑いが聞こえてきた。

「ハッハッハ、After all the tea after training
is different! (やはり鍛錬の後の紅茶は違うねえ) Don't you
boy and little girl think so too? (君達もそうは思わないかね?)」

「...Don't suddenly talk to me in English.
(急に英語で話しかけてくんないよ) I'm scared. (怖いだろ)」

「I, m not a little girl than that. (それよりも私は幼女じゃないんですが) Will you withdraw? (撤回してくれませんか?)」

何故か英語で高円寺に話しかけられて咄嗟に乗ってしまった。そして有栖は幼女と言われたことに青筋をたてる。怖いよ。マジで怒らせんのやめて欲しい。周りを見てみると疎らだが他の生徒達が入ってきている。

「ふむ、英語は端正なようだねえ、腐り目ボーイ。丁度リトルガールもいるし、先程言った女性へのリードについて私が享受してあげよう」

有栖の言葉を見殺して高円寺が言う。有栖から黒いオーラが出始めたのを必死に見ないようにして俺は言った。

「・・・いや、さつき遠慮しただろうが」

「ふむ、では始めようか。先ず——」

拒否権無しですかそうですか。多分逃がしてくれないだろうなと思い、俺は溜息を吐いた。

私は八幡君とカフェに行き、坂柳さんとも挨拶を交わした後、パフェを食べているとメールが来た。Bクラスの友達からメールで呼び出された。

『ちよつと2人きりで話したいから船の最下層に来て欲しい』

船の最下層というのが違和感をもたらしたが仲は良いので特に疑うことはしなかった。そして最下層のあるフロアにまで来る。そして携帯の位置情報が示しているのは扉の向こうだ。私は重い扉が金属が悲鳴の様な音を立てるのを気にせず開く。扉の向こうは薄暗く、碌な明かりが無い不気味な雰囲気少し緊張するが、何かある訳もないと思つて中に踏み入る。

「用があるから来たけど、話して何ー？」

私は誰の姿も見えないので誰かいるか確認する為に声を張り上げる。そしてその声に返答がきた。

「やあ、細川さん待ってたよ」

返答したのはBクラスの友達ではなく、本来此処にいるはずのない人物――葉山隼人が笑みを浮かべて立っていた。私は友達の携帯を何故葉山君が持っているのかと警戒しながらも自然体のまま聞く。

「何で葉山君が此処にいるのかな？」

「ああ、君と話したい事があったから君の友達に携帯を貸して貰ったんだよ」

笑みを浮かべながら言っているが、その笑みに含まれた何かに気づき、私は更に警戒する。いくら私の友達が葉山君とも仲が良いからと言ってそんな簡単に携帯を貸すわけがない。私はそう思いながらも本題を聞いた。

「それでこんなところに呼び出して一体何の用かな？」

「ああ、用件は君と同じグループにいた比企谷八幡って奴を退学させるのを手伝って欲しいんだ」

葉山君はそう笑みを深くして言った。その眼には有り有りと八幡君への憎しみが宿っていた。私は不自然にならないように手を後ろに回す。

そして携帯の録音を開始する。

「退学って何でかな？」

「比企谷にいられると不都合なんだよ。兎に角手伝って欲しい」

「葉山君を手伝ったとして私への見返りは何をしてくれるの？」

「僕のpptを月1万払うよ。それで如何かな」

葉山君の言質が聞きたいので私は煽る。

「でも葉山君さっきの試験で比企谷君に優待者だつて見破られてたじゃない。比企谷君を退学させられるとは思えないんだけどなあ」

その言葉に葉山君は苛立ったような顔を一瞬だけ見せるもすぐに笑みに戻し、こう言った。

「あれは比企谷のはつたりで、試験の結果を見たら分かるさ」

「嘘言わなくていいよ。私も葉山君が優待者だつて確信してるから。それに比企谷君に優待者だつて言われたときの動揺も凄かったよ?」

思わず笑いを洩らしそうで我慢が大変だったよ。葉山君は苦虫を噛み潰したような顔をした。私は更に言った。

「それに葉山君ってCクラスとかでも孤立してるって聞いたことがあるんだけど。私はそんな君が比企谷君を退学にできるわけがないと思ってるけどな。だって彼、坂柳さんとか一之瀬さんとも仲が良好し」

もう返す言葉がなくなつたのか黙り込む葉山君。話は終わつたと判断した私は最後に言つた。

「それに私には先約があるから協力はできないよ。話が終わりなら私は戻るから」

そして私は来た道を戻ろうと踵を返そうとする。その時葉山君の苛立ちを含んだ声が聞こえた。

「残念だよ。．．．．．だけどこのまま徒労に終わるのは嫌なんだ。――――」

「――――」だから君には比企谷を呼ぶための餌になつて貰うよッ」

葉山君はそう言うのと此方に走つてきて掴みかかろうと右腕を伸ばしてきた。余りにも突発的な行動、更に自分は女子で相手は運動部で鍛え込んでいる男子だ。普通であれば躲けたところで直ぐに捕まってしまうし、抵抗しても無意味だろう。体格差もさることながら力では普通であれば女子が男子に敵う通りは無い。

そう、普通であるならば。

「・・・・え？」

パアンと乾いた音が響く。状況が理解出来ないのか、素っ頓狂な声を洩らす。しかしそれは地面に倒れ伏した葉山君なのだが。私はそんな葉山君を冷ややかな視線を送る。

「駄目だよ！簡単に女の子に掴みかかろうとしたら。掴みかかるんだったら相手を選ばないと、相手の身のこなしからの程度の手合いなのかも見切らないとね」

あの瞬間、掴みかかった葉山は油断していた。意表を突いて細川を人質に比企谷を誘き出そうとしていた。中学の時から自分の好きな人の近くにいて妬ましかった八幡を修学旅行で引き離せたのに、この『高度育成高等学校』で再会した。疎ましく、それ以上に修学旅行の裏を暴露されるのではないかと気が気でなかった。

そしてこの学校でもまた人気者になれると思ったがクラスの暴君、龍園によって支配されて下僕になった。比企谷のBクラスがまさに自分がいる筈の所だったのに、現実はいく逆でビクビクとしながら暴君の恐怖政治に敷かれてコキを使われる自分。

ふざけるな。そう思いながら憎んで生活してきた。無人島試験で八幡を殴った時にはその鬱憤が少し晴れた葉山。そして高揚した気分のままバカンスを楽しみ、龍園の策に従い船に戻って結果を待っていた。これでCクラスの勝ちは確定したと。比企谷よりも自分が上に立っているのだと思っていた。

しかし、結果はc p tは0で最下位、Bクラスは200 c p t近くで2位で、1番下だったDクラスにも差は詰められる。そしてレストランの件で肅清も受けさせられる。痣にはなっていないが、山田アルベルトのあの怪力で殴られた時の痛みは骨の髄までトラウマとなって刻まれた。

そして更には船上試験では試験が始まった瞬間に優待者を八幡に見抜かれて150 c p tが確定してしまった。最早破滅にリーチとなりつつある葉山は形振り構っていないらなくなってしまう、直接八幡を振じ伏せようと考え、同じグループに居た細川を利

用しようとした。

しかしそれも上手くいかない。ついに葉山は理性を保てずに再び襲いかかった。

殴ろうとして放った拳は細川の鳩尾に入る、と思われたが直前で受け止められる。鍛え込んでいる身体からかなりの力を持つて放ったのにそれを受け止めた細川の顔は苦しそうな表情を浮かべるどころか涼しげだった。

「やっぱり運動部の男子の拳は重いね。だけど動きがなつてないよ」

その挑発じみた言葉に更に葉山は乗り、一番使い込んでいる利き脚で膝蹴りを放つ。それを細川はフワリと避ける。続けて左手で曲線を描くようにして顔を殴ろうとする。

「女の子の顔を殴ろうとするなんて男として終わってるね」

細川は右手の甲で払うように弾くと、細身の体格から想像も出来ない速度で左脚でミドルキックを鳩尾へ綺麗に叩き込んだ。

「ガハッ！」

余りの痛さに昼に食べた物を戻しそうになるが、ギリギリのところでは堪える。しかし痛みで蹲ってしまい動けなくなる。細川は脚先で葉山の顎を上げてその様子を見下ろす。葉山は苦しげに呻く。

「・・・何で、ヒキタニに・・・つくんだ」

細川はその言葉にうーんと唸ると思いつたのか、言った。

「強いて言えば、人間性かな？君と比企谷君の間に何があつたか知らないけどさっきの思つたよ。君だけには協力したくないって」

襲われたので償いとして軽く男の象徴の部分に蹴りを入れると、葉山は度重なる痛みで気絶した。細川は気絶したのを見て最後に言った。

「カメラとかは無いから良かったね、お互いに。だからこれくらいで済ましてあげるけど次は無いよ?」

そう言い終えると葉山を放置してフロアを出て行った。

水面下の計略と疑い

高円寺の謎のレクチャーが終わった後、俺は有栖と一緒にスパへと出向いていた。時間は2時を回り掛けている。高円寺の話は30分ぐらい聞かされていたのでぐったりしている。

「彼奴、話が長え……何であんなに内容が尽きないんだよ」

普通に教師の授業くらいでしかあんな長時間話すことねえよ。有栖も少し疲れが見えていて、俺の言葉に同意した。

「あそこまで休みを入れずに話し続けられるのは、教師でも少ないでしょうね」

俺と有栖は同時に溜息を吐いた。何度か口を挟んだのだが、話しは止まらず数分後には黙って聞いていた。そのお陰と言ったらあれだが女性のリード方法が身に付いた。今、有栖と腕を組んで歩いているが心臓バックバク程ではなく少し緊張するぐらいで済

んでいる。主に教えられたのは意識の切り替え、後は疲れにくい歩き方だ。女性と触れ合っても緊張しない意識の持ち方を教えてもらった。御曹司ってこんな廃スペックなんだなあ。

「まあ、こうやって八幡君と腕を組んで歩けているので良かったです」

「……照れるからそう言うのやめてね。まだ慣れてないから思わず心臓バクバクになるだろ」

俺はクスクスと楽しそうに微笑む有栖から眼を逸らす。生徒達ともすれ違ったが、男子は嫉妬の殺意、女子からは好奇や驚きと言った視線を向けられていて最早俺のライフは0だ!と思うくらいには悶えていた。そしてスパの施設へと足を進めている途中で、色々な意味で今会いたくない人物と鉢合わせした。

「腐り目……と女王様じゃねえか? ククツ、随分と熱いなあ。ええっ?」

龍園だった。しかも伊吹や石崎、山田と言った部下を連れていた。こんな偶然だった

としても今会いたくなかった。絶対面倒くさいやつだから。俺は内心、溜め息を吐きながら言った。

「……で、お前は部下をぞろぞろ従えて何してんの？」

俺が聞くと、龍園の左斜め後ろにいる伊吹が不満タラタラの様子で俺に突っかかってきた。

「ちよつと、此奴の部下っていう枠組みで言うのやめてくれる？私此奴に従っているのは自分にとって得の部分があるから従っているだけだ」

……一体どうしろと。俺からしたら伊吹や石崎は完全に部下にしか見えないんだが。山田はSPか、ヤクザの用心棒くらいにしか思えない。すると有栖が笑いながら言った。

「ふふ、随分とアクティブな人がいるようですが、手綱はしっかりと持ってた方が良いでしょうよ」

有栖の物言いに龍園は受けて立つように獰猛に笑い、伊吹が睨みつけるように有栖に視線を送る。その状況に割って入る様に聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あれ、八幡君と坂柳さん……それに龍園君に伊吹ちゃんたちだ。こんな所でどうしたの？」

声をかけてきたのは先程別れた細川だった。そして細川を見た伊吹が驚きに目を見開いた後、僅かに睨む様に見つめて言った。

「細川……アンタも此処に入学してたの」

「うん、してるよ。久しぶりだねー、背は高くなつたんじゃない？」

何やら2人は知り合いの様子だった。一見関わり合いそうにないタイプの様に思える。俺は意外に思いながら細川に聞く。

「知り合いなんだな」

「うん。伊吹ちゃんとは昔道場の親善試合があつたの。それで勝負したんだよね」

道場、色々な種類があるが2人共に何か武術の経験があるのは動きや体軸のブレの無さで分かる。堀北生徒会長に鍛えられたからそこらへんは見抜ける。有栖もやはりといった様子だった。細川の言葉に龍園が反応した。

「ほお、親善試合ね・・・どっちが負けたんだよ伊吹？」

普通、勝ったのはどっちって聞きそうなものだが、外道の龍園は聞き方も癪に触る。聞かれた伊吹は龍園を睨みつつもやがて苦虫を噛み潰したように言った。

「ツ・・・・・・私が負けたんだよ」

「付け足すとしたら完封負けだったよねー。伊吹ちゃんは正直過ぎるから勝ちやすいんだよ」

どうやら細川も大概外道のように伊吹の苦い思い出に塩を塗るといった追い打ちをかける。やめて、伊吹のライフはもう0よ！伊吹は更に眉間を険しくさせて細川を睨むが、張本人はニコニコと微笑みながら何処吹く風だ。怖つ、女怖つ。龍園は伊吹の様子をニヤニヤ見ながら、次は細川に視線を移す。そして笑いながら言った。

「Bクラスにもこんな奴が居たとはなあ。なあお前、俺の部下にならねえか？働きのよつては良い待遇をしてやつても良いぜ？」

その問いに石崎は驚き、山田も関心を寄せた様に龍園を見る。伊吹は龍園を凄まじい形相で睨み付ける。有栖は面白いといった様子で笑みを深める。俺も細川に注目する。正直乗り換えられるとヤバイ。Bクラスにスパイとして動かれたらBクラスはCクラスに抜かれる可能性が上がる。そして団結しているクラスも崩壊する。帆波や神崎などの尽力を無駄にはしたくない。そう考えている中、細川は笑いを洩らして言った。

「・・・ふつ、悪い話じゃなさそうだけど。領く程ではないかなあ、それに先約の人よりも満足させて貰えるとは思えないし、私を領かせたいなら屈服させてみなよ。私、強

い人が好きだからね」

こつちにウインクを飛ばす細川。こつちを巻き込むなよ。と内心溜息を吐いていると龍園は寧猛な笑みを浮かべて更に言った。

「面白えじゃねえか。お前が望むならこつちで満足させてやる事も出来るぜ?」

下半身の部分を指し示す。伊吹は輕蔑の睨みを向け、有栖は冷たい笑みを浮かべた。まあ、女子はあんまり聞かない方が良いだろうな。細川は楽しそうに笑うと言った。

「うーん、龍園君は私の事は好きじゃないでしょ? 私も君は好きじゃないって言うか興味ないし、龍園君がそう望むなら他の人に当たれば良いんじゃない? 龍園君って意外とモテそうだし、ちよい悪っぽい利口なヤンキー猿って」

そう言った瞬間、龍園は間合いを詰めて細川に左中段蹴りを繰り出そうとする。細川は受け流そうと右手で叩こうとするが、龍園のそれはフェイントで直前で引つ込め、右拳を鳩尾に繰り出す。

当たると思われた寸前で左手で受け止めると、細川は右手で手刀を龍園の首に当てようとする。その直前に龍園は左手で迫る手刀を掴む。そして2人共距離を取るよう後ろに飛ぶと龍園は関心したように笑いながら言った。

「悪い、脚と手が滑っちゃった。しかし女にしては中々どうしてやるじゃねえか」

「女の子も強いんだよ。手が滑ったなら仕方ないけど今度は無いよ?」

そんな会話をしている中で俺は周りに人がいないのを見て安堵した。最初は龍園から仕掛けたが細川も迎撃していたので喧嘩両成敗になってしまうからだ。迎撃しなければ証言してBクラスに有利なカードが出来たのに。

「クク、面白え奴がいたもんだ。比企谷がたらし込んだのか?」

「人聞きの悪い事を言ってるじゃねーよ。此奴とは利害が一致しているだけだ、それ以上でもそれ以下でもない」

そう細川とは唯の利害関係が一致しているだけの協力者だ。だからそんなに睨まないでください有栖さん。貴女の絶対零度の微笑みは怖過ぎるんですよ。龍園は軽く笑って石崎達を連れて去って行つた。伊吹はその場に残って細川を睨む。細川は楽しそうに聞く。

「何かな？伊吹ちゃん。リーダーの龍園君は行っちゃったけど」

「……アンタが何を企んでんのかはどうでも良い。ただ、敵になるんだつたら容赦しないから」

そう言い残してその場を去つた伊吹。俺は細川に気になることがあつたので聞いた。

「お前、何の武術習つてんの？相当戦い慣れてる様子だったが」

俺の近くで武術を習つてる女子は雪ノ下や陽乃さんぐらいしか知り合いにいないが、見た感じではその雪ノ下や陽乃さんよりも戦い慣れている。龍園は武術ではなく、独特

の喧嘩術だった。動きも相当だったから龍園もかなりの場数をこなしているのだろう。なのに細川は余裕そうな表情を浮かべている。そしてその様子を崩さずに言った。

「ちよいと事情があつて詳しくは話せないんだけどね。武術はジークンドーと古武術を習つてゐるの。まあ、殴られて、弱味握つても良かったんだけど、つまらないから敢えて迎撃したけどねー」

笑いながら軽い説明を入れる細川に対して、警戒を数段階上げる。此奴もそういう考え方をするらしい。龍園も本気ではなかったので分からないが、恐らく俺の勘が正しいなら細川は……そう考えていると、有栖が考えている様子だったので聞いた。

「どうした……?」

「……いえ、何でもありません。それよりスパに行きましょう」

有栖がそう言ったのを聞いた細川は私もついて行くよ。と言った。俺は女子が増えた事に更に目立つことが頭に浮かんで、溜息を吐いてゆつくりと歩き始めた。

「
・
・
・
ン
ン
ツ
・
・
・
あ
」

「はあっ……んああ……」

「んんう……ひゃ……んあ……」

「んあ……はふう……」

……誰か助けて、理性がヤバイ。スパにきてマッサージを受けに来ただけなのに嬌声が聞こえてくるんですけど。側から見たら全年齢対象から外れる様な声でするってスパなのか如何か疑うんですが。

幸いにもアイマスクをしているので視界は隠れているが、目に毒ならぬ耳に毒な声がしてスパの気持ち良さの恩恵が全くわからない。マッサージしているのは女性なのでまだ良いが男性だったら此奴等は危ないことになっているだろう。

此処にいるのは俺と有栖と細川、それと試験が一時的に終わって合流した帆波とひやりだ。途中で合流した2人は細川がいることに疑問符を浮かべていたが、俺は特別試験の説明の後に喋って仲良くなったと言っておいた。グループデイスカッションの時は

即悪斬と言っても過言じゃない程早く終わらせたので話す機会がないからだ。

そしてスパを受けた後、廊下を歩いている俺はげんなりとした表情を自覚しながら隣を歩いている有栖達に言った。

「おい、お前ら……スパのマッサージが気持ち良いのはそうだろうけどな。喘ぎ声を出すのは勘弁してくれよマジで」

俺の言葉に全員が僅かに赤くなつた。男の身としてはあの空間にいるのはある種の地獄だ。息子が何度か勃ちあがりかけたのを必死に理性と葉山の顔を思い出し、萎えさせるのは大変苦痛だった。

「すみません……思つた以上に気持ち良かったもので」

普段なら揶揄ってくるであろう有栖も思つた以上に羞恥心を募らせたのか、素直に謝ってくれる。帆波も苦笑しながら言った。

「にやはは……思い切り出しちゃつてたもんね」

うん、その言い方は今言われると卑猥に聞こえるのは俺だけじゃないよね？もうちょいい言い方考えてくれると八幡的にポイント高いかな。俺は溜息について逸らしていた現状について言つた。

「それと……流石に他の奴に見られるとヤバいから腕を組むのは止めて欲しいんだけど」

今、俺は有栖と帆波に腕を組まれてる状態である。スパの施設を出た時に有栖が腕を組んで歩こうとしていたので、帆波が不機嫌になつて、私も組む！と言つて腕を強制的に組まされたのだ。帆波の何時もと違う様子に驚きつつ、両腕に感じる違いつつも柔らかい感触に耐えて歩いてきたが、他クラスの女子と一緒に時点でかなりアレなのに、同じクラスの帆波とも腕を組んでいるところを見られたら流石に不味いので言つた。

「ふむ、こういう時にはこの言葉が適切ですかね。『だが断る』」

良い笑顔でジョ○ヨネタをぶっ込んできた有栖。誰だ此奴にそのネタ提供している奴は！あ、昔漫画で俺が教えたんだった。ノゲ○ラでも1回使われたネタである。あの時は腹痛くなつて筋肉痛になる程笑つた。急に彫りの深い顔になるんだからな。1番好きなキャラは東方○助である。

「本当に八幡君は好かれてるねえ。もしやギャルゲーの主人公が現実に飛び出してき たつて思うくらいには」

細川の揶揄いに俺は突っ込む。

「俺が攻略する前にフラグ折つて終わりだろ。それどころか一生会わないまでである」

「ふーん、好かれてるつて言うのは否定しないんだねー？」

ニヤニヤと聞いてきた細川に有栖達もハッと俺を見てくる。俺は静かに視線を逸らす。そんな時、ズボンのポケットが振動した。俺は組まれてる腕を放してもらい、誰からの着信なのか確認する。そして有栖達に言った。

「悪いが用が出来たから、此処で別れるぞ」

「誰からのの？」

帆波の問いに俺は静かに返す。

「……すまん。教えられない」

その言葉に少しだけ残念そうな表情を浮かべたが、一瞬で元の明るい笑顔を見せて言った。

「……そつか。じゃあ何かあったら直ぐに連絡してね？」

帆波の言葉に俺は頷き、有栖とひよりも頷き返してくれた。細川は変わらない楽しそうな表情を向けてきた。俺は歩いて呼び出してきた人物のいる『最下層フロア』へと足を運んだ。

最下層フロアの奥にある空きスペースに俺は呼び出された。普段なら無視しても良いのだが、と言うか無視するのだが呼び出しの用件と呼び出してきた人物によつては無

視出来ない。

『由比ヶ浜結衣と葉山隼人についての話がしたいから最下層フロアの空きスペースがある場所に来て欲しい』

俺はもう一度、メールの確認をして見間違いないかどうか見る。そして目的地の空きスペースの金属製の扉を開けて中に入る。中は薄気味悪く、海に最も近い位置にあるので結構涼しい。ホラーにも使われたそうだな。と思いながら扉を閉めて呼び出した相手に向けて言った。

「……………由比ヶ浜や葉山についての話って一体何だ？……………」――櫛田

そう言うのとゆつくりと足音が近づいて来た後、何時もその仮面をはめながら人と接しているであろうDクラスの人気者、櫛田桔梗が姿を見せた。誰もが好きになるであろう最高で偽物の笑顔を向けて。

「話をする前に……………久しぶりだね、八幡君」

そう言った瞬間、櫛田は仮面を外した。眼には恐ろしいほど黒くドロドロしたような『闇』があった。俺は驚きつつも警戒を崩さずに言った。

「何で今外した？バレてもいいのか？」

その言葉の意味を理解しているのであろう。櫛田は薄く微笑んだ。その笑みは一見普段の笑みと変わらないように見えるが、纏う雰囲気は全く別のものだ。

「ふふふっ……やっぱり分かってたんだね。流石だよ」

何だ……？此奴は俺を知っているような反応を見せてくる。そして俺も何処か既視感があった。前にもあったが俺は櫛田と会っている？俺が思考していると櫛田はそれを読んだかのように話し始める。

「何処で会ったか思いだせないみたいだから、昔話をしてあげるね」

――――

あれは小学校6年生の頃だったかな？私は小学校の中では最上位カーストだったんだ。明るい振る舞いに容姿も相まって私は学校中の人気者だった。他の子は何をするのにも私を入れてきた。

最初は楽しかった。皆と遊ぶのは面白いし、何より退屈しないからね。私は入れ替わり立ち代わりで色々なグループの人達と遊んだ。勉強でも皆、私を勉強会に誘った。

でもそんなある日、何時も通り私はグループの誘いに乗って遊ぶとした時、別のグループも私を誘おうとして取り合いになったんだ。皆で一緒に遊ぶうと言つてもそのグループのメンバーは互いに嫌い合つてたから如何しても領いてはくれなかったんだ。だからその場では最初に誘いにきたグループを優先した。でも、後になったグループの子は不満を持つてしまった。

そこから私に不満をぶつける機会が急激に増え始めたんだ。私を責める意見もあったけど人付き合いの良さが活きたのか少なかったよ。でも他人の愚痴を私にぶつけられることが増えた。それでかなりのストレスを溜めてたんだ。

『彼奴マジ意味不明！』

『本当感じ悪いよな彼奴』

そんなことばかりだった。私はその愚痴を聞いた後に抑えきれないものは何処かにぶつけてた。その時は誰も居ない公園でストレスをぶつけてた時だった。

「あー、ムカつくムカつくムカつくムカつく!! 何で彼奴等、全部私にぶつけてくるんだよ！ 私に打たれるだけのサンドバックじゃないんだよ、巫山戯んな！」

私は苛ついて近くの自販機に蹴りを入れた時、蹴りの音と共に足音が聞こえてきた。焦って振り向いたら驚いた顔の濁った眼と主張気味のアホ毛の男の子が缶コーヒーを

持っていた。恐らく飲んでいた缶コーヒーを自販機の隣にあるゴミ箱に捨てるつもりだったのだろう。そして振り向いた私の顔を見てハッとしてゆっくり言った。

「……あー、もしも壊れていたら弁償しなきゃいけないから止めといった方が良いでしょう」

そしてそのまま何事も無くゴミ箱に缶コーヒーを捨ててその場を離れようとしていたので、私は慌てていつも通りの顔に戻して声を掛けた。

「……ちよつと待ってっ」

声を掛けても止まることがなかったので私は近くに寄って肩に触れる。

「ちよつと良いかな。さっきの見た？」

そう言った時にこつちに振り向いて自然に言った。しかし眼は更に泥々に濁らせていた。そして静かに言った。

「……何の事だ？それより早く帰って妹の面倒を見なきゃいけないから。じゃあな」

そして肩に触れていた手はいつの間にか放されていて、彼は公園の出口に行く。その途中でこつちに振り向いた後、さつきと変わらない様子で言った。

「……無理して取り繕った顔をしない方が良いで。バレたら多分面倒なことになると思うから」

「……」

私は答えに窮している間にも彼は私の視界から消えた。

—————

「……………」これが私達の出会い。思い出した？」

櫛田が話した回想は俺と櫛田の初対面だ。前に『皆の櫛田桔梗の仮面』を見た時の既視感はこれか。あの出来事があり、俺は奇妙にも櫛田と関わることになっていくのだが、今は用件を聞き出す方が優先なので俺は早々に切り上げる。

「ああ、思い出したが。それで？ 由比ヶ浜と葉山についての話して何だよ」

「もうちょっと想い出話しに花を咲かせたいけど、あんまり時間は掛けられないもんね」

そうして一度話しを区切った後、仮面を外した状態のまま櫛田は言った。

「……………2人を退学させるのを手伝ってあげる」

八幡君と別れた後、私は一之瀬さん達と少し雑談した後、解散した。私は細川さんの事を考えていた。龍園君と対峙した時に見せた動きは私の勘が正しければだが、――――――――――全く本気を出していなかった。

「……『彼』の右斜め後ろに彼女に似た人が座っていたかも」

いや、しかしそんな事が可能なのだろうか？【彼処】から出たとなれば大騒ぎになるし、簡単に出られるようなところではない。『彼』でさえ出るのは1人では厳しかったの

に。

「……細川舞美さん……彼女がもう一人のホワイトルームからの脱走者であるとするなら、何故八幡君と組む必要があつたのかしら？」

そう私は誰にも聞こえない程の声音で呟いたのであつた。

決着は突然に

船の甲板にて、息を静かに吐いた。俺は櫛田との話し合いを済ませた後にこのかなり面倒で複雑な身の回りの状況に頭を悩ませていた。

「……Bクラスに味方が出来るのは良いんだが、Dクラスのスパイ活動を櫛田がやると面倒な事になりかねないなあ」

先ほどの話し合いの内容はDクラスのスパイ活動を櫛田が行うというものだった。櫛田は言明を避けていたがわざわざDクラスを裏切るということは櫛田にも退学させたい人物達がいるということだ。それを俺に協力を持ち掛け、交換条件として葉山と由比ヶ浜の退学を手伝う気だろう。

一応、保留にして貰ったがこの事はBクラスとDクラスの同盟関係を壊すものだ。正直、帆布が苦勞して団結力を高めたのに俺の私情を優先させてしまえばBクラスの敵が増えてしまうのはあまり良い手ではない。……どうしたもんかね。

俺は頭を抱えていると、静かな甲板にリズムカルな音楽が流れだす。その正体は俺のスマホの着信音だった。メールしにくるって誰だ？ そう思いながら件名を見ると。そこには『細川』の文字があつた。

From 細川舞美

To 比企谷八幡

Subject ppt稼ぎたいから裏切らせるようにクラスメイトに頼むけど良い？

……此処で裏切るのか。まあ、大丈夫か？ 裏切らせるグループの数を訊くと一つ、と返ってきたので、どうぞ。と許可を出した。すると、5秒と経たずに放送が流れた。

『已グループの試験が終了いたしました。已グループの方は以後、試験へ参加する必要はありません。他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

これで終わったのが7グループ目か。一日も経たずに半分以上決着するとか先生も考えていねえよなあ。俺はそう思いながら豪華客船のジャグジー付きの大浴場に行くことにした。

豪華客船の中を歩いていると各地から騒がしい声が聞こえる。まあ、優待者の法則が分からない奴がほとんどだし、混乱するのも無理はない。デイスカッションも碌にしないこのやり方は邪道だ。俺だって白鷺先輩のアドバイスを先に聞いてなければ違和感だけで終わった筈だ。もしくは気付くのはもつと後になっていただろう。

そして大浴場の所に着くとある生徒と鉢合わせした。その生徒は俺を見て顔を綻ばせる。

「八幡君、今から入浴するのですか？」

「おう、ひよりか。折角の豪華客船だしな。勿体ねえし」

そう言うといひよりも入浴するようで、着替えの服をもっている。恐らく私服だろう。

ひよりと別れて俺は男子専用がある筈なのでジャグジーの着替え部屋に入ると予想外の光景があった。思わず嘆く様に呟いた。

「……何で、男性と女性で別れてないのん？」

脱衣所の先のジャグジーの風呂場は一つしかない。脱衣所は流石に別れているが、ゴールの大浴場が一つに収束していると言う事はつまり、此処は男女混浴であるということだ。脱衣所には生徒がいないという貸し切り状態だった。俺はこの光景に驚いていると、何時迄も脱衣所の前で固まっている俺を怪訝に思ったのかひよりが聞いている。

「どうしましたか？八幡君、入らないのですか？」

「……なあ、此処って男子専用とかないのか？」

ひよりに聞くと、すぐさま首を横に振って言った。残酷なその一言を。

「いいえ、豪華客船のパンフレットではジャグジーは男女兼用と書いてありました。水着着用が必須ともありますよ?」

嘘だと言ってよバーニーイ! 何で男女兼用なんだよ! 普通分けるだろ! 一緒に入るとか気不味い上に健全な男子高校生を煽るだけなのに、設計した人何考えてんの。自分達の部屋が男女で別れてるのに大浴場が兼用とか水着着用でも可笑しいだろ! 俺は脳内で叫んでいるとひよりが言った。

「女子の脱衣所は貸し切り状態です。大浴場が満喫出来ますね。八幡君」

「ちよつと待て。ひよりは落ち着き過ぎだ。今男女兼用って言ったよね? つまりはそういうことだぞ?」

その言葉にひよりはキョトンとしている。何言ってるの? この人みたいな視線で見ないで! そんな純粋な瞳を向けられたら思わず土下座しちゃうから。え、俺が可笑しいの? 俺は日常生活での社会常識を言ってるだけだぞ。するとひよりが不思議そうな表情そのまま言った。

「？私は別に八幡君とであれば何の問題も無いですよ？」

「……ひより。それ、間違えて他の奴には言うなよ？主にお前の為に」

「私の為？それに八幡君以外には言いませんよ？」

辞めて！俺のライフはもう0よ！そんな男子を絶対落とす殺し文句を言わんで欲しい。思わず沸騰しそうになるから。しかもひよりの場合、有栖みたいな計算じゃない天然だから破壊力が倍増だし。もうこの子、水の呼吸一門ではないのだろうか。ちな、一番好きなキャラは言葉足らずの人です。蟲の呼吸の人と結ばれて欲しい。公式ファンブックとかで更新されねえかなあ。そう現実逃避をしても長くは続く訳もなく、ひよりに言われた。

「……八幡君は私と一緒に入浴したくないんですか？」

「うぐっ……」

上目遣いで不安そうに瞳を揺らすひより。俺はその表情を見て溜息を吐くと頬を掻いて言った。

「……はあ、分かった。入るからその眼を辞めてくれ」

そう言うとはひよりは嬉しそうに微笑んだ。俺達は脱衣所で服を脱いで水着に着替える。はあ……まさか女子と混浴することになるとは思わなかった。水着着用だけど。そう思いながら水着に着替えて大浴場の中に入った。

中は静寂に包まれており、貸し切り状態の大浴場だ。泡立ちが凄いな。おっ、サウナもあんのか。後で入ろう。俺はゆっくりと大浴場のジャグジー風呂に浸かる。ああ、良い温度だ。思わず大きい息が洩れた。このまま満喫しようと思いを風呂に向けかけたところでガララと大浴場の入り口の扉が開く音がした。その音にリラックスしかけていた気持ちが一気に緊張感が戻って来た。そしてひよりもう一人の声が聞こえてきた。

「広いのですね……此れ程広いとは思いませんでしたが、気持ち良さそうです」

「そうだねえ、羽根を伸ばすには良い開放感だよ」

この声は……細川か!?俺は声に反応して振り向いてしまう。すると2人と湯気越しにだが姿が見えた。ひよりは清涼な白いパレオの水着を着用している。ひよりの外見によく似合う物だ。しかし割と布面積が狭い。そして細川は紺色のスポーディな水着だった。二人共スレンダーだが、しっかりとした色気がある。その姿を茫然と見てしまつて不意に2人と眼が合つてしまった。すると2人が笑顔で声を掛けてきた。

「八幡君、お加減は如何ですか?」

「八幡君とお風呂に入るなんてね。ふふつ、女の子2人と一緒に入るとか激レア中の激レアだよ、八幡君。役得だねえ」

そうして風呂に入ろうと近付いてきた。しかも俺がいる所にわざわざ。俺は慌てて視線を正面の水面にやると言つた。

「いや、お前ら何でこっちにわざわざ入ろうと……て言うか、細川は何で此処にいるんだよー!」

「八幡君の近くで入った方が心地良さが大きいと思ひまして」

「離れて入るのはちよつと物足りないと思つたんだよ。何でいるかつて言うと、こういう所に行ける機会は少ないんだからちゃんと堪能しておかないと思つてね」

そう言いながら俺を挟む形でお湯に浸かる2人。そのお陰でこっちの心臓は氣恥ずかしさと緊張で普段では有り得ない程早く鼓動して、鼓動音も聞こえてくる。しかも2人と俺との間の距離は一人一人あるか無いかの距離だ。そしてひよりはまるで警戒していないかの様に更に近付いてきた。ち、近い近い近い良い匂い近い!!肩が触れ合いそうになる程近付いてきたところで思わず押し留める様に言つた。

「ひ、ひよりさん?さ、流星に近過ぎると思うんだが……」

「八幡君の側にいると落ち着きますから。……嫌であるなら離れますが、ダメでしょうか？」

俯き、不安そうに聞いてくるひよりにどういう受け答えが最善なのかを思考して答えあぐねていると、外野の細川が揶揄うように言った。

「椎名さん。八幡君は椎名さんが水着姿で近付いてきた事に照れてるだけだと思うよ。だから大丈夫」

おいしい！何言っちゃってんの！？確かにひよりの水着姿に眼福だと思ったのは事実だけだな。そもそも年頃の男子が一緒に風呂に入って至近距離で話し合うことがそもそも可笑しいんだよ！俺は細川に突っ込もうとしたが遮って細川は言った。

「ああ、そう言えば八幡君から水着姿の事について触れられて無いなあ。感想、聞きたいよね？椎名さん」

そう細川に言われてひよりは顔を赤らめて俯きながらほんの少し頷いた。その様子

に俺は言葉に詰まった。細川はニヤニヤしながら俺にひよりの水着姿の感想を促す様に顎をクイッと動かした。俺はその何とも言えない謎の圧力に堪え兼ねて頬を掻きながら言った。

「……に、似合っていると思う」

ひよりは天然で純粹なので遠回しに言うとき更にややこしくなるので、羞恥心を堪えて言わないといけない。こんなことを言うのは俺の柄じゃないんだがな。すると、俺の一言は見事に功を奏したのかひよりは顔を上げて微笑みを讃えて言った。

「……嬉しいです。ありがとうございます八幡君」

その一言に頷く俺。すると、細川に肩を叩かれたので、視線で問いかけると細川が自分の事を指した。その事について何を言われたいか察した俺は言った。

「……似合ってなかったら笑おうと思ったのにそれが出来なくて残念だ」

そう言うとき細川は一瞬目を細めた。ツ!?…何だこの圧。思わず身構えるが、細川は何を言われたことに気付いたのか圧をすぐに霧散させて笑った後に言った。

「あははは！捻くれ過ぎじゃないかな八幡君。素直に似合ってるって言ってくれたらいいのにー」

「…別に俺は何時も素直なんだが」

細川の言葉に俺は目を逸らしながら言う。すると細川が俺の耳元で囁いてきた。

「でも、椎名さんと反応が随分違うのは何故かなあ？」

「ツ！耳元で囁いてくんよ……思わず叫んじゃうだろ」

俺が細川から距離を取る様に顔を離すと、細川は俺の反応に面白がる様に微笑んだ。その様子に溜息を吐く。此奴も有栖の様に弄りにくるタイプか。そう思っているとな手の甲を抓られた。痛い痛い…ってひよりよ。そんな睨んでも可愛いだけだぞ。何故な

らお前は戸塚タイプだからなって痛い痛い痛い！何で戸塚の事考えてること察知出来るんだよ！

そんなやり取りをしながらも話題が一旦区切りに入ったので、静かにゆっくり浸かっている。細川との距離が肩の間が1メートル程しかないが、ひよりは最早肩同士、肌が密着している。遠慮しようとしたがひよりが哀しそうにするのを見たくは無いので引き離せない。お蔭で緊張で一杯一杯でゆっくり疲れを癒すつもりが癒されないという。あれ、ジャグジー風呂に來た意味がわからなくなってきたぞ？

そう思いながらボーっと浸かっていると、ひよりが不意に聞いてきた。

「八幡君、少し聞いて良いですか？」

「何だ？」

「今日の特別試験で最初に終わったグループであるの2人も八幡君の未グループに居たようです、何もされませんでしたか？」

あの2人とは葉山と由比ヶ浜の事だろう。マッサージをした時には聞かれなかったが、気になっていたのかひよりは心配そうにするので平然としながら言った。

「特に何も無えよ。心配しなくても良い」

俺としては逆にひよりの方が心配なのだが、同じクラスなので葉山に狙われ易い。契約の縛りを彼奴は違反してきた。龍園にペナルティーの処置を頼んで遂行されたらしいが試験の様子からして絶対に何かしてくる予感しかない。なるべく目を光らせておく必要がある。そして俺はひよりに聞きたい事があつたので聞き返した。

「それより、ひよりは猿グループって有栖から聞いてるんだが高円寺に試験が終わらせられたんだろ。終わった後に聞いてもアレだが、ひよりは試験の優待者の法則は解ったか？」

単純な興味での質問。ひよりの思考能力であれば法則は解けるだろう。ノーヒントから解くとしたら恐らく高円寺の様なイレギュラーを除いて猿グループの中では一番

早いはずだ。そう聞くとひよりは思考を動かし始めたのか、真剣な顔になった。

「……………八幡君のグループの人達を教えて貰えますか？」

そう聞いてきたので未グループのメンバーを教えると、ひよりはそのまま思考を深めるように少しの時間瞑目して沈黙する。そしてゆっくり答えた。

「……………未グループの優待者は葉山君、ですね？」

「…正解。……………凄えな、教師のヒントだけで此処まで早く優待者に辿り着くとか俺だつたらもうちょつと掛かるぞ」

もし、ひよりがAクラスの卒業時の特典に興味があつて、Aクラスに行くために力を入れていたらかなり厄介な事になっていたな。龍園、もしかすると有栖並かもしれん。

そう考えていると細川が感心するように言った。

「へえ、やつぱり凄いなね。八幡君の周りの女の子。並の人達より飛び抜けて優秀だね」

言い方が少し意味深に聞こえるが、スルーしようしよう。それにしても俺達が気付いている事だ。そろそろ彼奴も気付いても不思議じゃない。

そうして考えているとまたジャグジー風呂の入り口が開いた。誰だ？と思いながら入り口に目を向ける。そして入って来た人物達に俺は目を見開いて言う。

「有栖に神室……」

「おや、八幡君に椎名さんに細川さんではありませんか」

「……まさかあんた達と一緒に入っているとはね」

そう驚く有栖と神室。有栖はワンピース型の水色の水着、神室はラッシュガードを着用している。容貌が圧倒的に良いからか何方も似合っている。しかし、何時迄も見ていると有栖に揶揄われそうなので顔を真正面に向ける。そして有栖が入って来た。神室

は浸からずに足湯のようにしている。するとひよりが神室に聞いた。

「答えづらいことなら申し訳ありませんが、ラッシュガードを着ていますけど如何してですか？」

「ん、坂柳の付き添いで来ただけだからね。浸からなくてもいいと思つて」

そう言う神室。すると有栖が俺に何処か揶揄う様な笑みを浮かべて聞いてきた。

「八幡君、私の水着は如何ですか？」

「……似合つてんじゃないかねえの。知らんけど」

そう答えると有栖は少し意外そうな表情になった。

「随分と素直ですね。明日は雨でしょうか」

「…そんなに不思議なのかよ。素直に言うこともあるつつうの、て言うか何時も素直なまである」

そう突っ込みを入れると有栖達は苦笑する。何故だ、これが戸塚だったら純粋に受け入れてくれて天使の笑みを浮かべてくれるのに。戸塚アア…本当連絡出来ないのが辛い。川越さん？川島さん？かは忘れたが元氣にしているだろうか。下の子の面倒は見れているのだろうか。材木座？知らない人ですね。

そう思っていると有栖が不意に驚愕の事を言った。

「そう言えば、さっき5グループが決着していましたが知っていますか？」

「は？えっ……マジ？」

有栖の言葉に思わず聞き返すと有栖が頷く。神室以外のひよりや細川も驚いている様だ。俺は驚きつつも質問を重ねる。

「5グループってことは……全グループが終わったのか？」

そう聞くと有栖が首を横に振って言う。

「いえ、終わったのは卵グループ以外です」

如何やら有栖が言ったのは細川のグループを含めた＋4グループということだろう。細川が裏切る前は6グループが残っていたので、残りが卵グループになる。そう整理している和有栖が俺のミスを指摘した。

「八幡君、貴方は全グループと言いましたが、間違いましたね。つまり1グループ分を含めて無かったということ。それはただの勘違いでしょうか？それとも……貴方のクラスの誰かが裏切ったことを含めていなくて間違ったのですか？」

眼を鋭くして聞いてくる有栖。カマかけの場合もあるが、裏切った後だからそこまで隠す意味もないので、正直に言おうとするとその前に細川が言った。

「それ、私がクラスの子に頼んで裏切って貰ったんだ」

その言葉を予想していなかったのか、ひよりと神室が驚く。しかし有栖はそこまで驚いている様子はなかった。するとひよりが言った。

「浴場に入る前に終わったグループが1つありましたが貴女だったのですね」

「うん。まあ八幡君から優待者の法則を教えて貰ったんだけどね？」

俺はその言葉に眉を少し下げて疑問を持った。未グループを裏切った時に細川は驚く様子を見せてない。つまり俺が裏切ることを予測していた筈で、その時点で優待者の法則が分かっている限りどんなに予測していたとしても全く驚かないことは可笑しい。つまりこれは嘘ということになるが、何故嘘を吐く必要がある？

俺は考えていると有栖も何やら思案している様で下を向いている。これを細川に指摘するか？ いや、待て……細川は敢えて言っているのか？ 俺から優待者の法則を教えて貰ったんだ。とさつき言った。自分の功績にしない理由があるのか？ 表舞台に出ない

理由は他クラスの奴に警戒されないようにしているのかもしれない。有栖や龍園にはそう遠くないうちにバレルだろうが、完全にバレルにはまだかかる。俺を隠れ蓑にする意味がいまいち分からないが。Aクラスに上がる為の算段かもしれない。

それなら言わない方が良いな。と思いつつ俺は細川に目を向けた。その時、ひよりが言った。

「もしかすると龍園君から呼び出しがかかっているかもしれないので上がりますね。もう少し八幡君達と浸かっていたかったです……」

ひよりは残念そうにそう告げて浴場を上がる。十中八九細川が裏切らせた1グループ以外の4グループは龍園が手を打ったのだろう。恐らく龍園は今後の試験を含めてどうするかを告げるつもりなのだろう。俺達はその言葉に頷くとひよりを見送る。

それにしても残った卵グループ……帆波と綾小路がいるグループだが、龍園が裏切らせないのはDクラスの切れ者をあぶり出したいからか。恐らくこのグループが裏切らせること可能性としては少ないだろう。龍園はあぶり出したいから動けないし、帆波も

未だ優待者の法則は分かっているまいだろう。しかし有栖の派閥の人間が1人混ざっている。Dクラスもいるが綾小路以外で警戒する程の奴がいる可能性は低い。

メンバーは覚えてないので何とも言えないが。そう思っただけ俺は有栖に聞いた。

「有栖は卵グループに関与するつもりはあるか？」

その言葉の意味を理解している有栖は淡々として微笑みながら言う。

「いえ、取り敢えずは充分ですね。もうこれ以上は手を出すつもりはありませんよ。八幡君の活躍とこの試験のおかげで葛城君は失墜するでしょうから」

微笑みながら今後のことを含めて言った有栖。無人島の試験で有栖からの報酬は1つ。『Bクラスが最下位になった時に同盟を結んで互いに特別試験以外の時に最終的に不利となることを行わないこと。特別試験では試験中、試験の仕組みに置いてお互いが対立する状況になった場合以外で他クラスを攻撃する時に情報の共有又は共闘をするものとする』と言うものだ。

報酬として対等な修好条約を結ぶという感じになった。Bクラスに対しての試験以外の攻撃――主にスパイ活動など――が行わないということだ。しかしAクラスに対してのスパイ活動と言った事も基本的には行えない。つまり他クラスを攻撃する時のみに共闘し合い、お互いには不可侵ということだ。

俺はそうか。と言った。そして浴場から出ようと動き出す。すると細川達が聞いた。

「上がるの？」

「ああ、結構浸かっていたからな」

そう答えると細川達も上がるのか動き始める。有栖も動いている。入り始めて直ぐなのにもう出るのか？と聞くと頷いて言う。

「八幡君と一緒にいた方が有意義ですからね」

「……さいで」

言いながら視線を動かした。その視線には細川を見ていた。それは一瞬であつたが、かなり鋭く見つめている様に思える。細川はその事に気づいているのかいないのか、飄々として楽しそうな表情を浮かべている。その事を少し疑問に思いつつも浴場から出て身体をタオルで拭いた後、脱衣所に置いてある新しい服を着た。そしてスマホで有栖の言つた事を確認して卵グループ以外のグループが終わっていることを確認する。これはもう大騒ぎだな。確認を終えると脱衣所を出た。

そして女子脱衣所から有栖達が出てきて合流し、俺の今後の予定を聞いてきた。

「この後はどうするのですか？」

「ん、部屋に戻ってダラダラするわ」

そう言つた時、突如背後から声が掛けられた。

「ヒッキーッ！」

……おいおい、少しはリラックス出来たと思ったのに一気に疲労が来ただけ……声を聞いただけでここまで疲労するって凄くない？小学校で誕生日会とか祝ってるだけなのに思いつ切り溜息を吐かれたあの時の表情になってるのが鏡見なくても分かる。祝った時に俺の食べる筈だったケーキを教師に食われたのは今でも覚えてる。あの教師、俺の事を点呼で毎回呼んでただろ。ヒキタ二って呼んでたけど。何でそんな時に限って忘れてるの？

そう絶対許さないランキング上位の記憶を振り返ってこの状況を逃避していると無視された事に憤慨したのか、声の主は大声で叫んで捲きたてるようにして言った。

「何で無視してんの！返事ぐらい返せないの!？」

「……………ああ。これで返事したから行かせてもらおうわ」

そう言いながら声の主である由比ヶ浜に視線を合わせずに素通りしようとする。し

かし腕を掴まれてしまう。

「そんなの返事じゃない！無視して行こうとするとかヒツキーマジキモい！それに、良い加減に修学旅行の事を謝つてよ！ゆきのんまで嘘に誤魔化されたけどあたしは騙されないから！」

腕を掴んで怒鳴り散らしてくる。俺は腕を振り解こうとしたとき、細川が由比ヶ浜の腕を掴んで言った。

「いきなり大声で叫んで人の腕を掴んだ上に謝れって非常識だね」

そう言いながら由比ヶ浜の手を放させる。俺はそのまま細川に腕を引っ張られて由比ヶ浜と距離を置かれた。そして庇うように細川が前に立った。その様子を見て更に怒る由比ヶ浜。

「いきなり何なの!?!あんたには関係無いでしょ！ヒツキーに用があるんだから退いてよ！」

その言葉に俺も若干の疑問を持った。葉山と由比ヶ浜を退学させる協力者ではあるが、こう言ういざこざには首を突っ込んでこないと思つた。すると細川も淡淡として言う。

「同じクラスメイトが他クラスの生徒に絡まれているから助けたただけだよ。それと、貴女が八幡君に暴力を振るいそうだし」

それらしい理由をつけて話す細川。これを貸しにされそうで怖い。助かったけど。細川の言葉に納得がいつてないのか、吠えるようにして由比ヶ浜が言う。

「絡んでなんかない！出鱈目言わないで「良い加減耳触りなので黙ってくださいませんか？由比ヶ浜結衣さん」」

由比ヶ浜の言葉を遮つて言う者が1人。その言葉に反応して俺はそう言つた有栖に視線を向ける。ヤバイ、今までの経験で殺気とかを向けられたことは数え切れないほどあつたが……

「――毎度毎度、謝れ謝れ。その言葉しか言わない。自分の取った愚かな行動を省みず、挙げ句柵に上げて喚き散らす。貴女に学習能力はないのですか？」

今までの浴びてきたものは幼稚と片付けられる程だぞ：圧力が強過ぎて痺れが身体に走ったと錯覚するように指一本動かせない。背筋に冷たいナイフが突き付けられたような……殺気とか向けられていない第三者の俺ですらコレだ。神室も頬に冷や汗を掻いて静止している。細川は愉しそうな表情から変わってないが。

「ヒイツ!？」

殺気を諸に受けた由比ヶ浜は先程と打って変わって強気な態度から恐怖で悲鳴をあげる様子になって身体のいたところが震え出した。ガクガクと膝が笑っている様子を見て有栖は容赦無く続ける。

「今まで八幡君の意見を尊重して貴女の戯言を流し聞いていましたが、今此処で引導を渡してしましましょう。良い加減鬱陶しいですから」

「貴女は修学旅行の事を謝れと言いますが、八幡君が貴女に謝る理由はないと思いますか？」

有栖がそう言うのと由比ヶ浜は殺気に震えながらも声を荒げさせる。

「な、何でだし！ヒッキーは戸部っちの告白の邪魔をしたんだよ！謝るのが当然じゃない！！」

「八幡君は戸部さんとやらにはもう謝ってますが？」

嘘告白の後に俺は戸部に謝っている。依頼の為とはいえ一世一代の勇気を出して言おうとした告白を邪魔したのだから。振られないようにしたいというアレな依頼をしに来たが、戸部は葉山に相談して奉仕部を訪れた葉山グループの男子の中で一番の被害者だからな。戸部は拳一発で済ませてくれたしな。告白を邪魔したって学校に広めたのは葉山に大和と大岡だったっぽいし。

「そうじゃなくて嘘告白をしたのを見た私達に謝ってって言ってるんじゃない！」

有栖の指摘に由比ヶ浜は叫んで否定する。その言葉を受けて有栖は静かにこう言い返す。

「ふむ、嘘告白を見た貴女方に謝れと。……で？」

「えっ？……だ、だから——」

「何故、それが貴女方に謝る理由になるんでしょうか？八幡君が誰であろうが告白するのは勝手でしょう。例え振られようが振られまいが貴女には関係無い」

由比ヶ浜の言葉を遮る有栖。その一瞬で言葉を詰まらせる。そのまま言葉を続ける。

「そもそも戸部さんとやらの依頼を深く考えず受けたのは貴女でしょう。戸部さんが言った振られないようにして欲しいと言う願いは叶っているではないですか」

「そ、それは……」

「それに雪ノ下雪乃さんから言われたと思いますが八幡君はもう一つの依頼。戸部さんの告白の阻止をして欲しいと言う依頼を受けていたんですよ？それも叶える為に嘘告白の手段を取ったまでのこと。そうでなければ自分に一切関係無い貴女方のグループの女子に嘘告白する理由もないと思いますが、ねえ？八幡君」

そう俺に聞いてくるので、俺は頷く。しかし納得がいかないのか由比ヶ浜が言う。

「だ、だとしても、他にも方法があるじゃん！わざわざ……」

「八幡君がその依頼に気付いたのは戸部さんがその女子に告白する直前の直前です。貴女に相談して何が変わるんですか？しかも貴女はそのグループのメンバーです。知った後に気まずく思っただけグループがギスギスすると思いますが……」

「それに貴女の友達であるその女子の依頼を気付けない貴女にそう言う資格はないでしょう」

「……」

反論を術を失ったのか黙り込んで睨む由比ヶ浜。しかし本番は此処からというように有栖は薄く微笑む。そして言った。

「貴女が此れまでやってきた依頼の中で貴女が解決した依頼は有りませんねえ」

「そ、そんなことないし！」

「ほう、ではどんな依頼を解決したか言ってもらいましょうか」

「チエーンメールとか、さいちゃんのテニスとか、中二の小説の依頼とか、川崎さんの依頼とか、千葉村の時に文化祭、柔道の依頼も」

「……チエーンメールは貴女の男子グループから葉山隼人を抜くことで解決しましたね。その案は八幡君ですよ。テニスの件は貴女がやったのは戸塚君にボールを投げて

打たせていただけ、誰にでも出来ることでしょう。戸塚君の強化に繋がったとは思わない。その上貴女のグループの女子が乱入して来ました。そしてテニスコートを賭けて試合をしたが貴女は足手まといになっただけ。小説の依頼は貴女はそもそも小説を読んでいないと聞きましたか？そして適当な感想を述べただけで真剣に依頼に向き合っていない。川崎さんの依頼も八幡君の提案したスカラシップで乗り切りました。千葉村でのいじめ騒動を解消する案を出したのも八幡君……」

「文化祭については文化祭実行委員会で雪ノ下雪乃さんが倒れたのを聞いて貴女が頼って欲しいと言った。そして頼ったのは文化祭の終了セレモニーに時間稼ぎとしてライブのボーカルをやっただけ、文化祭実行委員会での事務作業を直接的に自分から手伝いに行つた訳ではない。それに屋上に逃げた実行委員長の相模さんとやらを八幡君が敢えて悪口を叩いて連れ戻させなければライブの時間稼ぎも意味が無い。葉山隼人は実行委員長に推薦しておきながら、殆どフォローもせずに、実行委員長の悪口を叩いた八幡君を攻めて、庇つたように見せてヒーロー面をしたまま、実行委員長に対しての悪口を叩いたという八幡君への噂を放置した。そしてそれは貴女も同じ」

「柔道も新入部員の確保の障害となつていたOBの人を追放する為の八幡君が出した案

で大会を開催したそうですが、貴女は試合にも出ていない」

そう瞬く間に切り捨てて論破する。由比ヶ浜は言葉を詰まらせるだけで反論出来ない。それはそうだ。有栖の言う通り、由比ヶ浜が直接的に解決に携わった依頼は無いのだから。解決への手掛かりになった意見を出した事も殆ど無い。遊戯部や体育祭でも由比ヶ浜が活躍していた場面があるとは言いがたい。言うとしたら体育祭での作業の手伝いくらいか？それも誰にでも出来る程度だ。

すると此処で今まで黙っていた神室が言った。

「て言うか、葉山とそのグループが持ちかけて来た依頼の問題が多過ぎない？聞いた限り半分以上あるけど…」

「確かに修学旅行含めて、殆ど葉山グループが関わってる。葉山グループが無かったら殆ど面倒な事にもならなかったと思うねえ」

神室の意見に追従する細川。改めて考えると本当に多いなあ。本当巻き込むのやめ

て下さい。千葉村は葉山が話し合いさせようとして、留美のいじめ騒動を助長しかけてたし、最早葉山グループってトラブルメイカーではないだろうか。

神室と細川の言葉に由比ヶ浜が怒ったように言い返す。

「そんなこと言わないでよ！ワザと問題を持ち込んでいるみたいに聞こえるじゃん！持ち込みたくてやってる訳じゃ無いし!!」

その時。

「へえ……?..」

その言葉を聞いた瞬間。

「ワザとじゃなければ何をしても赦されると…?」

有栖の、瞳の瞳孔が猫のように細くなっているように顔になっているのに俺は

氣付いた。ゾクツと背筋の産毛が鳥肌のように逆立った。そして次の言葉を言った。

「貴女が犬の故障しているリードをしつかりと管理していない事で八幡君が道に飛び出した犬を庇って車に引かれたあの事件の事を一年以上、しかも八幡君に指摘されるまで黙っていた事もワザとじゃないと？」

「……」

雪ノ下家の専属弁護士との話し合いでその事件について治療費とお詫びでそれなりの賠償費を払ってもらう代わりに関わってる雪ノ下家の事で当事者以外の口外してはならないと言われていたのだ。思わず愚痴として有栖に言ってしまったのだが、此処で言われるとは思わなかった。

慌てて有栖を見ると、当の本人は余裕そうな表情を浮かべている。あの表情には焦りが全く見られない。此処である事に気付く。有栖の言葉を聞いて由比ヶ浜に大きな動揺が走った。

「な、何で…」

「その事を知っているかですか？ウチの家も財界や政界に通じていましてねえ。そういう情報を得られる伝手があるのですよ」

そう言えば有栖の家も名家だったな。実際に名家のお嬢様である有栖なら知る機会が存在するかもしれない。それらしい理由を言つて俺が洩らした事ではなく、自分の家が得た情報だと認識させる有栖。そして動揺する由比ヶ浜に対してこう続ける。

「実に恩知らずですね。自分の家族と言つてもいい存在を助けてもらいながら、貴女の不注意で引き起こされた事故であるにも関わらず助けてくれた人と車側の人達に謝罪や礼もしない。一度、菓子折リを持つて親族に会つただけで当事者の八幡君に謝罪をせず、学校に通う1年間放置している。それもその事を八幡君から指摘されるまですつと。そうしているということは恐らく貴女の親御さんに知らせてないんでしょうね」

そう言うのと神室と細川が心底由比ヶ浜を蔑むように睨んでいる。

「人として有り得ないよ。自分の家族を助けてくれた人に対して仇で返してるようなものだね。私でも人間そこまで腐ってないわ」

「非常識だねえ。高校生になるまでに人として重要なものを置いてきてるよ。菓子折り程度で済ます事ではないでしょ」

「……………」

その言葉に黙り込み、俯く由比ヶ浜。すると口元が動いた。

「……………い」

「何です？聞こえませんか。反論があるならば堂々と言えば宜しいのではないのでしょうか？」

「……………」

「うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさいあああああ
いっ！」

うるさいのはお前な、と内心突っ込みを入れる。有栖の煽りに遂に逆ギレを起こし、幼い子をする癩癪のように大声で叫ぶ由比ヶ浜。その声にも有栖は全く意に返す様子はない。その態度に更に苛立つたのか更に捲し立てる。

「何で関係無いアンタ達にそんなことを言われ無いといけないの!? サブレの件はもうヒツキーと私の中では終わった事なんだから部外者が口を挟まないでよ! 大体、黙っていた事ならゆきのんだって同じだよ! あの車に乗車していることを黙っていて、ヒツキーを罵倒してるんだから!」

あまりに身勝手な言葉だ。そしてある種被害者とも言って良い友人である雪ノ下の事も責める。由比ヶ浜にそのつもりがないとは言え、その言葉は2人の仲を大きく揺るがすだろう。無論、悪い意味で。そして由比ヶ浜は確実に破滅への道へと転がり落ちることになる。その始まりを有栖が告げるように急に噛み始めた。

女が八幡君に絡んでから今までの事を録音しています」

「それが何だし！」

そう苛立ちながら言った由比ヶ浜。此奴……此処まで言われてまだ解らないって俺が色々なくてもこの試験の次の試験で退学すんじゃないやねえの？まあもう有栖に狙われた時点で此奴にそれを跳ね返す力がある訳はないので確実に破滅するんだろうな。

「……はあ、まさかそこまでとは思いませんでした。まあ良いでしょう、貴女を壊す事に代わりはありませんから」

「直接言つてあげましょう。今貴女が中学校で起こしたことを全て録音しているということですよ。幾つもの依頼での無能さから貴女が事故の原因を作った張本人である証言などをね。これを私達の他の第三者に流せばどうなるでしょうねえ」

そこまで有栖が言うのと漸く事の状況の悪さが理解出来たのか、由比ヶ浜は青褪めた。それを見て玩具で遊ぶような調子で有栖は心底愉しそうに追い詰めにいく。

「しかも事故について貴女は関係者から送られた処理代行者の弁護士に当事者である車側の人達の関与を第三者に口外してはいけなと言われていると思いますが貴女は間抜けにも名前を出してしまいましたね。貴女にも口外しない代わりとして慰謝料を支払って貰った筈なのに」

そう、詳細な説明は専門家ではないので出来ないが、人身事故や事件が起き、被害者が加害者との話し合いで両者納得のいく示談が成立している場合、和解に必要な条件が両者に対して共に存在するのであれば、示談が成立している時点でその条件を破棄、又は破る事は正式な手続きをしない限りは不可能だ。条件の遵守がされない場合、裁判にも発展するだろう。

由比ヶ浜は”第三者に雪ノ下家の車が由比ヶ浜のペットを轢きかけたという事実を一切口外しない代わりに慰謝料を支払う”。という条件で迷惑料や口止め料と言ったものを支払われた筈だ。それを彼奴は雪ノ下家の車が関与したと第三者である有栖達に洩らしてしまった。これは記録に残ってしまった場合、契約不履行の証拠が出来てしまう。有栖の録音の様に。

「あ、ああ……や、辞めて、消してよ！何でそんな非道いことをするの!？」

由比ヶ浜の悲痛な訴えに有栖は容赦無く淡々と応える。

「非道い事ですか。これは全て貴女が招いた事でしよう。八幡君への理不尽な対応をしていたことが今此処で貴女に返ってきただけです。つまりは、因果応報ですよ」

「それに、これで済む訳ないでしょう?」

そう一度、言葉を区切った後。有栖は万人が息を呑む程の深い微笑みを浮かべて告げる。

「ああ、そう言えば1年前に貴女の親族の働いている会社の社長が貴女の親族が会社の売上げ金の横領していると言っていたことを思い出しましたが、今、どうなっているでしょうね?」

有栖は由比ヶ浜家の裏の部分を話した。恐らく有栖の父親のつながりとかで情報を

得たのだろう。由比ヶ浜の親族の誰かが不正を行った情報。それが正しければ今、由比ヶ浜の家はヤバイ状況になっている筈だ。有栖の口ぶりからして、今年に裁判が行われていて、全国のお茶の間にそれが報道がされれば親族の事とは言え、マスコミが由比ヶ浜の実家にも押し寄せて両親の仕事にも影響が大きく出る筈だ。悪い意味で。

示談が成立する可能性は低いだろうし、仮に成立したとしても世間の由比ヶ浜家の関係者への風当たりは良いものではないだろう。有栖が此処で出任せを言う人間ではないのは分かっているので確実に事実として存在する筈だ。

改めて有栖の敵と認識した人間への追い詰め方に恐ろしさを感じた。有栖が敵に回ると想像すると肝が冷える。情状酌量の余地は欠片さえもない。俺だつたら一瞬で土下座して靴舐めでも何でもするレベル。プライド？馬鹿野郎、そんなのはそこいらの犬にでも食わせるわ。俺だけの犠牲で小町の安寧を得られるなら安いものだ。

そこまで言う则由比ヶ浜は恐怖で身体のあちこちが震えて膝から崩れ落ちた。顔を天井に向けて眼の焦点が合っていない。その様子を見て有栖は由比ヶ浜に近付く。カツ、カツと杖の音がヤケに響いて聞こえた。

「もう、壊れちゃいましたか。興醒めですねえ。まあ良いでしょう、貴女の終着点はもう目の前ですから」

そう近づきながら言い、有栖は由比ヶ浜の視線を真正面に自分の視線と合わせて言った。

「貴女への相応しい舞台はまだ序曲ですから精々踊って愉しませて下さい。それとあま
り――――」

思い上がるなよ、小^ガ娘^キが」

「ツ!!?」

と、此処からは表情を窺い知れないが、どんな相手であろうと、状況であろうと敬語が染み付いていた有栖の初めて荒々しい言葉遣いを聞いた。その庄はその場にいる全ての者を恐怖で呑み込む沸々とした怒りが込められていた。俺も思わず膝が笑い、冷や

汗が身体中から噴き出す程だった。神室も同様だった。

「……」

そして崩れ落ちた由比ヶ浜を放って俺達の方に戻ってきた。そしてそのまま微笑みを浮かべて言った。

「さて、行きましょうか」

そして有栖は俺達を先導する様に前を歩いていく。その様子を見て心底俺は思った。

——味方で良かった、と。

試験の終了は新たな予兆を告げる。

由比ヶ浜を放置して、豪華客船の廊下を歩く有栖と俺と神室に細川。俺は有栖と並んで歩きながら聞いた。

「……なあ、有栖？由比ヶ浜の事を再起不能にしたが、葉山もやるのか？」

そう聞くと有栖は此方に顔を向けて微笑むと、首を横に振って言う。

「いえ、如何するかは八幡君に任せます。ただ、先程の様に葉山隼人が絡んでくるのであれば壊しますが」

有栖の言葉に俺は申し訳無くなった。俺の問題なのに当事者ではない有栖を巻き込んで、直接的に手を下させたのだから。神室と細川も先程の有栖の事を思い返し、苦笑いを浮かべて言う。

「さっきの坂柳は普段では見ないくらい怒ってた。あんなに激情に駆られてる坂柳は初めてだよ」

「坂柳さんつてもっと余裕を出してじわじわと真綿で首を絞める感じで追い詰めそうだけど。ああやって一気に潰すのは意外だったな」

恐い……会話が物騒過ぎる。当事者だけこの空間から無関係でいたい。細川の言

葉に有栖がこう返した。

「そうですね……何時もの私ならもつと泳がせてじつくり壊しますが、彼女に使う時間よりも八幡君と接する時間に使いたいの。：けれど、まだ全部壊しきった訳ではありませんよ。未だ彼女にはメインの出番があるのでね」

未だあつたのね。まあ有栖があの一で終わらせるとは考え難いが。

しかし、結局俺の問題に有栖を巻き込んでしまった。情け無いもんだ。俺はこの学校に逃げた。正直なところ、総武中の奴が来ても復讐する気は無かった。それが葉山や由比ヶ浜であつても。復讐したくない訳ではない。俺も限界だったから。でもそれ以上に疲れていた、だから癒しを求めている。それと同時に……

「……まん君？」

そこで出会ったのが、有栖、帆波、ひよりだった。3人と接してきて、俺の中学時代のことを話した。そして受け入れられた。その時点で俺は満足だった。それ以上は求めていない。だが、思った以上に3人は俺に踏み込んできた。そして在ろう事か名前呼びまでしてきて、俺もそれを受け入れた。何時からか、俺は……

「八幡君？」

そこまで思考に沈みこんでいた俺は名前を呼ばれてハッと顔を上げると目の前には細川の顔があつた。その表情は俺の事を見透かしているような気がした。そして細川

はそのまま聞いてきた。

「それで、八幡君は一之瀬さんがこの試験の優待者を見つけれられると思う?」

「……ん、多分、五分五分なんじゃねえか? 帆波の場合は気付いても慎重だから何もしいとも思うし」

細川の言葉に先ほどまで頭にあつた考えを追いやって答える。正直なところ帆波がこの抜道に気付くかと言ったらその可能性はあるが、高くもない。それに気付いたとしても優待者がDクラスの奴だからなあ。わざわざ同盟関係に罅は入れないだろう。

そう思いながら、この試験の結果が如何なるか考える。その横で有栖とひよりがじつと俺を見つめていることに気付き、その眼が何処か真剣な表情だったので戸惑いながら聞いた。

「……ど、如何した?」

「……いえ、何でもありませんよ」

有栖とひよりは俺の問いに答える事無く、この試験の結果は如何になりますかねえ。と呟いた。

――――

午後10時、有栖達と別れて俺は部屋に戻って、ダラダラしつつも卵グループの事が気にかかり、帆波に電話で聞いたところ、特に動きはないと言った。卵グループではAクラスやCクラスも積極的に動く姿勢は無いらしい。特にAクラスの葛城派の男子が話し合う事を放棄すると提案していた様なので暫くは動けなさそうだ。ついでに帆波に優待者の法則を聞いたところでは、検討はついていないが、余り自身は無い様子だった。俺は帆波に答えは聞かないと言われた為に答えは口にしない。

そして試験の様子を聞いた俺は生徒会の件について聞く。

「それで、帆波。生徒会に入ったらしいが、堀北生徒会長がスカウトした訳じゃなくて南雲副会長にスカウトされたって聞いたが、その時に訊かれた事とかは何だったんだ？」
『うーん、志望した理由とかは訊かれたけど……そう言えば、何か他人に秘匿にしている過去の事を言葉は濁してたけど訊かれたよ』

！……これは若干マズいかもしれない。明らかに一之瀬帆波という少女を狙っているようだ。俺はその事を言ったのかと聞けば、特に何も言っていないよ。と言ったので少し安堵したが、油断は出来ない。この学校では生徒会の役職の高さに比例して生徒の情報を洗い流すことが出来る。帆波を狙っているという事はその辺を徹底的に調べているだろう。恐らく大丈夫だとは思いますが、由比ヶ浜のようにぼろっと事件関係者が洩す可能性も否定は出来ない。

俺は帆布と今後の動きについて話し合つて、通話を切ると、丁度着信が届いた。非通知からだつた。俺は無視していると、もう一度同じアドレスから着信が来た。二回も送つてくるつて何だ?と思いつつ、警戒しながら出てみると、特に通話主は何も言わず、無言でいたので悪戯電話か?と思つて切ろうとすると声が聞こえてきた。少し遠くから聞こえてくる声は茶柱先生の声だつた。

『…この3人で集まるのも久しぶりだな』

『最近我真島先生が時間取れなかつたからねえ。真島先生も入れて呑むのは結構久々だなあ。坂上先生は遠慮しちゃつたけど…』

茶柱先生の言葉に陽気な声が答えた。この声は星之宮先生か。この甘つたるい声からして結構酒が進んでらつしやる。しかしまだまだ呂律ははつきりしているので酒に飲まれないタイプか。すると真島先生の声が聞こえた。

『それで、わざわざ呼び出して呑もうとするという事は何か要件があるんだろう?』

『もう、普通に呑むつもりで呑んだだけよ。でも、紗枝ちゃんもそんなピリピリした空気出さないで、ね?』

そう言いながらグラスに入つた氷の音だろうか、カランと音が鳴つた。そうして呑んでいるのだろうか、ふうつと言つた後に茶柱先生が全く酔いの感じさせない声で言つた。

『それで、知恵。お前、今回の試験で一之瀬と比企谷を辰グループから切り離して別のグループに入れて何を探ろうとしている?』

ん!? 衝撃な事実が暴露されて思わず声を洩しそうになったが咄嗟に口を抑える。あの辰グループに入れられそうになってたのん? 恐つ、あの空間に入れないでくれた星之宮先生GJ!すると、全く動揺も見せずに星之宮先生がけろりと事も無げに言った。

『ええ、だって帆波ちゃんって竜なんて怖いものより可愛い兎っぽいんだもの。比企谷君は竜なんてかっこいいものが似合う子じゃないし』

おいコラ、カッコ良くないって直球で言うなよ。声出して聞いてますアピールしちゃうよ? 星之宮先生の株の上がり下がりが激しく変動している中、茶柱先生は星之宮先生の話を取り合う事なく言う。

『御託はいい。竜のグループは各クラスでのリーダーを集める決まりだった筈だ。比企谷は兎も角、一之瀬は入れなければいけないだろうが』

少し酔いが回っているのかはわからないが、茶柱先生が決定的な一言を言った。その鋭い指摘に星之宮先生は切り返した。

『そんなの私の中で厳正な調整で外しただけよ』

その言葉に茶柱先生は黙った。しかし剣呑な空気が漂わせているっぽい。

『あんまり睨み合うな。クラス対抗にお前達には関係が無いんだからな』

真島先生が呆れたような声で仲裁に入った。声だけしかないが睨み合ってるんだろ
うなあ……女の戦いつて怖いし。丁度三浦と雪ノ下みたいな感じ？真島先生、ご苦労様
です。と心中で真島先生の様子を案じていると星之宮先生はケラケラ笑いながら言っ
た。

『別に私は問題無いわよ。紗枝ちゃんが一番必死なんですよ。今だってCクラスに追いついてきてるからこの機を逃したくないんですよ。それに真島先生だってAクラス担当だつてホクホク顔だったじゃない。給料も差が出るし』

ちよつとそんな夢の無い事情を生徒に話さないで欲しい。ますます働きたくなくなつたわ。それに真島先生のイメージがガラツと変わっちゃつたでしょ。あんまり知らないけどね。それにしても星之宮先生の言葉には何処か茶柱先生を挑発するような言葉を言っている気がする。

『……ふ、Aクラスに上がれるなんて都合の良い事なんて考えてはいないよ。あのクラスはまだまだお前達に劣る』

自嘲気味に言う、星之宮先生がこう返した。

『ならいいけど、紗枝ちゃんもあの時のことがあるから虎視眈々と狙ってるんだと思っちゃつた』

その言葉に向こうの空気に緊張が走つた気がした。やっぱり何か二人には因縁があ

るようだ。数瞬の間が空いたが茶柱先生は、何を馬鹿な。元から気にしていないと言って、呑み終えたのか、戻る。と言つて足音を立てて遠ざかった様だった。そして星之宮先生は何処か呆れたような冷淡な声で呟いた。

『あれ、絶対に気にしてるなあ。いい加減に吹っ切れたと思つたんだけど』

『……私にはお前が敢えて言つたような気がするが』

『やだなあ、もう私は気にしてないわよ。もう決着が着いたことなんだから』

そう言つて声を出して笑うと真島先生の溜息が聞こえてきた。

『……お前のクラスの一之瀬と比企谷と言ひ、Dクラス行きだった筈の細川もいる。お前達が争うなよ』

……気になることが聞こえた。細川がDクラス行きだった？俺は続きを聞くが、其処からは関係が無い話になつてしばらくしてぷちりと通話が切れた。

俺はスマホを置いて考える。何故この会話を聞かせたかは解らないが、Dクラス行きだった筈の細川の事と何か関係があるのだろうか。此処で考えても結論が出ずにこの試験の二日目は終わつた。

そしてそれから更に1日が過ぎた。俺の予想通り、帆波の卵グループは裏切る生徒が出ない。有栖や龍園も特に動く気はないようだった。まあ龍園はDクラスの切れ者を探っているのだろう。正直終わってしまった俺に何も関係ないのでどうでも良かった。

そんなことを思いながら朝食を食べに行き、適当な席で食べていると声が掛けられた。

「比企谷君」

「……ん、おお、雪ノ下か」

声をかけにきたのは雪ノ下だった。雪ノ下は隣、良いかしら？と聞いてきたので、前だったらわざわざ聞かなかっただろうし、殊勝になったなと思いながらどうぞ。と言うと雪ノ下はトレーに乗せた朝食を食べ始めた。そして、一度食べる手を止めて、聞いた。

「そう言えば比企谷君。貴方、由比ヶ浜さんと何かあった？」

そう訊かれて、一昨日の事だなど思いながら俺は聞いてみる。

「あつたにはあつたが、由比ヶ浜がどうかしたのか？」

すると雪ノ下は何か嫌な事でも思い出したのか、米神に手を当てて溜息を吐いて苦虫を噛み潰したような表情で話し始めた。

「一昨日、由比ヶ浜さんが焦点の合わない顔で部屋に戻ってきて、昨日に同じ部屋割りの人に聞けば食事も取らずに寝込んでたらしいのよ。それには流石に他の人も事情を聞いたんだけど、私は悪くないって言葉しか言わないから医務室に連れてかれて療養中なのだけ……」

おお……え、ヤバくない？精神逝っちゃったのでは、それ。如何やら有栖の鉄槌は予想を遥かに上回るダメージを食らわされたらしい。まあ、同情するつもりは無いが、彼処まで追い詰められたら無理もない気がする。多分雪ノ下も見舞いに行つたが効果無しだったんだろうと察して、言つた。

「まあ、でも由比ヶ浜が絡んできたのを論破して撃退しただけだから、仕方ないだろ」

俺や有栖は悪くない。絡んで来ないでつて言つたのに絡んできた由比ヶ浜が悪い。それを雪ノ下も理解しているのか、他人事ね。貴方も当事者でしょう。と苦笑しながら言うが俺を咎める様子はなかった。

「八幡君！」

その時、またもや声をかけられたので視線を向けると、有栖と帆波とひよりに神室と細川、そして橋本と高校生ならぬ風貌の鬼頭が居た。えっ、何あの異色の組み合わせ。言うか大所帯だな。後目立つからそんなデカイ声で呼び掛けないでね。

そう思いながら、近付いてきた集団を見た雪ノ下は有栖達の存在が居て気不味く思ったのか。トレ―を持って立ち去ろうとするので一応言っておく。

「……あー、雪ノ下？ 有栖達にはお前が謝罪してやり直した事も説明してるからあんま気にしなくても良いと思うぞ？」

「……そう言ってくれるのはありがたいのだけれど、正直、彼女達に直面して話すのはまだ自分の中で踏ん切りがついていないの」

そう小さく言った雪ノ下の目は未だ迷いがあるようだ。まあ由比ヶ浜の関係にも完全に縁を切つてはいないみたいだし、直ぐに混ざる事はしにくいわな。俺でもそうだし。なのでこう言つた。

「……まあ、直ぐにとは言わんが喋りかけたくなつたなら、彼奴らも前のこととは別にしてくれるだろうから、来ても良いと思うぞ。喧嘩になるなら仲裁役くらいにはなってるよ……多分」

すると、雪ノ下は目を瞬かせると苦笑した。

「そっは言い切るのが普通でしょうに。……まあ、貴方らしくもあるのだけれど。…少

しは考えておくわ、また」

そう言つて雪ノ下は別の席に向かった。それを見送っていると丁度集まつてきた帆波達が雪ノ下を見て、俺に言つた。

「雪ノ下さん、やつぱりまだ顔を合わせにくいみたいだね……」

帆波の言葉に俺は頷くと疑問に思つた事があるのか、神室が聞いてきた。

「言いにくい事なら悪いんだけどさ、如何するのか決めてんの？」

神室が言いたい事は雪ノ下と俺の立ち位置がこの状態で良いのか？ということだろう。俺は静かに言つた。

「……彼奴が自分自身の気持ちと関係性に踏ん切りがついたら普通に話しかけてくるだろうし、彼奴次第だ」

「結構氣にかけてるのは何でなんだ？」

橋本の直球な物言いに有栖と神室がジトつと視線を向け、帆波とひよりと細川は苦笑していて、鬼頭はあまり興味無さそうだが。

「……まあ、同情つて訳じゃないつもりだが、今の彼奴に自分と重なつたんだよな。進んで一人で過ごすなら別に放つておくし、それで良いんだが。前の彼奴は兎も角、特別仲の良い奴が出来た事を経験していると、それを失くした時にまた一人に戻つて彼奴はそれで普通に過ごせるかつて思つた。まあ、要するに余計なお世話つてもんだよ。千葉の

兄の性って言っても良い」

そう言う和有栖達は神妙な空気を見せ始めたので変な空気になる前に要件を聞いた。

「…んで、有栖達は何の要件でこっちに来たんだよ。面倒ごとは断るぞ。これ以上は働きたくねえ」

「面倒ごとではないですね。八幡君が必要な、楽しい楽しい時間を思い付いたんですよ」
何やら企んでいる有栖は心底楽しそうだ。……これは断っても無駄だな。俺はN o
と言える日本人であるが、有栖の事だ。悉く退路を潰してくるに違いない。そう心中で
溜息を吐いて、俺は残りの食事を済ませた。

—————

「……んで、何で俺は水着に着替えさせられてプールに居るんでしょうか？」

そう言うのと、前には俺と同じく水着姿の有栖達と、海パンを着た橋本と鬼頭がいた。
広大なプールには試験の終わった生徒達で賑わっていて、人口密度が多い多い。俺の言
葉に有栖が答える。

「折角の夏休みなんですから想い出作りをしないと勿体無いでしょう？八幡君、この豪華客船に乗ってあまり娯楽を触れられる機会が無かったでは有りませんか」

その言葉に帆波とひよりが頷く。神室を見ても諦めて付き合ったら？と目線で答えが来た。細川は楽しそうにしている。すると橋本が俺の肩に手を置いて言った。

「良いじゃねえか、比企谷。こんなレベルの女子と一緒にプールを入ろうって言うてんだ。それに応じるのが紳士の役目だろ」

その言葉に鬼頭も頷く。味方がいねえと思いつつ、有栖達の心遣いを無碍にするものしのびないので俺は言った。

「……はあ、あんまり振り回さないでくれ。アクティブすぎるのは元ボツチには厳しいから」

そして、俺達はプールに入った。俺は端の方でプカプカ浮いていて、その横で有栖とひよりが同じく浮輪を使って浮いてる。まあ、有栖はこの人口密度では何があるか分からないので、一人にさせると危ない。ひよりは浮いてる方がいいらしい。帆波と細川は一緒に自由に泳ぎ回っており、鬼頭は人が多い中、プールの端から端まで泳いでる。橋本は神室に水を掛けようとして頭叩かれている。何やってんだ彼奴……そんな光景を見ていると有栖が言った。

「……すみません、八幡君。結局私のお守りのために泳ぎ回れなくなっちゃいましたね」

「いや、別に気にしてないぞ。逆に有栖のお陰で此処でゆっくり出来るから感謝してる

ぐらいだ」

有栖の謝罪に俺は何て事無いように言っていると、有栖は苦笑して、八幡君らしいですねえ。と言う。ふと、俺は気になることがあったのでひよりに視線をやって聞いた。

「そう言えばひより、龍園にAクラスとは関わり持っても良いって言われているのか？」
「はい、私には特に龍園君が持つている情報は共有されてない代わりに自由に良いと言われてますから。私としても八幡君達と一緒に居る方が有意義なので」

クラスの情報を共有させないって側から見たら異常だが、ひよりは嬉しそうにしているので別に良いだろう。そうしてボーっとしていると急に大きな波が発生して大きく揺れた。

「きゃあッ！」

「うおっ、大丈夫か!？」

波の揺れのせいでバランスを崩した有栖とひよりを咄嗟に抱えて、二人を庇う。誰だよこんな波を起こした奴。そう思っていると、有栖とひよりが腕の中にいて照れるように上目遣いで言った。

「その、八幡君…ありがとうございます。後、身体、大きいですね……」

「八幡君に抱き締められたのは初めてです……」

「わわわわりゆい、しゅ、しゅぐに離れる…!!」

慌てつつも怪我をさせないように離れると有栖達は名残惜しそうな顔をした。やめて！そんな顔しないで！罪悪感凄いから！それにしても直に触れた女の子の肌……柔らかかったなあと思いつつ、今度は背後から誰かにぶつかられた。

「うおっ、何だ!!」

驚いて後ろに振り向くとそこには帆波が不貞腐れたような表情を浮かべていた。

「……いいなあ、私も八幡君に抱き締められたいよう」

「ふあっ!!」

何言ってるの!?!ご乱心ですか!?!そう思つて帆波を見たら帆波も上目遣いになつていて思わず息を呑む。

「……八幡君、抱き締めてくれる?」

「……いやいやいや、こんな人が多い所で無理だ。勘弁してくれ…」

「……じゃあ二人つきりだったら良いの?」

「!!?」

「一之瀬さん!?!」

予想外の一言に俺は言葉を失い、有栖とひよりが慌てる。帆波の言葉は健全な男子高生には抗いがたい魅力があつた。帆波の眼が俺の眼と交差する。その眼には溢れんばかりの艶やかな熱意が籠っているように感じられる。そして、帆波はゆっくりと言つ

た。

「……八幡君なら、良いよ？それこそ、全部あげても……」

その言葉を言つた帆波の眼の奥から熱意に見え隠れした少しの熱意とはまた違う、ドス黒い何かを感じた。思わずゾクツとした。拔群な容姿と男子の理想を詰め込んだプロポーシオンは欲望が湧き出て収まることを知らない。息を呑みそうになる程の綺麗なシミひとつ無い肌に手を伸ばし掛けた時、耳元でパアンツと音が爆ぜた。

「ッ!？」

「はいはい、此処は人がいるから戻つて戻つてー」

音に驚いた俺は耳を抑えて音を出した主、細川を見た。細川は何処か呆れたような顔で此方を見ている。……助かった。理性が飛んでしまつていた。まさか往來のある中で理性が外されるとは思つてなかつた。帆波、恐ろしい子ツ！有栖とひよりはホツとしていて、帆波は何処か残念そうにした。そして細川は俺に言つた。

「今からビーチバレーやるから八幡君も参加ね」

「……え、まさかの選択権無し？」

「うん、女の子の色香に惑わされた八幡君には拒否権は無いよー」

若干棘を含んだ発言だが、事実であつたので反論出来ない。そして俺の背を押してビーチバレーをやるであろう橋本の所まで細川に連れられ、有栖とひよりは俺達を見

送って、泳ぎから帰った鬼頭がお守りになる様だ。帆波も参加するのか、着いてきた。その時に並んで追い越そうとした帆波が耳元で囁く。

「…次はまた、ね？」

「…ッ」

そうして追い越して橋本と神室の元に向かった帆波を少しの間茫然としていたのを同じく横にいる細川は言った。

「……本気だねえ、アレ」

そう言っただけを引っ張って連れて行っただけ。

その後はそれぞれがチームに別れてビーチバレーをやった。途中から有栖とひよりも近くまで鬼頭に守られながら来て、試合を観に来た。ビーチバレーしてる途中に神室や帆波、細川と密着しそうな場面があつて動悸が激しくさせられたが、皆が楽しそうにしているのを見て、俺には似合わないリア充なやり取りも…悪くは思わなかった。

そして、プールを出た俺達は制服に着替え、各々自由に過ごす事になったが、丁度昼だったので一緒に食事しようと有栖達に言われ、プールでも刺されそうな程の視線を浴びることになるのか…と遠い眼をして、勿論抵抗は無駄なので、ドナドナのBGMが頭で再生されている中で制服に着替えに行つた有栖達と待ち合わせしていると、1番早く

に細川が来た。橋本と鬼頭はどうしたかつて？橋本がリア充限定スキルのラッキースケベを神室に発生させたので、プールの中に沈められて死んだのを鬼頭が介抱している。本当にラッキースケベってあるんだなあと思わされた。橋本の場合、図ってやつてそうだが。

そして自販機のある場所でマッカンを飲んでいると、早く着替え終わったのか、細川が1番早く合流してきた。

「あれ、まだ介抱されてるんだ金髪の人」

橋本達がいらないことを疑問に思ったのかそう言う細川に頷く。事故とは言え胸がつつり揉まれたことに割と本気でキレた神室の全力のボディブローが綺麗に決まったからな。無理もない。

そうして細川も隣で自販機で買ったコーヒーを飲んで、先に行つて良いって言われたから移動しようか。と細川が言つてきたので、店は決まっている様だ。

そうして細川と歩いていると前方から綾小路が歩いてきた。特に用もなければ仲も良くないので、眼で会釈してすれ違おうと細川の横を通った時。

「……………」

耳をすましても聞き取れない音量で細川が口を開いたのが視界の端に映った。綾小路はほんの少しだけ動きがゆつくりになったが、それも一瞬で何事もなかったように通

り過ぎていった。

細川の言ったことが気にかかり、聞こうとしたが、細川の顔は最初から何もないかのような様子で普通に歩いている。これは聞いたところではぐらかされるなど思った俺は、聞こうとした事を頭の隅に追いやった。

それにしても、細川と綾小路に何か因縁でもあるのか？口の動きが少し読めた。あの時細川はこう言ったと思う。

「……久しぶりだね、最高傑作君……」と。

そう、細川の横顔をちらつと見つつもレストランに足を運ぶのだった。

――――

そして試験の最終日となった。卵グループ以外の生徒は自由に過ごしているが、テンションの高いクラスと低いクラスに分かれている。低いのはAとDクラスの生徒だ。Aは特に葛城派の生徒だ。葛城の策が有栖と龍園によつて壊されたからな。まあ、最初に裏切ったのは俺だけど。Aクラスの策に乗つかるメリットが無かったから仕方ない仕方ない。そう目の前の現実から目を背けているがもう無理だと思つた俺は言つた。

「……なあ、ひよりさん？俺は何故膝枕をされているんでしょうか？しかもわざわざ部屋まで来て」

俺を膝枕しながら、悠々自適に本を読んでいるひより。本のタイトルは有島武郎著の『或る女』だった。確か、普通に生活していた主人公が、アメリカに渡つて軍事的な諜報活動をして、情愛のある生活を一度は気付くも長くは続かず、スパイ活動に浸っていく様子を書いたものだったと思うが、如何だったわけ？俺の質問にひよりは本を読み進め

ながら答えた。

「二度、膝枕をやつてみたいと思つてましたので。耳搔きを持つていたら耳掃除もしてみたかったです」

そう微笑みを向けられるので、男女の距離感的にアレだが、ひよりが楽しいんだつたら別に良いか。ひよりの予想外にブツとんだ天然には慣れてきたし。行き過ぎる様なら止めれば良いしな。ちなみに俺とひより、そして何故か猫のように丸まって寝ている細川以外誰も居ない。細川によつて俺の使つてゐるベッドの大半が奪われてる。（※実は戸塚弥彦と由比ヶ浜のレストランの件でこの部屋のルームメイトが八幡達の関係にチャチャを入れないよう、氣遣つて部屋を出ている。八幡に嫉妬は有りつつも試験で貢獻していることを帆波が説明している為にクラス全員の好感度は結構高い）

性格からして此処に来て俺を弄るであろう有栖はAクラスに今後の方針を示しているから此処に来ていないんだらう。帆波は試験なのでいない。

「…膝とか痺れるようだったら言つてくれ。すぐ退くから」

そう言うのとひよりが頷いたので俺は柔かい膝の上でボーツしていると、だんだんと眠気が来たので、ひよりに言つた。

「……悪い。眠くなつてきたから退いて寝るわ」

「…いえ、このまま寝てしまわれても大丈夫ですよ」

そう本を置いて優しく撫でて、慈愛に満ち溢れた瞳を向けてくるひより。……いつの間にか女子が近くにいても眠れるようになったのは俺のリア充化が進んでいるからだろうか。やったね八幡、リア充デビュ―だよ！……小町が見たら驚いてショック死しそうだ。いや、俺が本物かどうか疑ってきそう。こんな想像しか出てこないあたり、リア充デビュ―は未だ先っぽいな。俺のボツチ度振り切れ過ぎい！

そんな脳内でボケつつもウトウトしてきたので、ゆっくりと瞼を閉じる。その直前に、お休みなさい。良い夢と言われた気がした。

八幡君、起きて下さい。と言われながら揺さぶられた気がして、眼を開く。すると、上から穏やかな声が聞こえた。

「起きましたね。八幡君」

「……おう、悪い、ずっと膝枕させてたか。退けてくれても良かったんだぞ？」

今、後頭部から感じる柔らかさは寝る前と全く同じだったので、そう判断した。するとひよりは首を振って言った。

「いえ、そこまで負担ではなかったので大丈夫ですよ」

その言葉に、そうか。と言った俺は何時迄も膝に乗せている訳にもいかないので身体を起こす。そして首を鳴らしていると細川が居ない事に気づいた。

「細川は自分の部屋に戻ったのか？」

そう聞けば、ひよりは首を振って衝撃の言葉を言った。

「いえ、先程全グループの試験終わった時にお友達に呼び出されたようで、そちらの方に」

「……ん？試験が終わったのか？」

もう一度聞き返すとひよりは頷く。今の時間は午後4時ってことは誰か裏切ったの

か。卵グループの優待者はDクラスの軽井沢なので同盟関係で帆波は裏切つてない筈なのでAクラスかCクラスか。

じゃあ後は結果を待つだけか。全部結果はIIIかIVになるだろうからptの振り分けの部分か。12グループの内Bクラスが2つ、Aクラスは5つ、Cクラスが4つ、Dクラスは1つ。優待者のクラスが偏っていればそのクラスが大ダメージだ。

そう考えていると、着信がなった。俺のスマホに有栖からのメールが届いていた。確認すると、何か卵グループの部屋でトラブルになっているらしい。それも何故かAクラス、葛城派が仲間割れになっているらしく、帆波が仲裁に入っているようだった。

仲間割れになっている理由が書かれていないってことは直接見に来て事か？……有栖の事だ見に行かなければ何か企みそうだし、見に行くか。け、決して帆波の事が心配になった訳では無いんだからね！……うん、鳥肌立ったからもう二度とやらんことにしよう。

メールを確認して、ひよりに有栖から卵グループの部屋でトラブルになったらしいから確認して来るが、如何する？と聞けば、ひよりは一緒に行きます。と言ったので俺はひよりを伴って卵グループの部屋に向かう。

そして、卵グループの部屋に着けば野次馬が少し居て、葛城と戸塚弥彦コンビと恐らくAクラスの葛城派の内の1人が言い争っていた。帆波は葛城が来たことで離脱して

その様子を見守っていた。卯グループのメンバーはCクラスの奴以外は揃っている。恐らく逃げ遅れたのだろう。そして野次馬の端には有栖と龍園も居た。俺達は有栖と合流すると、何があつたか聞く。

「……んで、有栖よ。葛城派には何があつた？見た所大分空気悪そうだが……」

「聞いていたら分かりますよ」

そう言ったので葛城達――主に戸塚弥彦と葛城派の内の一人――の言い争いに耳を傾けた。

「町田、葛城さんの指示に逆らうなんて何を考えてんだ！」

「逆らうつもりだった訳じゃねえよ！ただ、俺は坂柳派が優勢だったから優待者を当て、葛城派に傾けようとしただけだ！」

戸塚弥彦の詰問に町田と呼ばれた奴は裏切った理由を説明する。如何やら葛城派の予想外の崩れの早さに焦ったようで、葛城派の勢力を少しでも強くしようとしたらしい。この理由に戸塚弥彦は納得仕掛けていたが、葛城は納得がいていないのか、眉間を顰めて聞いた。

「……理由は解った。しかし、裏切るのはリスクを伴う。pptもcptも失敗してしまえばこちらが不利になる。卯グループの優待者は確信しているのだろうか？」

そう葛城が聞けば、町田は自信がないのか、一瞬だけ躊躇する様子を見せた所で、優

待者の名前を出した。

「……………Dクラスの、男子だ」

そう言った瞬間、嗤い声が出た。

「クツクツク……………Dクラスの男子か。良く当てに行こうとしたもんだぜ。男子は3人居るが、誰なんだよ?」

そんな煽りを声の主である龍園が野次馬の中から出てきて言った。町田はその言葉に動揺しているが、優待者の男子の方に、綾小路に指をさした。すると、その行動に更に龍園は笑みを深めて言った。

「金魚の糞野郎か……………ククツ、だが残念だったなあ。そろそろだから結果を見て知れよ」
龍園の言葉にキーンツと甲高い音がそこら中から聞こえた。如何やら学校が試験の結果を出したようで、この場にいる全員が結果を確認した。

『鼠——裏切り者の正解により結果3とする』

『牛——裏切り者の正解により結果3とする』

『虎——裏切り者の正解により結果3とする』

『兎——裏切り者の不正解により結果4とする』

『竜——裏切り者の正解により結果3とする』

『蛇——裏切り者の正解により結果3とする』

『馬——裏切り者の正解により結果3とする』

『羊——裏切り者の正解により結果3とする』

『猿——裏切り者の正解により結果3とする』

『鳥——裏切り者の正解により結果3とする』

『犬——裏切り者の正解により結果3とする』

『猪——裏切り者の正解により結果3とする』

『Aクラス……プラス50c1 プラス200万pr』

『Bクラス……マイナス100c1 プラス100万pr』

『Cクラス……プラス100c1 プラス200万pr』

『Dクラス……マイナス50c1 プラス100万pr』

となっていた。うん、こんな偏った結果あんまり無いだろうな。そしてこの結果を見て有栖は笑みを浮かべ、龍園もニヤニヤしながら葛城達を見る。町田は自分のグループの結果が違う事に狼狽えている。葛城達も同様だ。

「結果4!?!……っ」

「これは……!」

「ハッ、これはこれは……残念だったなあ。葛城の事を考えて行動した結果がこうなるなんてよ。何を根拠にして優待者を当てに行ったんだ?」

龍園の嘲笑に葛城達は悔しげに顔を顰めた。これはもう葛城派はトドメを刺されたな。Aクラスの牽引は有栖がしていく事だろう。そう考えていると、横にいたひよりが口を開く。

「全クラスの差がコレでまた動きますね…」

「…ああ、大分変わるな」

そう言う和有栖も加わって言った。

「AクラスとBクラスの差が開いて、BクラスとCクラスの差が縮まって、DクラスはCクラスとの差が開きましたね」

その有栖の言葉に頷きつつ、クラスの暫定を計算すると。

Aクラス $1024 + 50 \parallel 1074 \text{ c p t.}$

Bクラス $996 - 100 \parallel 896 \text{ c p t.}$

Cクラス $552 + 100 \parallel 652 \text{ c p t.}$

Dクラス $312 - 50 \parallel 262 \text{ c p t.}$

となる計算だ。Bクラスが -100 になったか。Cクラスの差が 242 c p t. 。一気に締められ、Aクラスとは 28 c p t. だったのが、 178 c p t. に開いた。これで、Aクラス行きが険しくなってきたな。Aクラスの指揮は有栖に移ってより強力になって纏まるだろうし、Cクラスも油断出来ない程接近してきている。Dクラスは低迷してい

るが、綾小路が居るから読めない。それに、輕井沢も雰囲氣が少し変わったか？

Bクラス、纏まり具合では他のクラスよりも練度は高い。しかし、他のクラスよりも突出している所がない。加えて帆波は王道では強いが、裏道を探るのが苦手だ。それに、クラスメイトも帆波と神崎に依存している傾向が観える。帆波と神崎が共倒れすれば、一瞬でBクラスはガタつく。龍園は王道には少しだけ付け入る隙があるが、有栖は王道にも強いし、裏道も解る。

俺は有栖を見て、試験の結果を見て雰囲氣の少し重い帆波を見た。……細川に裏道を担当してもらうか？ Aクラスに上がりたいと言っていたし。だが、細川も不安要素が多い。彼奴の様子からしてクラスを裏切るのも辞さないタイプだろう。そんな奴が俺とわざわざ協力関係を築いたのも不自然だ。……はあ、クラス間の争いとか如何でもいいのに巻き込まれているような気がする。

そう思いながらも、俺は部屋に戻る。有栖と帆波は今後の動きについてクラスの方針を固めに生徒達に言うらしく、ひよりは龍園に呼ばれたらしく、別れた。

「ヒキタニッ！」

前からそう言つてやって来た奴を見て、俺は溜息を吐いた。その声の主が葉山隼人だったからだ。眼には憎悪というかそれを通り越して殺意すら湧いている。そして興奮氣味に言つた。

「お前、結衣に何をした!!」

「……………別に何もしてないが?」

「惚けるなッ!!」

そして俺の胸倉を掴みに掛かるが、俺は後ろに下がって距離を置いて掴ませないようにしておく。掴み損ねた葉山はその事に苛立ち、更に声を荒げた。

「結衣が引き籠って何もしなくなつたのをクラスメイトに医務室に運ばれて結衣は医務室ですつと泣いてるんだぞ! お前が何かやったから結衣はあんなだったんだろッ!!」

……俺は絡まれただけだし、マジで何もしてないんだがな。彼奴が絡んで来たのにキレた有栖の誘導で勝手に自爆しただけ。まあ此奴に言つても納得しないだろうし、如何でもいいか。

「……………それで? お前は何をしに来た?」

「決まってるだろう! 結衣と雪乃ちゃんに謝罪して、坂柳さんや椎名さん、一之瀬さんと今後一切関わらず退学しろ!」

そんなふざけた要求を突き付けてきた葉山にもう此処で仕掛けるか? と思つていると何処からか音が聞こえてきた。この音…着信音か? だが俺ではない。鳴っているのは葉山のズボンのポケットからだつた。葉山は俺を睨みつつもスマホを取り出して、電話を始めた。

「もしもし……陽乃さん!」

そう言うと、葉山は電話の相手に驚いたのか目を見開くと言った。というか今此奴陽乃さんって言ったな。俺の記憶で陽乃さんって言うとかあの魔……なんかヤバイからこれ以上は考えないようにしよう。

「如何して陽乃さんが俺の番号を………えっ? ちょ、ちょつと待ってくれ! 俺は騙してなんかいない! ヒキタニが悪いんだ!!」

俺の名前出したな。それに、騙した? ……ああ、中学の件か。

「ヒキタニがっ……比企谷が俺のグループのメンバーの一世一代の告白を……それに傷付いた雪乃ちゃんや……ツ、雪ノ下さんや結衣に有りの俣伝えて謝らせようと……」

言い訳の途中で顔を凄く青ざめさせてるってことはめっちゃキレられてんな。すると、また何か言われたのか、顔を土気色にさせてこの世の終わりみたいな表情で言い始めた。

「ツ!? そ、それだけはッそれだけは辞めてくれ!!」

何を言われたのかは知らないが、葉山の身体が震えている。何を言われたらあんなに成るんだ。電話に意識が行ったのかももう完全に俺を視覚に入れていない為、俺はステルスヒッキーを発動すると葉山の横を素通りした。葉山はそれに気付くことなく、陽乃さんに懇願していた。

それからは何事もなく、部屋でダラダラしてその日を過ごす。Bクラスの方針は取り敢えずはc p tを積極的に取りに行くこととDクラスの同盟関係の継続（Aクラスとの秘密同盟含む）。

あの後、葉山に会うことは無かったが、ひよりが一度葉山を見かけた時には焦点が合わなくなつた眼で石崎に連行されていたらしい。その姿を想像して由比ヶ浜の姿と被つて何とも言えない気持ちになつた。

そして雪ノ下にもたまたま会つたのでそのことを話すと、そう。と変わらない調子で言いつつも何処か嬉しそうな雰囲気醸し出していた。葉山への好意とかはやり直す前も無かつたようで、今回の件でマイナスに堕ちたようだ。ざまあ。

そんなやりとりもあつたなかで漸く船が高度育成高等学校の港に着いて、学校に戻つた。マジで色々ありすぎたな。夏休みはゆっくりしたいもんだ……

しかし、この試験を受けて以降、さらに面倒な事に巻き込まれて行くことを俺は未だ知る由もなかった。

閑話 小きき頃の思い出 坂柳編③

コツ：コツ：と小気味良く白い駒を盤上に置いていく。黒い駒は白い駒が致命的になる位置にあり、何百万通りもあるパターンから最善手を選択していき、盤上は目紛しく形を変えていく。

そして、黒い兵士の駒を白い兵士の駒で倒した時に、ふと思い出した。そう思えば最近八幡君とチェスをしてませんね。

そう思つて携帯を見た時にトップの画面が今迄撮つた写真でランダムに変わる仕様に設定しているので、昔に撮つた写真も移ることがあり、その写真は小学校で卒業する時に撮つた八幡君とのものだつた。その写真の私は八幡君と2人で笑つて（八幡君は笑顔が少しぎこちなく若干目が正面からズレているが）寄り添うように八幡君の腕を組んでいる写真。

それを見て私は思い馳せる。あの時に八幡君と同じ中学に通つていれば、どんなに楽しい中学生生活になったのだろうか。

――――

季節は冬を迎えてしばらく、新年を迎えて春に向かい始めた時。私は小学校に登校していた。面倒臭そうにする眼の濁った特徴的な癖毛が天辺に生えている少年を連れて。

その少年は登校時に必ずと言って良い程向けられる刺すような視線に居心地悪そうにしながら私にジト目で言った。

「……おい、坂柳。毎回思うんだが、一緒に登校するのはキツイんだが……主に視線が」
私はその視線に微笑みを向けて言う。

「と言いながら4年生から1年間以上これが続いているんですよ？今更止めれば、逆に色々と勘繰られると私は思います」

そう言うのと、彼の平均的な小学生の頭脳よりも優秀な頭脳はこの言葉の意味を正確に把握したのか、濁った瞳は更に濁って例えるならヘドロを煮詰めたような物だった。私は思わず苦笑してこう言った。

「そんなに眼を濁らせてたら落ちそうですね…」

「……喧しいわ」

そんな他愛も無い会話を続けながらもなんだかんだ歩幅を合わせて歩いてくれる八幡君はやはり素直じゃないと内心思った。八幡君が隣に居てくれるのは私の身体が異常を来した時の為の対策だという事は直接聞いた訳ではないが察することが出来る。

こんな捻くれていて、優しい八幡君に申し訳ない気持ちもある。けれど、やはりこの生活は離れがたい。

そして何事も無く、授業を受けていき、昼休みになった。もう卒業が近いからか、思い思いに外のグラウンドで遊んだり、教室で友達と話したりしているクラスメイトとは別に私は八幡君と図書室に行つて本を読んでいた。

「……」

「……」

図書室であるので話すことは殆どない。しかし、こういった沈黙が気不味い訳でも無く、寧ろ心地よい。今私が読んでいる本はエラリー・クイーン著書の推理小説である『Yの悲劇』だ。因みに原文なので、英語の勉強にもなる。これは私物で小学校の図書室にはもちろん無い代物だ。ニューヨークが舞台である旧家のハッター家の者達が次々と殺されていき、その事件を元シエイクスピア俳優が捜査していくという名作である。

緻密な文章構成で此方も物語を追つて推理していくのがとても楽しい。そうしてふと八幡君の方を見る。八幡君も八幡君で日本文学の名作を読んでいる。タイトルは『破戒』：確か島崎藤村の長編小説で主人公は小学校教師で、差別を受けている部落出身の主人公がある寺の女性に恋に落ちて、正体を明かすことも中々出来ず、ある人物の死で遂に正体を明かして、新生活を求めて主人公が去っていくという話だった筈だ。

自分が思うのもなんですけど、一般的な小学生からかけ離れた物を読んでもすね……：そう苦笑すると、そんな私に気付いた八幡君は怪訝そうな顔で聞いた。

「……何だ？」

「いえ、別に何でも。ただ、一般的な小学生とはかけ離れた小説を読んでいるなと思っただけです」

「いや、海外小説読んでるお前が言ってもブーメランだからな？しかも、原文とか良く読めるな」

そう呆れ気味に返した八幡君に、そうですね。と軽く笑う。嗚呼、こんなにも楽しい日々がもう後少ししか無いと思うと寂しい。そしてふと思ったことがあつて聞いた。

「……そう言えば受験対策は万全ですか？」

「……それ聞いて意味あるのか？……まあ、割と自信はある」

八幡君は中学受験をする。その中学とは千葉県立屈指の進学校である総武中学。五年生の夏から総武中学に行く事を決めた八幡君はそこから勉強に取り掛かっていた。それを聞いた私も自身の学習と共に八幡君の勉強を見ていた。偶に八幡君を家に招いたりもしたのでチェスでも遊んだりも出来てとても充実していた。

今迄見た様子では合格は堅いので、通るだろう。私も八幡君と同じ中学に通いたいがお父様の仕事の関係もあつて東京の中学に通うことになった。正直言えば少し、否、かなり残念だ。鼻根目で見なくても八幡君ほどの人が中学にいるとは思えにくい。正直退屈な中学校生活になってしまいそうだ。

そう思いながらも私は八幡君との生活を楽しむ。悔いが残らないように。

そして、2月の中旬の休日になって、その日の午後三時になった辺りで八幡君からメールが来た。

『取り敢えず受かった』

その文章を見て私は自分の事のように嬉しくなりつつもこんな気持ちになるのは初めてで、まさかこんな気持ちを持つなんてと若干の驚きを覚えて、八幡君の素気ない文章には直接言葉で返事をしようと、電話を掛けた。

電話をかけた3コール後に？がって声変わりが起こり始めた少年の声が耳朵を震わせた。

『……もしもし』

「あの素気ない文章は貴方らしいですね。まずお祝いの言葉を、総武中学合格おめでとうございます」

「……おう」

電話越しの声は照れているのか少し小さな声が返ってきて、八幡君の様子がありありと想像出来て思わず頬が緩む。すると八幡君が言った。

『……まあ、そのありがとな。坂柳のおかげで試験が大分楽に感じたわ』

「……いいえ、私は少し入れ知恵した程度なので。それに私も楽しく過ごさせて頂きましたからお互い様です」

そう返事をする。実際に理数系などの解き方や英語の文法などをほんの少しだけ教えただけで、後は八幡君が自力でやり通した結果だ。まあ、数学や理科などは粗が見える部分もあるが、それ以外での教科は中学卒業程度のレベルまで教えたので大分余裕があるだろう。突出しているのはやはり国語で、これは難関高校を既に狙えるレベルにまで育っている。教える時に少し難関高校の問題も混ぜていたが、今の時点で解けるのは八幡君自身の才能だろう。

『……そうか』

八幡君がそう眩き、数瞬の間に沈黙が流れる。珍しく八幡君が会話を切り上げないで、どうしたのかを聞こうとした所で再びこう言った。

『……あの、坂柳。礼がしたいから。何かして欲しいこととかあったら言って欲しいんだが』

その言葉を聞いて、八幡君にして欲しい事を考えた。何時も私からお願ひすることはあれど八幡君からその言葉を聞くのは滅多に無いので、じっくりと考える。

そして数秒ほど考えて、ふと思いついたので八幡君にこう言った。

「……では、3月12日にデートしましょう」

そう言った時に電話越しで良かったと思う。今の私は誰かに見られでもしたら一生の弱みになる程ニヤケていると分かっていたから。

そして3月12日当日。お父様が身体のことを心配されていたけれど、異常があれば直ぐに知らせることや、八幡君との事を考慮してくれたので、地理的に覚えがあり、尚且つ病院も近いところにあるショッピングモールに絞って動くことと、午後6時には家に戻り始める事を条件に八幡君とのデートは成立した。本当にお父様には感謝しかない。

年々体調が良くなってきているおかげで、待ち合わせも出来るようになったのは私にとつて吉報だった。それがなければ今回のデートも成立しなかったのかもしれないから。

「……流石に早過ぎましたかね」

気持ちちはやって待ち合わせの午前10時の10分前に着いた。其れ程今日という日待ち望んで居たのかと自覚し、思わず自分に苦笑する。取り敢えず早く来すぎたので、座つて待とうと思い、近くに丁度良いベンチが無いかと探して辺りを見渡している、後ろから声が聞こえた。

「坂柳」

その声に振り向くとそこには黒いコートとインナーに紺の長ズボンを履いた八幡君が居た。今通っている小学校は制服なので、私服の八幡君を見るのは夏は兎も角、冬はとても珍しい。私は彼に近付いて言った。

「おはようございます、比企谷君。今日は随分とお早いですね。貴方の事だから時間ぴったりになるかと思っていましたか」

そう言うのと、八幡君は苦笑して言った。

「……流石に俺が礼をしたいって言つたんだから待たせんのもな。それに、妹にも女の子を待たせるのはあまり良くないって言われたし」

この人は捻くれているが、自分で言つたことに対しては筋を通すのでどんなに捻くれていても嫌う事はない。変なところで取り繕ったり、誤魔化したりすることもあるが。心が暖かくなるのを感じつつも言葉を重ねる。

「妹さんですか。比企谷君のお家には行つたことがないので妹さんにも会つてみたいですねえ」

「……まあ、機会があればな」

そう曖昧な返事を返す八幡君。地味に頬が引き攣つているように見えるのは何故だろうか。まあ、今日は弄るのは止めておきましょうか。そう思つて改めて八幡君を見て私は言った。

「…服、良く似合ってますよ」

「……お、おう。そうか……坂柳も良いと思う、ぞ?」

「ふふつ、何で疑問形で聞くんですか」

照れている八幡君の答えに可笑しく思つて思わずクスツと声を洩す。今日の格好は白いトレンチコートに水色のインナーに膝丈まである黒いスカートに白いスパッツを履いている。インナーはヒートテックなので暖かい。3月と言つても今日は寒かったのでこの格好だ。それにしても先程からかなりの視線を感じるが、やはり杖についている私は珍しいのでしょうか。

「……んで、如何する？ 回りたい所とかはあるか？」

八幡君が視線に居心地が悪そうにしながらもそう聞いてきたので、私は少し周りを見渡して、言つた。

「……では、雑貨屋から適当に回りましたらどうか」

その言葉に八幡君は頷くので私は彼の横に寄り添うように並ぶと言つた。

「……折角のデートなので、手を繋いでも良いですか？」

「……まあ今日は坂柳への礼だし、お願いだったら聞くつもりだったからな。……ん」

そう言つて右手を差し出してきたので、私はゆっくりと左手を指と指を絡ませるようにして、繋ぐ。細く見えましたが、意外と筋肉質ですね。

所謂『恋人繋ぎ』というものを実践すると、八幡君は普通に手を繋ぐのだと思つていたのか、私の行動にギョツとして慌て気味に言つた。

「お、おい、これは……」

「あらあら、こういうものには疎いと思つていましたが、知つていたのですね。今日のお願いは聞いてくださるんでしょう？ 今日はこの状態でお願ひしますね」

そう言つてクスクスと微笑むと、八幡君は少し溜息を吐いて、あんまり揶揄う様な行動は辞めてくれよ……と言つて私達のデートが幕を開けた。

そして相変わらず視線を感じながらも気にせずにはゆつたりと歩きながら雑貨屋に入つて、適当に見て回つてしていると、眼鏡のコナーを見つけたので八幡君を連れて向かう。

「比企谷君はどれが良いですか？」

何種類もの眼鏡を見つつそう訊く。

「……買うのか？」

「まあ、試しがけして似合いそうな物があれば」

そう言いながら、試しがけ可能と書かれた板に置いてある眼鏡から適当に青い細縁の眼鏡を取つてかけてみる。

「如何でしょう？ 似合いますか？」

「……下地が良いと何でも合うつて改めて思い知らされたわ」

そう恥ずかしげに頬を搔いて遠回しの褒め言葉に少し笑つて、素直じゃないですねえ。と言つて、ふと思いついた事があつたので深緑色の細縁眼鏡を取つて八幡君に

言った。

「比企谷君も掛けてみてください」

「え、遠慮したいんですが「お・ね・が・い」……はあ、似合わなくても笑わんでくれよ？」

眼を濁らせながら溜息を吐いて、渋々と言った様子で眼鏡を掛けてこつちを見た。

……………

「……おい、何か反応ぐらいしてくれよ。居た堪れないだろうが」

「……………」

「……え、何？そんな似合わない？ちよつと、坂柳さん？坂柳さん」

「……いえ、その眼が……………」

「……………眼が、何？腐り落ちそうって事？ちよつと、変なところで区切られると気になるんだけど？」

そんな八幡君の言葉に反応することなく、八幡君から黙って眼鏡を取り外して戻す。すると、濁っている見慣れたいつもの眼に戻った。私の行動に呆気を取られている彼に向かいこう言った。

「……ええ、比企谷君はやはりそのままの方がホツとします」

「……これ、褒められてんのか貶されてんのかどっちだよ。そのままって、そこまで眼が

酷かったのか？」

「……比企谷君、この世には知らない方が良いこともありますよ？」

「俺の眼鏡を掛けた姿は知らない方が良いことなのか……」

そんな呟きを他所に私達は別のコーナーに歩き始めた。本当、この世には知らない方が良いこと、周りに知られない方が良いこともある。八幡君の眼鏡姿は後者だ。……あの姿は反則だ。色々と心臓に悪いから。

それから服屋に入って服を見たりしつつ、丁度お腹が空いてきたので近くの洋食レストランに入った。今日は休日なのでかなりの数の御客がいる。空いたテーブル席に座って食べたいものを注文する。そして注文して料理が来るのを待つ間に八幡君が聞いてきた。

「体調は大丈夫か？」

「ええ、特には異常はないですから大丈夫ですよ。心配してくださってありがとうございます。それで、午後からは如何します？比企谷君が行きたい所があるならお付き合いますか？」

そう聞けば、八幡君はその言葉を予想してなかったのか、少し悩んだ様子で言った。

「……特に決めてなかったからな。……じゃあ本屋に寄って良いか？」

「分かりました」

そう了承して、料理を待つ間は八幡君の家での生活を聞いた。妹の話が9割ぐらいで、後の1割は普段の過ごし方だった。シスコンですねと思いながら聞いている内に料理が来た。2人ともパスタで、私はカルボナーラ、八幡君はペペロンチーノだ。

「料理が来ましたし、食べましょうか」

「そうだな」

そうして食事を始めた。食事中は基本的に私達は喋らないために黙々と食べる。すると八幡君が私のパスタの方を見ていた。そんな様子に少し悪戯心が働いた私は八幡君に言った。

「比企谷君、折角ですので食べ比べてみませんか？」

「……別に良いんだが」

「私は比企谷君の頼んだペペロンチーノが食べたいですから、食べさせてくれませんか？ ああ、もちろん比企谷君の手で食べさせていただきたいですねえ」

そう言うのと、八幡君は顔を顰めるが、頬を赤らめている事から嫌がついている訳ではないと判断すると、八幡君はフォークにペペロンチーノを巻き付けて一口分を私の方へ持ってきて来た。

「…ほら」

「……ん」

八幡君が差し出してきたフォークに巻き付けられたペロンチーノを食べた。美味しいと思いつつも今度は私のカルボナーラをフォークに巻き付けて八幡君の口に差し出す。

「はい、あーん」

「だから、良いって「これもお願いの一つ、ですよ」……ん」

照れる八幡君を半ば強引に押し切って、カルボナーラを食べさせる。そんな光景に周りの人がチラチラと視線を送ってきているのを感じながらも気にせずに、八幡君に美味しいですか？と聞けば、美味しい。と顔を赤らめながら言った。

その後も食事をつけ、食べ終わって会計を済ませると、私達は店を出て変わらず手を恋人繋ぎした状態でゆつくりと本屋に向かった。八幡君も視線に慣れたのか、特に居心地悪そうにはしていなかった。

立ち寄った本屋はかなりの数の本を取り扱っている。私は八幡君に買いたい物が何かを聞いた。

「何を買うおつもりで？」

「……ん、ラノベの新刊をな。坂柳は欲しいもんとかねえの？」

「そうですねえ……最近心理学も気になっていましたから心理学の専門書でも買いま

しようかね」

「じゃあ二手に分かれ「私は後で良いですから一緒に周りましょう」……ういっす」

まだ周りの眼を気にしていたようだ。八幡君の言葉を封殺して、彼が見たいと言ったライトノベルのコーナーへ。八幡君に薦められて読み始めたが、普通の文学小説とも違う面白さやアクション系の描写があつて私には新鮮だ。最近では学園ラブコメ型ファンタジーの物を見ていたりする。アニメも最近見始めて、ハマったのはジョジョだ。物語は勿論、登場人物とスタ○ドの能力もかなり作り込まれていて惹き込まれた。

そして八幡君が取った物は異世界型ファンタジーのラブコメシリーズだ。ちらっと表紙が見えたが、何かと女の子が多い。しかもやたらと胸が大きい。

「……比企谷君はこういう女性の方が好みで？」

「は？……いや、別に好みって訳ではないけど」

私の急な質問に若干ぼかんとしながら言葉を返す。……まあ、もしもの時は女性の魅力を私自身が教えれば良いか。と思つて、八幡君のライトノベルを持つて次は心理学のところへ。知りたいのは対人心理のモノだ。財界や政界の重鎮達が集まるパーティーにも出席するので、弱みは見せないようにしなければならなし、コールドリーディングやホットリーディングを学んでみたいと思つていたところだから丁度良い。

そうして見たいものが載つた物を一冊、八幡君のライトノベルと一緒に買つて本屋を

出た。今日のために多めに貯金を崩して来たが、今の所本2冊分や昼食代しか使っていない。しかも八幡君の分は彼自身が払っているのも逆で多過ぎるぐらいだった。

今の時刻は午後2時。私は八幡君に聞く。

「他に行きたい所はありますか？」

「……妹に土産を買ってやりたいからまた雑貨屋に寄って良いか？」

「分かりました。……それと比企谷君？ 幾ら妹さんの事とは言え折角のデートなのですから、基本的に他の女性の名前は出さないのがマナーですよ？」

「……妹の事でも？」

「ええ。これは少し穿ち気味な考えですが、他の人物で理由付けをすると、接してる相手に自分に関心が向けられてないと思うような方もいますから。比企谷君は何のつもりも無い上で言った事も解りますし、妹さんの事なので大丈夫ですけれど、家族以外の異性の名前を異性間のデートで出すのはあまりよろしくありませんから、今後は気を付けて下さいね？」

八幡君は私の言葉にそういうもんなのか……と呟いた。そうして雑貨屋の前に着くと、八幡君は少しトイレに行つてくると言つたので、行つてらっしゃいと見送る。

八幡君が居なくなつたので丁度良かった。私は雑貨屋ではなく、その隣にある花屋に寄つてある花を注文した。

そして注文した花を受け取って八幡君を待っているとその5分後に八幡君が戻って来た。少しトイレが長かったようだが、そこは気にしないでおく。

そして雑貨屋に入り妹さんのお土産を買った後に、八幡君が私の体力を気にして休憩がてらにベンチに座らせてもらった。

「すいません。もう少し体力があればいいのですが」

その私の謝罪の言葉に対して八幡君は気にしている様子も無く言った。

「別に謝らんで良い。俺も丁度休憩したかった所だし、人混みも結構あるからな」

そして、喉は乾いたから飲み物買ってくるが、欲しい物あるか?と訊かれたので答えるようにとした時に視界の端にある施設が映った。その施設はまだ一度も行ったことが無いゲームセンターだった。

そのゲームセンターで私の眼に止まったのはUFOキャッチャーの中の最前列に白い可愛らしいペンギンがあった。八幡君もその視線に気付いたようで私に聞いてきた。

「……なんか欲しいのか?」

「……少しUFOキャッチャーをやってみたいのですが、良いですか?」

「おう、別に俺に聞かずに好きにやればいいぞ。……それにしても坂柳がぬいぐるみに興味を持つなんてな」

「意外ですか？」

「……お前つてこういうのに興味無きそうに見えたし」

そうして、八幡君と一緒にUFOキャッチャーの方へ行き、台に小銭を入れて台に書いてある説明通りに操作して、アームを動かして行く。

ウィーンつと機械音を出しながらペンギンの頭部分を掴む。しかし、持ち上げる事が出来てもアームから滑り落ちてしまった。

「……取れませんか」

「……何回かやれば取れそうだが」

八幡君の言葉に従う様にその後も何回か行つて見ると、落ちる位置にまで近付いてきた。しかし他のぬいぐるみに阻まれる位置に落ちてしまつて中々掴みにくい状態になった。少し難しいですね……そう思いながらも休憩を殆ど挟んでないので足が疲れてきた中で八幡君が言つた。

「……坂柳、少し代わつてもらつてもいいか？」

そう聞いてきた八幡君に素直に代わつてみる。そして小銭を入れて台のボタンを押して操作する。するとアームはペンギンの頭部分ではなく、腕に付いているタグの間にアームを通す。すると八幡君は少し驚いた様に呟く。

「……あ、いけた」

「……計算してやったわけじゃないんですね」

なんと計算でやっていなかったようで、少し呆れ気味に言う。そしてタグにアームを通した状態で他のぬいぐるみに邪魔されることなく持ち上げると、今度は途中で落ちることなく、商品の取り出し口の中に落ちた。

取り出し口に落ちたペンギンを取り出すと、八幡君が言った。

「……杖をついてるから持てないだろうし、坂柳の迎えが来たら渡すわ」

その言葉に私は首を横に振った。

「いえ、今日は迎えは無いんですよ。車も丁度用事があつて出払つているので、歩きです」

「そうなのか!?……良く坂柳さんが許してくれたな」

八幡君が驚く様に言ったので、貴方の事を信頼してくれているからですよ。と言うと、八幡君は何で?と解せない様子だったので、私は内心溜息を吐いた。如何やら私の気持ちに気が付いていないようだ。まあ、将来の楽しみと思えば良いだろう。そう思いながら私は八幡君に微笑むと言った。

「なので、今日は比企谷君が家までエスコートして下さい」

「………はあ、解った。どうせこれもお願いなんだろう?」

「ご名答です。ではそろそろ帰りましょうか」

そう微笑んで言うと、八幡君の手を握り直して私の家の帰路を辿り始めた。ゆつくりと踏みしめる様に足を動かしながら、今日という日を脳裡に寸分無く刻みつける。そしてゆつくりと八幡君に寄り添う様に歩きながら、言った。

「…比企谷君」

「………何だ？」

そう怪訝そうにする彼の眼は初対面の時と同じ暖かさで、いつまでも見詰めていたような優しさが有った。

「今日のデートの感想を言っても良いですか？」

「………おう、どうぞ」

「ありがとうございます。今日は私のお願いに付き合つて下さって」

「今迄貴方と居た中で一番楽しいひと時でした」

「しかも、触れたことも無かった物にも触れられたのでどれもこれも新鮮で」

「手を繋いだり、こうやって隣で歩く事も」

「まだまだ知らない事が多く感じられる充実した日で」

「好きな様に好きなだけ、貴方共に過ごせた、とても、ええ、とても良い日でした。改めてお礼を言います。ありがとうございました」

そう万感の想いを込めて伝えれば、やはり照れ臭い様で彼は頬を赤らめて目を逸らして小さく言った。

「……そりゃ、お願いに付き合ったからそう思ってくれないと困るがな」

「ふふ、そうですか」

「……まあ、楽しかったよ」

そう言った後に流れ始める沈黙は撥ったくて、けれど気不味くも不快でもない心地良いもので。ゆつくりと夕焼けが辺りを優しく包み込むように照らす。

そして陽が沈みかけ、辺りが暗くなり始めた時に私の家に着いた。八幡君は相変わらず凄い家だと言つて、私に向き直る様に視線を送つて言った。

「……あー、坂柳。家に入る前にお前の荷物のついでに出来れば貰つて欲しいんだが」

そう言う八幡君を不思議に思いながらも八幡君は私の買った本とUFOキャッ

チャアのペンギンの他に、もう一つ、プレゼント用の包みに入った有るものを取り出して、珍しく不器用だけれど、優しく暖かく微笑んで言った。

「誕生日、おめでとさん」

「ッ……」

そう、この日は私の誕生日。デートに指定したのも私の誕生日プレゼントとしてであつた。彼にはこの一年と数ヶ月に誕生日として教えたけれど、一回切りだったし、覚えてないだろうと予想してこのデートが誕生日プレゼントだと思っていた。

けれど、彼はただ一度の言葉を、何気なく言つた言葉を覚えてくれていた。これだけでも嬉しいのに誕生日プレゼントまで貰えるとは思っていなかった。私はゆつくりとそれを受け取ると、聞いた。

「開けても……?」

八幡君は頷くので、ゆつくりと開くと。その中身はチェスの白い王の駒が付いたネットクロスだった。

「……チェス好きで、王の駒が付いてたから丁度良いつて思つたんだが。まあ、気に入らんかったら家に帰ってから捨ててくれ。流石にこの場で破棄は勘弁してくれよ?」

「……」

「……………坂柳?」

「……いいえ、捨てませんよ。寧ろ毎日着けても良いくらいですよ」

「……流石に学校では着けて来ないでくれよ？ 目立つから」

その言葉に私は本気で悩んだ。けれど、八幡君が嫌がる様な事をしたくないし、私の事を嫌いになって欲しくない。私も女の子だから。好いた殿方には嫌われたくないのだ。そう思つて家でずつと着けて置こうと決めた。そうして私も八幡君に渡す物があつたのでビニール袋からある花を取り出して渡す。

「御返しに貴方の比べると随分と大した物では無いですが……」

「……黒い薔薇と白い薔薇？」

「ええ、花屋に寄つて買ったんですよ」

二輪の対になる薔薇は丁度私と比企谷君の様で。私はこう続ける。

「もし薔薇が枯れた時、言つてください」

「……何で枯れた時なんだ？」

「秘密です。……御自分で調べてみてください」

そう言うのと八幡君は怪訝そうな顔をした。その様子に私は微笑むと家の門を開けて中に入る時に言つた。

「では、また。八幡君」

「……おう、じゃあな」

そして私達のデートは幕を下ろした。幸せの残滓を確かに残して。

|
|
|
|
|

コツ、と回想しながら、チェスを置くと、丁度チェック、いや、チェックメイトに成っていた。私は微かに笑いながら呟いた。

「……八幡君も覚えているでしょうかね」

この学校に来て、僅かながら船上試験の時に謎の記憶喪失から少し思い出した八幡君の事を想う。これを彼が思い出した時、私達の関係性は少なくとも大きく変わる。その時、彼の左側には……

掃除が未だ終わっていないし、この一年間は休ませてあげたい。私と八幡君が本格的に勝負するのは恐らく一年後。それまでに掃除を終わらせて『彼』とも決着を着けたい。中々ハードな一年だが、退屈ではない。

そう思いながら、部屋では着けている当時そのままのネックレスの王を指で優しく撫でて呟く。

「薔薇は枯れていますか？八幡君。少なくとも私はあの時には枯れていますよ」